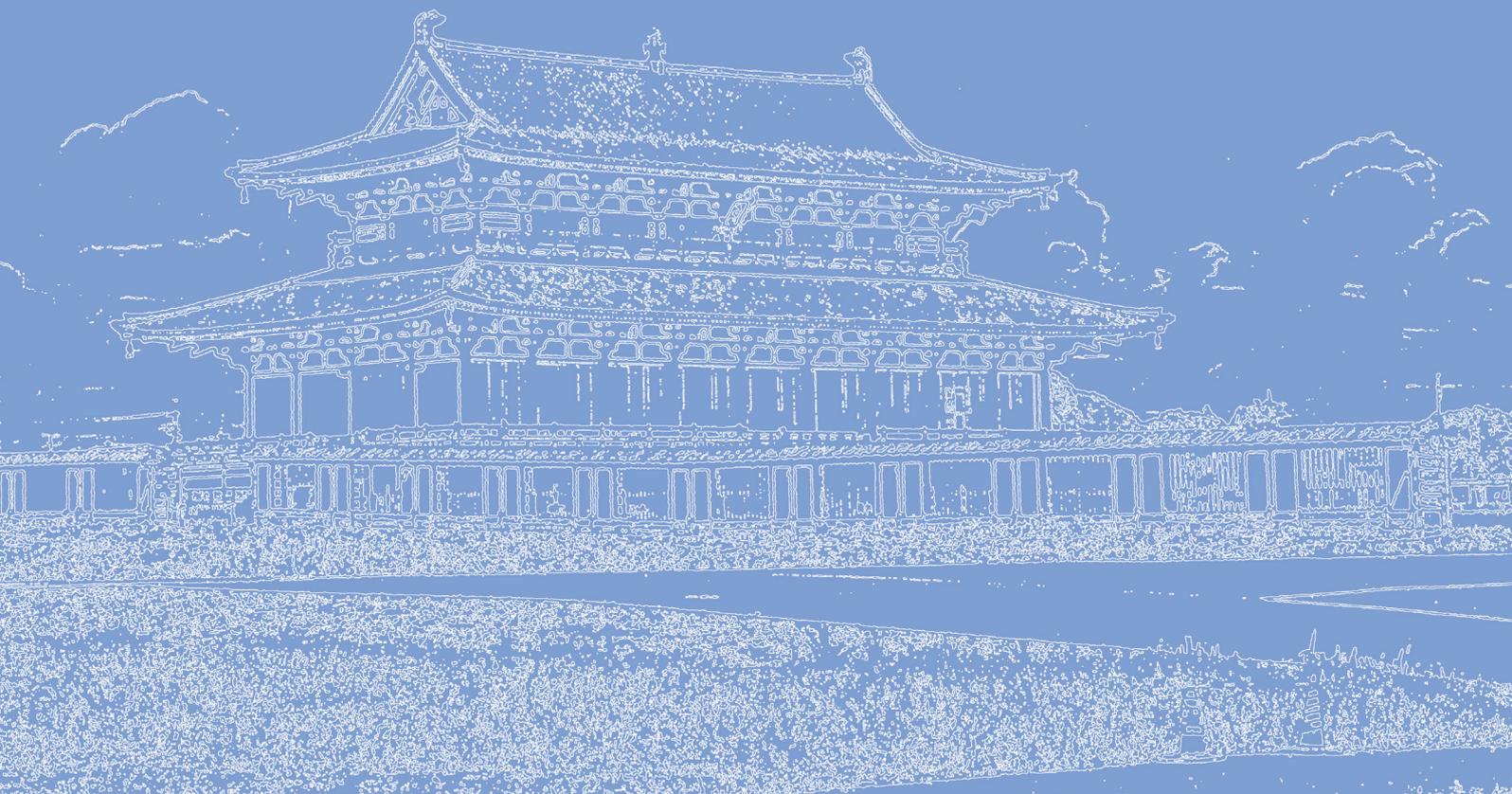


考古遺跡の整備とオーセンティシティ
—“復元の是非”を超えて:アジアの多様な実践と論理—

Conservation and Interpretation of
Archaeological Sites and Authenticity:

Approaches to 'Reconstruction' through Asia's Diverse Practices and Rationales

17-18 December 2025
Nara, Japan





文化遺産に関わる国際会議等の開催 2025

国際会議「考古遺跡の整備とオーセンティシティ」

— “復元の是非” を超えて：アジアの多様な実践と論理—

ACCUCO INTERNATIONAL CONFERENCE 2025

Conservation and Interpretation of Archaeological Sites and Authenticity

Approaches to ‘Reconstruction’ through Asia’s Diverse Practices and Rationales

Cultural Heritage Protection Cooperation Office,
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCUCO)

Agency for Cultural Affairs, Government of Japan



(例言)

- ・本報告書は、令和7年度文化庁委託事業「アジア太平洋地域世界遺産等文化財保護協力推進事業」における実施事業「文化遺産の保護に関する国際会議の開催」として、令和7年12月17日・18日の2日間にわたり実施した事業の記録である。
- ・本報告書の編集は、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修事業部国際協力課のバトリシア・サン、吉田万智、長野積良の協力を得て、脇谷華代子が担当した。
- ・ベトナム語資料の翻訳は、グエン・ドック・アイン（早稲田大学日本語応用言語学研究所）が担当し、日本語版の校閲は、上野邦一（奈良女子大学名誉教授）が行った。
- ・本報告書における訳語は可能な限り統一を図ったが、各論考においては原著の用語を尊重し、差異を残した箇所がある。なお、「整備」を含む頻出用語については、下記のとおり可能な限り統一を図った。

- ・ conservation and interpretation（整備）
- ・ reconstruction（復元・再建）
- ・ restoration（修復）
- ・ repair（修理）
- ・ presentation（公開）
- ・ interpretation（解説）

Credit

- ・ This report presents the outcomes of the project ‘International Conference on the Protection of Cultural Heritage,’ conducted over two days on 17–18 December 2025, under the Agency for Cultural Affairs FY2025 commissioned programme ‘Asia-Pacific Cooperation Programme for the Protection of Cultural Properties, including World Heritage.’
- ・ The report was compiled and edited by WAKIYA Kayoko with the cooperation of Patricia SUN, YOSHIDA Machi, and NAGANO Sekiroh of the International Cooperation Section, Programme Operation Division, Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU).
- ・ The Vietnamese material was translated by NGUYEN Duc Anh (Graduate School of Japanese Applied Linguistics, Waseda University) and the Japanese version was proofread by UENO Kunikazu (Emeritus Professor, Nara Women’s University).
- ・ Terminology in this report has been standardised as far as possible. However, in some cases variations have been retained in order to respect the terminology used in the original papers.
- ・ In particular, frequently used terms including those corresponding to the Japanese term *seibi*（整備） have been harmonised as follows wherever possible:
 - ・ conservation and interpretation（整備 *seibi*）
 - ・ reconstruction（復元・再建）
 - ・ restoration（修復）
 - ・ repair（修理）
 - ・ presentation（公開）
 - ・ interpretation（解説）

はじめに

本書は、令和7年度文化庁委託事業として実施した国際会議「考古遺跡の整備とオーセンティシティー—“復元の是非”を超えて：アジアの多様な実践と論理—」における基調講演、7本の講演、総合討議の内容をまとめたものである。本会議は文化庁と公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所（ACCU 奈良事務所）の共催により開催し、ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）、独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所・奈良文化財研究所、奈良県、奈良市の後援、さらに文化遺産国際協力コンソーシアムの協力を得た。

1. 開催の経緯

本会議は、奈良コンフェレンス 30 周年を記念して昨年掲げた「オーセンティシティー」の議論を継承し、本年はその対象を「考古遺跡」として実施した。開催の契機となったのは、近年、アジア諸国において、上部構造を失った考古遺跡で建物遺構の復元（再建）への関心が高まり、遺跡整備の一環として復元方針を模索する動きが各国で具体化しつつあったことにある。これに伴い日本の専門機関に対する研修や技術的助言の要請も増加傾向にあった。こうした事例では、復元に対する価値判断や実践のアプローチには国ごとに異なり、それぞれの課題や文化的背景を踏まえた柔軟な議論の必要性が浮き彫りとなっていた。日本においても、オーセンティシティーの視点から復元には否定的な見解が根強く存在する一方で、実際には教育的活用や地域理解の促進を目的とした復元事例が数多く進められており、その是非をめぐる議論には新たな論理展開が求められている。

本会議は、このような背景を鑑み、アジア各国の考古遺跡における復元・整備の取り組みを共有するとともに、文化財の地域性を踏まえた新たな視点から「上物のない考古遺跡の整備」や「復元という選択肢の意義」について、実践に即した議論を展開する場として実施した。さらに、単なる理論の整理にとどまらず、現場における意思決定や政策判断に資する具体的な知見を提示しつつ、日本の知見と事例を発信するとともに、各国の理論と実践を共有する機会の創出も目的としている。

2. 会議日程・構成

会議は 2025 年 12 月 17 日・18 日の 2 日間、奈良県コンベンションセンターを主会場として開催した。初日に国内外の包括的な視点を共有した上で、二日目に各国の個別事例を通じて課題解決の実践や復元の多様な意義を議論できる構成とし、これらの段階を経ることで最終日の総合討議へスムーズに移行できる設計とした。

一日目：午前、エクスカージョンとして世界遺産「古都奈良の文化財」の構成資産である平城宮跡を訪れ、現在進められている整備事業の様々な事例を視察した。会議に先立ってエクスカージョンを実施した目的は、参加者が現地を実見・体感し、午後からの論点に反映される日本の整備手法や理論について、共通の理解のもとで議論に臨むためであった。奈良文化財研究所の案内のもと、整備方針や、復元建物が全体の整備計画の中で果たす役割、さらに復元の根拠となる調査・研究成果についても説明を受け、議論の基盤となる理解を深めた。

午後から、会場を奈良県コンベンションセンターに移し、3本の講演を行った。講演では、日本国内の考古遺跡整備の基本的な考え方を示すとともに、復元を含む遺跡整備の意義や様々な手法について紹介した。加えて、世界遺産審査に携わる専門家から、世界各地の遺跡整備における復元の考え方や国際的な視点を踏まえた総合的な報告が行われ、参加者は国内外の復元整備の理念や政策的背景を広く理解する基盤を得ることができた。

二日目：アジア各国の世界遺産（考古遺跡）から、特に復元が課題となっている5か国の事例を取り上げた。各国の実務担当者は、復元に関わる具体的課題とその解決の試み、あるいは実際に復元を実施した場合の理論的根拠や手法、復元建物が果たす効果・意味・役割について発表した。

3. 会議概要

パネリストには、海外6か国から6名、国内から9名の、計7か国計15名の専門家を招へいた。会議の様子はオンラインで同時配信し、2日間で延べ18か国198名のオブザーバーが参加した。

基調講演には、日本の遺跡整備において豊富な経験と実績を有する本中眞氏（奈良文化財研究所長）を迎えた。本中氏は、日本政府文化庁の立場で国内各地の史跡、名勝及び文化的景観等の整備に長年携わるとともに、世界遺産「古都奈良の文化財」平城宮跡については世界遺産登録時からその後の整備に至るまで、一貫して関与してきた。現在も奈良文化財研究所長として、同遺跡の整備および活用を主導する立場にある。続く講演1を、世界的視点から復元整備の課題を俯瞰するため、イコモスの世界遺産審査に関与し、各国の審査および遺跡整備事例に精通するリチャード・マッケイ氏に依頼した。講演2には、平城宮跡第一次大極殿院の復元に関わり、現在は建築史の視点から「復元学」を提唱する海野聡氏（東京大学）を招いた。これら三氏の講演により、実務・国際的視点・学術研究という三つの視座から、復元をめぐる基本的論点を共有した。

講演3～7は、アジア各国の世界遺産において復元が重要課題となっている事例を取り上げ、実務担当者による報告を配した。中国からは、世界遺産「シルクロード：長安―天山回廊の交易路網」の構成資産である隋唐洛陽城遺跡について、整備の実践をエンジニアの立場から肖金亮氏（清華大学）が報告した。日本からは、世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産である御所野遺跡における復元家屋の焼失実験などの取り組みの成果と意義につき、長年、自治体担当者として整備に携わってきた高田和徳氏（いちのへ文化・芸術NPO）が紹介した。さらに、モンゴルの世界遺産「オルホン渓谷の文化的景観」の構成資産エルデン・ズー寺院をはじめとする寺院復元の背景について、政府文化遺産保護局のオドフー・アンガラグスレン氏が実務担当者の立場から報告した。韓国からは、世界遺産「慶州歴史地域」（新羅王京関連遺跡を含む）における王宮復元計画について、国家遺産庁の研究者ホン・バルグム氏が発表した。最後に、ベトナムの世界遺産「タンロン皇城の中心区域」において現在検討が進む復元計画について、その理論的枠組みと調査研究成果を、国の研究者で発掘調査も担当したグイ・ミン・チー氏が報告した。各発表はいずれも、復元の是非のみならず、その理論的根拠、政策的判断、社会的意義を具体的に提示するものであった。

総合司会は、稲葉信子氏（筑波大学名誉教授）および西和彦氏（文化庁主任調査官）が務めた。稲葉氏は、本中氏とともに世界遺産「古都奈良の文化財」登録時に日本政府文化庁の立場から復元建物を含む整備方針を対外的に説明した実務担当者であり、その後も国内外の世界遺産登録・管理に関する政策的助言を行ってきた専門家である。西氏は現在、文化庁において国内外の世界遺産の登録・管理に携わっ

ている。両氏の進行により議論は整理され、最終日の総合討議へと結実した。討議には、上野邦一氏(奈良女子大学名誉教授)、鈴木地平氏(文化庁)、高橋知奈津氏(奈良文化財研究所)も参加し、議論は一層深められた。また、討議の総括(サマライザー)にはロヒト・ジギヤス氏(ICCROM)を迎えた。同氏は文化財防災の専門家として世界各地の世界遺産担当者に対する実務研修を担う立場で、とりわけ災害復興時の復元事例に精通しており、国際的視野に立った総括を行った。

なお、本中氏、稲葉氏、西氏には、会議の草案段階から多大な協力を賜ったことを付記する。

総合討議では、アジアにおける上物のない考古遺跡の復元に関する多様な実践と理論につき議論を深めた。復元は、物理的再建や実験的再建、宗教的機能や心理的復興を重視した再建、保護シェルター化、AR・VRなどのデジタル技術の利用に至るまで幅広く、文脈に応じた戦略の選択肢として各国の実践に反映されていることが明らかになった。さらに、「復元(再建) reconstruction」の概念は国ごとに解釈が異なる課題も浮き彫りとなった。たとえば中国では、「名称(name)」「材料(material)」「位置(location)」「形態(from)」「規模(size)」など複数の基準に基づき評価される場合があり、復元の解釈の幅広さが示された。このように、同じ漢字文化圏においても復元の概念は統一されておらず、議論の前提となる定義や内容の共有を図るため、関連する概念・用語の整理が今後の課題として提示された。

地下遺構のみ残存する考古遺跡での建物遺構の復元は、遺産保存の一環であるとともに、その価値を伝える手段の一つであり、さらに実証研究や教育、伝統技術の継承など新たな価値を創出する営みでもあることが、多くの事例を通じて示された。復元の意思決定においては、真正性(authenticity)や完全性(integrity)、資料の信頼性、そして復元建物の社会的役割などを総合的に考慮する必要がある。また、復元の価値は固定的ではなく、社会的・文化的文脈の中で、将来的に再評価され得るものである。こうした議論を通じ、本会議は復元を単なる再現行為にとどめず、遺産の価値を再考し、そこから生まれる新たな価値や文化的意義を捉える重要性を改めて示す機会となった。

なお、紙面の都合により、総合討議の詳細な議事録(各発言を含む記録)は本報告書には掲載していない。詳細については、ACCU奈良のウェブサイトに掲載予定であるので、あわせてご参照いただきたい。

本会議では「考古遺跡の復元」をめぐる様々な課題と実践、そしてそこから生まれる新たな価値や可能性を共有した。本会議の論点が今後、世界文化遺産をはじめとする考古遺跡の実務担当者間での議論を深め、有益かつ有意義な成果につながれば幸いである。

公益財団法人

ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所

FOREWORD

This publication is a compilation of the keynote speech, seven presentations, and panel discussions from the international conference, *Conservation and Interpretation of Archaeological Sites and Authenticity: Approaches to 'Reconstruction' through Asia's Diverse Practices and Rationales*, held in 2025 as a commissioned project of the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan. The conference was co-organised by the Agency for Cultural Affairs and the Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU Nara). It was also supported by the International Centre for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property (ICCROM), the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties and the Nara National Research Institute for Cultural Properties, Nara Prefecture, and Nara City, with additional cooperation from the Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage (JCIC-Heritage).

1. Background and Objectives

Building on last year's conference theme of 'Authenticity,' held to commemorate the 30th anniversary of the 1994 Nara Conference on Authenticity in relation to the World Heritage Convention, this year's meeting expanded the scope of discussion to archaeological sites. The conference was prompted by the growing interest across Asian countries in the reconstruction of architectural remains as part of the conservation and interpretation of archaeological sites. In many countries, concrete efforts to formulate policies on reconstruction as part of site management have emerged, leading to increasing requests to Japanese expert institutions for training and technical advice. These cases reveal considerable diversity among countries in value judgments and practical approaches toward reconstruction, highlighting the need for flexible discussions grounded in each nation's specific challenges and cultural contexts. In Japan as well, although critical views on reconstruction based on authenticity remain deeply rooted, numerous reconstruction projects have been carried out for educational purposes and to promote public understanding of sites. As such, debates surrounding the acceptability of reconstruction require more nuanced perspectives and deeper discussions.

Against this background, the conference was convened as a forum to share approaches to reconstruction and site management at archaeological sites across Asia. In addition, the conference served as a platform for new perspectives that reflect regional characteristics of cultural properties to engage in practice-oriented discussions on the management of archaeological sites without extant structures as well as the significance of reconstruction as an option. Furthermore, the conference aimed not only to revisit theoretical discussions but also to present practical knowledge useful for on-site decision-making and policy formulation. It sought to present Japanese expertise and case studies while creating opportunities to share the current state of theory and practice in each participating country.

2. Schedule and Structure of the Conference

The conference was held over two days, 17 to 18 December 2025, with the Nara Prefecture Convention Center in Nara City serving as the main venue. The programme was designed so that the first day would provide overarching domestic and international perspectives, while the second day would examine specific case studies, enabling a smooth transition into the final general discussion.

Day 1: In the morning, participants joined an excursion to the Nara Palace Site, a component property of the World Heritage site *Historic Monuments of Ancient Nara*, where they observed various ongoing conservation and interpretation projects. The excursion was organised prior to the conference so that participants could directly experience the site and engage in discussions during the afternoon sessions based on a shared understanding of Japanese approaches and theories of site management. Guided by the experts from Nara National Research Institute for Cultural Properties, participants received explanations on conservation policies, the role of reconstructed buildings within the overall site management plan, and the research results that form the basis for reconstruction.

In the afternoon, the participants moved to the Nara Prefecture Convention Center, where three presentations were delivered. The sessions outlined the fundamental philosophies behind Japanese approaches to conservation and interpretation of archaeological sites and examined the significance of reconstruction in addition to introducing various other methodologies. An expert involved in the World Heritage inscription process provided a comprehensive report on approaches to reconstruction in conservation and interpretation worldwide from an international perspective. Through these presentations, participants gained a broad foundation for understanding the philosophies and policy contexts underpinning reconstruction practices both in Japan and abroad.

Day 2: Five case studies from World Heritage sites (archaeological sites) in Asia where reconstruction is a key issue were presented. Practitioners from each country reported on specific challenges related to reconstruction, efforts toward their resolution, the theoretical foundations and methodologies employed when reconstruction projects were realised, and the effects, meanings, and roles of reconstructed buildings.

3. Conference Participants

The conference invited fifteen experts from seven countries (six from overseas and nine from Japan) as panellists, and the proceedings were simultaneously streamed online. Over the two days, a total of 198 observers from 18 countries participated.

The **keynote speech** was delivered by Mr MOTONAKA Makoto, Director General of the Nara National Research Institute for Cultural Properties, who has extensive experience in archaeological site conservation and interpretation in Japan. Since his time working at the Agency for Cultural Affairs, he has long been involved in the conservation and interpretation of Historic Sites, Places of Scenic Beauty, and Cultural Landscapes throughout Japan and has consistently contributed to projects at the Nara Palace Site of the World Heritage property *Historic Monuments of Ancient Nara* from the time of its inscription to the present. In his current position as the Director General of the Nara National Research Institute for Cultural Properties, he continues to lead conservation, interpretation, and utilisation initiatives at the site. **Presentation I** was delivered by Prof Richard MACKAY, an expert involved in ICOMOS evaluations of World Heritage nominations and has extensive knowledge of review processes and site management practices in various countries. His presentation provided a global overview of issues surrounding reconstruction. **Presentation II** was delivered by Dr UNNO Satoshi from the University of Tokyo, who contributed to the reconstruction of the Former Imperial Audience Hall Compound at the Nara Palace Site. In his presentation, he analysed the concept of reconstruction from the perspective of architectural history and proposed the field of ‘reconstructionology.’ Through the presentations of these three speakers, fundamental issues concerning reconstruction were shared from three complementary viewpoints: practical implementation, international review, and academia. **Presentations III to VII** introduced case studies from World Heritage sites across Asia where reconstruction has become a major subject and were delivered by practitioners directly involved in the sites’ conservation and interpretation projects. From **China**, Dr XIAO Jin Liang (Tsinghua Tongheng Urban Planning & Design Institute) reported on reconstruction practices at the Luoyang Ruins of Sui and Tang Dynasty, a component property of the World Heritage site *Silk Roads: the Routes Network of Chang’an–Tianshan Corridor*. From **Japan**, Mr TAKADA Kazunori (Ichinohe Culture and Arts NPO), who has long been involved in municipal-level site management, introduced the outcomes and significance of initiatives such as experimental burn tests of reconstructed dwellings at the Goshono Site in Iwate Prefecture, part of the World Heritage site *Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan*. From **Mongolia**, Dr Angaragsuren ODKHUU (Administration of the World Heritage—Orkhon Valley Cultural Landscape) presented the background to temple reconstruction projects including Erdene Zuu Monastery, a component property of the World Heritage site *Orkhon Valley Cultural Landscape*. From the **Republic of Korea**, Ms HONG Balkeum (Gaya National Research Institute of Cultural Heritage, Korea Heritage Service) introduced the reconstruction plans within the World Heritage site *Gyeongju Historic Areas* (including the Silla Royal Capital sites). Finally, from **Vietnam**, Dr BUI Minh Tri, reported on the theoretical framework and research findings underpinning the reconstruction plan currently under consideration at the World Heritage site *Central Sector of the Imperial Citadel of Thang Long*. Each presentation addressed not only the various approaches and challenges of reconstruction, but also clearly articulated its rationales, policy considerations, and social significance.

The conference was jointly moderated by Prof INABA Nobuko (Professor Emerit, University of Tsukuba) and Mr NISHI Kazuhiko (Chief Senior Specialist for Cultural Properties, Agency for Cultural Affairs). Prof INABA, together with Mr MOTONAKA, previously served at the Agency for Cultural Affairs and were responsible for explaining Japan's conservation and interpretation policies, including reconstructions of buildings, to foreign experts during the inscription of *Historic Monuments of Ancient Nara*. She has since provided policy advice on World Heritage nomination and management both domestically and internationally. On the other hand, Mr NISHI is currently engaged in World Heritage nomination and management at the Agency for Cultural Affairs. Under their facilitation, the discussions were effectively structured and culminated in the final session. The discussion was further enriched by contributions from Professor Emeritus UENO Kunikazu (Nara Women's University), Mr SUZUKI Chihei (Agency for Cultural Affairs), and Ms TAKAHASHI Chinatsu (Nara National Research Institute for Cultural Properties). The session summary was delivered by Dr Rohit JIGYASU (ICCROM), a specialist in disaster risk management in cultural heritage. Dr JIGYASU provides practical training to heritage practitioners worldwide and is particularly knowledgeable about reconstruction in post-disaster recovery contexts. He offered a synthesis grounded in an international perspective.

We also express our deepest appreciation to Mr MOTONAKA, Prof INABA, and Mr NISHI for their substantial cooperation from the planning stage of this conference.

4. Panel Discussion

In the Panel Discussion on the last day, participants further explored the diverse practices and theoretical approaches to the reconstruction of archaeological sites without standing structures in Asia. It became clear that reconstruction encompasses a broad spectrum of approaches, including physical and experimental reconstructions, reconstruction for the revival of religious functions or cultural identity, reconstruction as protective shelters, and digital reconstruction using AR or VR. The discussion also highlighted that the concept of 'reconstruction' is interpreted differently across countries. For example, in China, reconstruction may be assessed based on multiple criteria, such as name, material, location, style, and size, demonstrating the breadth of interpretive frameworks applied to the concept. Even within the cultural sphere that shares the use of Chinese characters, the understanding of 'reconstruction' is not uniform, showing the need to further clarify related concepts and terminology to establish a common basis for discussion.

Through the case studies, it was demonstrated that the reconstruction of architectural remains at archaeological sites is not only part of heritage conservation and a means of communicating site values, but also an activity that can generate new forms of value, including experimental research, education, and the transmission of traditional techniques. Decision-making regarding reconstruction therefore requires holistic consideration of authenticity, integrity, the reliability of available evidence, and the social role of reconstructed buildings. Moreover, the value of reconstruction is not fixed and may be reassessed over time within evolving social and cultural contexts. In this respect, the conference reaffirmed the importance of viewing reconstruction not merely as an act of reproduction, but as an opportunity to reconsider heritage values and to recognise the new cultural meanings that may emerge from the process.

Through this conference, participants shared a wide range of challenges, practices, and emerging perspectives on approaches to reconstruction in the conservation and interpretation of archaeological sites. It is our sincere hope that the themes raised here will further deepen dialogue among practitioners involved in World Heritage and other archaeological sites and contribute to meaningful and productive outcomes.

Cultural Heritage Protection Cooperation Office,
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

Contents

開会あいさつ Opening Remarks	10
参加者一覧 List of Participants	18
基調講演 KEYNOTE SPEECH	
本中 眞 MOTONAKA Makoto	26
考古学的遺跡における木造建造物の復元—世界遺産「古都奈良の文化財・平城宮跡」を事例として— Reconstruction of Wooden Structures in Archaeological Sites: A Case Study of the Nara Palace Site in the World Heritage Property ‘Historic Monuments of Ancient Nara’	
講演 PRESENTATIONS	
リチャード・マッケイ Richard MACKAY	45
考古遺跡：保存・管理とその意義 Archaeological Sites: Conservation, Management and Meaning	
海野 聡 UNNO Satoshi	58
遺跡復元の価値と復元学 Value of Archaeological Reconstruction and ‘Reconstructionology’	
肖金亮 XIAO Jin Liang	76
隋唐洛陽城遺跡に関する事例研究 Case Study on the Conservation of Luoyang Ruins of Sui and Tang Dynasty	
高田 和徳 TAKADA Kazunori	93
地域に根ざした遺跡の整備活用と研究—岩手県御所野遺跡から— Community-based Site Conservation, Interpretation and Research: Insights from the Goshono Site, Iwate Prefecture	
オドフー・アンガラグスレン Angaragsuren ODKHUU	104
エルデン・ズー僧院大ツォグチェン寺とバルーン・フレー僧院バット・ツァガン寺の復元の実現性 The Possibility of Reconstruction of Tsogchin Dugan (Main Assembly Hall) of Erdene Zuu Monastery and the Bat-Tsagaan Temple of Baruun Khüree Monastery	
ホン・バルグム HONG Balkeum	114
韓国考古遺跡の復元に対するオーセンティシティ及び最新傾向 — 慶州・新羅王京の中核遺跡を中心に — Authenticity and Recent Trends in Reconstruction of Archaeological Sites in Korea: Focusing on the Core Sites of Gyeongju, the Ancient Capital of the Silla Kingdom	
ブイ・ミン・チー BUI Minh Tri	126
考古学的証拠に基づく李朝ベトナムの宮殿建築：東アジアの文脈における形態学的同定と比較分析 Vietnamese Palace Architecture during the Ly Dynasty from Archaeological Evidence: Morphological Identification and Comparative Analysis within the East Asian Context	
総合討議サマリー	163
Summary of the Discussions	
参考資料 Appendix	165

開会あいさつ



皆様、こんにちは。文化庁文化財鑑査官の山下信一郎と申します。

本日の国際会議の開催に当たり、共催者の一員として、一言ご挨拶申し上げます。

本日は、広く国内外から多くの専門家の方にお集まりいただき、心より感謝申し上げます。また、会議の開催にご尽力をいただきましたユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所をはじめ関係機関の皆様に、厚く御礼申し上げます。

文化庁では、アジア太平洋地域における文化遺産保護への協力を推進すべく、各国の文化遺産保護に携わる担当者等の人材養成を支援する事業を行っております。国際会議の開催はその取組の一環であり、各国の文化遺産の事例発表などを通じて諸課題を共有し、意見交換によりその対応策を検討する場として捉えております。

本日の国際会議は、「考古遺跡の整備とオーセンティシティ」をテーマとしております。

アジア諸国では、考古遺跡の保存・整備や建物遺構の復元に対する関心が高まり、各国において消滅した寺院や宮殿等の再建をめぐる検討が具体化しています。奈良市内においても平城宮跡の復元事業が行われているところです。その一方で、復元に対する価値判断や実践のアプローチは国ごとの多様性がみられ、それぞれの文化的背景を踏まえた慎重かつ柔軟な議論が求められています。

本会議で、こうした状況を踏まえ、各国の取り組みを共有し、現場の意思決定や政策判断にも資する実践的な視点から検討を深める場としたいと考えております。

また、文化遺産保護の分野における人材の養成、そして担当者間のネットワークの一層の充実が図られますことも本会議の目的のひとつです。

結びに、ご参加の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。簡単ではございますがご挨拶とさせていただきます。

文化庁文化財鑑査官
山下 信一郎

OPENING REMARKS

Distinguished guests, welcome. My name is YAMASHITA Shin'ichiro, and I serve as the Councillor for Cultural Properties for the Agency for Cultural Affairs of the Government of Japan. As a representative of the co-organising body for today's International Conference, I would like to offer a few opening remarks.

I would like to begin by expressing my heartfelt gratitude to the many experts who have gathered here today from across Japan and around the world. I also wish to extend my sincere thanks to the Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO and all the related organisations for their dedicated efforts in making this conference possible.

The Agency for Cultural Affairs is committed to promoting cooperation for the protection of cultural heritage in the Asia-Pacific region. To this end, we support various initiatives focused on human resource development and capacity building for heritage protection across different nations, and this international conference is a vital part of those efforts. We view it as a forum for sharing the specific challenges faced by each country through presentations on cultural heritage case examples, and for exploring potential solutions through a rigorous exchange of opinions.

The theme of today's conference is *Conservation and Interpretation of Archaeological Sites and Authenticity*.

Throughout Asia, there is a growing interest in the conservation and interpretation of archaeological sites, as well as the reconstruction of archaeological remains. Proposals for the reconstruction of vanished temples and palaces are becoming increasingly concrete in many countries. Here in Nara City, for instance, the reconstruction project at the Nara Palace Site is currently underway. At the same time, we see a great diversity in how different nations approach value judgements and practical methods regarding reconstruction. This necessitates a careful and flexible dialogue that respects the unique cultural background of each region.

In light of these circumstances, we hope this conference will serve as a platform to share the initiatives of each country and to deepen our discussions from a practical perspective that will ultimately aid in on-site decision-making and policy development.

Furthermore, another key objective of this gathering is to further enhance the training of personnel in the field of cultural heritage protection and to strengthen the networks between those responsible for these tasks.

In closing, I would like to offer my very best wishes regarding the endeavours of all participants. I look forward to a successful and productive conference.

Thank you very much.

YAMASHITA Shin'ichiro
Councillor for Cultural Properties
Agency for Cultural Affairs of the Government of Japan.

開会あいさつ



ご来賓の皆さま、そして国内外からご参加いただいたパネリストの皆さま、本日は「ACCU 国際会議」にご参集くださり、誠にありがとうございます。主催者を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

ACCU 奈良事務所では、事務所開設の 2000 年当初から国際会議を継続して開催し、本年で 26 年目を迎えることができました。長年にわたり文化遺産保護をめぐる議論と実践を積み重ねてこられた皆さまのご協力に、深く敬意を表します。事務所開設当初から、ACCU 国際会議は、奈良県および日本の文化財保護に軸足を置いた歴史ある会議として発展してまいりました。

まず、開催にあたり、長年にわたり私どもの事業全体を支えてくださっている日本国政府文化庁に、深く御礼申し上げます。また、後援機関としてロヒト・ジギヤス氏を派遣くださったイクロム (ICCROM) にも、長年のご協力にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

さらに、長年にわたり ACCU の協力機関として多大なご支援をいただくとともに、本日のエクスカージョンをはじめ、当会議の開催趣旨の段階からご助言を賜りました独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に、心より感謝申し上げます。また、地元自治体として会場をご提供いただくなど、多方面でご支援くださった奈良県および奈良市にも御礼を申し上げます。開催案内の広報にご協力いただきました東京文化財研究所、そして協力機関である文化遺産国際協力コンソーシアムにも、改めて感謝申し上げます。

1994 年に奈良で開催された世界文化遺産「奈良コンフェレンス」から 30 周年となったのを記念し、昨年の国際会議では、「オーセンティシティ」をテーマに議論を深めました。当時の関係者をお迎えし、国宝・重要文化財クラスの建造物の修復・再建（復元）を議論し、大変実りある会議となりました。

本年は、昨年のテーマを継承しつつ、対象を「考古遺跡」に広げています。東アジアや東南アジアでは、建物の多くが木造であることから、遺跡となると地上には痕跡を残さないことが普通です。遺跡としての価値は地下に保存されているとも言えるでしょう。しかし、その存在は地下に埋もれていて人々が視覚的に理解できないために、近年アジア諸国では考古遺跡の保存・整備における復元への関心が急速に高まっています。このため日本の専門機関に対して研修や技術協力の要請が増えています。再建するかどうかの判断やその方法は国によって大きく異なることから、多様な文化的背景を踏まえた議論が求められます。日本でも、オーセンティシティの観点から慎重な意見がある一方で、教育的意義や地域理解の促進を目的とした復元事例が多数存在し、従来の議論を超える新たな論理の構築が必要となっているのでしょうか。

本会議では、こうした背景を踏まえ、アジア各国での取り組みを共有し、「上物のない考古遺跡の整備」や「復元という選択肢の意義」について、理論と実践の両方から議論を深めます。現場での意思決定や政策判断に寄与する具体的知見を提示して、奈良そして日本における経験や蓄積を発信するとともに、各国における実情と課題について情報交換する実りある場としたいと考えております。

最後に、国内外の関係機関の皆さまに、多大なるご支援への御礼を申し上げます。本日から議論が、アジア地域の文化遺産保護の未来を切り開く一助となることを願っております。ありがとうございました。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
文化遺産保護協力事務所
所長 森本 晋

OPENING REMARKS

Distinguished guests, esteemed panellists from Japan and abroad, thank you very much for joining us today for the ACCU Nara International Conference. On behalf of all the organisers, I would like to offer a few words of welcome.

Since the establishment of the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), Nara office in 2000, we have continuously hosted this international conference, and this year marks our 26th anniversary. I would like to express my deepest gratitude to all of you who have contributed your expertise to the ongoing dialogue and practice of cultural heritage protection over these many years. Since its inception, the ACCU Nara International Conference has evolved as a historic forum, deeply rooted in the cultural property protection traditions of Nara Prefecture and Japan as a whole.

First and foremost, I would like to express my profound appreciation to the Agency for Cultural Affairs of the Government of Japan, which has supported our entire operation for many years. I also wish to extend my sincere thanks to the International Centre for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property for their long-standing collaboration and for delegating Dr Rohit JIGYASU to join us as their representative.

Furthermore, my heartfelt thanks go to the Nara National Research Institute for Cultural Properties. They have provided the ACCU with immense support as a partner organisation for many years and have offered invaluable advice from the earliest planning stages of this conference, including today's excursion. I also wish to thank Nara Prefecture and Nara City, our local host governments, for their multi-faceted support, including the provision of this venue. Finally, I would like to acknowledge the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties for their cooperation in promoting this event, and the Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage for their continued support.

Last year, we marked the 30th anniversary of the 1994 *Nara Conference on Authenticity in relation to the World Heritage Convention*. To commemorate this milestone, we explored the theme of 'Authenticity' at the ACCU Nara International Conference. It was a highly productive session where we welcomed experts to discuss the restoration and reconstruction of buildings designated as National Treasures and Important Cultural Properties.

This year, while continuing from last year's theme, we are expanding our focus to archaeological sites. In East and Southeast Asia, where wooden architecture is predominant, it is common for archaeological sites to leave no visible traces above ground. One could say that the value of these sites is preserved entirely underground. However, because this value is buried and cannot be visually perceived by the public, interest in the conservation, interpretation, and reconstruction of archaeological remains has risen sharply across Asian nations in recent years. For this reason, Japanese specialist institutions have been receiving an increasing number of requests for training and technical cooperation. As the criteria and methods for deciding whether to reconstruct a site vary significantly by country, the dialogue surrounding this must respect all these diverse cultural backgrounds. In Japan, while opinions on authenticity in this regard are sometimes cautious, there are also numerous examples of reconstruction projects intended to promote educational significance and regional understanding. This suggests that we may need to construct a new logic that transcends traditional debates.

Having said this, this conference will serve as a platform to share initiatives from various Asian countries. We will deepen our discussion on the management of archaeological sites without standing structures and the implications of choosing reconstruction as an option, both in theoretical and practical terms. The experience and expertise accumulated over the years by Nara and Japan will hopefully contribute positively to policies and on-site decision-making. At the same time, we hope this will prove a fruitful exchange regarding the current realities and challenges faced by each nation.

In closing, I would like to reiterate my gratitude to all domestic and international partner organisations for their immense support. I sincerely hope that the discussions beginning today will help pave the way for the future of cultural heritage protection in the Asian region.

Thank you very much.

MORIMOTO Susumu
Director

Cultural Heritage Protection Cooperation Office,
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

開会あいさつ



皆さま、こんにちは。奈良文化財研究所長の本中眞でございます。

まず、本会議を主催いただきました ACCU ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所の森本所長をはじめ、開催にご尽力くださった関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

また、イコモス (ICOMOS) 世界遺産顧問のリチャード・マッケイ様をはじめ、アジア各国ならびに日本各地からお越しくださった研究者・専門家の皆さま、意見交換を導いてくださる稲葉信子先生、イクロム (ICCROM) のロヒト・ジギヤス プログラムマネージャー、そして文化庁の文化財調査官の皆さまに対しましても、深く感謝を申し上げます。

今回の会議のメインテーマは「考古遺跡の整備とオーセンティシティ」であり、「復元の是非」を越えて：アジアの多様な実践と論理」というサブタイトルが付されております。

考古学的遺跡は、地域ごとに性質や構成要素が異なります。しかし、その価値を次の世代へと確実に継承するためには、共通の原則を踏まえつつ、各地域が育んできた固有の考え方や手法を尊重し、相互に共有し理解を深めることが不可欠です。

遺跡のプレゼンテーションには多様なアプローチがあります。どの手法を選び、どのように組み合わせるのかは、調査研究の進展の程度はもちろんのこと、遺跡の特性や周辺環境、遺跡を取り巻く市民社会の状況によっても大きく異なります。

だからこそ、全体のバランスを見据え、その遺跡に最もふさわしい方法を丁寧を選び取る視点が重要であると言ってよいでしょう。

本会議において、多様な観点から実りのある議論がおこなわれ、国際的な知見の交流を通じて、相互の理解と協力の輪がさらに広がることを心より期待しております。

簡単ではございますが、開会にあたって、私からのご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所
所長 本中 眞

OPENING REMARKS

Good afternoon, ladies and gentlemen. My name is MOTONAKA Makoto. I am the Director General of the Nara National Research Institute for Cultural Properties. First, I would like to express my heartfelt gratitude to Mr MORIMOTO Susumu, Director of the Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO, as well as to all those who have devoted their efforts to organising this International Conference on Cultural Heritage.

I also wish to extend my sincere appreciation to Prof Richard MACKAY, International Council on Monuments and Sites expert advisor to the UNESCO World Heritage Committee; to the distinguished researchers and experts who have come from across Asia and various regions of Japan; to Prof INABA Nobuko for guiding our discussions; to Dr Rohit JIGYASU, Programme Manager of the International Centre for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property; and to the Specialists for Cultural Properties from the Agency for Cultural Affairs of the Government of Japan.

The theme of this conference is *Conservation and Interpretation of Archaeological Sites and Authenticity: Approaches to 'Reconstruction' through Asia's Diverse Practices and Rationales*.

Archaeological sites differ in their nature and composition depending on their region. However, to ensure that their

value is faithfully passed on to future generations, it is essential to build upon shared principles while respecting the unique approaches and methods nurtured in each locality, and to deepen mutual understanding through exchange.

There are diverse approaches to the interpretation and presentation of archaeological sites. The choice of method, and how it is combined, depends not only on the progress of research but also on the characteristics of the site, its setting, and the nature of the society that engages with it.

Therefore, it is crucial to maintain an overall balance and carefully select the most appropriate approach for each site.

I sincerely hope that this conference will lead to fruitful discussions from multiple perspectives and that through the international exchange of knowledge, the circle of mutual understanding and cooperation will expand even further.

With these brief remarks, I would like to conclude my opening address.

Thank you very much.

MOTONAKA Makoto

Director General

Nara National Research Institute for Cultural Properties

開会あいさつ



ご来賓の皆様、ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所（ACCU 奈良）所長の森本様、文化庁文化財鑑査官の山下様、奈良文化財研究所所長の本中様、ご登壇の発表者およびパネリストの皆様、そしてご来場の皆様、本日、この歴史ある奈良の地において開催される「2025年文化遺産に関わる国際会議」の開会にあたり、イクロム（ICCROM）を代表して皆様にご挨拶申し上げます。私にとりまして大きな喜びであり、また名誉でもあります。

はじめに、本会議を主催してくださった日本国政府文化庁、ならびに ACCU 奈良の皆様、心より感謝申し上げます。文化遺産の保全に関する国際的な対話を長年にわたり主導され、本会議においても温かいおもてなしと強いリーダーシップを示してくださったことに、ICCROM として深く敬意を表します。また、奈良文化財研究所、奈良県、奈良市の皆様と再び協力できることを大変光栄に思っております。これらの機関の皆様の共同のご尽力が、本会議の実現を可能にしています。

ICCROM は、ACCU 奈良との長年にわたるパートナーシップを誇りに思っております。この協力関係は、ACCU 奈良の設立以来、着実に発展してきました。私たちは知識機関として、アジア太平洋地域全体において、専門的・技術的な幅広い取組を共に進めてきました。その中心にあるのは、文化遺産の保存と管理の分野における専門人材の能力強化に対する共通のコミットメントです。研修プログラム、専門家交流、そして本会議のような国際会議を通じて、私たちの協力は専門実践の向上と、多様な文化的背景を越えた相互学習の促進に貢献してきました。特に、気候危機、災害、開発圧力といった地球規模の課題が文化遺産に深刻な影響を及ぼしている現在、こうした取組の重要性は、これまで以上に高まっています。

本会議のテーマである「考古遺跡の整備、そして復元のアプローチに焦点を当てたオーセンティシティ」は、まさに時宜を得た、きわめて重要な課題です。アジアをはじめとする各地域において、文化遺産の専門家は、可視的な遺構に限られた遺

跡をどのように解釈するのか、オーセンティシティと教育的・社会的価値をいかに調和させるのか、また、復元をどのように文脈に配慮し、学術的根拠と倫理性に基づいて進めるのかといった、複雑な問いに直面しています。ICCROM は、モスル（イラク）やウクライナでの取組、ならびに「文化遺産の危機後復興」に関する年次の国際研修プログラムを通じて、こうした課題に対応するための枠組み、手法、実践の構築に取り組んできました。本会議を通じて、地域の多様な経験、考え方、視点を持ち寄り、実践に根ざした丁寧な対話を行う機会が得られることを、ICCROM は強く歓迎しております。

私たちは、このような国際会議の場が、事例や技術的知見を共有するだけでなく、文化遺産の専門家として私たちの意思決定を導く価値観について、共に考えるために不可欠であると考えています。その価値観とは、人々、文化的多様性、そして長期的な持続可能性を、保存実践の中心に据えるものです。

今後に向けて、ICCROM は、ACCU 奈良をはじめとする日本および国際的なパートナーの皆様との、すでに確立された協力関係をさらに強化していきたいと考えています。研究、研修、知識共有における連携を一層深め、考古学的遺跡および文化遺産を取り巻く課題の変化に対応できる次世代の専門家を共に支援していく所存です。

結びにあたり、ACCU 奈良の森本様とそのチームの皆様、日本国政府文化庁の山下様、奈良文化財研究所の本中様およびご関係の皆様、そして本会議にご参加くださったすべての発表者、パネリスト、参加者の皆様、心より御礼申し上げます。本会議が実り多く刺激的なものとなり、今後数日にわたって活発で充実した議論が展開されることを願っております。

文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）
プログラム・マネージャー
ロヒト ジギヤス

OPENING REMARKS

Distinguished guests, Mr MORIMOTO, Director of the Cultural Heritage Protection Cooperation Office of ACCU Nara, Councillor YAMASHITA, the Agency for Cultural Affairs of the Government of Japan, Mr MOTONAKA, Director-General of the Nara National Research Institute for Cultural Properties, esteemed presenters and panellists, ladies and gentlemen, it is a great pleasure and honour for me to address you today on behalf of ICCROM—at the opening of the 2025 International Conference on Cultural Heritage here in the historic city of Nara.

Allow me, first of all, to express ICCROM’s sincere appreciation to the Agency for Cultural Affairs of the Government of Japan and to ACCU Nara for convening this important conference, and for their warm hospitality and continued leadership in advancing international dialogue on cultural heritage conservation. We are also honoured to collaborate once again with the National Research Institute for Cultural Properties, the Nara Prefectural Government, and Nara City, whose collective efforts make this forum possible.

ICCROM is particularly proud of its long-standing partnership with ACCU Nara, which has flourished ever since ACCU Nara’s establishment. Over the years, we have worked closely together as knowledge institutions, collaborating on a wide range of professional and technical initiatives across the Asia-Pacific region. Central to this collaboration has been our shared commitment to capacity building for heritage professionals, especially in the fields of conservation and management of cultural heritage. Through training programmes, expert exchanges, and international conferences such as this one, our partnership has contributed to strengthening professional practice and fostering mutual learning across diverse cultural contexts. In the light of pressing global challenges confronting cultural heritage especially climate crisis, disasters and development pressures, the need for such initiatives is more than ever before.

The theme of this conference—the conservation and interpretation of archaeological sites and authenticity, with particular attention to approaches to reconstruction—is both timely and highly relevant. Across Asia and beyond, heritage professionals are increasingly confronted with complex questions: how to interpret sites with limited visible remains, how to balance authenticity with educational and social values, and how reconstruction can be approached in ways that

are context-sensitive, evidence-based, and ethically grounded. ICCROM has been engaged in developing frameworks, tools and practices on post crisis recovery of cultural heritage, notably through recent initiatives in Mosul (Iraq), Ukraine and its annual flagship international training on post crisis recovery of cultural heritage. ICCROM strongly welcomes this opportunity to engage in a nuanced and practice-oriented dialogue that brings together diverse experiences, rationales, and perspectives from across the region.

We believe that forums such as this conference are essential not only for sharing case studies and technical knowledge, but also for reflecting collectively on the values that guide our decisions as heritage professionals—values that place people, cultural diversity, and long-term sustainability at the centre of conservation practice.

Looking ahead, ICCROM very much looks forward to further strengthening our well-established partnership with ACCU Nara and with our Japanese and international colleagues. We remain committed to deepening collaboration in research, training, and knowledge exchange, and to jointly supporting the next generation of heritage professionals in responding to the evolving challenges facing archaeological sites and cultural heritage worldwide.

In closing, I would like to thank Mr MORIMOTO and his team at ACCU Nara, Councillor YAMASHITA, the Agency for Cultural Affairs of the Government of Japan, Mr MOTONAKA and colleagues at the Nara National Research Institute for Cultural Properties, as well as all presenters, panellists, and participants, for their contributions to this important event. I wish you all a stimulating and fruitful conference, and I look forward to the rich discussions that will unfold over the coming days.

Thank you very much.

Rohit JIGYASU
*Programme Manager,
Sustainable Urban and Built Heritage Conservation, Disaster
and Climate Risk Management and Post-Crisis Recovery*
ICCROM

LIST OF PARTICIPANTS

Moderators:



INABA Nobuko (Japan)

Professor Emerit

University of Tsukuba

Trained as a conservation architect and architectural historian, Prof INABA received her doctoral degree from the Tokyo Institute of Technology. From 1991 to 2008, including the period from 2000 to 2002 when she worked for ICCROM seconded by Japan, she served in the Japanese government's Agency for Cultural Affairs and its affiliated research institute. Through this period, she gained practical knowledge and experience in heritage policy development and management. From 2008 to 2020, she held the position of Professor of World Heritage Studies at the University of Tsukuba. Continuing her domestic and international advisory role in heritage conservation, she is now Professor Emerit at the University of Tsukuba and the Director of the Mount Fuji World Heritage Centre, Shizuoka, Japan.

稲葉 信子 (日本)

筑波大学 名誉教授

東京工業大学で博士号を取得。1991年から2008年まで文化庁及び文化財研究所に勤務し、2000年から2002年までICCROMに出向。2008年から2020年まで筑波大学教授（世界遺産学）。現在、静岡県富士山世界遺産センター館長を務める。



NISHI Kazuhiko (Japan)

Chief Senior Specialist for Cultural Properties

Office for International Cooperation on Cultural Heritages, Cultural Resources Utilization Division,

Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

In charge of cultural property administration with a focus on architecture preservation at the Agency for Cultural Affairs from 1996. Worked as a Project Manager at ICCROM in Rome (2005-2006). Later became involved with World Heritage nominations from various regions and the World Heritage Committee, in addition to the protection of cultural properties in Japan. Assumed current position in April 2022. Council member of ICCROM. Works include 'Modern Japanese Style Architecture' (*Nihon no Bijutsu*, No.450, 2003), and *Introduction to the World Cultural Heritage* (co-authored, 2017).

西 和彦 (日本)

文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室世界文化遺産部門
主任文化財調査官

1996年より文化庁において建造物保護を中心に文化財行政を担当。国際文化財保存修復研究センター (ICCROM) (在イタリア・ローマ) プロジェクト・マネージャー (2005~2006年度出向) を経て、国内文化財の保護に並行して各地の世界遺産推薦や世界遺産委員会に関わる。2022年4月より現職。国際文化財保存修復研究センター (ICCROM) 理事。著作に「近代和風建築」(『日本の美術、第450号』、2003年) 『世界文化遺産の思想』(2017年、共著) など。

Rapporteur:



Rohit JIGYASU (India/Italy)

*Programme Manager,
Sustainable Urban and Built Heritage Conservation,
Disaster and Climate Risk Management and Post-Crisis Recovery
ICCROM*

Rohit JIGYASU is a conservation architect and risk management professional from India, currently working at ICCROM as Programme Manager on sustainable urban and built heritage conservation, disaster, and climate risk management & post crisis recovery. Rohit served as UNESCO Chair holder professor at the Institute for Disaster Mitigation of Urban Cultural Heritage at Ritsumeikan University, Kyoto, Japan from 2010 to 2018. He has also contributed to ICOMOS in various capacities. Since 2002, Rohit has been working with several national and international organizations for consultancy, research and training on Disaster Risk Management and climate action for Cultural Heritage. He has also authored several publications.

ロヒト ジギヤス (インド・イタリア)

ICCROM プログラム・マネージャー

インド出身の保存建築家、リスクマネジメントの専門家。京都にある立命館大学の都市文化遺産防災研究所のユネスコチェアホルダー教授を務め、文化遺産の災害リスク管理に関する国際トレーニングコースの開発と指導に尽力した。2014年から2018年までICOMOS-India会長、2010年から2019年までICOMOS International Scientific Committee on Risk Preparedness (ICORP) 会長を務める。2011年よりICOMOS執行委員会選出メンバー、2017年から2020年まで同副会長を務める。ICCROMに参加する以前は、ユネスコ、UNISDR、ゲッティ保存修復研究所、世界銀行など、複数の国内・国際機関で文化遺産の災害リスク管理に関するコンサルティング、研究、研修に携わる。

Keynote Speaker:



MOTONAKA Makoto (Japan)

Director General

Nara National Research Institute for Cultural Properties, Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage

After working at the Nara National Research Institute for Cultural Properties, he was involved in the registration of Places of Scenic Beauty and World Heritage sites as Senior Cultural Property Specialist of the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, and Cabinet Counsellor of the Cabinet Secretariat. He has been in his current position since 2021. He specialises in landscape architecture and landscape studies.

本中 眞 (日本)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 所長

奈良国立文化財研究所を経て、文化庁主任文化財調査官、内閣官房内閣参事官として名勝や世界遺産登録に携わる。2021年から現職。専門は造園学、景観研究。

Presenters:



Richard MACKAY (Australia)

Director of Possibilities

Mackay Strategic

Professor Richard MACKAY AM is Director of Possibilities at Mackay Strategic, an ICOMOS World Heritage Adviser, Adjunct Professor in the Cultural Heritage and Museum Studies program at Deakin University, and co-editor of *Archaeological Sites: Conservation and Management*, in the Getty Conservation Institute ‘Readings in Conservation’ series.

Professor MACKAY has directed major archaeological excavations in Australia and been involved in innovative projects for archaeological site conservation and interpretation, including the BIG DIG Archaeology Centre in Sydney. Professor MACKAY is co-author of the Guidance and Toolkit for Impact Assessment in a World Heritage Context, a Member of Australia’s Heritage Council, and was the Convenor of the General Assembly of ICOMOS held in Sydney in 2023.

リチャード・マッケイ (オーストラリア)

マッケイ・ストラテジック 可能性開発ディレクター

マッケイ・ストラテジック可能性開発ディレクターと ICOMOS 世界遺産顧問。ディーキン大学文化遺産・博物館学プログラム非常勤教授。ゲティ保存研究所「Readings in Conservation」シリーズの一冊『Archaeological Sites: Conservation and Management (考古遺跡：保存と管理)』の共同編集者でもある。オーストラリア各地で主要な考古学発掘調査を担当し、シドニーの The BIG DIG Archaeology Centre をはじめとする、考古遺跡の保存および活用に関する革新的なプロジェクトに携わってきた。

また、『世界遺産の文脈における影響評価のためのガイダンス及びツールキット』の共著者であり、オーストラリア遺産審議会の委員を務めている。さらに、2023年にシドニーで開催されたICOMOS総会では議長を務めた。



UNNO Satoshi (Japan)

Associate Professor

Department of Architecture, Graduate School of Engineering,
University of Tokyo

Began working at the Nara National Research Institute for Cultural Properties in 2009. During his tenure, he was mainly in charge of the excavation of the Nara Palace Site (nationally-designated Special Historic Site), the reconstruction project of the Former Imperial Audience Hall Compound, and engaged in the conservation of the East Pagoda of Yakushi-ji Temple. Additionally, he led the comprehensive survey of Enryaku-ji Temple and the townscape preservation survey in Wakasa Town, Tottori Prefecture. In parallel with his practice, he has brought together researchers in related fields and led research on the history of the maintenance of historic buildings and the theory of reconstruction in archaeological sites. He took up his current position in 2018.

海野 聡 (日本)

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 准教授

2009年、奈良国立文化財研究所に着任。在職中は、主に特別史跡平城宮跡の発掘調査や第一次大極殿院の復元事業を担当。また、薬師寺東塔遺跡の保存修復にも携わった。また、鳥取県若桜町の重要伝統的建造物群保存地区や延暦寺建造物総合調査を主導した。業務と並行して、関連分野の研究者を結集し、歴史的建造物の維持管理や歴史や遺跡の復元理念に関する研究「復元学」を提唱・主導してきた。2018年より現職。



XIAO Jin Liang (China)

Chief Engineer

Heritage Protection Branch,
Tsinghua Tongheng Urban Planning & Design Institute

Holds a PhD from the School of Architecture at Tsinghua University. He currently serves as Chief Engineer at the Heritage Protection Branch of the Tsinghua Tongheng Urban Planning & Design Institute. He is also a certified National Cultural Relics Conservation Architect, a member of ICOMOS-CIPA, and a member of the Traditional Architecture Sub-Committee of the China Engineering & Consulting Association. His research focuses on architectural history, restoration and scientific conservation of historic buildings, design of protection facilities, and the planning and design of culture-tourism integration projects. He has led or contributed to numerous major conservation projects, including the restoration of Prince Gong Mansion (Beijing), the bridge restoration and stabilisation of the Western mansions ruins in the Old Summer Palace, the digital reconstruction of the Old Summer Palace, the World Cultural

Heritage nomination for the Historic Monuments of Dengfeng in ‘The Centre of Heaven and Earth’ (Henan), and the reconstruction of the Wanfota Pagoda (Zhejiang). His work has earned multiple national and provincial awards.

肖金亮 (中国)

清華同衡都市計画設計研究院文化財保護分院 総エンジニア

清華大学建築学院にて博士号を取得。現在、清華同衡都市計画設計研究院・文化財保護分院の総エンジニアを務める。国家文物保護責任設計師として認定されているほか、ICOMOS-CIPAの会員、中国観察設計協会・伝統建築分委員会のメンバーでもある。研究分野は、建築史、歴史的建造物の修復・科学的保存、保護施設の設計、文化と観光の融合プロジェクトの計画・設計など多岐にわたる。これまでに、北京・恭王府の修復、北京・円明園における橋梁修復および西洋楼遺跡の緊急保護、円明園のデジタル復元、「天地の中央」にある登封の史跡群（河南省）の世界文化遺産推薦、浙江省・万仏塔の再建など、数多くのプロジェクトを担当してきた。国家級・省級の賞を複数受賞している。



TAKADA Kazunori (Japan)

Representative Director
Ichinohe Culture and Arts NPO

Graduated university and joined the Cultural Affairs Division of Iwate Prefecture in 1973. From 1976, he worked on the Board of Education, Ichinohe Town, where he engaged in local cultural projects. From 1989 to 2012, he worked on archaeological excavations at the Goshono Site, a National Historic Site. From 2002 to 2020, he served as Director of the Goshono Jomon Museum, overseeing its site development and public presentation. He concurrently served as Director of Ichinohe’s World Heritage Registration Promotion Office, lectured at universities, and oversaw training of the next generation of custodians. Current position since 2021.

International work includes excavations in Egypt (Al-Tūr, Sinai Peninsula) and research on earthen-roofed dwellings in Russia (Sakhalin & around Khabarovsk). He also contributed to the *Handbook for Investigative Excavation* (Agency for Cultural Affairs, Government of Japan) and authored several books on Jomon archaeology.

高田 和徳 (日本)

特定非営利活動法人いちのへ文化・芸術 NPO 代表理事

1973年に大学卒業後、岩手県教育委員会文化課に勤務。1976年より一戸町教育委員会社会教育課で地域文化事業に従事。1989年より国史跡御所野遺跡の発掘調査を開始し2012年まで継続、2002～2020年は御所野縄文博物館館長を務め遺跡整備・公開に携わる。大学講義や後進育成も担当。一戸町世界遺産登録推進室長も兼務。2021年より一戸文化・芸術 NPO 代表理事。海外調査はエジプト・シナイ半島ツール遺跡、ロシア・サハリン州・ハバロフスク周辺での土屋根住居調査。文化庁「発掘調査の手引き」作成委員。主な著書に『縄文土屋根住居の焼失実験』(1999)、『遺跡を活用した地域おこし』(2002)、『縄文のイエとムラの風景』(2005)。



Angaragsuren ODKHUU (Mongolia)

Researcher

Administration of the World Heritage-Orkhon Valley Cultural Landscape

Conservator in the fine arts, particularly paintings, archaeological findings, textiles, and mural paintings. He received his BA and MA in Mongolian traditional painting from the University of Art and Culture in Ulaanbaatar, and PhD in conservation (mural paintings) from Kyoto University. His research focuses on ancient Mongolian pigments, traditional technology, and the restoration and conservation of Mongolian Buddhist temples. He is also a conservator at the National Library of Mongolia.

オドフー・アンガラグスレン (モンゴル)

文化遺産保護局世界遺産オルホン渓谷文化的景観管理局
研究員

美術分野の保存修復専門家で、特に絵画、考古遺物、織物、壁画の保存修復を担当。ウランバートルの芸術文化大学でモンゴル伝統絵画の学士号および修士号を取得後、京都大学で壁画保存の博士号を取得。研究分野は、古代モンゴルの顔料、伝統的技術、およびモンゴル仏教寺院の修復・保存。また、モンゴル国立図書館でも保存修復の専門家として活動している。



HONG Balkeum (Republic of Korea)

Researcher

Gaya National Research Institute of Cultural Heritage,
Korea Heritage Service

Born in 1984. Graduated from Korea National University of Cultural Heritage (Bachelor) in 2007 and Chonnam National University (Master) in 2010. Entered the Bureau of Cultural Property (now Korea Heritage Service) in 2016. Currently works as a researcher at the Gaya National Research Institute of Cultural Heritage.

ホン・バルグム (韓国)

国家遺産庁国立伽倻文化遺産研究所
学芸研究員

1984年生まれ。2007年に韓国伝統文化大学校で学士課程を修了、2010年に全南大学校大学院で修士号を取得。2016年に文化財庁（現 国家遺産庁）に入庁。現在、国家遺産庁 国立伽倻文化遺産研究所 学芸研究士として勤務している。



BUI Minh Tri (Vietnam)

Deputy Director

Institute of Asian Civilisation Studies,
Vietnam Union of Science and Technology Association

Assoc. Prof. Dr. Bui Minh Tri is a senior researcher of the Vietnam Institute of Archaeology and an expert in ancient Vietnamese ceramics. He served as Secretary (December 2001 - March 2008) and Deputy Head (April 2008 - December 2010) of the Thang Long Imperial Citadel Project Management Board. He is also the former Director of the Institute of Imperial Citadel Studies (IICS).

ブイ・ミン・チー (ベトナム)

ベトナム科学技術協会連合アジア文明研究所 副所長

ブイ・ミン・チー氏は、ベトナム考古学研究所の上級研究員であり、古代ベトナム陶磁器の専門家。彼は、タンロン皇城プロジェクト管理委員会の書記（2001年12月～2008年3月）および副委員長（2008年4月～2010年12月）を務めた。

また、帝城研究所（IICS）の元所長でもある。

Commentators:



SUZUKI Chihei (Japan)

Specialist for Cultural Properties

Office for International Cooperation on Cultural Heritage,
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

Born in 1980 in Shiga Prefecture. Holds a PhD in Regional Policy Studies. After completing graduate studies in Geography at Kyoto University, he joined the Agency for Cultural Affairs in 2005 as a technical official in charge of cultural landscapes. He has been in his current position since 2015.

鈴木 地平 (日本)

文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室世界文化遺産部門
文化財調査官

1980年生まれ、滋賀県出身。博士（地域政策学）。

京都大学、同大学院（地理学）を経て、2005年文化庁技官（文化的景観担当）。

2015年より現職。



TAKAHASHI Chinatsu (Japan)

Section Head

Site Management Section, Department of Cultural Heritage,
Nara National Research Institute for Cultural Properties, Independent Administrative
Institution National Institutes for Cultural Heritage

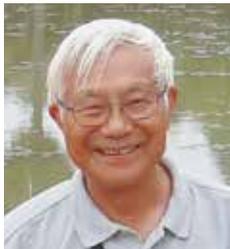
Began working at the Archaeological Feature Section, Department of Imperial Palace Sites Investigations, Nara National Research Institute for Cultural Properties, in 2008. Moved to the Site Development Section (now Site Management Section), Department of Cultural Heritage, in 2014. She has been in her current position since 2024 and specialises in site conservation and management and history of Japanese gardens.

高橋 知奈津 (日本)

独立行政法人国立文化財機構

奈良文化財研究所文化遺産部 遺跡研究室 室長

2008年、奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室着任。2014年文化遺産部遺跡整備研究室（現遺跡研究室）着任。2024年より現職。遺跡整備、日本庭園史。



UENO Kunikazu (Japan)

Professor Emeritus

Nara Women's University

Graduated from Nagoya University, Faculty of Engineering, Department of Architecture in 1967. Doctor of Engineering. Began working at the Nara National Research Institute for Cultural Properties in 1972, where he specialised in archaeological research of ancient monuments, palaces. and monasteries, as well as traditional buildings, towns, and villages. He became a professor at the Nara Women's University in 1992 and retired in 2007. Specialises in architectural history in Japan and Southeast Asia. He participated and lead excavations at Wat Phu temple in Laos (1989), Banteay Kudei in Angkor, Cambodia (1991-2014), Thang Long Emperor's site in Hanoi, Vietnam (2004-2014), and helped establish the Master Plan of Pagan, Myanmar (1993-1995). Authored works include, *Shukuba and Honjin* (1990), *Nara, Machi, and Mirai* (1992), *Learn by Drawing* (2006), *Finding Evidence of Disappeared Buildings* (2010), and *Inheriting Historic Towns and Architecture in Nara* (2025). He was awarded with the Royal Order of Sahametrei in 2009.

上野 邦一 (日本)

奈良女子大学 名誉教授

1967年に名古屋大学工学部建築学科を卒業し、工学博士。1972年より奈良国立文化財研究所で古代の宮殿・寺院、伝統的建造物や町並みの調査研究に携わる。1992年に奈良女子大学教授となり、2007年に退職。専門は日本と東南アジア建築史。ラオスのワット・プー（1989）、カンボジアのバンテアイ・クデイ（1991-2013）、ベトナム・ハノイのタンロン遺跡（2004-2014）など、多くの国際的な発掘・保存プロジェクトを指導し、ミャンマー・パガン遺跡群の保存計画（1993-1995）にも参加した。著書に「宿場と本陣」（1990）、『なら・まち・みらい』（1992）、『描いて学ぶ』（2006）、『建物の痕跡をさぐる』（2010）がある。2009年、カンボジア王国よりサハメトリ勲章を受章。

基調講演

考古学的遺跡における木造建造物の復元 — 世界遺産「古都奈良の文化財・平城宮跡」を事例として —

本中 眞
奈良文化財研究所 所長

1. はじめに

本報告は、「考古学的遺跡の整備とオーセンティシティ」を共通テーマとする国際会議において行った発表内容を整理し、世界遺産『古都奈良の文化財』（1998年記載）の構成資産の一つである平城宮跡を事例として、失われた木造建造物の復元の理念、方法、ならびにその評価をめぐる議論について記録するものである。

平城宮跡は、地上に建造物の遺構をほとんど残さない考古学的遺跡であり、地下に残る遺構・遺物こそが世界遺産としての顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value:OUV）を表すアトリビュートである。そのような考古学的遺跡において、現代における木造建造物の復元がいかなる意味や役割を持ち、遺跡の理解や景観形成においてどのような意義を果たしうるのかを整理し、評価することが重要な論点となる。

本報告では、①世界遺産としてのOUVにおける平城宮跡の位置づけ、②保存・整備の歴史的経緯、③復元事業の内容と根拠、④世界遺産委員会による指摘とその対応、⑤オーセンティシティおよびインタープリテーションの観点からの評価、⑥国際憲章との関係を順に述べ、平城宮跡における復元建造物の意義について総括する。

2. 世界遺産『古都奈良の文化財』と平城宮跡の位置づけ

1998年に世界遺産一覧表に記載された『古都奈良の文化財』は、8つの構成資産からなる。本遺産は、世界遺産委員会が定めた「評価基準」に沿って、以下の4つの特質に基づいて評価されている（図1）。

第一に、東アジアにおける価値観や文化の交流を示す顕著な証拠であること「評価基準(ii)」。

第二に、日本文化の形成と栄華を象徴する存在であること「評価基準(iii)」。

第三に、都市計画・建築配置計画の顕著な事例であること「評価基準(iv)」。

第四に、宗教的影響力が現在に至るまで継続していること「評価基準(vi)」。

Historic Monuments of Ancient Nara (inscribed in 1998)

Criterion (ii)

The historic monuments of Ancient Nara bear exceptional witness to the evolution of Japanese architecture and art as a result of cultural links with China and Korea which were to have a profound influence on future developments.

Criterion (iii)

The flowering of Japanese culture during the period when Nara was the capital is uniquely demonstrated by its architectural heritage.

Criterion (iv)

The layout of the Imperial Palace and the design of the surviving monuments in Nara are outstanding examples of the architecture and planning of early Asian capital cities.

Criterion (vi)

The Buddhist temples and Shinto shrines of Nara demonstrate the continuing spiritual power and influence of these religions in an exceptional manner.

図 1

平城宮跡は、これらの四つの特徴のすべてに関連しつつ、とりわけ「評価基準 (iv)」において、「宮殿建築の配置計画を示す考古学的遺跡」として評価されている。他の構成資産が現存する木造建造物群や森林景観を中心としているのに対し、平城宮跡は、宮殿や官衙の建築がすでに失われ、地下に遺構・遺物のみが残存する点で、その性質を異にしている。

『古都奈良の文化財』の8つの構成資産は、すべて国の文化財に指定されており、それぞれの周囲には適切な範囲の緩衝地帯（バッファゾーン）が設定されている。これにより、構成資産の価値のみならず、それらの周辺の景観や環境を含めた総体が保全されている。平城宮跡においても、構成資産の範囲は特別史跡（特別名勝を含む）として厳格に保護され、緩衝地帯についても複数の法令や都市計画制度を通じて周辺環境の保全が図られている（図2）。

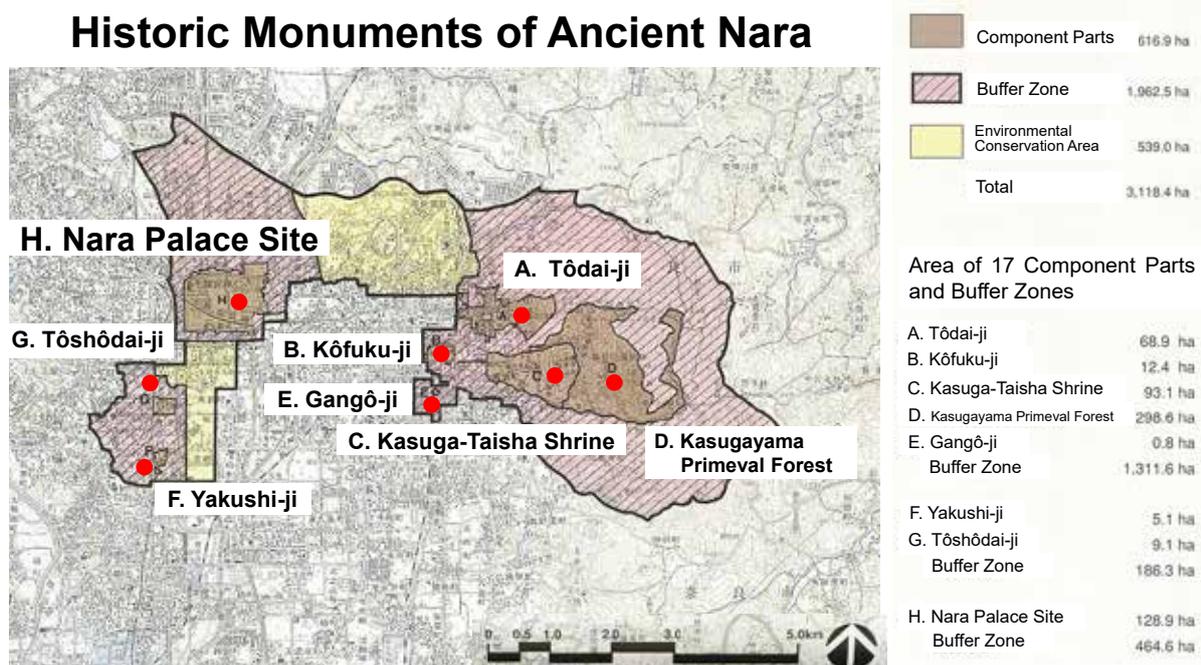


図 2

3. 平城宮跡の保存・整備の歴史的経緯とマスタープラン

平城宮跡は、1922年に史跡、1957年に特別史跡に指定され、その一部が2010年に特別名勝に指定された。指定面積は約131.1ヘクタールに及び、そのうち北辺の集落区域などを除く約98%が世界遺産の範囲に含まれている。1955年以降、国は本格的な発掘調査を開始し、宮殿・官衙の空間構成、建造物の配置・規模、施設構成などが次第に明らかとなった。

一方で、発掘調査は遺跡の破壊を伴う不可逆的行為であり、多大な経費を要することから、全域の発掘調査を行わない方針が採られている。1978年には文化庁によってマスタープラン（「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想」）が策定され、平城宮跡全体を「サイト・ミュージアム」として公開する方向性が示された（図3）。

このマスタープランでは、

- 木造建造物を復元するゾーン
- 建造物の位置や規模を地表表示によって示すプレゼンテーション・ゾーン
- 草地や湿地として保存するゾーン

などが設定され、復元に偏らない多様な遺構の表現手法が組み合わせられている（図4）。

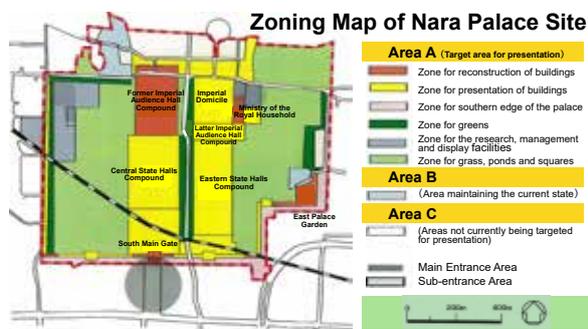


図3



図4

現在、平城宮跡の大部分では、発掘調査を行わず「みどりの草原」として管理している。また、木製品の保存が期待される区域では、浅い池からなる湿地帯を造成し、地下の保存環境を安定させる工夫を行っている。これらの草地・湿地は、地下遺構の保存に寄与するのみならず、水生植物、鳥類、昆虫など多様な生物の生息地としても重要な役割を果たしており、遺跡の保護と自然環境の保全が両立する事例となっている（図5）。

一方、内裏区域では、発掘調査により巨大なスギ材を削り抜いた井戸と石敷きの洗い場が発見認識されたことから、これらの遺構を地下で確実に保存した上で、その上部に模型を設置するという方法により公開している。ほかにも、木造建造物の姿を復元したゾーンのほか、樹木の刈り込みや新しい石材を用いて、当時の宮殿の空間構成および建造物の規模・形態を平面および立体的に表現するゾーンなどを設けている（図6）。



図5



図6

このように、平城宮跡では、必ずしも建造物を復元することなく、発掘調査の成果を視覚化し、往時の空間構成の理解を促す多様な表現の手法を試みてきたわけである。

4. 第一次大極殿の復元とその根拠

文化庁は、1998年に平城宮の南正門の「朱雀門」を、2010年には儀式の中心的建造物である「第一大極殿」を、それぞれ現地に復元した。並行して、2008年以降は国土交通省が国営公園として第一次大極殿院全体の復元事業を継続し、文化庁と連携して平城宮跡の管理事業を進めている（図7）。

第一次大極殿院の復元事業は、国の『平城京遷都1300年記念事業』の一環として決定され、2010年に第一次大極殿、2022年に南門が完成した。現在は東楼の復元が進められており、将来的には南門とその東西の楼閣を含む第一次大極殿院回廊全体の復元が計画されている（図8）。

復元にあたっては、発掘調査の成果をはじめとする各種の調査が重要な根拠となる。第一次大極殿院の発掘調査では、基壇外面の化粧石の抜き取り痕跡が確認されたほか、8世紀中ごろに平城宮跡の大極殿が移築された恭仁宮跡（京都府木津川市加茂町に所在）での発掘調査成果により、元の大極殿の平面規模が明らかとなった。さらに、薬師寺東塔や唐招提寺講堂など、8世紀以来の姿を伝える現存建造物も参照し、特に唐招提寺講堂が平城宮内建造物の移築例であることが、復元検討において重要な位置を占めた。このように、地下に残る考古学的遺構・遺物に基づきつつ、現存する同時代の建造物の事例も参照することにより、いかに論理的かつスムーズに説明できるのかを念頭に復元を試みたわけである（図9）。

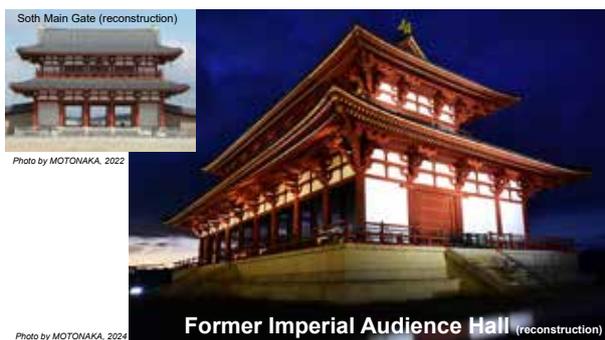


図7



図8



図9

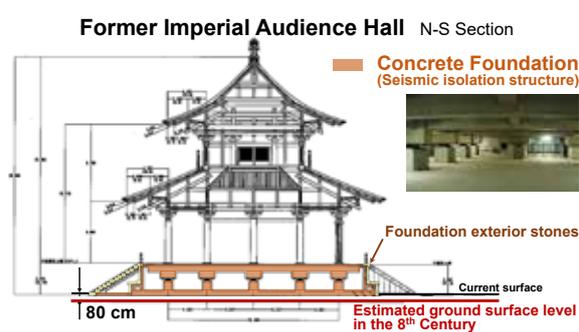


図10

第一次大極殿院では、元の基壇の築成土が失われていたことから、復元にあたっては当時の復元地盤高を想定した地形造成を行い、その上に厚さ80センチメートルの盛土を施した。さらに、その盛土の上に、免震構造を備えたコンクリート基礎を設置することにより、地下遺構を損なうことのない設計とした（図10）。一方、復元建造物の本体については、可能な限り当時の材料および技法の再現に努め、ヤリガンナによる柱材の仕上げ、出土瓦片に基づく瓦範（はん）の復元などを実施した。これらの一連の過程には、日本の伝統建築や瓦製作に携わる伝統的な技能集団が参画し、その実践を通

じて、若手技能者に対する技能の伝承が着実に行われた点は、復元事業における重要な成果の一つであった（図 11）。

加えて、奈良文化財研究所では、古代寺院の発掘調査によって出土した木造建造物装飾金具を対象として、考古学的観察、理科学的分析、文献史料の検討を組み合わせた総合的研究を継続してきた。また、伝統的技能者集団と連携し、古代の製作技法を再現する実験的研究も実施している。これらの成果は、復元建造物に用いる飾り金具の製作および将来的な劣化予測、修理にも資するものであり、復元事業における意義深い成果として位置づけられる（図 12）。

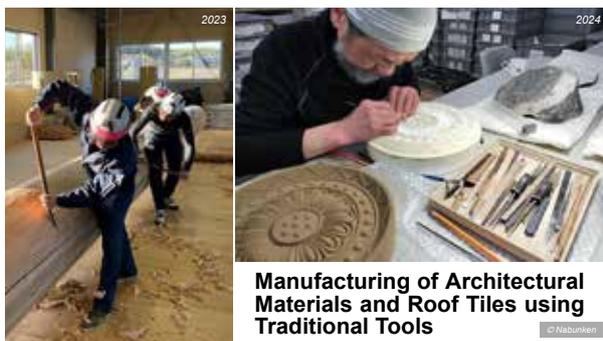


図 11



図 12

5. 世界遺産委員会の懸念と対応

平城宮跡は、宮殿や官衙の建造物が失われて既に 1300 年が経過し、その上に水田が営まれてきたため、地下の遺跡は破壊されることなく良好に残されてきた。国の史跡・特別史跡として保存され、土地が公有化された後は平らな草地として維持され、サイト・ミュージアムとして公開する「マスタープラン」が策定されたのである。発掘調査の成果に基づく現地での展示では、木造建造物の復元に偏ることなく、多様な手法をバランスよく組み合わせ、これらを支える調査研究も併せて発展させてきた。しかし、2011 年、世界遺産委員会は第一次大極殿院の復元を継続するのであれば、その理論的根拠を明確に示すべきであるとの厳しい指摘を行った（図 13）。

Decisions by the World Heritage Committee to Nara Palace Site

Decision 33 COM 7B.76 (adopted in Seville, SPAIN)

5. Recalling that any **reconstruction project** within the property would have to be based only on complete and detailed documentation and to no extent on conjecture, and on all provisions for authenticity and integrity as outlined in the Operational Guidelines, and appropriately interpreted,
6. Also requests the State Party, in case it wished to proceed with the **proposed reconstruction of certain structures within the Nara Palace site**, to submit to the World Heritage Centre and the Advisory Bodies **a full justification of the rationale for the reconstruction, including the detailed evidence on which it is based;**
8. Requests furthermore the State Party to submit to the World Heritage Centre, by 1 February 2011, a report including information on the points above, for examination by the World Heritage Committee at its 35th session in 2011.

Decision 35 COM 7B.71 (adopted in Paris(UNESCO), FRANCE)

4. Requests the State Party to **submit to the World Heritage Centre for review by the Advisory Bodies, in line with Paragraph 172 of the Operational Guidelines:**
 - c) an **overall conservation rationale for all planned reconstruction work at the corridor of the Nara Heijo-kyo Palace site**, including detailed plans and the evidence on which they are based before any reconstruction work is approved;
5. Also requests the State Party to submit to the World Heritage Centre, by 1 February 2013, **an updated report** on the state of conservation of the property and the implementation of the above.

図 13

これを受け、文化庁、国土交通省、奈良県、奈良市は、2012年11月に中国・韓国等から外国人専門家を招聘し、現地視察と議論の場を設けて合意形成を図ることとした。その結果、復元には、①遺跡の元の姿を完全な形で提示できる、②調査研究を促進する意義がある、という二つのメリットがあることから、国際的にも「復元」を求める背景が存在することが明確に示された（図14）。

あわせて復元の条件として、①地下の遺構・遺物を損傷しないこと、②遺構・遺物や文献・類例遺構などの歴史的証拠を活用して信頼性を確保すること、③可能な限り当時と同じ材料・伝統技法を用いること、④可逆性の確保も考慮すること、の四点が整理された。これを踏まえ、会議参加者は平城宮跡の公開状況を精査した結果、平城宮跡で行われてきた建造物の復元は、これらの条件に大きく反していないことを確認したのである。

この合意文書は世界遺産センターにて受容され、それ以降、平城宮跡における失われた建造物の復元に関する否定的な議論は収束するに至った（図14）。

Outcome of the Informal Meeting for the State of Conservation of Nara Palace Site	
November 4-5, 2012, Nara	
In regards with “reconstruction” of the historical buildings on the archeological site, principles indicated below are to be strictly followed;	
1.	The “reconstruction” is necessary or beneficial for the protection of the original historic remains; or it helps to provide complete interpretation and presentation for the public and the researchers, to facilitate further research, and there exists rather universal need for it;
2.	The “reconstruction” will not cause any damage or other negative impact on the existing authentic historic remains;
3.	The “reconstruction” must be evidenced by historic archives, archaeological findings and other related documentations, to be faithful to the historic state;
4.	Similar materials and traditional craftsmanship conforming to the historic evolution of the site must be used whenever possible for the “reconstruction”;
5.	The “reconstructed part” must be reversible, so that whenever considered inappropriate, it could be corrected or undone to recover the original state of the heritage site.
6.	The participants of the meeting realized that, the “reconstruction” project on the Nara Palace site has not been so far violating any of the above principles.”
Furthermore, the participants commonly recognized that, “reconstruction” issue is a subject extremely controversial in the conservation and presentation of cultural heritage sites. And the participants agreed, only under the condition of some principles being strictly followed, “reconstruction” could be considered an understandable and acceptable option for the managers of the sites where aboveground structures have ceased to exist and only the underground remains left.	

図14

6. オーセンティシティとインタープリテーション

平城宮跡の OUV を伝える主要なアトリビュートは地下に残る遺構・遺物であり、復元建造物は現代の新建築である。したがって、復元建造物をデザイン・材料・技術の観点からオーセンティシティの評価対象とすることは適切とはいえない。

一方で、地上にほとんど痕跡を残さない木造建造物の考古学的遺跡において、復元建造物は、失われた建造物の「デザインと形態」、「材料と材質」、さらには「技術」を可視化する役割を果たすものである。その結果、ビジターは、現在の「位置」や「セッティング」の中で、往時の空間構成や利用のあり方を体感的に理解することが可能となる。この点において、復元建造物はきわめて強力な「インタープリテーション」上の意義を有するとの評価が可能である。

平坦で広大な平城宮跡において、復元建造物は来訪者が自らの現在地を把握するための重要なランドマークとしても機能している。平城宮南東隅付近に位置する小子部門の復元基壇から朱雀門を遠望する事例に見られるように、視点の位置や距離の違いによって建造物の見え方は変化し、それによって中央ゲートの位置や中軸線の所在を視覚的に理解することが可能となる（図15）。同様に、大極殿

についても、観察地点や周囲の環境、すなわちセッティングの違いによって、その形態やスケール感
は多様に認識され、来訪者に自らの現在地を示唆する重要な役割を果たしている（図 16）。



図 15



図 16

復元建造物が平城宮跡の風景の中でバランスよく配置されていることにより、来訪者は安心して散策し、平城宮跡の歴史的価値を視覚的かつ体感的に理解することができるのである。それは、復元建造物と平城宮跡のセッティングとのバランスが十分に保たれているからこそ可能となっているのだといえる。このように、復元建造物が来訪者の理解と体験を支える基盤として機能することで、それらを活用した市民ボランティアによる解説活動や文化イベントが展開され、遺跡と地域社会との関係を媒介するとともに、新たな社会的・文化的価値の創出にも寄与しているのである（図 17・18）。

今後とも当研究所では、国および地方公共団体の行政機関、大学・研究機関、ならびに遺跡のインタープリテーションに積極的に関与する市民と連携し、失われた木造建造物の復元を含めた総合的かつ「バランスのよい」遺跡の保全事業に引き続き取り組んでいく方針である。ここにいう「バランスのとれた遺跡保全」とは、第一に失われた建造物の復元のみには偏らないこと、第二に多様なインタープリテーションの手法を用いた遺跡の解釈を提示すること、第三に多様な主体の理解と支持を得つつ、市民参画のもとで遺跡を「サイト・ミュージアム」として公開・活用していくことを目指すものと捉えている。



図 17



図 18

7. 国際憲章との関係

平城宮跡における復元建造物と国際的な保存理念との関係について、関連する国際憲章を踏まえて整理しておきたい。

ヴェニス憲章は、記念物（モニュメント）の修復に関する基本原則を定めた国際憲章であり、その第 15 条において「復元はいかなる場合においても排除されるべきである」との原則を示している（図 19）。ただし例外として、現地に残存しつつも散逸した部材を再構成する「アナスタイローシス（anastylosis）」の手法のみが許容されている。ここでいう「復元（reconstruction）」とは、長年月の経過により廃墟（ruin）と化した考古学的遺跡において、散在する石材を再び組み上げる行為を指し

ており、石造建造物の遺存部材を用いた再築を想定したものである。したがって、地上に建築部材の実体をほとんど残さない木造建造物を主体とする平城宮跡のような考古学的遺跡における復元、すなわち朱雀門や第一次大極殿の復元は、ヴェニス憲章第15条が想定する「復元(reconstruction)」とはまったく性質を異にするものである。

その後、ヴェニス憲章の採択から30年以上を経た1990年に、ICOMOS（国際記念物遺跡会議）により「考古学的遺跡の保護・管理に関する憲章」が採択された。同憲章第7条では、「復元(reconstruction)」が持つ二つの積極的意義について言及している（図20）。第一に、考古学、歴史学、建築史学などの学術的事実に基づきつつ、新たな材料・技術も取り入れた「実験的研究」としての意義である。第二に、往時の建造物の実体的な姿かたちを人々に提示し、理解を促す「インタープリテーション」としての意義である。この条文には「オーセンティシティ（真実性）」という用語が用いられているが、復元にあたっては、事実に基づく「信頼性の高い復元の論理」が求められているのだといえよう。

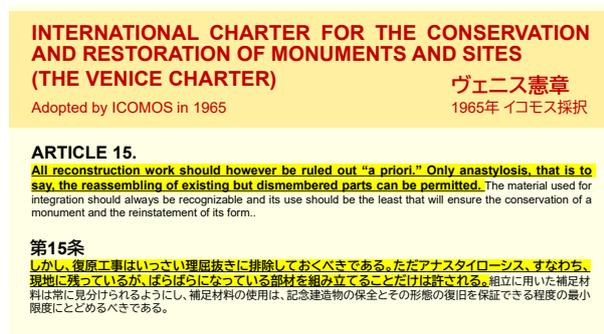


図 19



図 20

8. まとめ

最後に、本報告のまとめとして平城宮跡における復元建造物の意義について総括的に整理しておきたい（図21）。

まず、世界遺産『古都奈良の文化財』の構成資産の一つである平城宮跡は、宮殿や官衙の建造物が

平城宮跡における失われた建造物の復元の意義 The Significance and Importance of Reconstructing the Lost Buildings at Nara Palace Site

1. 復元建造物は現代の「新建築」
Reconstructed Buildings as Contemporary 'New Architecture'
2. 「地下に埋もれている遺跡」の確実な保存
Ensuring the Preservation of 'Subsurface Archaeological Remains'
3. 「事実」と「推測」を結び付ける「論理」の明示
Demonstrating the 'Logic' that Connects 'Facts' and 'Conjecture'
4. 遺跡の風景において復元建造物が果たす意義
The Significance of Reconstructed Buildings within the 'Setting' of the Site
5. 「新しい価値」の創造への源泉
A Source for the Creation of 'New Values'

図 21

失われてから約 1300 年という長い時間が経過した考古学的遺跡である。そのため、マスタープランに基づいて宮跡内に建設された復元建造物は、現代における「新建築」であり、世界遺産の顕著な普遍的価値 (OUV) を直接的に伝えるアトリビュートではない。したがって、復元建造物そのものは、「デザインと形態」、「材料と材質」の観点からオーセンティシティの評価対象となるものではない。

次に重要な点として挙げられるのは、平城宮跡内の復元建造物は、① OUV のアトリビュートである「地下に埋蔵された遺跡」を確実に保存することを前提としており、②考古学をはじめとする多角的な分野からの信頼性の高い調査研究の成果に基づき実現したものだということである。

三点目は、多角的な学術領域からの調査研究によって、いかに「事実」を明らかにすることができるのか、また、その「事実」に基づいてバランスのよい「論理」を構築し、復元のプロセスをいかに補強することが可能となるのかということである。歴史的に「推測に基づく復元」は禁じられてきたが、必ずや生じる「推測」と失われた過去の「事実」との隙間を明確化し、両者を結び付ける「論理」を明示することが重要であると考えられる。

四点目は、遺跡の風景において復元建造物が果たす意義を正當に評価する視点である。将来の平城宮跡の風景において、復元建造物がどのようにバランスよく調和するのかを予測することが求められる。そのためには、遺跡の「位置と背景 (環境)」の指標によるオーセンティシティの評価に基づき、復元建造物が果たす視覚的役割を適切に予測することが必要となる。

そして五点目として強調したいのは、復元建造物がもたらす「新しい価値」の創造にも注目しなければならないということである。現代を生きる人々、そして将来を担う子どもたちにとって、復元建造物とその復元プロセスが、いかに新たな価値の創出につながるのかという視点である。平城宮跡では、復元建造物の場を活用して地域の人々によるさまざまな活動が展開されている。そうした活動の過程で生まれる人々のコミュニケーションは、世界遺産の顕著な普遍的価値を基盤として生み出される「新しい価値」であると考えられる。

本報告で整理したように、平城宮跡における復元建造物は、地下遺構の確実な保存を前提としつつ、考古学的事実を踏まえた信頼性の高い論理に基づくものであり、歴史的事実への理解や空間的体験、さらには新しい社会的・文化的価値の創出にも資する重要な役割を果たしている。今後とも、地下にのみ OUV のアトリビュートが残る考古学的遺跡においては、適用すべきオーセンティシティの指標に関する適切な理解を基本としつつ、復元建造物の意義を広く来訪者に伝え、地域社会と連携した活用を進めることが求められる。

KEYNOTE SPEECH

MOTONAKA Makoto

Director General, Nara National Research Institute for Cultural Properties

Reconstruction of Wooden Structures in Archaeological Sites: A Case Study of the Nara Palace Site in the World Heritage Property ‘Historic Monuments of Ancient Nara’

1. Introduction

This report summarises the content of a presentation delivered at an international conference held under the shared theme of ‘Conservation and Interpretation of Archaeological Sites and Authenticity’, and records discussions on the principles, methods, and evaluation of the reconstruction of lost wooden structures, using the Nara Palace Site as a case study. The site is a UNESCO World Heritage property forming part of ‘Historic Monuments of Ancient Nara’, inscribed in 1998.

The Nara Palace Site is an archaeological site that retains almost no aboveground structural remains of buildings. The archaeological features and artefacts preserved underground constitute the attributes that convey its Outstanding Universal Value (OUV) as a World Heritage property. In such an archaeological site, an important issue is to organise and evaluate what meanings and roles the present-day reconstruction of wooden structures may hold, as well as what significance they can have for understanding the site and shaping its landscape.

This report proceeds by discussing, in turn, (1) the positioning of the Nara Palace Site in relation to the OUV of the World Heritage property; (2) the historical background of its conservation and interpretation; (3) the content of the reconstruction projects and their rationale; (4) remarks by the World Heritage Committee and responses; (5) an evaluation from the perspectives of Authenticity and interpretation; and (6) the relationship with relevant international charters, before concluding with an overall assessment of the significance of reconstructed buildings at the Nara Palace Site.

2. The World Heritage Property of ‘Historic Monuments of Ancient Nara’ and the Positioning of the Nara Palace Site

The Historic Monuments of Ancient Nara, inscribed on the World Heritage List in 1998, comprise eight component parts. The property is evaluated on the basis of the following four characteristics, in accordance with the ‘criteria for evaluation’ established by the World Heritage Committee (Figure 1).

First, it constitutes outstanding evidence of the exchange of values and cultures in East Asia (**Criterion (ii)**).

Second, it symbolises the flourishing of Japanese culture (**Criterion (iii)**).

Third, it represents an outstanding example of urban planning and architectural layout planning (**Criterion (iv)**).

Fourth, it continues to have religious influence that persists to the present day (**Criterion (vi)**).

The Nara Palace Site relates to all four of these characteristics, but it is evaluated in particular under criterion (iv) as an archaeological site that demonstrates the layout planning of palace architecture. While the other component parts are characterised primarily by extant groups of wooden buildings or forested landscapes, the Nara Palace Site differs in that the palace and government buildings have already been lost, and only underground archaeological features and artefacts remain.

All eight component parts of Historic Monuments of Ancient Nara are designated as National Cultural Properties, and an appropriate buffer zone has been established around each. As a result, not only the OUV of the component parts themselves, but also the surrounding landscape and environment are conserved as an integrated whole. At the Nara Palace Site as well, the area of the component part is strictly protected as a Special Historic Site (including a Special Place of Scenic Beauty), and the surrounding environment within the buffer zone is conserved through a combination of laws and urban planning systems (Figure 2).

Historic Monuments of Ancient Nara (inscribed in 1998)

- Criterion (ii)**
The historic monuments of Ancient Nara bear exceptional witness to the evolution of Japanese architecture and art as a result of cultural links with China and Korea which were to have a profound influence on future developments.
- Criterion (iii)**
The flowering of Japanese culture during the period when Nara was the capital is uniquely demonstrated by its architectural heritage.
- Criterion (iv)**
The layout of the Imperial Palace and the design of the surviving monuments in Nara are outstanding examples of the architecture and planning of early Asian capital cities.
- Criterion (vi)**
The Buddhist temples and Shinto shrines of Nara demonstrate the continuing spiritual power and influence of these religions in an exceptional manner.

Figure 1

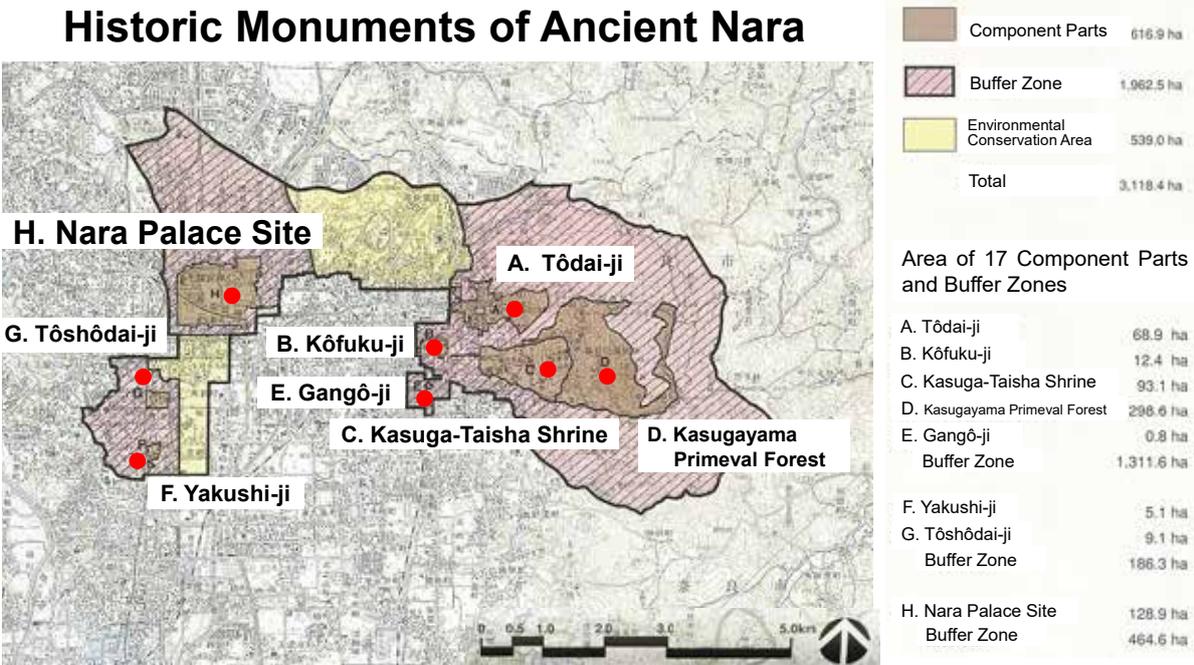


Figure 2

3. Historical Background of the Conservation and Interpretation of the Nara Palace Site and the Master Plan

The Nara Palace Site was designated as a Historic Site in 1922 and as a Special Historic Site in 1957, and part of the site was designated as a Special Place of Scenic Beauty in 2010. The designated area covers approximately 131.1 hectares, of which about 98%, excluding settlement areas along the northern edge, is within the World Heritage property. Since 1955, the national government has conducted substantive archaeological excavations, which gradually revealed the spatial organisation of the palace and government buildings, the layout and scale of structures, and the overall composition of the facility.

At the same time, archaeological excavation is an irreversible act that disturbs the site and requires substantial financial resources. For this reason, a policy to not to conduct excavations across the entire site has been adopted. In 1978, the Agency for Cultural Affairs of the Government of Japan established a master plan, titled the ‘Basic Concept for the Conservation and Interpretation of the Special Historic Site of the Nara Palace Site’, which set out a direction for presenting the entire site to the public as a site museum (Figure 3).

Under this master plan, the site is divided into the following zones:

- Zones in which wooden structures are reconstructed,
- Presentation zones in which the locations and scale of buildings are indicated through surface-level marking, and
- Zones conserved as grasslands or wetlands.

These zones combine a variety of methods for presenting archaeological remains, without placing excessive emphasis on reconstruction (Figure 4).

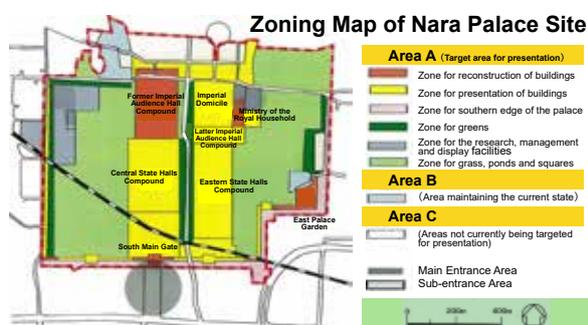


Figure 3



Figure 4

At present, most of the Nara Palace Site is managed as open grassland without undertaking archaeological excavation. In areas where wooden artefacts are expected to be preserved under ground, wetland zones consisting of shallow ponds have been created in order to stabilise the subsurface preservation environment. These grassland and wetland areas contribute not only to the preservation of underground archaeological remains but also serve as important habitats for a wide range of organisms, including aquatic plants, birds, and insects, representing an example in which both the protection of an archaeological site and the conservation of the natural environment are balanced (Figure 5).

In contrast, within the area of Imperial Domicile, archaeological excavations revealed a well hollowed from a massive cedar log with a stone-paved washing area. After ensuring the preservation of these remains underground, they are presented to the public in the form of models installed above them. In addition to areas where wooden structures have been reconstructed, the site also includes zones in which the spatial configuration of the former palace and the scale and form of its buildings are expressed in flat and three-dimensional form using techniques such as the shaping of vegetation and the placement of new stone materials (Figure 6).

Area maintained as wetlands or grasslands



Figure 5



Figure 6

In this way, a variety of representational approaches have been adopted to visualise the results of archaeological research and facilitate an understanding of the former spatial configuration at the Nara Palace Site, without necessarily reconstructing the structures.

4. Reconstruction of the Former Imperial Audience Hall and its Rationale

In 1998, the Agency for Cultural Affairs reconstructed the Suzaku Gate, the southern main gate of the Nara Palace, followed in 2010 by the Former Imperial Audience Hall, the central ceremonial building, both on their original locations. In parallel, the Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism has continued a reconstruction project for the entire Former Imperial Audience Hall Compound as a national government park, advancing site management in coordination with the Agency for Cultural Affairs since 2008 (Figure 7).

The on-site reconstruction project for the Former Imperial Audience Hall Compound was decided as part of the national 1300th anniversary of the capital's transfer to Heijo-kyo commemorative project. The Former Imperial Audience Hall was completed in 2010, and the South Gate in 2022. Reconstruction work on the East Pavilion is currently underway, and in the future, the reconstruction of the entire compound is planned, including the corridors that surround the Former Imperial Audience Hall, and connect the South Gate and the east and west pavilions (Figure 8).

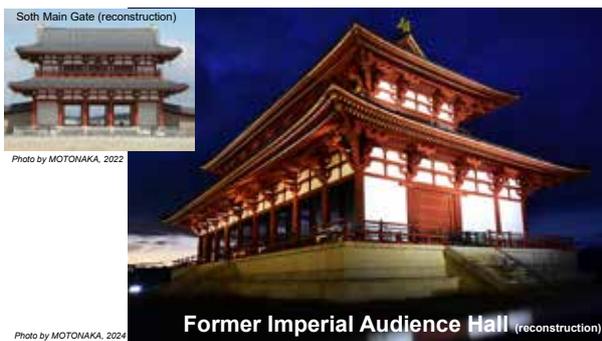


Figure 7



Figure 8

In undertaking the reconstruction, the results of archaeological excavations and various other studies constitute an important rationale. Excavations of the Former Imperial Audience Hall Compound confirmed traces of the removal of facing stones from the outer surface of the foundation platform, and excavation results from the Kuni Palace Site (Kamo, Kizugawa City, Kyoto Prefecture), to which the Imperial Audience Hall of the Nara Palace was relocated in the mid-eighth century, clarified the original plan and scale of the hall. In addition, reference was made to extant buildings that have preserved their eighth-century form, such as the East Pagoda of Yakushi-ji Temple and the Lecture Hall of Toshodai-ji Temple. In particular, the fact that the Lecture Hall of Toshodai-ji represents a relocated building from within the Nara Palace precincts occupied an important position in the consideration of the reconstruction. In this way, the reconstruction was undertaken based on it in the

archaeological features and artefacts preserved underground, while also referring to extant examples of buildings from the same period and careful consideration of how the process and results could be explained in a logical and coherent manner (Figure 9).

The original earthen construction layers of the foundation had been lost at the Former Imperial Audience Hall Compound. Accordingly, the reconstruction involved first carrying out landform modification based on an assumed historical ground level, followed by the placement of an embankment layer 80 centimetres in thickness on top. A concrete foundation incorporating seismic isolation technology was then installed on top of this embankment, ensuring that the underground archaeological remains would not be damaged (Figure 10). With regard to the reconstructed buildings themselves, efforts were made to reproduce historical materials and techniques as faithfully as possible. These included finishing column members using a *yari-ganna*, a traditional Japanese woodworking tool, and reconstructing tile moulds based on excavated tile fragments. Through the participation of traditional craft groups involved in Japanese wooden architecture and tile production, skills were transmitted to younger craftspeople, constituting a significant outcome of the reconstruction project (Figure 11).



Figure 9

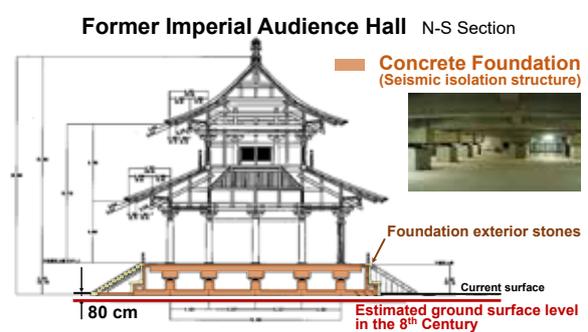


Figure 10

In addition, the Nara National Research Institute for Cultural Properties has continued comprehensive research on decorative metal fittings from wooden buildings excavated from ancient temples, combining archaeological observation, scientific analysis, and the examination of documentary sources. Experimental research has also been conducted in collaboration with groups of traditional craftspeople to reproduce ancient manufacturing techniques. These outcomes contribute to the production of decorative fittings used in reconstructed buildings, as well as to the prediction of future deterioration and repair, and are positioned as significant achievements of the reconstruction project (Figure 12).

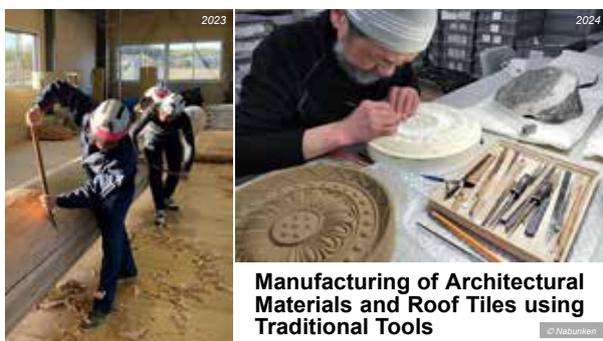


Figure 11

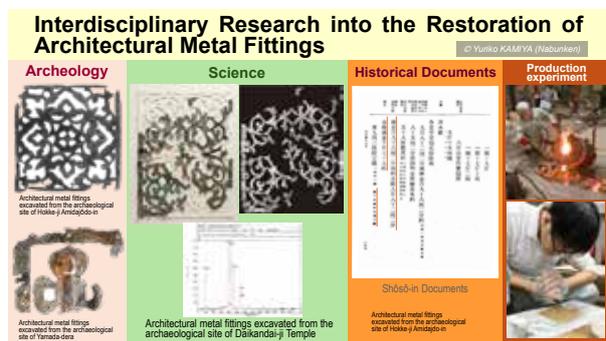


Figure 12

5. Concerns Raised by the World Heritage Committee and the Response

At the Nara Palace Site, more than 1,300 years have passed since the palace and government buildings were lost. During this period, the site was used as rice paddies, a land use that allowed the archaeological remains underground to be preserved in good condition without destruction. After the site was designated as a National Historic Site and the land was brought under public ownership, it was maintained as level grassland, and a

master plan was formulated to open the site to the public as a site museum. The on-site presentation based on the results of archaeological excavations has combined a variety of methods in a balanced manner, without placing excessive emphasis on the reconstruction of wooden structures, while related research activities supporting these approaches have also been developed in parallel.

However, in 2011 the World Heritage Committee issued serious concern regarding the reconstruction of the Former Imperial Audience Hall Compound, stating that, if the reconstruction project were to be continued, its logical rationale should be clearly demonstrated (Figure 13).

In response, the Agency for Cultural Affairs, the Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, Nara Prefecture, and Nara City invited foreign experts from China, the Republic of Korea, and other countries in November of 2012, and conducted site visits and discussions with the aim of building consensus. As a result, it

Decisions by the World Heritage Committee to Nara Palace Site

Decision 33 COM 7B.76 (adopted in Seville, SPAIN)

5. Recalling that any **reconstruction project** within the property would have to be based only on complete and detailed documentation and to no extent on conjecture, and on all provisions for authenticity and integrity as outlined in the Operational Guidelines, and appropriately interpreted,
6. Also requests the State Party, in case it wished to proceed with the **proposed reconstruction of certain structures within the Nara Palace site**, to submit to the World Heritage Centre and the Advisory Bodies **a full justification of the rationale for the reconstruction, including the detailed evidence on which it is based;**
8. Requests furthermore the State Party to submit to the World Heritage Centre, by 1 February 2011, a report including information on the points above, for examination by the World Heritage Committee at its 35th session in 2011.

Decision 35 COM 7B.71 (adopted in Paris(UNESCO), FRANCE)

4. Requests the State Party to **submit to the World Heritage Centre for review by the Advisory Bodies, in line with Paragraph 172 of the Operational Guidelines:**
 - c) an **overall conservation rationale for all planned reconstruction work at the corridor of the Nara Heijo-kyo Palace site**, including detailed plans and the evidence on which they are based before any reconstruction work is approved;
5. Also requests the State Party to submit to the World Heritage Centre, by 1 February 2013, **an updated report** on the state of conservation of the property and the implementation of the above.

Figure 13

Outcome of the Informal Meeting for the State of Conservation of Nara Palace Site

November 4-5, 2012, Nara

In regards with “reconstruction” of the historical buildings on the archeological site, principles indicated below are to be strictly followed;

1. The “reconstruction” is necessary or beneficial for the protection of the original historic remains; or it helps to provide complete interpretation and presentation for the public and the researchers, to facilitate further research, and there exists rather universal need for it;

2. The “reconstruction” will not cause any damage or other negative impact on the existing authentic historic remains;

3. The “reconstruction” must be evidenced by historic archives, archaeological findings and other related documentations, to be faithful to the historic state;

4. Similar materials and traditional craftsmanship conforming to the historic evolution of the site must be used whenever possible for the “reconstruction”;

5. The “reconstructed part” must be reversible, so that whenever considered inappropriate, it could be corrected or undone to recover the original state of the heritage site.

6. The participants of the meeting realized that, the “reconstruction” project on the Nara Palace site has not been so far violating any of the above principles.”

Furthermore, the participants commonly recognized that, “reconstruction” issue is a subject extremely controversial in the conservation and presentation of cultural heritage sites. And the participants agreed, only under the condition of some principles being strictly followed, “reconstruction” could be considered an understandable and acceptable option for the managers of the sites where aboveground structures have ceased to exist and only the underground remains left.

Figure 14

was clearly shown that reconstruction offers two key benefits—(1) enabling the original form of the site to be presented in a complete manner, and (2) contributing to the promotion of research—and that there are internationally shared reasons for pursuing reconstruction on this basis (Figure 14).

At the same time, four conditions for reconstruction were identified: (1) underground archaeological features and artefacts should not be damaged; (2) reliability should be ensured through the use of historical evidence, including archaeological remains, artefacts, documentary sources, and comparable sites; (3) that materials and traditional techniques consistent with those of the period should be used as far as possible; and (4) that reversibility should also be taken into consideration. Based on these, the participants closely examined the manner in which the Nara Palace Site has been presented to the public and confirmed that the reconstruction of buildings undertaken at the site does not substantially conflict with these conditions.

This consensus document was accepted by the World Heritage Centre, and thereafter negative debate concerning the reconstruction of lost buildings at the Nara Palace Site came to an end (Figure 14).

6. Authenticity and Interpretation

The main attributes that convey the OUV of the Nara Palace Site are the archaeological features and artefacts preserved underground, while the reconstructed buildings are newly constructed structures of the present day. Accordingly, it is not appropriate to assess reconstructed buildings in terms of Authenticity with respect to design, materials, or techniques.

On the other hand, at archaeological sites of wooden architecture where almost no traces remain above ground, reconstructed buildings serve to visualise the design and form, materials and substance, and even the technology of the lost structures. As a result, visitors are able to gain an experiential understanding of the former spatial configuration and patterns of use within the present-day location and setting. In this respect, reconstructed buildings can be evaluated as having exceptionally strong significance in terms of interpretation.

Within the flat and expansive Nara Palace Site, reconstructed buildings also function as important landmarks that help visitors orient themselves spatially. As illustrated by views of the Suzaku Gate from the reconstructed foundation of the Chiisakobe Gate near the southeastern corner of the site, the appearance of the Suzaku Gate changes according to differences in viewpoint and distance, making it possible to visually grasp the location of the central gate and the position of the main axis (Figure 15). Similarly, the Former Imperial Audience Hall is perceived in varied ways depending on the observation point and the surrounding environment, that is, the setting. Through these shifts in form and sense of scale, it likewise plays an important role in indicating visitors’ present location within the site (Figure 16).



Figure 15



Figure 16

The well-balanced placement of reconstructed buildings within the landscape of the Nara Palace Site allows visitors to walk through the site with confidence and to understand its historical value both visually and through direct experience. This is possible precisely because a balance is carefully maintained between the reconstructed buildings and the setting of the Nara Palace Site. In this way, reconstructed buildings function as a foundation

supporting visitors' understanding and experience, and they are also utilised in interpretive activities led by community volunteers and in other cultural events. The reconstructed buildings therefore mediate the relationship between the site and the local community and contribute to the creation of new social and cultural value (Figures 17 and 18).

Going forward, the Nara National Research Institute for Cultural Properties intends to continue pursuing a comprehensive and well-balanced approach to site conservation that includes the reconstruction of lost wooden buildings, in collaboration with national and local government authorities, universities and research institutions, and community members who are actively engaged in the interpretation of archaeological sites. Here, a 'well-balanced approach to site conservation' is understood to mean, (i) avoiding an exclusive focus on the reconstruction of lost buildings; (ii) presenting interpretations of the site through a diverse range of interpretive approaches; and (iii) aiming to open and utilise the site as a site museum through community engagement, while securing understanding and support from a wide range of stakeholders.



Figure 17



Figure 18

7. Relationship with International Charters

It is useful to review the relationship between the reconstructed buildings at the Nara Palace Site and international principles of preservation in light of relevant international charters.

The Venice Charter is an international charter that establishes fundamental principles for the restoration of monuments. Article 15 sets forth the principle that 'all reconstruction should...be ruled out *a priori*' (Figure 19). As the only exception, however, it permits the method of anastylosis, which involves the reassembly of original but dismembered components that remain on site. In this context, 'reconstruction' refers to the act of reassembling scattered stone elements at archaeological sites that have become ruins over long periods of time, thus presupposing the existence of surviving components of stone structures. Reconstruction at archaeological sites predominated by wooden architecture, such as the Nara Palace Site, where almost no physical building components remain above ground, must be understood on different terms. Accordingly, the reconstruction of the Suzaku Gate and the Former Imperial Audience Hall differ fundamentally in nature from the 'reconstruction' envisaged in Article 15 of the Venice Charter.

Subsequently, in 1990, more than 30 years after the adoption of the Venice Charter, the International Council on

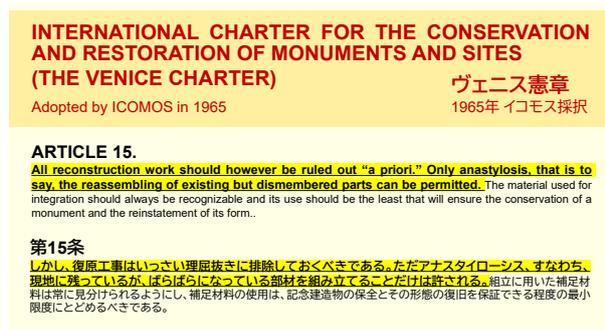


Figure 19



Figure 20

Monuments and Sites (ICOMOS) adopted the Charter for the Protection and Management of the Archaeological Heritage. Article 7 of this charter refers to two positive significances of reconstruction (Figure 20). The first is its significance as experimental research, grounded in academic evidence from archaeology, history, and architectural history, while also incorporating new materials and techniques. The second is its significance as interpretation, in that it presents the tangible form of buildings from the past to the public and promotes understanding. Although the term ‘authenticity’ is used in this article, it may be understood to indicate that reconstruction is required to be supported by reliable logic grounded in factual evidence.

8. Conclusion

Finally, as a conclusion to this report, the overall significance of reconstructed buildings at the Nara Palace Site is summarised (Figure 21).

First, as one of the component parts of the World Heritage Property Historic Monuments of Ancient Nara, the Nara Palace Site is an archaeological site at which approximately 1,300 years have passed since the palace and government buildings were lost. For this reason, the reconstructed buildings built within the site in accordance with the master plan are new buildings of the present day and are not attributes that directly convey the Outstanding Universal Value (OUV) of the World Heritage property. Accordingly, the reconstructed buildings themselves are not subject to an assessment of Authenticity from the perspectives of design and form, or materials and substance.

Second, the reconstructed buildings within the Nara Palace Site are (1) premised on the secure preservation of the underground archaeological remains, which constitute attributes conveying OUV, and (2) the results of reliable research outcomes derived from archaeology and other relevant disciplines.

Third, an important consideration is how historical facts can be clarified through research spanning multiple academic fields, and how, on that basis, a well-balanced logic can be constructed to strengthen the reconstruction process. Historically, reconstruction based on conjecture has been prohibited. It is important to clearly identify the gap that inevitably arises between elements of conjecture and the lost facts of the past, and to explicitly present the logic that connects the two.

Fourth, the perspective from which the significance of reconstructed buildings within the landscape of the site can be appropriately evaluated is important. It is necessary to anticipate how reconstructed buildings will harmonise in a well-balanced manner within the future landscape of the Nara Palace Site. To this end, it is necessary to appropriately

平城宮跡における失われた建造物の復元の意義 The Significance and Importance of Reconstructing the Lost Buildings at Nara Palace Site	
1.	復元建造物は現代の「新建築」 Reconstructed Buildings as Contemporary ‘New Architecture’
2.	「地下に埋もれている遺跡」の確実な保存 Ensuring the Preservation of ‘Subsurface Archaeological Remains’
3.	「事実」と「推測」を結び付ける「論理」の明示 Demonstrating the ‘Logic’ that Connects ‘Facts’ and ‘Conjecture’
4.	遺跡の風景において復元建造物が果たす意義 The Significance of Reconstructed Buildings within the ‘Setting’ of the Site
5.	「新しい価値」の創造への源泉 A Source for the Creation of ‘New Values’

Figure 21

assess and predict the visual role played by reconstructed buildings, based on an evaluation of Authenticity with reference to the indicators of the site's location and setting.

Fifth, it is important to emphasise new values created by reconstructed buildings. This perspective considers how reconstructed buildings and the processes through which they are realised can generate new forms of value for people living today, as well as for children who will shape the future. At the Nara Palace Site, a wide range of activities carried out by the local community has developed using spaces created by reconstructed buildings. The communication that emerges through these activities can be regarded as new value generated on the foundation of the OUV of the World Heritage property.

As outlined in this report, the reconstructed buildings at the Nara Palace Site are premised on the secure preservation of the underground archaeological remains and are grounded in reliable logic based on archaeological facts. They play an important role in deepening understanding of historical facts, enabling spatial experience, and contributing to the creation of new social and cultural value. Going forward, at archaeological sites where the attributes conveying OUV remain solely underground, it is necessary to proceed with a sound understanding of the indicators of Authenticity that should be applied, while widely communicating the significance of reconstructed buildings to visitors and promoting their use in collaboration with local communities.

講演 1

考古遺跡:保存・管理とその意義

リチャード・マッケイ

マッケイ・ストラテジック 可能性開発ディレクター

ICOMOS世界遺産顧問

(オーストラリア勲章受章者)

文化遺産とは、価値ある場所・物・伝統・知識を継承し、世代を超えて伝えていくという概念を体現するものである。考古遺跡は長らく重要な文化遺産として認識されてきた。カンボジアとジンバブエの国旗には考古遺跡が描かれており、カンボジアでは世界遺産アンコールは国のシンボルと認識されている。考古遺跡をどのように提示するかは、国家のナラティブやアイデンティティに大きな意味を持ちうる¹。しかし、遺構が地中に存在する場合や断片的にしか残っていない場合、その場所について理解することが困難になり、復元が行われることもある。そうしたアプローチによって、考古遺跡の復元が保存措置として適切かという倫理的・理論的問題が提起されてきた。

考古学的復元とは？

考古学において見いだされてきた「価値」の性質は、時代とともに変化してきた。すなわち、宝物としての考古遺物の発見・収集を重視する段階から、重要な遺跡の象徴的意義の評価へ、さらに科学的研究の可能性の追究へと、その重心は移行している。そこには、考古遺跡を発掘し発見したいという欲求と、それに伴う不可逆的な破壊、そして保存して次世代へ継承する責務との間に生じるパラドックスが存在する。発掘された考古遺跡の「意義」を解釈・説明する方法は多様であり、新技術の登場によってその手法はさらに拡大しているが、部分的・全体的を問わず、実証的なものから仮説的なものまで含めて、「復元」は常にその一翼を担ってきた。しかしながら、考古遺跡の復元は長らく議論の対象でもあった。すでに1839年には、フランスの考古学者アドルフ＝ナポレオン・ディドロン(Adolphe-Napoléon Didron)が次のように記している。は次のように書いている。

修理するよりもそのまま保存するほうがよい。修復するよりも破損部のみ修理するほうがよい。復元(再建)するよりも修復するほうがよい²。

英国の博学者ジョン・ラスキン(John Ruskin)は、建築の原則を論じた著名な評論『建築の七灯』(1849年)で次のように記している。

復元(再建)という言葉の真の意味を、一般の市民も公共記念物の管理者も理解していない。復元(再建)とは、建築物が被りうる最大の破壊を意味する³。

一方、フランスの修復建築家で、パリのノートルダム大聖堂、モン・サン＝ミシェル、カルカソンの中世の城壁をはじめ、フランス中世の歴史的建造物の修復で有名なウジェーヌ・ヴィオレール＝デュク(Eugène Viollet-le-Duc)は、1860年に次のように述べている。

修復とは、保存することでも、修理することでも、再建することでもない。いずれの時代にも決して存在しなかったであろう完全な状態に回復させることである⁴。

¹ マッケイ (2005年)。

² ディドロン (1840年)。

³ ラスキン (1849年)。

⁴ ヴィオレール＝デュク (1875年)。

1931年のアテネ憲章⁵や1964年のヴェネツィア憲章⁶に具体化されたその後の実践では、証拠に基づく意思決定と「オーセンティシティ」が強調されているものの、エフェソス（トルコ）、万里の長城（中国）、テオティワカン（メキシコ）といった世界各地の象徴的な考古遺跡の多くにさまざまな程度の復元が施されており、厳密な証拠に基づくのではなく、仮説に基づいて行われた事例もある。こうしたアナスタイロシスのアプローチは古代遺跡において特に顕著に見られ、そこでは暗黙のうちに、審美的価値や視覚的特質、歴史の実体といった特定の価値の選択が強調されている。しかしながら、科学的研究の可能性や意義など、他の潜在的な価値属性については、必ずしも十分に考慮されているとは限らない。



写真1：エフェソスの図書館（トルコ）。アナスタイロシスによって復元された考古遺跡。
写真：リチャード・マッケイ



写真2：ストーンヘンジ（英国）。オリジナルの石を立て直して再建された考古遺跡。
写真：リチャード・マッケイ

文化的・手続き的文脈

考古遺跡の「意義」を保存・管理・公開するための世界的なアプローチは、考古学史の変遷や文化的伝統と実践の違いに応じて多様に変化してきた⁷。復元に対するアプローチの相違は、「東洋と西洋」や「古と新」といった二分法によって単純化してとらえられることもあるが、実際には、社会的文脈とそれに基づく保存・展示に対する価値観の微妙な差異に由来する。これについては1994年のオーセンティシティに関する奈良ドキュメントに明記されており、同ドキュメントには次のような鋭い洞察による認識が示されている。

遺産は、それが帰属する文化的文脈の中で考慮され評価されなければならない⁸

また、2000年の中国の文化遺産の保護に関する原則(*Principles for the Conservation of Heritage Sites in China*)では次のように定められている。

その遺跡の遺産的価値に対する認識は継続的で終わりのないプロセスであり、社会の科学的・文化的認識が発展するにつれて深化する⁹。

こうした概念は、1979年から2013年にかけて発展し、文化的意義を持つ「場所」の保存のためのオーストラリアイコモス憲章(バラ憲章)¹⁰にも反映されている。同憲章は、場所の文化的意義が、用途、関係性、意味といった無形の属性とともに、有形の属性の双方の中に具現化されているという認識に至った。バラ憲章は、「価値に基づく (values-based)」意思決定を通じて、考古遺跡の保存および管

⁵ イコモス (1931年)。

⁶ イコモス (1965年)。

⁷ サリバンとマッケイ (2012年) 参照。

⁸ 文化庁ほか (1994年)。

⁹ 中国イコモスと文化遺産局 (State Agency of Cultural Heritage) (2000年)。

¹⁰ オーストラリアイコモス (2013年)。

理のための有効な方法論を提示している。この方法は、歴史的実体（historic fabric）や審美性に重点を置く立場から、より包括的な検討へと重心を移すものである。そしてそれは、遺跡をどのように保存し、管理し、公開・提示すべきかを判断するための論理的基盤を提供する¹¹。

重要な考古遺跡を解釈することは、世界遺産条約¹²第5条(a)に規定されているように、世界遺産に「地域社会の生活の中での役割（life in the community）」を与える一つの方法でもある。この国際的義務を履行するためには、文化遺産の価値を厳密に評価することが求められ、その評価は通常、「顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value:OUV）」¹³を支える世界遺産の「属性（attributes）」を明確化するという形で示される。

アンコール（カンボジア）

アンコールは、「価値」や「意義」に対する理解の変化が、遺跡の公開・提示のあり方——復元の可能性を含めて——にどのような影響を及ぼし得るかを示す興味深い事例である。1992年に世界遺産一覧表に記載された際、アンコールの顕著な普遍的価値（OUV）の当初の記述では、その卓越した芸術的特質や、美術・建築様式・建設技術の発展への影響が強調されるとともに、過去の文明の証として類を見ないものであることも主張された。しかし、この「過去の文明」という位置づけは議論を呼ぶものであり、また、千年以上前にこの巨大都市を築き、しかも決して去ることのなかったクメールの人々に対して、軽視的とも受け取られかねないものであった。その論理的帰結として、当初は「現在」よりも「過去」に焦点が当てられ、複数の寺院復元プロジェクトを通じて記念碑的側面が重視された。しかし近年では視点が広がり、アンコールは、人々が暮らし続ける聖なる景観（sacred lived-in landscape）として理解されるようになってきている。そこでは、伝統的な利用や儀礼が遺産の価値として認識され、継続する風習や慣習が、考古学的調査や物理的再建と同様に、この場所を保存していくうえで不可欠な要素とみなされるようになってきている¹⁴。



写真3：アンコール（カンボジア）で今も続く仏教の風習。写真：イム・ソクリティ

水落遺跡の漏刻（水時計）（明日香村）

考古遺跡において何を復元すべきで何を復元すべきでないかは、どのような「価値」が認識されているのか、それによってどのようなメッセージを伝えるべきなのかに大きく左右される。奈良県の例として明日香村の水落遺跡の漏刻がある。この漏刻は歴史、当時の科学、新たに登場した技術を示す証拠を提供するが、発掘された遺構は現地での公開に限界がある。そのような場合、復元が漏刻を保存・公開し、その歴史を伝える1つの選択肢になる。しかし、この非常に重要な遺構を保存・公開する「正しい」方法も「間違った」方法も存在しない。必要なのは、それがなぜ重要と認識されているかを理

¹¹ マッケイ（2019年）。

¹² ユネスコ（1972年）。

¹³ コートら（2022年）参照。

¹⁴ マッケイとサリバン（2009年）。

解することである。歴史的な場所としてなのか。遺跡が提示する科学的証拠のためなのか。考古学的方法や革新的技術の例としてなのか。あるいは独自の視覚的特徴を有する顕著な景観的遺構であるからなのか。この新しい漏刻技術は日本の歴史の重要な側面を明らかにしているのだろうか。こうした問いや他の問いへの答えは、復元が適切な選択肢かを見極めるのに役立つだろう。

多様な世界のアプローチ

主要な考古遺跡の復元に対する世界のアプローチは多様であり、その場所の意義に対する認識や、新しい技術的能力の双方を反映している。その幅広いアプローチの多様性を、ユネスコ世界遺産一覧表に記載されている象徴的遺跡に見ることができる。

ペルーのマチュ・ピチュでは、石造建築以降が発掘・整備され、安定化措置が施され、一部は復元されているが、全体としては介入を最小限にとどめて公開している。米国のメサ・ヴェルデでは、先史時代の先住民による卓越した石造遺構が保存・安定化されており、遺構は概して復元されていない。ストーンヘンジの世界的に有名な環状列石は、「ストーンヘンジ、エーヴベリーおよび関連遺跡群」として知られる世界遺産の一部であり、より広い考古景観の中にある著名な巨石記念碑である。これらの立石群は立て直されたものであるが、全面的な再建は行われておらず、周囲の遺構との強い視覚的関連性を有する景観の中で公開されている。



写真4：マチュ・ピチュ（ペルー）－安定化された遺構と復元された遺構が屋外環境で公開されている。
写真：リチャード・マッケイ



写真5：フィラデルフィアのフランクリン・コート（米国）－地下に遺構を残しつつ、彫刻的な要素を用いてかつての屋敷の輪郭を示している。
写真：リチャード・マッケイ

発掘され、安定化され、展示されている重要な考古遺跡はほかにもある。有名な例は、中国西安近郊の秦始皇帝陵に埋葬されている兵馬俑であり、大きな屋根で覆うことで、環境の管理と見学を可能にしている。これとは対照的に、サウジアラビア・ディルイーヤのトゥライフ地区では石造や土造の遺跡や考古堆積物が屋外で公開されている。遺構は安定化が施され、一部は復元されており、併せて一般公開と解説も整備されている。

復元の度合いという尺度の反対側には、地中に地下遺構をそのままの状態（あるいは発掘して）保存し、装置やメディアを用いて解釈・説明しているものもある。革新的な例として、フィラデルフィアのフランクリン・コートがある。ここでは、アメリカ建国の父であるベンジャミン・フランクリンの旧宅の考古学的遺構を、地下の「実物の」遺構として体験できるとともに、地上にはその輪郭を示す「ゴーストハウス（ghost house）」型（建物の輪郭を示す記念建造物）が設けられている。また、パリのノートルダム大聖堂前広場の地下にあるシテ島の考古学地下聖堂では、約二千年にわたる人類の歴史を示す考古遺構が、一般に公開された地下空間で展示されている。

これまで取り上げた事例は、発掘され、安定化され、部分的に復元された世界各地の考古遺跡のごく一部にすぎない。これらの事例は、遺跡の意味をどのように理解し、それをどのように伝えるかと

いう点における多様なアプローチを示している。復元自体は適切でも不適切でもない。しかし、世界遺産条約の直接的な先例が、アブ・シンベル神殿群の解体・移設・再建事業にあったことを想起することは重要である。これらの神殿は、のちに「アブ・シンベルからフィラエまでのヌビア遺跡群」として1979年に世界遺産一覧表に記載された。

紛争の影響と復元

紛争によって記念建造物が損傷や破壊にさらされた場合、とりわけ遺産が「文化」に対する破壊活動のターゲットにされた場合、特有の状況が生じる。不幸なことに、過去数十年間でさまざまな場所で意図的な破壊が増加してきた。モスタル旧市街の古い橋（ボスニア・ヘルツェゴビナ）、バーミヤン渓谷の巨大石仏（アフガニスタン）、シリアの複数の世界遺産などがその例である。パルミラのベル神殿の破壊は、このような場合の復元の難問を典型的に示している。ローマ帝国時代のベル神殿、凱旋門、貴族の塔墓をはじめ、パルミラの著名な建造物は、2015年から2016年にかけて次々にイラク・レバントのイスラム国（ISIL）の標的となった。ベル神殿は記録が十分に残されており、技術的には忠実な復元が可能である。その場合、文化的価値やアイデンティティを再確認できるという利点がある。一方で、現在の廃墟自体が、近年の悲劇的な事件を象徴する重要な証拠を提示しているという見解もある。上述の他の事例と同様に、単一の経験的に正しい解決策は存在せず、採用すべきアプローチは、その場所の価値と意味を慎重に考慮したうえで判断されるべきである。



写真6～8：パルミラのベル神殿（シリア）、2015～2016年。意図的な破壊の後に残った遺跡の断片と復元をめぐるジレンマ。写真の出典：ラジオ・フリー・ヨーロッパ (<https://www.rferl.org/a/palmyra-temple-of-bel-destroyed-islamic-state/27219887.html>)、ザ・テレグラフ (<http://www.telegraph.co.uk/news/worldnews/islamic-state/11911399/islamic-state-destroys-2000-year-old-arch-of-triumph-in-palmyra.html>)、ハーバード大学「誰の文化か？（Whose Culture?）」 (<https://whoseculture.hsites.harvard.edu/palmyra>)。

シドニーのビッグディグ

シドニーの歴史的地区「ロックス」にある考古遺跡は、発掘された遺構をもとにした都市型考古遺跡の解釈の、再建を行わない例として示唆に富む事例である。1990年代に行われた考古学的調査により、1780年代のヨーロッパ人到来から、1900年頃の腺ペスト流行までの時期に属する豊富な複合遺跡が発掘された¹⁵。これによって小規模な住居が建てられ、その後、主にヨーロッパ系の入植者コミュニティによって居住され、住宅、考古学的堆積、井戸、浄化槽などを含む構造が形成されていた。これらは、ペスト対策として建物が取り壊された後に埋め戻され、100年間にわたり土盛り層の下に封じられていた。

現在、この「ビッグディグ」遺跡は、考古遺構の上に建設されたユースホステルと、それに付随する考古学教育センターを備えている。この施設の設計は、発掘された基礎構造やその他の遺構を現地で保存・解釈することを実現しており、解釈には多層的な手法とメディアが用いられている。大型の彫刻・絵画作品、詳細な解説板、歴史写真、学校用教材、出版物、ウェブページに加え、関連展示やガイドツアーも提供されている。「ビッグディグ」は、地下に埋もれた大規模かつ重要な考古遺跡を、再建に頼ることなく有意義に提示できる好例である。

¹⁵ カースケンス（1999年）。



写真 9～10：シドニーのロックスにあるビッグディグ遺跡（オーストラリア）。解説パネル、マルチメディア、ガイドツアーなどの工夫によって、復元することなく、発掘した遺構をもとに植民地時代の考古遺跡を公開している。写真：リチャード・マッケイと GML ヘリテージ株式会社（GML Heritage Pty Ltd）

まとめ

本稿で示した事例は、さまざまな時代や地域にわたるものであるが、それぞれが多様なアプローチを示しており、従来型の保存モデルと、より人々を中心としたアプローチとの対比を浮き彫りにしている。後者のアプローチでは、遺跡や場所の価値・意義を、その現代的な文化的文脈の中で理解したうえで行われる意思決定の重要性が認識されている。

参考資料

- Australia ICOMOS. 2013. The Australia ICOMOS Charter for Places of Cultural Significance (The Burra Charter). Burwood, VIC: Australia ICOMOS. <http://australia.icomos.org/wp-content/uploads/The-Burra-Charter-2013-Adopted-31.10.2013.pdf>, accessed 26 January 2026.
- China ICOMOS and the State Agency of Cultural Heritage. 2000. *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China*. (English Version). J Paul Getty Conservation Institute, Los Angeles.
- Court, Sarah, Jo, Eugene, Mackay, Richard, Murai, Mizuki, and Therivel, Riki. 2022. *Guidance and Toolkit for Impact Assessments in a World Heritage Context*. UNESCO, ICCROM, ICOMOS and IUCN, Paris, France; Rome, Italy; Charenton-le-Pont, France; Gland, Switzerland, ISBN 978-92-3-100535-0.
- Didron, Adolphe-Napoléon. 1840. Sur le Travaux du Comité pendant la session de 1839.
- ICOMOS. 1931. *The Athens Charter for the Restoration of Historic Monuments—1931*. Paris. ICOMOS. https://civih.icomos.org/wp-content/uploads/2022/03/The-Athens-Charter_1931.pdf, accessed 26 January 2026.
- ICOMOS. 1965. *International Charter for the Conservation and Restoration of Monuments and Sites (The Venice Charter 1964)*. [Paris]: ICOMOS. <https://www.icomos.org/charters-and-doctrinal-texts/>, accessed 26 January 2026.
- Agency for Cultural Affairs (Government of Japan) and Nara Prefecture in cooperation with UNESCO, ICCROM and ICOMOS. 1994. *The Nara Document of Authenticity*. <https://whc.unesco.org/document/116018>, accessed 26 January 2026.
- Karskens, Grace. 1999. *Inside The Rocks: the archaeology of a neighbourhood*. Sydney: Hale and Iremonger.
- Mackay, Richard & Sullivan, Sharon. 2009. 'Living with Heritage at Angkor', in Turgeon, L, *The Spirit of Place*, Laval University Press, Canada, pp 205–212.
- Mackay, Richard. 2019. Values-Based Management and the Burra Charter: 1979, 1999, 2013— in Avrami, E, Macdonald, S, Mason, R and Myers, D, (eds), *Values in Heritage Management : Emerging Approaches and Research Directions*, J Paul Getty Conservation Institute, Los Angeles, 110-126.
- Ruskin, John. 1849. *The Seven Lamps of Architecture*. Smith, Elder and Co, United Kingdom.
- Sullivan, Sharon & Mackay, Richard. (eds). 2012. *Archaeological Sites: Conservation and Management. Readings in Conservation Series*. Los Angeles: Getty Conservation Institute.
- United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO). (1972). Convention Concerning the Protection of the

World Cultural and Natural Heritage, adopted by the General Conference of UNESCO 16 November 1972. <https://whc.unesco.org/en/convention/>, accessed 26 January 2026.

Viollet-le-Duc, Eugene. 1875. Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XIe au XVIe siècle. A. Morel, Paris.

著者詳細

Mackay, Richard

Cultural Heritage and Museum Studies Program, School of Humanities and Social Sciences, Deakin University Australia, Mackay Strategic Pty Ltd, Australia

richard@mackaystrategic.com.au

ORCID: 0000-0003-3049-3574

PRESENTATION I

Richard MACKAY
Director of Possibilities
Mackay Strategic

Archaeological Sites: Conservation, Management and Meaning

Cultural heritage embodies the concept of inheritance and inter-generational transmission of valuable places, objects, traditions and knowledge. Archaeological sites have long been recognised as important heritage places. Cambodia and Zimbabwe showcase archaeological sites on their national flags and in the case of Cambodia the Angkor World Heritage property is a recognised symbol of the nation. The manner in which archaeological sites are presented can be of great importance to national narratives and identity¹. But when archaeological remains are underground or fragmentary, understanding the place can be challenging and reconstruction may occur. This practice has, in turn, created ethical and theoretical questions about whether archaeological site reconstruction is an appropriate conservation action.

Archaeological Reconstruction?

The nature of the ‘value’ ascribed to archaeology has evolved over time, moving from focus on finding and collecting treasures and artefacts, to recognition of the symbolic significance of major sites, and engagement with their scientific research potential. Therein lies a paradox between the desire to excavate, discover – and in doing so destroy – archaeological sites and the inter-generational obligation to conserve them. The options for interpreting the ‘meaning’ of excavated archaeological sites are varied and have increased through emerging technologies, but have always included ‘reconstruction’ both partial and total, whether evidence-based or hypothetical. But, reconstruction of archaeological sites has been long contested. As early as 1839, a French archaeologist, Adolphe-Napoléon Didron wrote that it would be:

*better to preserve than to repair, better to repair than to restore, better to restore than to reconstruct*².

English polymath, John Ruskin, in his classic essay on architectural principles, *The Seven Lamps of Architecture* in 1849 observed that:

*Neither by the public, nor by those who have care of public monuments is the true meaning of the word restoration understood. It means the most total destruction which a building can suffer*³,

whereas French conservator, Eugène Viollet-le-Duc, himself renown for the restoration of French medieval landmarks including Notre-Dame de Paris, Mont Saint-Michel, and the medieval walls of Carcassonne, observed in 1860 that:

*To restore is not to preserve it, to repair it or to re-build it; it is to re-instate it in a condition of completeness which may never have existed at any given time*⁴.

¹ Mackay 2005.

² Didron 1840.

³ Ruskin 1849.

⁴ Viollet-le-Duc 1875.

Subsequent practices embodied in the 1931 *Charter of Athens*⁵, the 1964 *Venice Charter*⁶ emphasise evidence-based decision making and ‘authenticity’, yet many iconic archaeological sites around the world, including, for example: Ephesus (Türkiye), The Great Wall (China), and Teotihuacan (Mexico) present varying degrees of reconstruction; in some cases hypothetical, rather than strictly evidence based. These anastylosis approaches, which are especially evident at classical sites implicitly emphasise a selection of values, namely aesthetic, visual qualities, and historic fabric but do not necessarily address other potential attributes of value such as scientific research potential, or meaning.



Figure 1: The Library, Ephesus, Türkiye. An archaeological ruin reconstructed through anastylosis. Photo: Richard Mackay.



Figure 2: Stonehenge, United Kingdom. Re-erected original stones presented a reconstructed archaeological monument. Photo: Richard Mackay.

Cultural and Procedural Context

Global approaches to conserving, managing and presenting the ‘meaning’ of archaeological sites, have varied according to changing archaeological historiography and different cultural traditions and practices⁷. While divergent approaches to reconstruction may be simplistically characterised through ‘west and east’ or ‘old and ‘new’ dichotomies, the reality is a more nuanced perception of societal context and resulting curatorial values, as well articulated in the 1994 *Nara Declaration* which perspicaciously recognised that:

*heritage properties must be considered and judged within the cultural context to which they belong*⁸;

and the 2000 *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China* which accept that:

*Recognition of the site’s heritage values is a continuous and open-end of process that deepens as society develops at its scientific and cultural awareness increases*⁹.

Such concepts are also reflected in *The Australia ICOMOS Charter for Places of Cultural Significance (The Burra Charter)*¹⁰, which between 1979 and 2013 evolved to recognise that the cultural significance of a place is embodied in both tangible and intangible attributes such as use, association and meaning. *The Burra Charter* offers a useful methodology for archaeological site conservation and management through ‘values-based’ decision making, which shifts the emphasis from historic fabric and aesthetics to a more comprehensive consideration. This in turn provides a logical basis for determining how a site might be conserved, managed and presented¹¹.

⁵ ICOMOS 1931.

⁶ ICOMOS 1965.

⁷ See Sullivan and Mackay 2012.

⁸ Agency for Cultural Affairs et al 1994.

⁹ China ICOMOS and the State Agency of Cultural Heritage 2000.

¹⁰ Australia ICOMOS 2013.

¹¹ Mackay 2019.

Interpreting significant archaeological sites is one way to provide World Heritage properties with ‘life in the community’ as specified in Article 5(a) of the *World Heritage Convention*¹². Compliance with this international obligation requires rigorous assessment of cultural heritage values, typically expressed as identification of the ‘attributes’ of a World Heritage property that support its Outstanding Universal Value¹³.

Angkor, Cambodia

Angkor offers an interesting example of how changing understanding of significance and meaning can affect decisions about site presentation – including potential reconstruction. Inscribed on the World Heritage List in 1992, the original statement of Outstanding Universal Value for Angkor highlighted its unique artistic qualities, influence on the development of the arts, architecture and construction, but also asserted that it presented unique testimony of a past civilization. The latter point (‘past civilization’) was both contentious and contemptuous of the Khmer community who constructed this immense city more than a millennium ago – and never left! But the logical consequence was an initial focus on the ‘past’ rather than the ‘present’ emphasising the monumental, through multiple temple reconstruction projects. Only more recently has the perspective widened to enable Angkor to be understood as a sacred lived-in landscape, where traditional use and ritual are recognised as heritage values and ongoing practices and customs have become as vital to conserving the place as archaeological investigation or physical reconstruction¹⁴.



Figure 3: Contemporary Buddhist practice at Angkor, Cambodia. Photo: Im Sokrithy.

Misouchi Water Clock, Asuka

What should or should not be reconstructed at archaeological sites depends greatly on what ‘values’ are perceived and therefore what messages should be communicated. An example from Nara Prefecture is the Misouchi Water Clock at Asuka. The Clock provides evidence of history, contemporary science and emerging technology, but as an excavated feature has limited possibilities for on-site presentation. So, reconstruction is an option for conserving and presenting the Clock and telling its story. But there is neither ‘right’ nor ‘wrong’ way to conserve and present this highly-significant archaeological feature. What is relevant is understanding why it is perceived to be important. As an historic place? For the scientific evidence it presents? As an example of archaeological method, or innovative technology? Or a remarkable landscape feature with distinctive visual character? Does the emergent water clock technology reveal an important aspect of Japanese history? The answers to these and other questions may help discern whether reconstruction would be an appropriate.

Diverse Global Approaches

Global approaches to reconstruction of major archaeological sites are diverse and reflect both perceptions of the

¹² UNESCO 1972.

¹³ See Court et al 2022.

¹⁴ Mackay and Sullivan 2009.

meaning of the place and evolving technical capability. Some of the iconic sites on the UNESCO World Heritage List illustrate the diversity of this spectrum.

Machu Picchu, Peru, presents cleared and excavated stone masonry, stabilised, reconstructed in part, and presented as an open site with minimum minimal intervention. At Mesa Verde in the United States of America, extraordinary pre-Hispanic Amerindian masonry remains have been preserved and stabilised with ruins generally not reconstructed. The globally-iconic stone ring at Stonehenge, part of the World Heritage property known as Stonehenge, Avebury and Associated Sites is well-known megalithic monument, set in a wider archaeological landscape. The standing stones have been re-erected, but not fully reconstructed and the site is presented within a landscape setting with strong visual links to surrounding archaeological features.



Figure 4: Machu Picchu, Peru – a combination of stabilised and reconstructed remains in an open setting. Photo: Richard Mackay.



Figure 5: Franklin Court, Philadelphia, USA – use of a sculptural element to interpret the former house, with archaeological remains below. Photo: Richard Mackay.

Major archaeological sites have also been exposed excavated, stabilised and displayed. A well known example is the entombed warriors at the Mausoleum of the First Qin Emperor near Xian, China, presented beneath a large protective cover which provides both climate control and visitor access. By contrast at the At-Turaif District in ad-Dir'iyah, Saudi Arabia, masonry and earthen ruins and archaeological deposits are presented in the open, stabilised, and partly reconstructed, with associated visitor access and interpretation.

At the other end of the reconstruction scale, some archaeological sites are conserved as intact (or excavated) sub-surface remains and interpreted using installations or media. Innovative examples include sculptural interpretation, such as the such as Franklin Court, in Philadelphia, where the archaeological remains of the house of United States' founding father Benjamin Franklin can be experienced as 'real' subsurface archaeological remains and a 'ghost house' outline monument above. The Crypte archéologique on the Île de la Cité beneath the forecourt of the Notre Dame Cathedral in Paris presents archaeological remains representing two millennia of human history in an accessible underground vault.

The abovementioned case studies present a small selection from thousands of excavated stabilised and partially reconstructed archaeological sites all around the world. They illustrate the diversity of approaches to understanding meaning and conveying messages. Reconstruction of itself is neither appropriate nor inappropriate, but it is relevant to recall that the World Heritage Convention itself had its direct antecedent in the dismantling, relocation and reconstruction of the colossal temples at Abu Simbel which were later inscribed on the World Heritage List in 1979 as part of the 'Nubian Monuments from Abu Simbel to Philae'.

Conflict Impacts and Reconstruction

A particular circumstance arises in the case of monuments that have been damaged or destroyed as the result of conflict; and especially where heritage was the target with destructive activities directed at 'culture'. Sadly, recent

decades have seen increasing deliberate destruction at places such as the Mostar Bridge (Bosnia Herzegovina), the giant buddhas in the Bamiyan Valley (Afghanistan), and multiple Syrian World Heritage properties. The destruction of the Temple of Bel at Palmyra exemplifies the resulting reconstruction quandary. Renowned buildings at Palmyra, including the Roman Temple of Bel, Triumphal Arch and Tower Tombs of the Nobles; progressively became targets of the Islamic State of Israel and the Levant (ISIL) during 2015 and 2016. The Temple of Bel is well documented, so faithful reconstruction is technically feasible, and doing so might re-assert its cultural value and identity. A contrary view suggests that the ruin itself now provides significant symbolic evidence of recent tragic events. As is the case with other places considered above, there is no single empirically correct solution and the selected approach should rely on careful consideration of the value and meaning of the place.



Figures 6-8: The Temple of bel, Palmyra, Syria 2015 – 2016. Deliberate destruction results in a standing fragment and reconstruction quandary. Image reproduced from Radio Free Europe: <https://www.rferl.org/a/palmyra-temple-of-bel-destroyed-islamic-state/27219887.html>, The Telegraph: <http://www.telegraph.co.uk/news/worldnews/islamic-state/11911399/Islamic-State-destroys-2000-year-old-Arch-of-Triumph-in-Palmyra.html>. Harvard University, Whose Culture? <https://whoseculture.hsites.harvard.edu/palmyra>.

Sydney’s BIG DIG

An archaeological site in Sydney’s historic Rocks precinct presents an informative example of urban archaeological site interpretation based on excavated remains without any reconstruction. Archaeological investigations undertaken in the 1990s revealed a rich ensemble dating between the arrival of Europeans in the 1780s and the advent of the bubonic plague around 1900¹⁵. The site had been progressively occupied by transported prisoners who built small dwellings and, later by a community of largely European settlers, and contained houses, archaeological deposits, wells and cesspits; all sealed for a century beneath layers of fill added after buildings were demolished in response to the plague.

Today the ‘BIG DIG,’ site features a youth hostel, constructed above the archaeological remains, plus an associated archaeology education centre. The design achieves *in situ* conservation and interpretation of extensive foundations and other archaeological features, which are interpreted through a layered spectrum of techniques and media: large sculptural and painted artwork, detailed signs, historic photographs, a school education kit, published books, web pages, plus an associated nearby exhibition and guided tours. The ‘BIG DIG’ is a noteworthy example of how an



Figures 9-10: The BIG DIG site, The Rocks, Sydney, Australia. Signs, multimedia, guided tours and other devices present a colonial archaeological site with excavated remains but no reconstruction. Photos: Richard Mackay and GML Heritage Pty Ltd.

¹⁵ Karskens 1999.

excavated largely sub-surface but highly-significant archaeological site can be meaningfully presented without recourse to any reconstruction.

Conclusion

The case studies presented in this paper, from a range of historical periods and different places, serve to highlight diverse approaches and contrast traditional conservation models with more people-centred approaches, including recognition of the role of decision-making founded on an understanding of the values and meaning of place within their contemporary cultural context.

References

- Australia ICOMOS. 2013. The Australia ICOMOS Charter for Places of Cultural Significance (The Burra Charter). Burwood, VIC: Australia ICOMOS. <http://australia.icomos.org/wp-content/uploads/The-Burra-Charter-2013-Adopted-31.10.2013.pdf>, accessed 26 January 2026.
- China ICOMOS and the State Agency of Cultural Heritage. 2000. *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China*. (English Version). J Paul Getty Conservation Institute, Los Angeles.
- Court, Sarah, Jo, Eugene, Mackay, Richard, Murai, Mizuki, and Therivel, Riki. 2022. *Guidance and Toolkit for Impact Assessments in a World Heritage Context*. UNESCO, ICCROM, ICOMOS and IUCN, Paris, France; Rome, Italy; Charenton-le-Pont, France; Gland, Switzerland, ISBN 978-92-3-100535-0.
- Didron, Adolphe-Napoléon. 1840. Sur le Travaux du Comité pendant la session de 1839.
- ICOMOS. 1931. *The Athens Charter for the Restoration of Historic Monuments—1931*. Paris. ICOMOS. https://civvih.icomos.org/wp-content/uploads/2022/03/The-Athens-Charter_1931.pdf, accessed 26 January 2026.
- ICOMOS. 1965. *International Charter for the Conservation and Restoration of Monuments and Sites (The Venice Charter 1964)*. [Paris]: ICOMOS. <https://www.icomos.org/charters-and-doctrinal-texts/>, accessed 26 January 2026.
- Agency for Cultural Affairs (Government of Japan) and Nara Prefecture in cooperation with UNESCO, ICCROM and ICOMOS. 1994. *The Nara Document of Authenticity*. <https://whc.unesco.org/document/116018>, accessed 26 January 2026.
- Karskens, Grace. 1999. *Inside The Rocks: the archaeology of a neighbourhood*. Sydney: Hale and Iremonger.
- Mackay, Richard & Sullivan, Sharon. 2009, 'Living with Heritage at Angkor', in Turgeon, L, *The Spirit of Place*, Laval University Press, Canada, pp 205–212.
- Mackay, Richard. 2019. Values-Based Management and the Burra Charter: 1979, 1999, 2013— in Avrami, E, Macdonald, S, Mason, R and Myers, D, (eds), *Values in Heritage Management: Emerging Approaches and Research Directions*, J Paul Getty Conservation Institute, Los Angeles, 110-126.
- Ruskin, John. 1849. *The Seven Lamps of Architecture*. Smith, Elder and Co, United Kingdom.
- Sullivan, Sharon & Mackay, Richard. (eds). 2012. *Archaeological Sites: Conservation and Management*. Readings in Conservation Series. Los Angeles: Getty Conservation Institute.
- United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO). (1972). Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage, adopted by the General Conference of UNESCO 16 November 1972. <https://whc.unesco.org/en/convention/>, accessed 26 January 2026.
- Viollet-le-Duc, Eugene. 1875. *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XIe au XVIe siècle*. A. Morel, Paris.

Author Details

Mackay, Richard

Cultural Heritage and Museum Studies Program, School of Humanities and Social Sciences, Deakin University Australia, Mackay Strategic Pty Ltd, Australia

richard@mackaystrategic.com.au

ORCID: 0000-0003-3049-3574

講演 2

遺跡復元の価値と復元学

海野 聡

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 准教授

はじめに

文化遺産とは、単に過去から偶然残された物質的遺構の総称ではない。それは過去の営為が現在の社会において意味を持ち続けるための、知的・文化的枠組みの中で成立する概念である。遺跡や古建築をめぐる価値判断は、物質的残存の有無だけで決定されるものではなく、歴史的記憶、社会的文脈、地域コミュニティとの関係、さらには文化的アイデンティティなど、多様な要素で形成される。そのため文化遺産の理解には、遺構の保存や調査にとどまらず、時間の経過が建築に及ぼす影響、文化圏による建築観の違い、遺跡を社会に提示するための方法論など、複合的視点が求められる。

日本の建築文化は、こうした複合的理解を必要とする最たる例であり、文化遺産の捉え方が現存建築と遺跡で大きく異なる。日本の伝統建築は木造を中心とするため、時間の経過とともに腐朽・焼失・風化といった損耗を避け難い。結果として、建物の上部構造が完全に失われ、礎石や柱穴などの痕跡のみが遺跡として残ることが多い。これは石造建築を中心とする欧州とは大きく異なる遺跡の姿であり、遺跡の「見え方」そのものが文化圏によって異なる事実を示している。すなわち、日本における遺跡理解は、物質的遺構が必ずしも視覚的・空間的情報を保持していないという状況を前提にしなければならない。

このような条件下で、遺跡を社会にどのように伝えるのかという問題が生じる。日本では古来、建築を「建て替える」ことを通じて継承してきた文化が存在する（海野 2024）。伊勢神宮の式年遷宮に代表されるように、建物そのものを更新し続ける行為が文化の継承を保証し、物質的同一性よりも形式・技術の継承が重視されてきた。こうした文化的基盤の上に、日本における遺跡復元の思想が成立している。

一方、現代の文化遺産論では、復元に対する批判的視点も強い。復元は誤解を生む危険や、過度な観光化による価値の単純化、記憶の恣意的操作といった問題を抱えるためである。しかし同時に、復元は失われた空間的情報を社会に開くための重要な手段でもある。とりわけ、日本のように木造建築が消滅しやすい文化圏では、復元は遺跡理解の核心を担う行為となる。

本論文では、こうした状況を踏まえ、日本の遺跡と復元の特質を多角的に整理し、さらに復元を学術的領域として体系化する「復元学」を提唱している状況を述べたい（海野 2017・2019）。全体は、古建築の時間経過と遺跡化の問題、日本的継承論、文化遺産の価値と類型、復元の歴史的展開を経て、復元学の理念と方法論へと展開する。最終的には、復元を単なる技術行為としてではなく、過去と現在、そして未来をつなぐ創造的継承として位置づけることを目指す。

1. 古建築と時間経過に伴う遺跡化

古建築が時間の経過によって遺跡化する過程は、文化圏および建築材料によって大きく異なる。特に木造建築を主とする日本では、建築物が物質として長期に残ることはむしろ例外であり、遺跡の姿は上部構造が消失し、地中の痕跡のみとなることが一般的である。この「遺跡の不可視性」は、日本の遺跡観・復元観を理解するための重要な前提条件である。

まず、日本の古建築は、木材という有機物を主材料とするため、腐朽・虫害・風雨・火災など、自然的・社会的要因による損耗を受けやすい。寺社建築のように形式が継承され続ける場合であっても、物質

としての同一性を保つことは困難であり、建て替えを通じて継承されるのが常態であった。このため、古代・中世の建築物で現存する例は極めて限られ、遺跡として発見される場合は柱穴・礎石・建物配置など、基礎構造に関わる情報が中心となる。

これに対して、欧州の石造建築は、たとえ破損しても壁体やアーチ構造が長期にわたり残存し、視覚的にも「建物の痕跡」を保ちやすい。この差異は、遺跡がどのように認識されるかに直接影響し、日本では「遺跡＝地中に埋もれた痕跡として発掘されるもの」というイメージが広く共有されてきた。つまり、遺跡とは「建物の残骸」というよりも、「過去の活動が残した地層の情報」として理解される傾向が強い。

こうした遺跡の特性は、文化財保護における保存・公開のあり方に大きく影響する。たとえば、埋め戻しをされた遺跡の理解は極めて困難であるし、よしんば柱穴だけが残る遺跡をそのまま公開しても、一般来訪者には空間構造を理解することが難しい。専門家であれば柱間寸法、建物規模、用途を解読できるが、来訪者は「何がどのように存在したのか」を直感的に把握できない。そのため、日本では遺跡に復元建物を併設することによって、空間的理解を助ける手法が採用されてきた。

加えて、日本の遺跡化の過程には、「意図的な建て替え」が歴史的に大きな位置を占める。伊勢神宮の式年遷宮のように、神社を中心に建物を一定周期で建て替える文化が存在するため、建築物の寿命は単なる物質劣化によるものではなく、文化的・宗教的要請によって更新される場合も多い¹⁾。このような文化圏では、「古いものが残ること」よりも「形式が持続すること」に価値が置かれ、物質保存とは異なる遺跡観が形成される。

したがって、日本における古建築の遺跡化を考える際には、「物質としての遺構が消滅しやすい」という自然的条件と、「建て替えを通じて継承する」という文化的条件の両方を踏まえて理解する必要がある。時間経過による遺跡化は、単なる劣化の問題ではなく、日本建築文化の根底にある継承理念と結びついた現象なのである。

2. 日本建築文化における継承の特質

2-1 更新を前提とする文化的背景

日本の伝統建築における継承のあり方は、世界的に見ても独自性の高い文化的特徴をもつ。すなわち日本では建築物そのものの物質的持続だけではなく、形式・技術・理念の継承が優先されることもある。この特質は、単に木造建築の物理的脆弱性に起因するのみならず、歴史的・宗教的・美意識的背景が複合的に絡み合っ形成されてきた。それゆえ日本の継承観の構造を整理し、遺跡・復元との関係を明確にする。

日本の建築文化において、建造物が時間の経過とともに建て替えられることは自然な行為であった。木造建築は、風雨・地震・火災といった自然災害の影響を強く受け、長期間にわたり物質的同一性を保ちにくい。しかし日本では、単に物質寿命が短いから建て替えるのではなく、「建て替えること」に積極的な意味が与えられてきた。

その代表的事例が伊勢神宮の式年遷宮である。20年ごとに主要社殿を新造し、神体を新殿に遷すこの儀礼は、1300年以上にわたり続いてきた。式年遷宮の本質は、建物の物質的保存ではなく、技術と形式を更新し続けることであり、宮大工の技術体系が代々引き継がれる場としても機能した。すなわち、式年遷宮は「建物を更新することで文化を保持する」という日本の継承観の象徴である。

このような文化的背景においては、物質そのものの古さよりも、「同じ形式を保ちながら継続してきた」ことが価値を持つ。古材が残存しているか否かではなく、建築形式が連続しているかどうかことが重要視されるのである。

2-2 寺院建築における継承と再建の思想

寺院建築においても、被災と再建は一般的であった。法隆寺金堂や五重塔のように飛鳥時代の建築が現存する例は例外であり、寺院建築の多くは長い歴史の過程で火災や戦乱により失われ、その都度、再建されてきた。たとえば奈良の興福寺では、主要堂舎が歴史上何度も焼失し、再建されたことが記

録に残る。新材を用いても、古式の建築様式を忠実に再現することで、「古代建築の形式を維持してきた寺院」というアイデンティティが保たれている。形式の継続こそが文化的価値を形成している点が注目される。同様の手法は清水寺や延暦寺でも確認でき、古刹においては、再建時にあえて前身の形を踏襲することで、伝統の堅守が示されたと考えられる。

寺院建築の再建には、宗教的意味も深く関わる。仏堂は仏像を安置する場所であり、信仰の中心であるため、焼失した場合には速やかに再建されることが文化的要請であった。日本では、焼失した堂をそのまま廃墟として残すという発想は育ちにくく、むしろ「廃墟であること」が寺院本来の姿を損なうものと捉えられた。この点も、欧州の石造の教会が廃墟として価値づけられたり、廃墟の基礎や一部を利用して新築したりする文化とは対照的である²⁾。

2-3 過去（伝統）を求める行為

日本において、過去の形を求める行為は連綿と行われてきている。古代には新しい外来の宗教に対して、伝統的な神道の建物に、より古い王宮の伝統的なカタチを用いた。これにより、新しい建築形式の寺院と古式な神社という対比的な構成が生まれた。宮殿でも同じような手法が取られており、対外的な大極殿では中国的な最新の建築形式が用いられたのに対して、天王の居所である内裏では、日本の伝統的な形式が意図的に用いられた。

中世にも類似する手法が見られ、新しい禅宗の寺院では新しい建築形式が用いられたのに対して、伝統的な密教寺院などでは、伝統的な形式を意図的に選択した。これも最先端の建築のカタチを追求するのではなく、建築のカタチを古式とすることで伝統を求めたのである。

これらの手法は、いずれも新しい文化的な流入に対して、古式な手法を継続的に用いるというスタンスであるが、近世には意図的に過去に戻す行為も行われている。詳しくは後述するが、寛政度内裏の造営において、裏松固禅の『大内裏図考証』などの成果を参照しつつ、平安時代の内裏と儀礼の再興が目指された。

近代にはいと、西洋学問としての建築学が導入された。平安宮からの遷都 1100 年を祈念して、平安神宮が建設された。この平安神宮は平安宮を模して造られたもので、近代における復元という思想が強く示された事例である。詳しくは後述する。

3. 遺跡の価値と復元の理念

3-1 文化遺産における復元の価値

文化遺産の価値としては、物質的価値・観念的価値・風景を構成する要素・地域のモニュメント・学術的意義などの価値がある。

そして文化遺産の特性に応じて、復元の価値も大きく変わってくる。例えば、復元しないことに価値がある、すなわち廃墟であることに価値を見出すものもある。これは遺跡を時間の記憶装置・表現装置としての価値を示す文化遺産で、原爆ドームがその代表である。原爆ドームは被爆した、すなわち破壊されていることに価値がある。それゆえに復元することにより、文化遺産としての価値を失うこととなる。つまり戦災・被災遺構の特殊性ではあるが、復元することで、被災という記憶が喪失してしまう。いっぽうで、以前と同じ形の再建による負の記憶の消去による癒しという現代社会としての効能もあるが、これは文化遺産としての価値とは異なることは忘れてはならない。

一方で、文化財建造物の修理や復元においては、より繊細な判断が求められる。石造建築を中心とするヨーロッパの文化圏では、現存建築の修理と遺跡の修理が連続的に扱われる場合が多いのに対し、日本では両者は明確に区別されてきた。日本において「復元」とは、痕跡や史料に基づいて、過去の姿に戻す行為を指すが、それが常に最善の選択となるわけではない。

法隆寺夢殿の事例は、その象徴である。調査によって、夢殿が 8 世紀の形状を有していたことが明らかになったが、周囲の建物は 13 世紀の姿をとどめている。仮に夢殿のみを 8 世紀の形に復元すれば、過去に一度も存在しなかった時代混合の景観が生まれてしまう。このため、夢殿では復元ではなく、

現状を尊重した修理が選択された。ここでは、「過去のある時点に戻すこと」よりも、「時間の積層を保存すること」が重視されたのである。

3-2 過去の形を表現する行為の多面性

名勝として指定される庭園においては、建造物とは異なる価値基準が適用される。庭園は風景そのものであり、そこでは必ずしも素材のオリジナリティが問われない。鹿苑寺金閣の再建が広く受け入れられているのは、金閣が庭園景観を構成する象徴的要素であり、その再現によって浄土庭園としての価値が視覚的に回復されるからである。ここでは、「風景のオーセンティシティ」と「建造物のオーセンティシティ」は一致しない。

平等院鳳凰堂の平成修理（2012～2014年）も、復元と保存のバランスを考える上で示唆的である。外部は彩色を施して木部を保護し、浄土庭園としての視覚的価値を高める一方、内部は剥落止めにとどめた。また、調査によって柱が池中に立っていたことが判明したが、それを元に戻すことは、現存建造物への悪影響を考慮して見送られた。ここでは、「史跡としての再現」よりも、「現存建築を長く残すこと」が優先されている。加えて、過去の改良行為そのものも、建築の歴史の一部として評価されている点は重要である。

このように見ていくと、「過去の形を表現する」という行為は、単純な復元か否かという二項対立では捉えられない。遺跡、建造物、庭園、被災遺構といった対象ごとに、求められる価値やオーセンティシティのあり方は異なり、それに応じて保存・修理・復元の方法も変わる。復元とは、過去を固定的に再現する行為ではなく、現在の価値観と知見に基づいて、過去との関係を再構築する行為なのである。

遺跡や歴史的建築をどう扱うかという問いは、結局のところ、「私たちは時間をどのように受け止めるのか」という問題に行き着く。建築を単なる形としてではなく、時間の記憶装置として捉えるとき、復元は目的ではなく、数ある選択肢のひとつとして、慎重に位置づけられるべき行為となる。その判断の積み重ねこそが、現代における文化遺産の成熟した扱い方を形づくっていくのである。

4. 日本における復元の歴史

4-1 寛政度内裏再建にみる復古

天明8年（1788）の大火によって焼失した京都御所は、寛政2年（1790）より寛政度内裏として再建された。この再建事業は、単なる宮殿の復旧にとどまらず、平安時代の平安宮の形式を規範とした復古的建築の実践として、日本建築史上きわめて重要な位置を占める。とりわけ注目すべきは、本事業が文献史料にもとづく歴史考証を前提として進められた点であり、そこには近代的な「復元」概念に連なる方法論的萌芽を認めることができる。

寛政度内裏再建の思想的背景には、光格天皇による平安時代の古式に則った朝儀・神事の再興や京都御所の復古的造営を通じて、天皇の権威と皇室の伝統を回復・高揚させようとした意向があった。それゆえに単なる様式的回帰ではなく、古代を規範とする政治的・象徴的空間の再構築という性格を有していた。

この再建において中心的役割を果たしたのが、裏松固禪をはじめとする有職故実家である。裏松は『大内裏図考証』を著し、平安内裏の殿舎構成、配置、儀礼動線を文献史料にもとづいて精緻に検討した。その成果は紫宸殿・清涼殿を中心とする寛政度内裏の構成に反映された。むろん『大内裏図考証』は再建のためのものではないが、結果的には有効な情報源であった。ここに、造営の実践が学問的知見によって方向づけられるという構図が成立している。

もっとも、寛政度内裏は平安内裏の忠実な再現ではない。史料の欠如や解釈の幅は不可避であり、平面の追求に対して、小屋組などの構造には近世的な構法や技術が用いられている。そもそも忠実な復元という思想ではなかった可能性もある。したがって、この再建は復元というよりも、史料にもとづく「復古」として理解すべきであろう。すなわち過去の建築をそのまま再生する行為ではなく、当時の知識体系と価値観のもとで、想定される古代像を再構築する行為である。

4-2 平安神宮と建築学研究

平安神宮は、明治28年(1895)の第四回内国勸業博覧会を契機として創建された神社であり、平安遷都1100年を祈念する事業である。平安宮を規範とした意匠が構想されたが、敷地の都合から場所はもとの位置から離れた場所で建てられており、規模も八分の五に縮小されている。

しかし実際の事業の実現のために、伊東忠太によって近代日本における建築史研究の成果が持ち込まれた。当時は日本建築史という学問体系も未確立で、現存する古建築の年代判定も不十分な状況にあって、現存する古代建築の参照が確認できる。とりわけ腰組部分の細部意匠の検討のために、平安宮の建立年代と近い薬師寺東塔・般若寺楼門の調査に赴いており、実例の調査にもとづく復元検討がなされた。くわえて大棟にのる鴟尾の検討のために唐招提寺金堂の鴟尾を調査している。この鴟尾は八世紀のものが現存しており、適切な年代判定がなされている。これらの行為は過去の建築の探究という点で、近代学問の嚆矢と位置付けられる。

さらに実験考古学的な検証も行っており、緑釉瓦の焼成について、ヒビ割れて、新聞沙汰になっているが、同時に工人の差によってヒビの程度の差があることを示している。

さらに学問的な視座として、伊東忠太自身が復元に対する検証を行っている点は重要である。伊東忠太による回顧談によると、この平安宮の大極殿については、否定的な見解を示している。その理由として、唐代の最高級の屋根の形は寄棟造であるが、入母屋造としたこと、柱の大きさ48cmから33cmへ縮小したこと、緑釉瓦のヒビ割れを中心に取り上げて、批判的検証を行っている。それぞれの内容には踏み込まないが、復元設計者による学術的な批判的検証の姿勢は学術的に重要であり、復元された建物が過去をそのまま投影したものではないという視座を示している。

4-3 20世紀後半以降の復元の歴史

20世紀後半以降には考古学の隆盛もあり、有史以前の遺跡を対象に、復元が展開する。1949年には与助尾根遺跡で復元の先駆例として位置づけられ、その後、建築史研究者による竪穴建物の復元が続く。同年には尖石石器時代遺跡で堀口捨己による復元がなされている。さらに1951年には平出遺跡で藤島亥治郎、1951年には登呂遺跡で関野克が復元を手掛けている。これらの復元は三者三様で、復元に唯一解がないことをよく示している³⁾。さらにこれらの復元に対して、民俗事例を追加すべきと指摘や復元案は時代差を考慮しなくてはならないという指摘がなされ、批判的検証が行われている。またこれ以降、絵画資料・文献資料が良好に残る城郭などを除き、基本的に建物復元はされなかった。

こうした方向性が大きく変わったのが、昭和40年代以降の「遺跡博物館」構想である。遺跡の価値の理解促進のために復元は有用であり、1966年の加曽利貝塚は遺跡の保存・活用・復元整備の先駆例である。さらに1986年の吉野ヶ里遺跡は全国的な復元整備の画期と位置付けられる。また1989年には「史跡等活用特別事業」を開始し、平城宮朱雀門(1998)・第一次大極殿(2010)などが復元されている。

なお、戦災で焼失した首里城正殿も1992年に復元されており、これは旧国宝に指定されていたため、写真・図面類もあったことから、精緻な検討が可能であった。しかし色や細部技法などについては、不明な部分もあり、完全な復元は困難である。

5. 復元学の提唱

5-1 復元学の対象

以上の復元の歴史を見ると、社会的な意義だけではなく、学術的な検証と復元建物に対する批判的検証という学術的側面の価値がある。これは復元自体が単なるプロジェクトではなく、遺跡そのものの理解や価値を再確認する学術的意義を持っていることを示している。それゆえ、筆者は復元を学問として扱う「復元学」を提唱している。そのためには、①近世学問と現代学問、すなわち考証学と建築学の接続、②庭園史・美術史・考古学などの隣接分野との連携、③海外、とりわけ木造建築文化圏の遺跡における整備、④整備の現場における実験的な修理方法の検討による学術的成果の蓄積と公開が重要であると考えられる。また復元に際して、前提となる条件やコンセプトの明示も欠かせない。

関野克による登呂遺跡の復元の事例を取り上げると、関野は竪穴建物については縄文時代の特徴、高床・平地建物については弥生時代の特徴と捉えており、時代差を認識していた。また発掘遺構の特徴を第一に考え、それに合致した建設過程や設計の理念を検討している。まず、放射状かつ、楕円形平面という遺構の特徴は垂木の長さが一定であったためという前提を捉え、中心部の柱穴から、柱・梁・桁の構造で中心部分の切妻造を考えた。さらに羽目板による土止めが廻る構造を想定し、上部構造を復元している（図1）。

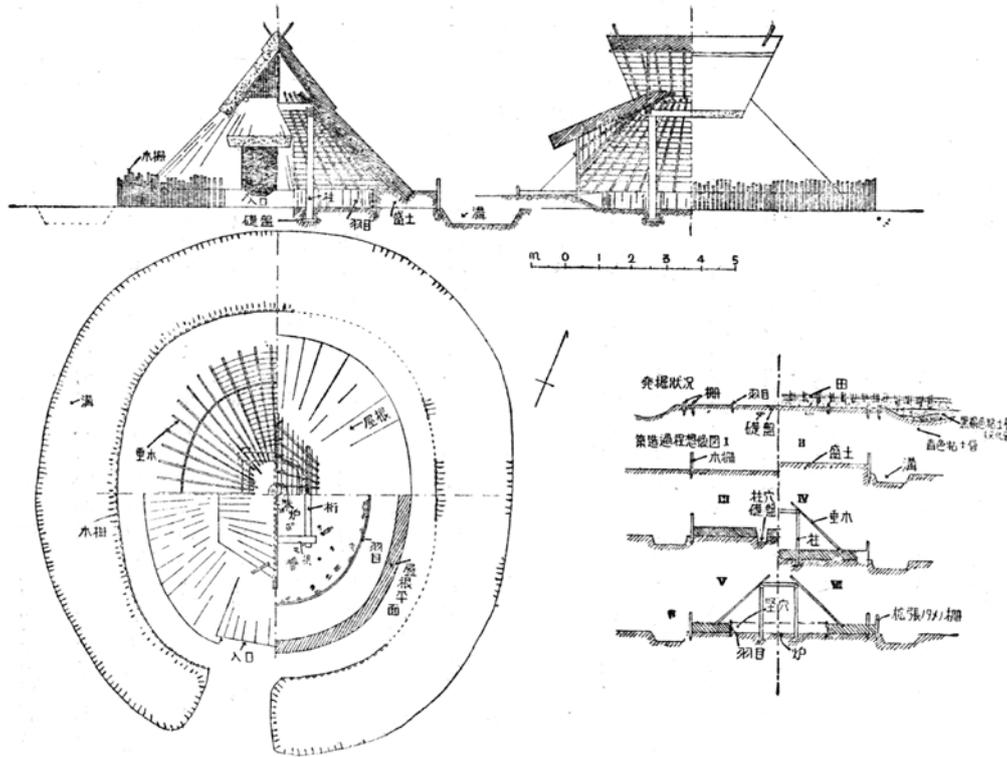


図1 登呂遺跡の想像復元図（『登呂』毎日新聞社、1949年、p118_第30図）

ただし、過去の忠実な再現ではなく、「想像復原」という言葉を用いて、学術的根拠が十分ではないことを示し、形の復元だけではなく、内在する技術の復元も同時に行った実験的思考であると位置づけている。実際に建てることは、建築史・考古学の実験であり、加えて木工具などの製材加工技術・仕口の部材接合技術・屋根の架構形式を検討することに学術的意味がある。いっぽうで構造上の負担に対しては、釘・ボルト・鋸などをなるべく見えない部分で用いて、架構再現を優先している。

藤島亥治郎による四天王寺の復元では、現存最古の法隆寺よりも古い建物であるということを示すため、雲斗雲肘木・卍高欄・人字椽という法隆寺の形式を持ち込むとともに、しころ葺というより古式な屋根形式としている。さらに発掘調査で判明した扇垂木という現存建築では確認できない方法を再現している。この復元においても、法隆寺よりも古い建築であることを示すという復元のコンセプトが明確である。

5-2 復元学の方法論と可能性

学問として必要な要素として適切な証拠への依存と明確な結論が欠かせないが、復元の場合には、発掘遺構や遺物が復元の前条件にあたる。また明確な結論の存在は復元案が該当する。そして前条件と復元過程を結ぶ推論・考察の過程が学術的な論理展開である。そして復元学においては、これらの明示が重要である。また復元においては、学術的な検討の成果である復元原案と、現代的な制約による実施案を区別し、復元原案に関しては現代社会的なバイアスを排除した学術的な検討が求められる。さらに復元の過程で、複数案の可能性は十分にあり、それを提示することの意義は大きい。また復元自体に対する批判的検討による学術的な検討も、復元の精度向上につながる意義が期待される。

また復元において重視すべき点とフローを示すと、発掘調査から建物の骨格を検討し、それに同時代の建造物や史料・絵画資料などの情報を加味して、検討を深める（図2）。ただしフローは一筋ではなく、前提条件となる発掘遺構・出土遺物も、復元の過程で再発掘を含む再検討が必要となることがあり、考古学的な学術的な展開も期待される。そして厳格な学術的検討の成果として、過去のカタチを示した復元原案を作成し、構造補強などの現代的な付加に関しては、復元原案とは異なる復元実施案として作成し、両者を区別する。これより、学術的な担保と現代的な制約を区分する。

さらに復元建物も修理が必要になることがあり、復元建物は新築の建物であるから、より幅広い手法が取りうる。それゆえに、歴史的建造物の修理方法の事前実験としての可能性もあろう。いっぽうで、復元建物の存在意義は担保する必要があるから、修理の際には、その価値に即した修理手法も求められる。

加えて近年には実物の復元以外にも AR・VR による復元手法も存在する。これらの手法の位置づけとともに、あえて実物で復元すること価値についても再検討が必要であろう。

そしてこれらの復元のフローや選択肢を報告書などの方法によって情報蓄積し、学術的な再検討の可能性を担保しておくべきである。

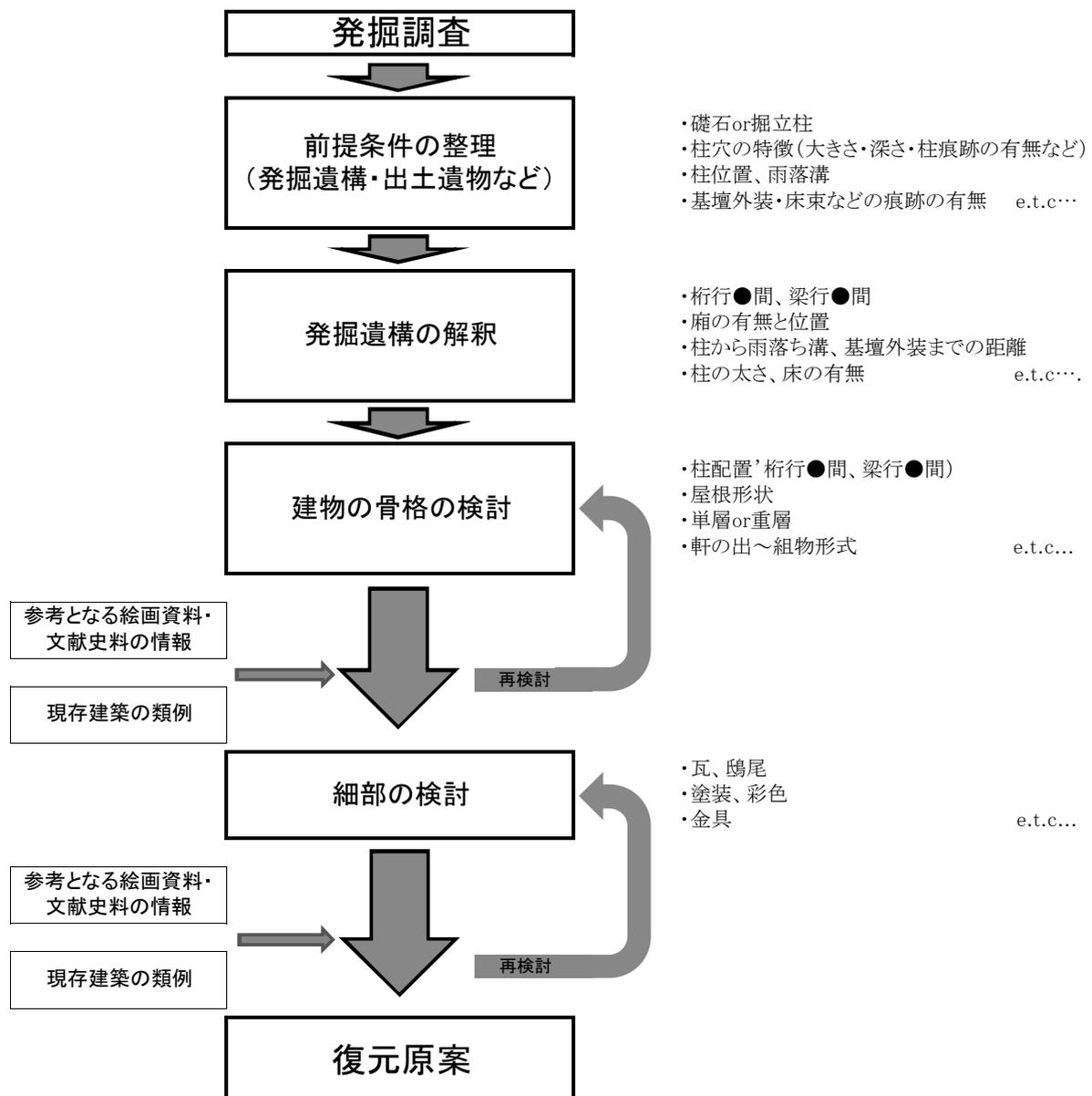


図2 復元のフロー（海野 2017）

おわりに

遺跡における復元は史跡整備の手法の一つであり、唯一の方法ではない。また復元建物はあくまで現代の新造の行為であり、歴史的建造物とは大きく異なる、いっぽうで日本には伝統的に過去の建築形式を受け継ぐ文化的背景や復元に類する行為が存在した。さらにそこには学問的な論拠を求める行為も存在した。また神社の式年造替のように、物質的な更新を伴っても、形を保持しようとする無形の概念に基づく継承も存在する。こうした特異な背景を加味すると、近代以降の文化遺産の概念にもとづく遺跡の復元という観点とともに、過去を求める行為の伝統という重層的な文化の多様性を踏まえる必要がある。こうした文化的多様性を認めつつも、その根底には、復元におけるプロセスの明示という部分でオーセンティシティの担保は求められよう。

同時に史跡における復元という行為の意味を、文化遺産、学術、社旗、コミュニティなどの様々な観点からとらえることが求められよう。同時に発掘遺構のオーセンティシティと遺跡としてのオーセンティシティは必ずしも同一のものではなく、後者については多面的な価値を認めつつ、復元を含む史跡整備の手法を位置付ける必要がある。また価値観自体が変容するなかで、文化遺産の理念そのものも固定化されるものではなく、問い続けることの必要性を述べて擲筆としたい。

注

- 1) 神社における式年造替は宗教的観念にもとづく行為であり、他の木造建築にみられる解体をとまなう修理とは大きく異なる。また寺院などにおいても、遠忌などに合わせて建物を修理し、維持する行為も見え、物質的側面と観点的側面の両方のサイクルを総合的に捉える必要がある。
- 2) この観点で、現存する建造物と史跡における復元建物は全く異なる存在であり、両者は明確に区別している。また復元建物は基本的に盛り土によって遺構を保護して復元を行うが、宗教施設であれば、地面に接触した元々の礎石に観念的な意義を見出し、復元するという方法も考える。これは復元という行為の物質的価値と観念的価値の両者の捉え方に起因するもので、いずれも、一定の側面で評価できる行為である。
- 3) 古代出雲歴史博物館において、中世の出雲大社の復元案が五案、提示されている。復元というプロセスは前提条件が同じであっても、大きく復元案が変わりうることや学術的背景を提示する点で、好例である。

主要参考文献

海野聡 2017 『古建築を復元する：過去と現在の架け橋』 吉川弘文館

海野聡 2019 『文化遺産と「復元学」：遺跡・建築・庭園復元の理論と実践』 吉川弘文館

海野聡 2024 『古建築を受け継ぐーメンテナンスからみる日本建築史』 岩波書店

PRESENTATION II

UNNO Satoshi

Associate Professor

Department of Architecture, Graduate School of Engineering,
The University of Tokyo

Value of Archaeological Reconstruction and ‘Reconstructionology’

Introduction

Cultural heritage is not merely a generic term for material remains that have happened to survive from the past. Rather, it is a concept constituted within an intellectual and cultural framework through which past human activities continue to hold meaning in contemporary society. Value judgments concerning archaeological remains and historic architecture are not determined solely by the presence or absence of physical remains, but shaped by a wide range of factors, including historical memory, social context, connection with local communities, and cultural identity. Accordingly, understanding cultural heritage requires more than the preservation and investigation of archaeological remains. It demands a multifaceted perspective that encompasses the effects of the passage of time on architecture, differences in architectural perspective across cultural spheres, and the methodologies by which archaeological sites are presented to society.

Japanese architectural culture represents a prime example of the need for such a multifaceted mode of understanding, with approaches to cultural heritage differing significantly between extant buildings and archaeological remains. Traditional Japanese architecture is predominantly wooden, thus making deterioration through decay, fire, and weathering unavoidable. As a result, the superstructures of buildings are often entirely lost, and only traces such as foundation stones and postholes remain as archaeological features. This situation stands in sharp contrast with European sites, where stone construction predominates, and it demonstrates that the ‘legibility’ of archaeological sites varies according to cultural context. In other words, understandings of Japanese archaeological sites must be based on the premise that material remains do not necessarily retain visual or spatial information.

Under these conditions, the question arises of how archaeological sites can be conveyed to society. In Japan, there has long existed a cultural tradition in which architecture is transmitted through ‘acts of rebuilding’ (Unno, 2024). As exemplified by the ceremonial rebuilding of Ise Jingu Shrine, the continual renewal of buildings themselves has been understood to ensure cultural continuity, with greater importance placed on the transmission of form and technique than on original material. It is upon this cultural foundation that the concept of archaeological reconstruction in Japan has developed.

By contrast, in contemporary cultural heritage discourse, there is also strong criticism of reconstructions. Reconstruction is associated with risks such as being misleading, simplifying of values for touristification, and the arbitrary manipulation of memory. At the same time, however, reconstruction also serves as an important means of sharing lost spatial information with society. Particularly in cultural contexts such as Japan, where wooden architecture is especially prone to disappearance, reconstruction is a practice central to understanding archaeological sites.

Considering these circumstances, this paper seeks to examine the characteristics of archaeological sites and

reconstruction in Japan from multiple perspectives, and to discuss the proposal of ‘reconstructionology’ as a systematic field of study (Unno, 2017, 2019). This paper begins by addressing issues concerning the passage of time in historic architecture and the process of sites becoming archaeological remains, then moves on to discussions of Japanese approaches to heritage transmission, the values and typologies of cultural heritage, and the historical development of reconstruction. It concludes by outlining the principles and methodologies of reconstruction studies, ultimately framing reconstruction not simply as a technical act, but as a form of creative continuity linking the past, present, and future.

1. Historic Architecture and the Process of Becoming Archaeological Remains

The process by which historic architecture becomes archaeological remains varies greatly depending on the cultural context and building materials. In Japan, where wooden architecture predominates, buildings to survive over long periods as material objects are rather exceptional, with archaeological sites typically having no extant superstructures and only underground remains. This ‘invisibility of archaeological sites’ constitutes a crucial prerequisite for understanding Japanese perspectives on archaeological sites and reconstruction.

First, historic architecture in Japan is particularly vulnerable to deterioration caused by natural and social factors, including decay, insect damage, wind, rain, and fire, because wood is its primary construction material. Even in cases such as shrine and temple architecture, where transmission of architectural form has been maintained over long periods, it has been difficult to preserve the original material, and transmission through rebuilding was the norm. Consequently, surviving examples of ancient and medieval architecture are extremely rare, and when such architecture is identified archaeologically, what remains is primarily information related to foundational structures, such as postholes, foundation stones, and building layouts.

In contrast, European stone architecture tends to retain their wall and arch structures for long periods, even when damaged, making it easier for sites to retain visible traces of buildings. This difference directly influences how archaeological sites are perceived, and in Japan, there is a widely shared understanding that archaeological sites are remains buried underground and revealed only through excavation. As a result, archaeological sites are more often understood not the ‘remains of buildings,’ but rather as ‘information left in layers of earth by past human activities.’

These characteristics of archaeological sites have a significant impact on approaches to conservation and interpretation. For example, it is extremely difficult to understand sites that have been reburied, and when a site where only postholes remain is presented as it is, it is hard for general visitors to grasp its spatial structure. Specialists may be able to interpret bay spacing, building scale, and function, but visitors may not be able to intuitively understand what or how structures stood there. For this reason, reconstructing buildings alongside archaeological sites to facilitate spatial understanding has been a method adopted in Japan.

In addition, the process of structures becoming archaeological remains has historically been strongly shaped by ‘intentional rebuilding’ in Japan. Such as in *shikinen sengu* (ceremonial rebuilding and transfer of deity) of Ise Jingu Shrine, rebuilding structures at fixed intervals exists as a cultural practice, especially in the context of shrines. As a result, the lifespan of architecture is not determined solely by material deterioration but is often renewed in response to cultural and religious imperatives¹. In such cultural contexts, greater value is placed on the ‘continuity of architectural form’ than on the ‘survival of old material,’ giving rise to a view of archaeological sites that differs from one based on material preservation.

Hence, when considering the process by which historic architecture becomes archaeological remains in Japan, it is necessary take into account both the natural conditions that make material structures prone to disintegrate and the cultural practice of transmission through rebuilding. The transformation into archaeological sites over time is not merely a matter of material deterioration, but a phenomenon closely tied to the underlying philosophy of continuity that shape Japanese architectural culture.

2. Characteristics of Transmission in Japanese Architectural Culture

2-1 Cultural Background Premised on Renewal

The modes of transmission found in traditional Japanese architecture has a high degree of cultural distinctiveness even in a global context. In Japan, priority has often been given not only to the material continuity of buildings themselves, but also to the transmission of architectural form, technique, and philosophy. This characteristic has been shaped not merely by the physical fragility of wooden architecture, but through a complex interplay of historical, religious, and aesthetic factors. The following discussion examines the structure of Japanese concepts of transmission and clarifies their relationship to archaeological sites and reconstruction.

In Japanese architectural culture, the rebuilding of structures over time has been regarded as a natural practice. Wooden architecture is strongly affected by natural hazards such as wind and rain, earthquakes, and fire, and it is therefore difficult for buildings to maintain material continuity over long periods. In Japan, however, rebuilding has not been undertaken simply because of the short material lifespan of structures; rather, the act of 'rebuilding' itself has been given positive significance.

A representative example is *shikinen sengu* of Ise Jingu Shrine. This ritual, in which the main shrine buildings are newly constructed every twenty years and the deity is transferred to the newly constructed sanctuary, has continued for more than 1,300 years. The essence of this practice lies not in the material preservation of buildings, but in the continual renewal of technique and architectural form, and it has also functioned as a place where techniques of shrine carpentry has been transmitted across generations. In this sense, *shikinen sengu* stands as a symbol of the Japanese view of cultural transmission in which culture is sustained through the physical renewal of buildings themselves.

Within such a cultural context, value is placed not so much on the age of the material itself, but on the fact that the same architectural form has been maintained over time. What is regarded as important is not whether old materials remain, but whether architectural form has been continuously sustained.

2-2 Concepts of Transmission and Reconstruction in Temple Architecture

Damage and subsequent reconstruction were also commonplace in temple architecture. Cases in which buildings from the Asuka period (538 – 710 CE) remain extant, such as the Kondo (Main Hall) and Five-storey Pagoda of Horyu-ji Temple, are extremely rare. Over the course of history, many temple buildings were lost to fires and warfare and were rebuilt each time. At Kofuku-ji Temple in Nara, for example, records show that its principal halls were destroyed and reconstructed many times over the course of its history. Even when new materials were used, the faithful reproduction of ancient architectural styles has preserved their identity as a temple that has maintained its ancient architectural form. It is noteworthy that the continuity of form itself constitutes cultural value. Similar approaches can be observed at Kiyomizu-dera and Enryaku-ji temples, where the deliberate adoption of the predecessor's form in reconstructions show a firm commitment to tradition.

There is also deep religious meaning in the reconstruction of temple architecture. Buddhist halls serve as places for enshrining Buddhist images and function as the centres of worship. Accordingly, when they were destroyed by fire, their prompt reconstruction was regarded as a cultural imperative. In Japan, the idea of leaving a burned hall as a ruin is unthought of, and 'being in a state of ruin' was rather understood to detract from the proper form of a temple. This attitude stands in contrast to cultural contexts of Europe, where stone churches may be valued as ruins and new buildings are constructed by incorporating the foundations or partial remains of ruins².

2-3 The Act of Seeking the Past 'Tradition'

In Japan, the act of seeking forms from the past has been carried out continuously over time. In ancient times, in response to newly introduced foreign religions, traditional Shinto buildings employed architectural forms drawn from older royal palace traditions. This resulted in contrasting spatial compositions in which newly introduced temple architecture coexisted with archaic-style shrines. A similar approach can be observed in palace architecture: in outwards-facing structures such as the Daigoku-den (Imperial Audience Hall), the latest Chinese architectural forms

were adopted, whereas in the Dairi (Emperor's residential quarters), traditional Japanese forms were deliberately employed.

Similar approaches can also be observed in the medieval period. While new architectural forms were adopted in newly established Zen temples, traditional esoteric Buddhist temples deliberately chose traditional forms. Here again, rather than pursuing the most advanced styles of the time, tradition was sought through the deliberate adoption of archaic architectural forms.

All of these approaches share a stance of responding to new cultural influences by the continued use of archaic forms. In the early modern period, however, there were also deliberate efforts to return to the past. As discussed later, in the construction of the Kansei-period Dairi, efforts were made to revive the Heian-period Dairi and court rituals, drawing on works such as *Daidairi-zu Koushou* (Historical Research on the Heian Imperial Palace) by Uramatsu Kozen.

With the advent of the modern period, architecture was introduced to Japan as a Western academic discipline. Commemorating the 1,100th anniversary of the transfer of the capital to Heian-kyo (Kyoto), Heian Jingu Shrine was constructed. Modelled on the Heian Palace, Heian Jingu Shrine represents a clear example of the modern concept of reconstruction. This will be discussed in further detail later.

3. Value of Archaeological Sites and Reconstruction Philosophy

3-1 The Value of Reconstruction in Cultural Heritage

Cultural heritage encompasses a range of values, including material value, conceptual value, value as an element constituting the landscape, value as a regional monument, and value of scholarly significance.

Accordingly, the value of reconstruction varies greatly depending on the characteristics of the cultural heritage in question. In some cases, value lies in a site not being reconstructed, that is, in its remaining as a ruin. Such cultural heritage demonstrates the value of archaeological sites as temporal devices for memory and the expression, with the Atomic Bomb Dome being a representative example. The Atomic Bomb Dome derives its value from having been subjected to the atomic bomb, namely in its state of destruction. For this reason, reconstruction would result in the loss of its value as cultural heritage. In other words, while this reflects the particular nature of war-damaged and disaster-affected sites, reconstruction would erase the memory of the damage itself. At the same time, reconstruction in the same form as before may serve a contemporary social function by providing healing through the reconciliation of negative memories; however, it should not be overlooked that this function is distinct from cultural heritage value. By contrast, in the repair and restoration of cultural heritage buildings, more delicate judgment is required. In European cultural contexts centred on stone architecture, the repair of extant buildings and archaeological sites are often treated as a continuous practice, whereas in Japan the two are clearly distinguished. In Japan, '*fukugen* (restoration)' refers to the act of returning a structure to a past state based on physical traces and documentary sources, but this does not necessarily represent the optimal choice in every case.

The case of Horyu-ji Temple's Yumedono (Hall of Dreams) illustrates this point clearly. Research has shown that the Yumedono originally possessed an 8th-century form, while the surrounding buildings preserve 13th-century appearances. If only the Yumedono were to be restored to its 8th-century form, it would produce a mixed-period landscape that never existed at any point in the past. For this reason, repair that respects the existing condition was chosen instead of restoration of the Yumedono. In this case, priority was given not to 'returning the building to a particular moment in the past,' but to 'preserving the layers of time.'

3-2 The Multifaceted Nature of the Act of Expressing Past Forms

In gardens designated as scenic sites, value criteria are different from those applied to built structures. A garden is a landscape in itself, and material originality is not necessarily a determining factor. The widespread acceptance of the reconstruction of Rokuon-ji Temple's Kinkaku (Golden Pavilion) lies in the fact that Kinkaku is a symbolic element of the garden landscape, and that its reproduction visually restores the value of the site as a Pure Land (Buddhist paradise) garden. In this context, the 'authenticity of the landscape' and the 'authenticity of the building' do not

coincide.

The Heisei-era restoration of Byodo-in Temple's Phoenix Hall (2012–2014) is also indicative in considering the balance between restoration and preservation. While the exterior was repainted to protect the wooden elements and enhance its visual value as a Pure Land garden, intervention in the interior was limited to preventive measures against further flaking. In addition, investigations revealed that columns had originally stood in the pond; however, restoring them to that condition was abandoned in consideration of the potential adverse effects on the extant structure. In this case, priority was given not to 'restoration as a historic site,' but to 'ensuring the long-term preservation of the existing building.' It is also important to note that past acts of modification themselves are evaluated as part of the building's architectural history.

Seen in this way, 'expressing forms of the past' cannot be understood through a simple dichotomy of whether or not reconstruction is undertaken. The values and the modes of authenticity sought differ depending on the object in question, whether an archaeological site, a building, a garden, or a structure damaged by conflict or disaster, and the appropriate approaches to preservation, repair, and reconstruction also vary accordingly. Reconstruction is not an act of reproducing the past in a fixed form, but rather that of reconfiguring the relationship with the past on the basis of contemporary values and knowledge.

The question of how archaeological sites and historic architecture should be treated ultimately leads to the issue of 'how we perceive time.' When architecture is regarded not merely as form but as a repository of temporal memory, reconstruction is no longer a goal in itself, but an action that should be positioned cautiously as one option among many. It is the accumulation of such judgments that shapes a mature approach to cultural heritage in the contemporary era.

4. History of Reconstruction in Japan

4-1 Historical Revival in the Reconstruction of the Kansei-period Dairi

The Kyoto Imperial Palace, which was destroyed by the Great Fire of Tenmei in 1788, was reconstructed beginning in 1790 as the Kansei-period Dairi. This reconstruction project was not limited to the mere restoration of the palace but occupies an exceptionally important position in the history of Japanese architecture as a revivalist structure modelled on the forms of the Heian Palace. Of particular interest is that the project was based on historical verification using historical documents, within which methodological precursors to the modern concept of 'reconstruction' can be discerned.

The rationale behind the reconstruction of the Kansei-period Dairi was Emperor Kokaku's hope to restore and elevate imperial authority and tradition through the revival of court ceremonies and Shinto rites of the Heian-period, as well as through the revivalist reconstruction of the Kyoto Imperial Palace. Accordingly, the project was not merely a stylistic return to earlier forms, but rather the reconstruction of a political and symbolic space based on ancient norms. A central role in this reconstruction was played by experts of court rules and ceremonies, foremost among them Uramatsu Kozen. Uramatsu authored *Daidairi-zu Koushou*, in which he meticulously examined the composition, layout, and ceremonial circulation of the Heian-period Dairi (Emperor's residential quarters) based on documentary sources. The results of this research were reflected in the configuration of the Kansei-period Dairi, particularly in the arrangement centred on the Shishin-den and Seiryō-den, the principal halls of the palace. *Daidairi-zu Koushou* was not written for the purpose of reconstruction, but it still proved to be an effective source of information. Here, a framework emerges in which architectural practice is guided by academic knowledge.

Nevertheless, the Kansei-period Dairi was not a faithful reproduction of the Heian-period Dairi. Gaps in the historical record and a broad scope for interpretation were unavoidable, and while the plan sought to follow ancient precedents, the structural system, including the roof framing, employed early modern construction methods and techniques. It is also possible that the project was never conceived as a strictly faithful reconstruction in the first place. Accordingly, this rebuilding should be understood not as reconstruction, but rather as a form of historically grounded 'revival'

based on documentary sources. In other words, it was not an act of reproducing past architecture as it once existed, but an act of reconstructing an imagined image of antiquity in accordance with the contemporary body of knowledge and values of the time.

4-2 Heian Jingu Shrine and Architectural Scholarship

Heian Jingu Shrine is a Shinto shrine founded in 1895 during the Fourth National Industrial Exhibition, as part of a project commemorating the 1,100th anniversary of the transfer of the capital to Heian-kyo (Kyoto). The design of the shrine was modelled on the Heian Palace, but due to site constraints, it was constructed at a location removed from the original site, and its scale was reduced to five-eighths of the original.

However, for the practical realisation of the project, the results of architectural history research in modern Japan were introduced by Ito Chuta. At the time, architectural history as an academic discipline in Japan had yet to be established, and the dating of extant historic buildings remained systematically insufficient. Despite this, extant examples of ancient architecture were consulted. In particular, to examine the detailed design of the bracket complexes, surveys were conducted of the Yakushi-ji Temple East Pagoda and the Hannya-ji Temple Romon (two-storey gate), both dating close to the period of construction of the Heian Palace, and reconstruction studies were carried out based on on-site investigation of existing examples. In addition, for the examination of the *shibi* (ridge-end ornament), the *shibi* of Toshodai-ji Temple Kondo (Main Hall) was investigated. This *shibi*, dating to the 8th century, survives today and has been reliably dated. These activities can be regarded as pioneering examples of modern scholarship in the exploration of the architectural past.

In addition, experimental-archaeological verification was also carried out. Cracking occurred in the firing of the green-glazed roof tiles, which even became a news story; but at the same time, these experiments demonstrated that the degree of cracking varied depending on the workmanship.

Equally important from an academic perspective is the fact that Ito Chuta himself critically evaluated reconstructions. He expressed a negative assessment of the reconstructed Daigoku-den of the Heian Palace in retrospective accounts. As reasons for this view, he pointed out that the highest-grade roof form of the Tang dynasty was the hip roof, yet a hip-and-gable roof was adopted, and that the column diameter was reduced from 48 cm to 33 cm. In addition, he critically examined the cracking of the green-glazed roof tiles. While details of each aspect will not be further discussed, Ito's stance of subjecting his own reconstruction work to scholarly and critical scrutiny is of considerable academic significance. It demonstrates a perspective in which reconstructed buildings are not regarded as direct projections of the past.

4-3 History of Reconstruction Since the Latter Half of the 20th Century

From the latter half of the 20th century onward, alongside the peak of archaeology, reconstruction of prehistoric sites also grew. In 1949, the Yosuke One site came to be regarded as a pioneering example of reconstruction, followed by a series of reconstructions of pit dwellings undertaken by architectural historians. In the same year, a reconstruction was carried out by Horiguchi Sutemi at the prehistoric Togariishi Site. Subsequently, in 1951, Fujishima Gaijiro undertook reconstruction at the Hiraide Site, and Sekino Masaru carried out reconstruction at the Toro Site the same year. These reconstructions differed greatly from one another, clearly demonstrating that there is no single correct solution in reconstruction practice³. In addition, these projects were subjected to critical examination, with arguments advanced that folk examples should be incorporated and that reconstruction proposals must take chronological differences into account. Thereafter, except for sites such as castles that have surviving pictorial and documentary sources, reconstruction was generally not pursued.

A major shift occurred with the emergence of the 'archaeological site museum' concept from the 1960s onward. Reconstruction came to be regarded as an effective means of promoting public understanding of the value of archaeological sites, and the Kasori Shell Mounds project of 1966 is positioned as a pioneering example of integrated site preservation, utilisation, and reconstruction. Subsequently, the Yoshinogari site (1986) is regarded as a milestone in the domestic reconstruction projects. In addition, a 'special project for the utilisation of historic sites' was launched

in 1989, under which major reconstructions were carried out, including the Suzakumon Gate (1998) and the Former Imperial Audience Hall Compound (2010) of the Nara Palace site.

The Shuri Castle Seiden (Main Hall), which was destroyed by war damage, was reconstructed in 1992. Its former designation as a National Treasure meant that photographic records and blueprints existed, allowing for detailed examination for reconstruction. Even so, uncertainties remained, such as in colouration and construction techniques of small details, making a complete reconstruction difficult.

5. Proposal of ‘Reconstructionology’

5-1 Objects of ‘Reconstructionology’

A review of the history of reconstruction outlined above reveals that its significance lies not only in social value, but also in its academic dimensions, including scholarly verification and critical examination of reconstructed buildings. This demonstrates that reconstruction is not merely a construction project, but something that possesses academic significance in re-examining the understanding and value of the site itself. For this reason, the author proposes treating reconstruction as a scholarly field, referred to here as ‘reconstructionology.’ To establish such a field, the following are considered essential: (1) connecting early modern scholarship with contemporary scholarship, that is, linking study of ancient texts and architecture; (2) interdisciplinary study, such as with garden history, art history, and archaeology; (3) conservation and interpretation of overseas sites, particularly those in regions characterised by timber architectural traditions; and (4) accumulation and presentation of academic outcomes derived from examining experimental repair methods implemented at sites. In addition, when undertaking reconstruction, it is indispensable to disclose the premise and conceptual framework on which the project is based.

For example, in the reconstruction of the Toro Site by Sekino Masaru, Sekino regarded pit dwellings as characteristic of the Jomon period, while raised-floor and ground-level buildings as characteristic of the Yayoi period, indicating his recognition of chronological differences. He also prioritised the characteristics of the excavated remains themselves and examined construction processes and design philosophies that corresponded to those features. First, he interpreted the characteristics of the remains, namely their radial and elliptical shape, as a result of rafters that were uniform in length. Next, based on the postholes at the centre of the structure, he deduced that the central portion used a gabled roof with a structural system composed of posts, beams, and crossbeams. In addition, he assumed that the structure had earthen wall with surrounding side planks, and on that basis reconstructed the superstructure (Figure 1).

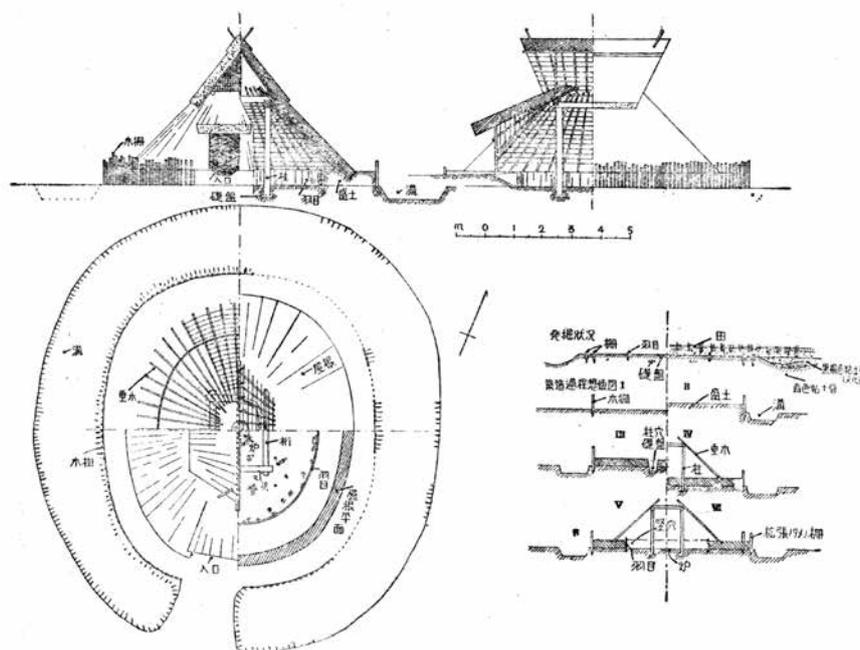


Figure 1: Imaginative reconstruction drawing of the Toro Site (Toro, Mainichi Shimbun, 1949, p. 118, Fig. 30)

However, rather than aiming at a faithful reproduction of the past, Sekino deliberately used the term ‘imaginative reconstruction’ to indicate that the academic evidence was insufficient, and positioned the project as experiential thinking in which the reconstruction of form and the reproduction of technique were pursued simultaneously. The physical construction was treated as an experiment in architectural history and archaeology, and scholarly significance is found in examining timber-working techniques using hand tools, and joinery methods for connecting structural members, and roof framing. At the same time, nails, bolts, clamps, and the like were used in as inconspicuous locations to aid in load-bearing, with priority given to reproducing the overall structure.

In the reconstruction of Shitenno-ji Temple by Fujishima Gaijiro, elements associated with Horyu-ji Temple, such as cloud-shaped bracket complexes, *manji*-pattern balustrades, and *hitoji*-style (V-like) bracket struts, were deliberately incorporated to demonstrate that the building predated Horyu-ji Temple, the oldest extant wooden structure. At the same time, a more archaic roof form, *shikoro-buki* (hip-and-gable roof split into two halves, with the gable roof on top and a differently pitched hip roof underneath), was adopted. In addition, the reconstruction reproduced the use of fan-shaped rafters, a method identified through excavation but not confirmed in extant buildings. This case also clearly demonstrates that its reconstruction concept embodies an architectural phase earlier than Horyu-ji Temple.

5-2 Methodology and Possibilities of ‘Reconstructionology’

As essential elements of scholarship, reliance on appropriate evidence and the presentation of clear conclusions are indispensable. In the case of reconstruction, excavated features and artefacts constitute the premises on which reconstruction is based. The reconstruction proposal itself corresponds to the conclusion. The process of inference and analysis that links these premises with the reconstruction process constitutes the academic argument. In reconstructionology, it is therefore important to make each of these explicit. In addition, reconstruction requires a clear distinction between the original reconstruction proposal, which represents the outcome of scholarly study, and the implemented plan, which is shaped by contemporary constraints. Regarding the original reconstruction proposal, scholarly study that excludes biases arising from present-day social conditions is required. Furthermore, during reconstruction, multiple proposals may potentially exist, and there is considerable value in presenting them. Critical scholarly examination of the reconstructed object is also expected to meaningfully contribute to improving the accuracy of reconstruction.

To outline the points that should be emphasised in reconstruction and its process, the workflow begins with examining the structural framework of a building through excavation results, with further investigation through the incorporation of information from buildings from the same period as well as documentary and pictorial sources (Figure 2). The workflow, however, is not linear. Excavated features and artefacts that serve as preconditions may themselves require re-examination during the reconstruction process, including, in some cases, re-excavation, thereby opening the way for further archaeological inquiry. As the outcome of rigorous scholarly examination, a reconstruction proposal that represents a past form is produced. By contrast, a separate proposal for implementation that may include modern additions such as structural reinforcements is formulated distinct from the original reconstruction plan. In this way, scholarly grounding and contemporary constraints are differentiated.

In addition, reconstructed buildings may themselves require repair. As newly constructed structures, they allow for the application of a wider range of repair methods and thus offer potential as sites for advance experimentation with techniques relevant to the repair of historic buildings. At the same time, the significance of reconstructed buildings must be maintained, and repair methods appropriate to their value are therefore required.

In recent years, reconstruction methods using AR and VR have also emerged alongside physical reconstruction. It is necessary to reconsider the positioning of these approaches, as well as the value of deliberately choosing physical reconstruction.

In addition, the workflows and options involved in reconstruction should be documented through reports and related means, thereby accumulating information and ensuring the possibility of future scholarly inquiry.

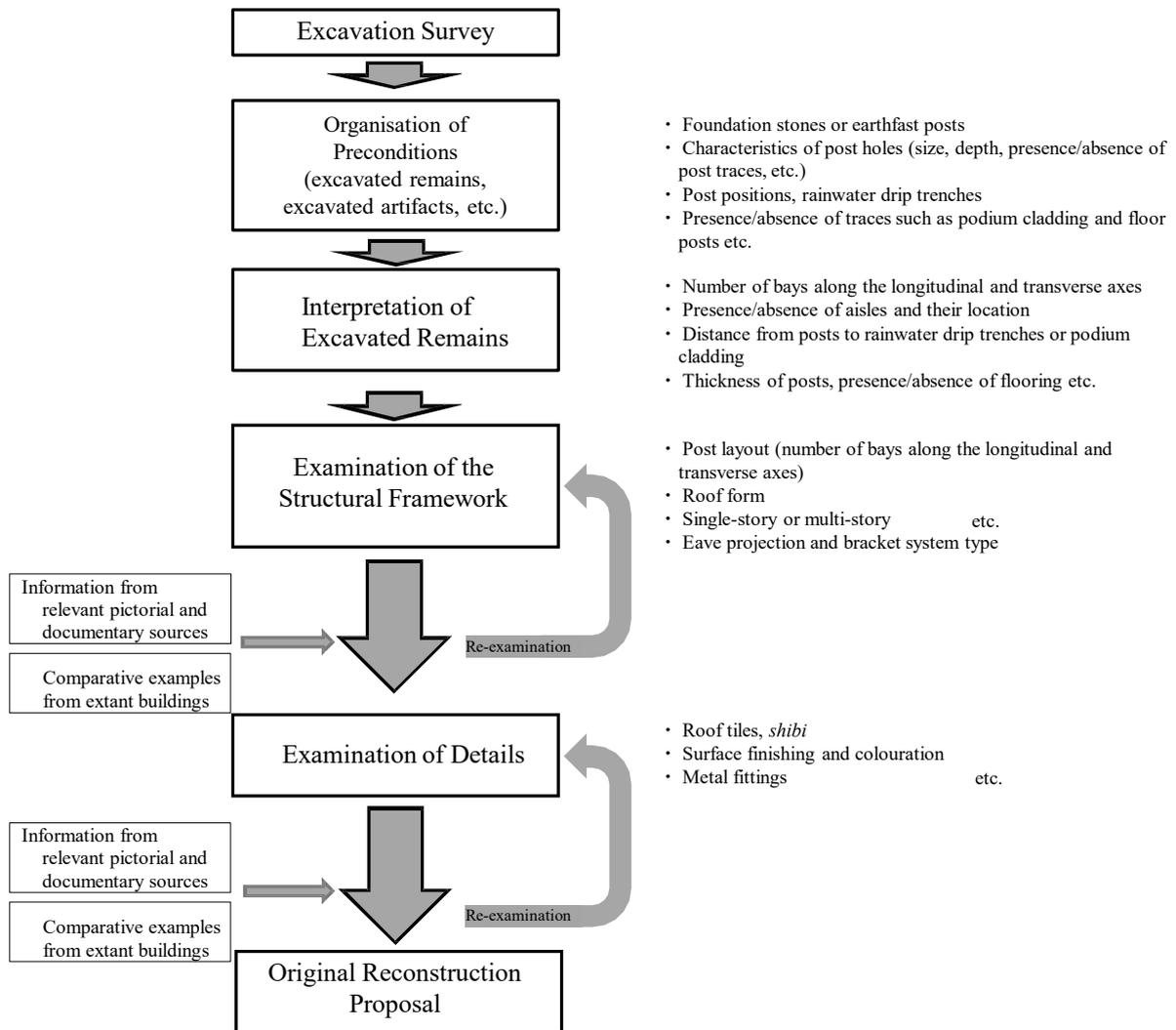


Figure 2: Reconstruction workflow (Unno, 2017)

Conclusion

Reconstruction of archaeological sites is one method of site conservation and interpretation, but it is not the only approach. Reconstructed buildings are, after all, acts of new construction carried out in the present, and they differ fundamentally from historic buildings. At the same time, Japan possesses a cultural background in which traditionally, past architectural forms are transmitted and practices similar to reconstruction also existed. Within this context, there have also been efforts to ground such practices in academic processes. In addition, forms of transmission based on intangible concepts exist, such as the periodic rebuilding of shrines, in which form is maintained even when material renewed. In addition to these distinctive circumstances, it is necessary to consider reconstruction at archaeological sites not only from modern perspectives of cultural heritage, but also in light of multilayered cultural diversity that includes traditions of seeking the past. While acknowledging such cultural diversity, it remains essential to ensure authenticity at a fundamental level through the explicit articulation of the processes involved in reconstruction.

At the same time, it is necessary to understand the meaning of reconstruction at historic sites from multiple perspectives, including cultural heritage, scholarship, society, and local communities. Likewise, the authenticity of excavated remains and the authenticity of a site as a historic place are not necessarily identical. Regarding the latter, it is necessary to recognise its multifaceted values and, on that basis, to position reconstruction as one method of historic site management. As values themselves continue to change, concepts of cultural heritage cannot be regarded as fixed. This paper therefore concludes by emphasising the need to continue questioning and re-examining this philosophy.

Notes

¹ Periodic rebuilding of Shinto shrines is an act grounded in religious concepts and differs fundamentally from repair practices involving dismantling that are seen in other wooden buildings. In addition, at temples and similar institutions, buildings are repaired and maintained in connection with memorial observances such as commemorative anniversaries. It is therefore necessary to grasp in an integrated manner both material cycles and conceptual cycles.

² From this perspective, extant historic buildings and reconstructed buildings at historic sites are entirely different entities and should be clearly distinguished. Reconstructed buildings are generally erected after protecting the remains through the addition of earth fill. In the case of religious facilities, however, it is also conceivable to assign conceptual significance to the original foundation stones that were in contact with the ground and to reconstruct the structure on them. This difference arises from how the material and conceptual values of the act of reconstruction are understood. Both approaches can be evaluated as meaningful practices from their individual perspectives.

³ At the Shimane Museum of Ancient Izumo, five reconstruction proposals for the medieval Izumo Taisha Shrine have been presented. This is an example that demonstrates that even under the same circumstances, reconstruction proposals can differ substantially, and in clarifying the scholarly backgrounds on which those proposals are based.

Selected References

Unno, Satoshi. 2017. *Reconstructing Historic Architecture: A Bridge Between the Past and the Present*. Yoshikawa Kobunkan.

Unno, Satoshi. 2019. *Cultural Heritage and Reconstructionology: Theory and Practice in the Reconstruction of Archaeological Sites, Architecture, and Gardens*. Yoshikawa Kobunkan.

Unno, Satoshi. 2024. *Transmitting Historic Architecture: Japanese Architectural History Viewed Through Maintenance*. Iwanami Shoten.

講演 3

隋唐洛陽城遺跡に関する事例研究

肖金亮

清華同衡都市計画設計研究院文化財保護分院 総エンジニア

本報告は、隋唐洛陽城遺跡を対象とした事例研究であり、筆者がこれまで直接関与してきた保存・整備・復元に関する実務経験を中心に、その経緯と課題を整理するものである。理論的考察にとどまらず、実践に基づく知見を共有することを目的とする。

本報告は以下の四部で構成される。第一部では、洛陽および隋唐洛陽城の歴史的・都市的概要を示す。第二部では、これまで実施されてきた遺跡保存・整備の取り組みを整理する。第三部では、遺跡保全に関わる意思決定および承認のプロセスを検討し、第四部では、真正性をはじめとする文化遺産保護の基本原則について考察する。

第1章 洛陽および隋唐洛陽城の概要

洛陽は、中国古代文明の中心である中原地域の中核に位置し、複数の王朝において都として機能してきた都市である。都としての累計期間は約 1800 年に及び、中国史上最も長期間にわたり首都であった都市とされる。西周（紀元前約1046-771）、隋（581-618）、唐（618-907）の各時代には洛陽と長安が並立する都となり、北宋期（960-1127）には洛陽と開封が都として位置づけられた。一方、12世紀以降、洛陽は急速に衰退し、首都としての地位のみならず省都としての役割も失った。現在は著名な観光都市ではあるものの、現代都市としての規模や機能は平均的な水準にとどまっている（スライド 4-5）。

中国の王朝交替期では、前代の都を継承して使用する場合と新たに都城を築造する場合があった。これにより洛河沿いには異なる時代の都城遺構が集中し、五つの都城が形成された。この特徴から、洛陽は「五都荟洛（五都が洛陽に集まる）」と称されている（スライド 6）。隋代・唐代・北宋期の洛陽城はほぼ同一の場所に築かれており、一般には「隋唐洛陽城（隋唐城）」と呼ばれている。都城の総面積は約 47 平方キロメートルで、宮城・皇城・郭城の三重構造を有していた。洛河が都市を南北に貫流し、都市空間を分割していた点も特徴である。都市構造は里坊制を採用し、西側には皇帝の離宮である上陽宮および皇室の苑囿である西苑が配置されていた。北部には道教施設の上清宮、南部には仏教遺跡である龍門石窟が位置しており、当時の洛河の流路は現在とはやや異なっていた（スライド 7）。

スライド 8 に示す隋唐洛陽城の復元図では、全長約 20 キロメートルの都市中軸線が確認でき、その城内中心部には約 6 キロメートルに及ぶ「天街」と呼ばれる大通りが設けられていた。天街の両側には 100 以上の里坊が整然と配置され、洛河には天津橋が架けられ、そこから皇城および宮城へと至っていた。宮城の中心建築は明堂であり、その西側には皇室庭園である陶光園と九洲池が存在していた。

12世紀、洛陽は南宋と金の戦場となり、地上の建築物はほぼ完全に消失し、地下遺構のみが残存する状況となった。1943年の写真によれば、隋唐城東部は清代の市街地として利用されていた一方、宮城および皇城の区域、ならびに洛河南側の里坊地区は農地や小規模な村落となっており、里坊の区画はほぼ失われていた。その後、1963年の中華人民共和国による都市計画により、洛陽は重工業都市として再編され、宮城・皇城の跡地には倉庫、工場、職工住宅区、卸売市場などが建設された。この時期に整備された都市道路は、隋唐時代の中軸線と約 12 度の角度差を持っている。里坊地区は依然として農地が中心であったが、村落の規模は徐々に拡大した。また、洛河の度重なる氾濫により、多

くの地下遺構が侵食された。

1985年以降の改革開放政策を経て重工業は衰退し、2000年以降は新たな住宅地や高架橋などのインフラ整備が進行した。その結果、里坊地区の村落は急速に拡大し、隋唐洛陽城の中軸線上にも現代都市の構造物が重層的に重なっている。スライド9は、宮城の中核にあたる範囲である。遺跡は地表下約0.5メートルの位置に分布しており、地上部には1960年代に建設された工場、倉庫、ならびに住宅区が現存している。先に述べたように、これらの現代の道路網は、隋唐洛陽城における中軸線と約22度の角度差をもって形成されている。

隋唐洛陽城の遺構は、ほぼ全てが地下に埋蔵され、主に夯土によって構成されている。そのため視認性が極めて低く、遺構の解釈や露出展示には大きな困難を伴う。結果として、遺跡が有する文化遺産としての価値や歴史的重要性が、十分に一般に伝えられているとは言い難い（スライド10-11）。

例えば、明堂は中国古代儒教思想において最上位に位置づけられる建築であり、隋唐洛陽城の明堂は、中国古代最大級の単体建築であった。その規模は、面積約3万平方メートル、高さ約86メートルに及び、版築遺構の直径は約105メートル、6層の版築層から構成されている。しかし、地表に露出する遺構は限定的であり、考古学的な表示がなければ一般の来訪者がその全体像を理解することは困難である（スライド13）。

また、天堂は中国史上唯一の女帝である武則天が大仏を安置した建築であり、内部には仏像を地下から昇降させる特殊な構造が備えられていたが、現在残存する遺構は極めて限定的である。宮城南門である応天門（則天門）は国家儀礼の場として機能し、武則天の即位儀式や日本の遣唐使による拝謁が行われた歴史的空間であったが、現存する遺構は往時の壮大さを十分に伝えるものとはなっていない（スライド14-15）。

さらに、陶光園および九洲池は宮城内の皇室庭園として宴遊の場であったが、現在確認できるのは夯土による基壇遺構のみであり、庭園本来の景観的価値はほぼ失われている（スライド16）。

第2章 隋唐洛陽城遺跡における整備の取り組み

前述のように、隋唐洛陽城遺跡は現代都市構造と重層的に存在し、地下に大規模な遺構を残すという複雑な状況に置かれていた。このような条件下において、洛陽市では、失われた都城構造をどのように現代都市の中で再現・提示するかが大きな課題となった。

これに対し、洛陽では隋唐洛陽城の中軸線を都市構造の中で明確に位置づけ、定鼎門から玄武門に至る軸線上において、複数の地上建築物の撤去を含む大規模な整備を実施した。あわせて、主要な遺構を対象とする複数の遺跡保護・展示プロジェクトが段階的に進められ、その過程では従来にはない手法も試行された（スライド18）。

整備後の状況として、明堂および天堂は、遺構の位置と規模を明確に示す形で整備され、都城中枢を構成する重要な要素として視覚的に認識可能となっている（スライド19）。宮城南門にあたる応天門についても復元・整備が行われ、門構えの構成要素や細部意匠が提示されている（スライド20-21）。宮城核心地区では、応天門、明堂、天堂といった主要要素が一体的に整備され、現代都市の空間構造の中に位置づけられている。これにより、古代都城の中枢空間と現代都市機能とが同一の都市枠組みの中で共存する状況が形成された（スライド22）。

また、宮城西側に位置する九洲池についても整備が進められ、水景を含む宮廷庭園空間の構成が示されている（スライド23）。さらに、都城南端の定鼎門および天街では、中軸線の存在を明確に示す空間整備が行われ、天街からは応天門や天堂を視認できる都市景観が形成された（スライド24-25）。里坊区域においては、里坊の門や区画壁が整備され、隋唐期の都市区画構造を理解するための空間的手がかりが提示されている（スライド26）。

これら一連の整備は、大規模かつ大胆な内容を含むものであったが、いずれも法的手続きを踏まえて実施されており、中国中央政府の国家文物局による正式な承認を受けたものである。

第3章 意思決定および承認のプロセス

隋唐洛陽城遺跡における大規模な整備を進めるにあたり、いかにして意思決定を行い、国家文物局および専門家の理解と承認を得るかは、中心的な課題であった。本章では、その理論的枠組みと具体的手法について整理する。

1. 国家考古遺跡公園という枠組み

整備の初期段階において採用された基本理念は、「国家考古遺跡公園」である。これは中国独自の文化財保護概念であり、国家政府の定義によれば、考古遺跡を研究・教育・レクリエーションの機能を併せ持つ公共空間として整備することを目的としている。隋唐洛陽城遺跡は、この理念を全面的に採用して整備が進められてきた（スライド 28）。

洛陽市と連携し、隋唐洛陽城国家考古遺跡公園の開発を通じて、以下の四つの課題に同時に取り組むことが目標とされた。第一に、対象地域が都市として衰退し、発展を牽引する力を欠いていたこと。第二に、かつて首都であった都市に暮らす洛陽市民が、現代の居住環境に対して強い不満を抱いていたこと。第三に、考古学者が荒廃した環境で調査に従事し、職業的尊厳が十分に確保されていなかったこと。第四に、改革開放以降、洛陽市が新たな都市アイデンティティを確立できていなかったことである（スライド 29）。

2. 「復元」をめぐる制度的制約と用語整理

本事業においては、「復元」をめぐる議論を意図的に慎重に扱っている。『中華人民共和国文物保護法』では、文化財の「復元」には中央政府・国務院の承認が必要とされており、実務上、その承認を得ることは極めて困難である。1949年以降、国務院が正式に復元を承認した事例は、わずか二件にとどまるとされている（スライド 30）。

ICOMOS China が策定したガイドラインでは、「復元」に関する詳細な定義が示されているが、中国語においては「復建」「復原」「重建」「新建」「再建」など、いずれも reconstruction または rebuild を意味する語が併存しており、学術的にも統一した理解が確立されていない。このため、『中華人民共和国文物保護法』および『中国文物古跡保護準則』では、reconstruction の対応語として「重建」に統一されている。非文化財事業においては、消失した古代建築の名称を継承し、現代的需要に応じた完全に再建する事例も見られる。しかし文化財事業においては、当時の材料、技術、工法、形状を用いた場合にのみ「reconstruction」と位置づけられ、実際の復元事例は極めて限定的である（スライド 31-32）。

3. 保護施設

洛陽で採用された第二の理念は、遺跡保護施設、いわゆる「保護シェルター」である。これは遺跡を覆う形で建設される保護構造物であり、国家文物局の事業申請書においても独立した項目として規定されている（スライド 33）。保護シェルターと聞くと、一般にはスタジアムや駐車場のような大規模構造を想起しがちであるが、1999年に郭黛姮教授が提唱した「雷峰塔モデル」は、この概念に新たな可能性を示した。同モデルでは、大規模な現代鋼構造によって遺跡を保護しつつ、外観には雷峰塔の歴史的形像を採用している。斗拱、瓦、欄干、窓枠などの意匠は、構造重量を軽減するため薄銅板によって再現された。

内部には、エレベーターや消防設備など現代基準の設備が導入され、展示室を設けて雷峰塔の歴史的・文化的価値を紹介している。この事例により、従来は二者択一とされてきた「原位置での遺跡保護」と「歴史的・外観の提示」を同時に実現する手法が示された。また、雷峰塔は高い経済効果も上げ、公開から二年で建設投資を回収している。

郭黛姮教授は、奈良および京都と深い関わりを有した梁思成の助教を務めた人物である。なお、筆者は郭黛姮教授の最後の弟子にあたる（スライド 34）。

4. 洛陽における具体的手法の体系化

洛陽では、「国家考古遺跡公園」と「雷峰塔式保護施設」という二つの理論を基盤として、整備手法を体系化した。誤解を避けるため、建築外観のみを古代様式に近づける行為を「復古」と定義し、

建築材料や工法とは切り離して整理している。これらの手法は、概ね八つに分類される（スライド 35）。

第一の手法は、鋼構造による保護シェルターを建設し、外観を雷峰塔様式で復古するものであり、隋唐洛陽城で最も多く採用されている。天堂の保護シェルターは、延床面積約 13,000 平方メートル、高さ 88 メートル、地下 1 階・地上 5 階建てで、2013 年完成当時は中国最大規模であった。地下一階には吹き抜けを設け、遺構中央の石坑を俯瞰できる構成とし、床面はガラス張りとして版築遺構を視認可能としている。1～5 階には唐代の仏教文化や茶文化を紹介する展示室が配置され、小規模な茶芸パフォーマンスや茶室も設けられている（スライド 36-37）。

同様の手法は応天門にも採用されており、延床面積約 30,000 平方メートル、高さ 50 メートル、地上 6 階建てで、2019 年に完成した。現在、天堂に代わり国内最大の遺跡保護シェルターとなった。1 階は遺構展示ホール、上層階は文化展示空間として構成され、唐代の伝統芸能を体験できる飲食施設も併設されている。定鼎門および玄武門も同様の構造を持つ（スライド 38）。

第二の手法は、基壇部分のみを鋼構造とし、上部構造に伝統的木造を用いる保護シェルターである。基壇床面はガラス張りとし、遺構を視認できる構成としている（スライド 39）。

第三の手法は、鋼構造の保護シェルターを用いつつ、外観を復古ではなく現代的形態とし、古代のデザイン要素を部分的に取り入れるものである。この方式は明堂のみで採用された。明堂は本来、高さ 86 メートル、平面幅 105 メートルの巨大建築であったが、木造復元では材料確保および消防基準の問題が生じ、鋼構造で原寸再現すると深い基礎が必要となり遺跡を損なう恐れがあった。そのため、保護シェルターの高さは 32 メートルに抑え、構造重量を軽減し、遺跡への影響を最小限にとどめている。明堂保護シェルターは延床面積 9,600 平方メートルで、2009 年に国家文物局の認可を受け、中国最大規模の保護施設であると同時に、中国で初めてグリーンビルディング理念を採用した文化財保護建築となった（スライド 40）。

明堂の内部構造は天堂と同様である。1 階の床はガラス張りとなされ、地下遺跡を見下ろすことができる。中央部には吹き抜けが設けられ、遺構の中心柱の穴も直接視認可能である。ガラス床下には作業層が設置され、考古学者や作業員が継続的に調査・作業を行える構造となっている。外観は復元されていないため、歴史的姿を示す大型模型を設置している。1 階および 2 階の室内空間は文化展示ホールとして活用され、明堂遺跡および隋唐時代の歴史的背景について解説・展示が行われている（スライド 41）。

第四の手法は、いわゆる「復元」に近いものである。地下遺構を保護した上で、版築および木造構造を用い、門および壁の歴史的姿を再現した。しかし、我々はこの事業を「復元」として申請せず、「標識展示」という名目で承認を得ている。これはおそらく、規模が小さく文化財保護上の感受度が比較的良かったことによるものである（スライド 42）。

第五の手法は、遺跡を覆土した上で門楼を復元せず、基壇のみを造成し、壁体は原高まで立ち上げず崩壊状態を示すものである（スライド 43）。

第六の手法は、舗装によって地下遺構の位置や形状を示すものであり、永泰門および乾元門で採用された。これらの門は主要遺構ではなく、また遺跡公園において広場利用が求められたため、保護シェルターは設けられていない（スライド 44）。

第七の手法は、九洲池および陶光園で採用されたもので、遺構を地下に保護した上で、地表に土を盛り、歴史的様式に基づく庭園を造成するものである。この手法は日本の歴史庭園の整備方法に近いと考えられる。中国では庭園遺構に対する復元概念が比較的緩やかであるため、復元としての明確な申請を行わずに承認を得ることができた（スライド 45）。

第八の手法は天街で採用されたもので、九洲池や陶光園と同様に地下遺構を保護しつつ、地表景観は古代様式に準拠していない。天街は本来、幅約 141 メートルの土の道路であり両側に幅広い水路が流れ、植栽がなかった。現代のコミュニティのニーズおよび水資源の制限に応じて、伝統的な中国庭園の要素を取り入れた現代の公園として整備された。このため、「復元」とは位置づけられていない（スライド 46）。

第4章 真正性および文化遺産の原則

隋唐洛陽城遺跡公園では、前章までに述べた整備に加え、新たな事業も継続的に推進されている。これまでの成果は顕著であり、国家文物局より「十大優秀保護事例」に選定されるなど高い評価を得るとともに、観光収入の大幅な増加や約20万人の雇用創出に寄与した。洛陽市は新たな都市アイデンティティを確立し、住民満足度は96.04%に達している。こうした取り組みは、洛陽市政府および市文物局により「洛陽モデル」と命名され、学術的にも次の四点に整理することができる（スライド47-49）。

まず、隋唐城の事例は、復元ではなく保護シェルターを中心とした手法であるため、復元に関する制度的・学術的論争を回避してきた。2007年に採択されたICOMOSケベック会議の『文化遺産の解釈と展示に関する憲章』によれば、隋唐城の保護シェルターは文化財保護施設であり、外観および内部展示空間は「インタプリテーション装置」として遺跡と歴史文化を解説する役割を担うと考えられる（スライド50）。一部の中国の学者は、建築物の外観が古代の形態で再現される場合、来訪者に誤解を与え、真正性を損ない、来訪者に建築物が消滅したことがないかのよう誤解を与える可能性がある」と指摘する。しかし、保護シェルター内部で遺跡を直接目にできる場合、誤解は生じにくい。一方、基壇や壁の基礎部分を復元し標示することの方が、古代から残されたものだと人々に誤解される恐れがあると考えられる（スライド51）。

外観の復古に伴う懸念は、文献や参考事例に基づく再現の正確性にも関連する。建築物が一度消滅した場合、完璧な再現は不可能であり、特に木材など天然素材では同一材料の使用は困難である。しかし、インタプリテーションの視点からは、推測や補完を適切に示すことで、遺跡の意義や情報を効果的かつ直感的に来訪者へ伝えることができる。部分的な推測を理由に展示全体の価値を否定することは、文化財の教育的効果および人々の知る権利に反する（スライド52）。遺跡の大きな価値の一つは、歴史を証明する役割にある。保護施設は、歴史的な外観を再現できるだけでなく、地下遺跡を直接目にすることが可能であり、直接的な証拠として来訪者に歴史を伝えることができる。この効果は、標識展示や完全な復元のみでは得がたいものである。筆者はこの概念を「証明の可能性」と呼ぶ（スライド53）。

東アジアの古代建築に使用される材料は、遺跡の形状や脆弱性、明示性においてヨーロッパの遺跡とは大きく異なる。同時に、東アジア文化における建築伝統や工芸技術の継承性は非常に高く、すでに失われた建築物や庭園をいかに整備するかは、現状の遺跡を尊重するとともに、将来の活用ニーズにも配慮すべきである、と考える（スライド54）。

PRESENTATION III

XIAO Jin Liang

Chief Engineer

Tsinghua Tongheng Urban Planning & Design Institute

Case Study on the Conservation of the Luoyang Ruins of Sui and Tang Dynasty

This report presents a case study of Sui-Tang Luoyang City based on the author's direct involvement in the processes of conservation, site development, and reconstruction. It examines the background and challenges of these practices, drawing primarily on hands-on professional experience accumulated over many years. Rather than remaining at the level of theoretical discussion, this report aims to share practical knowledge derived from on-site project implementation.

The report is structured into four parts. The first part provides a historical and urban overview of Luoyang and the ruins of the Sui-Tang city. The second part reviews the approaches and measures implemented for the conservation and interpretation of the site to date. The third part examines the decision-making and approval processes related to heritage conservation. The fourth part discusses the fundamental principles of cultural heritage protection, with an emphasis on authenticity.

1. Overview of Luoyang and the Sui-Tang Capital

Luoyang is located at the core of the Central Plains, the heartland of ancient Chinese civilisation, and has functioned as a capital city under multiple dynasties throughout history. The total period during which Luoyang served as a capital is approximately 1,800 years, making it the city with the longest continuous history as a capital in China. During the Western Zhou (c. 1046-771 BC), Sui (581-618 AD), and Tang (618-907 AD) dynasties, Luoyang coexisted with Chang'an as a parallel capital, while during the Northern Song (960-1127 AD) period, Luoyang and Kaifeng were designated as dual capitals. However, from the twelfth century onward, Luoyang experienced a rapid decline, losing not only its status as a capital but also its role as a provincial capital. Today, although Luoyang is widely known as a tourist destination, its scale and functions as a modern city remain relatively average (Slides 4–5). During periods of dynastic transition in China, some regimes inherited and continued to use the capitals of previous dynasties, while others constructed entirely new capital cities. Capital remains from different periods thus became concentrated along the Luo River, forming five distinct capital sites. Owing to this unique characteristic, Luoyang is known as *Five Capitals Converging in Luoyang* (Slide 6).

The capital cities of the Sui, Tang, and Northern Song dynasties were all established on nearly the same site and are generally referred to collectively as the 'Luoyang City of Sui and Tang Dynasties'. The total area of the capital was approximately 47 square kilometres and featured a three-tiered urban structure consisting of the Palace City, the Imperial City, and the Outer City. The Luo River flowed through the city from south to north, dividing the urban space into two sections. The city adopted the *li-fang* ward system, and to the west were located Shangyang Palace, a secondary imperial residence, as well as the Western Gardens, which served as imperial estates. In the northern part of the city stood the Shangqing Palace, a major Taoist complex, whereas the southern area was home to the Longmen Grottoes, a significant Buddhist site. It should also be noted that the course of the Luo River during this period

differed slightly from its present route (Slide 7).

As shown in the reconstruction image of the Sui-Tang city (Slide 8), the city is organised around a central axis extending approximately 20 kilometres in total length. Within the urban core, a grand avenue known as *Tianjie* stretched for about 6 kilometres. More than one hundred *li-fang* blocks were laid in an orderly manner on both sides of this avenue. The Tianjin Bridge crosses the Luo River, connecting the city to the Imperial City and further to the Palace City. At the centre of the Palace City was Mingtang, the principal ceremonial building, while Taoguang Garden and Jiuzhou Pond were located to the west as imperial gardens.

In the 12th century, Luoyang became a battlefield between the Southern Song (1127–1279 AD) and Jin (115–1234 AD) dynasties. As a result, almost all above-ground structures were destroyed, leaving only underground remains. According to photographs taken in 1943, the eastern part of the Sui-Tang city had been incorporated into an urban area dating back to the Qing (1636/1644–1912 AD) dynasty. In contrast, the Palace City, Imperial City, and *li-fang* areas south of the Luo River had been converted into farmland or small villages, and the original *li-fang* layout had largely disappeared.

Following the establishment of the People's Republic of China, the 1963 urban master plan reorganised Luoyang as a heavy-industrial city. Warehouses, factories, workers' housing, and wholesale markets were constructed on the sites of the former Palace City and Imperial City. The road network developed during this period was oriented at an angle of approximately 22 degrees from the original Sui-Tang central axis. While the *li-fang* areas remained primarily agricultural, village settlements gradually expanded. Repeated flooding of the Luo River also caused erosion and damage to many underground archaeological remains.

After the implementation of the Reform and Opening-up Policy in 1985, heavy industry declined, and from the early 2000s onward, new residential developments and other infrastructure projects were introduced. Consequently, villages in the former *li-fang* areas expanded rapidly, and modern urban structures came to overlap, forming multiple layers along the central axis of the Sui-Tang Luoyang City.

Slide 9 shows the core area of the Palace City. Archaeological remains are distributed at a depth of approximately 0.5 metres below the ground surface, while factories, warehouses, and residential areas constructed in the 1960s remain above ground. As noted earlier, the modern road system in this area also deviates from the ancient central axis by about 22 degrees.

Almost all remains of the Sui-Tang Luoyang City are buried underground and consist primarily of rammed earth. As a result, their visibility is extremely limited, and both interpretation and open-air displays present significant challenges. It is therefore difficult to adequately convey the cultural heritage value and historical significance of the site to the public (Slides 10–11).

A representative example is Mingtang. In ancient Chinese Confucian thought, Mingtang occupied the highest hierarchical position among architectural types, and the Mingtang of Sui-Tang city was one of the largest single buildings in ancient China. It covers an area of approximately 30,000 square metres and reaches a height of about 86 metres. The diameter of its rammed-earth foundation is approximately 105 metres and consists of six distinct rammed-earth layers. However, only limited portions of the structure are visible above ground, and without archaeological markings and explanations, it is difficult for visitors to grasp the overall scale and significance of the building (Slide 13).

In addition, Tiantang was a building in which Empress Wu Zetian, the only female emperor in Chinese history, enshrined a colossal Buddha statue. The interior of the structure was equipped with a special mechanism that allowed the Buddha to be raised from underground. However, only limited remains of this structure survive today.

Yingtianmen, also known as Zetianmen, functioned as the southern gate of the Palace City, and served as the setting for state ceremonies. It was a historically significant space where Empress Wu Zetian's enthronement ceremony was held, as well as a site where Japanese envoys to the Tang court were received. Nevertheless, the extant remains are insufficient to convey the former monumental scale and grandeur of the gate (Slides 14–15).

Furthermore, Taoguang Garden and Jiuzhou Pond functioned as imperial gardens within the Palace City and were

used as venues for banquets and leisure activities. At present, only the rammed-earth foundation remains can be identified, and the original landscape value of the gardens has almost entirely been lost (Slide 16).

2. Development and Conservation Initiatives at the Sui-Tang City

As described above, the ruins of Sui-Tang city exist in a complex condition, with extensive underground remains overlain by modern urban structures. Under these circumstances, a major challenge for Luoyang City was how to reconstruct and present the lost capital city structure within the framework of the contemporary city.

In response, Luoyang City clearly positioned the central axis of Sui-Tang city within its modern urban structure. Large-scale redevelopment was conducted along the axis from Dingdingmen to Xuanwumen, including the removal of numerous above-ground buildings. Simultaneously, multi-phased projects for the protection and exhibition of major archaeological remains were implemented, during which several unprecedented approaches were explored (Slide 18).

Following these interventions, Mingtang and Tiantang have been developed in a manner that clearly indicates the location and scale of the original remains, allowing them to be visually recognised as key elements of the former urban core (Slide 19). Reconstruction and development work was also undertaken at Yingtianmen, the southern gate of the Palace City, where the structural composition and architectural details of the gate have been presented (Slides 20–21). In the core area of the Palace City, major elements such as Yingtianmen, Mingtang, and Tiantang have been comprehensively integrated and positioned within the spatial structure of the modern city. As a result, a condition has been created wherein the core space of the ancient capital and contemporary urban functions coexist within the same urban framework (Slide 22).

Development work has also progressed at Jiuzhou Pond, located on the western side of the Palace City, where the spatial composition of an imperial garden incorporating water features has been indicated (Slide 23). In addition, at Dingdingmen and along Tianjie at the southern end of the capital, spatial interventions have been undertaken to clearly express the presence of the central axis, creating an urban scape in which Yingtianmen and Tiantang can be visually perceived from Tianjie (Slides 24–25). Within the *li-fang* areas, gates and partition walls have been constructed, providing spatial cues that help convey the urban block structure of the Sui-Tang dynasty (Slide 26).

Although these interventions involved large-scale and bold measures, they were implemented in accordance with established legal procedures and received formal approval from the National Cultural Heritage Administration (NCHA) of the central government of China.

3. Decision-Making and Approval Processes

In advancing the large-scale development of the Sui-Tang Luoyang City site, one of the central challenges was to establish decision-making mechanisms and obtain understanding and approval from the NCHA and relevant experts. This section organises the theoretical framework and practical approaches adopted for this process.

3.1 The Framework of the National Archaeological Site Park

In the initial stage of the project, the fundamental concept adopted was the *National Archaeological Park*. This cultural heritage protection framework is unique to China. According to the official definition provided by the national government, a National Archaeological Park is intended to develop archaeological sites into public spaces that integrate the functions of research, education, and recreation. The Luoyang Ruins of Sui and Tang Dynasty have been developed in full accordance with this framework (Slide 28).

In collaboration with Luoyang City, the development of the Luoyang National Archaeological Park of Sui-Tang Dynasty was conceived to address four challenges. First, the area was experiencing urban decline and lacked the driving force for development. Second, the residents of Luoyang—once the capital of multiple dynasties—harboured strong dissatisfaction with their contemporary living environment. Third, archaeologists were conducting research under severely deteriorated conditions, where their professional dignity was insufficiently respected. Fourth, since the

Reform and Opening-up period, Luoyang City had struggled to establish a new urban identity (Slide 29).

3.2 Institutional Constraints and Terminological Clarification Regarding ‘Reconstruction’

Within this project, discussions surrounding ‘reconstruction’ were deliberately approached with caution. Under the *Law of the People’s Republic of China on the Protection of Cultural Relics*, any reconstruction of cultural heritage requires approval from the State Council of the central government, which renders such approval extremely difficult in practice. It is widely noted that since 1949, only two projects have received formal approval from the State Council for reconstruction (Slide 30).

The guidelines formulated by ICOMOS China provide detailed definitions related to reconstruction. However, in the Chinese language, multiple terms—such as *fujian* (复建), *fuyuan* (复原), *chongjian* (重建), *xinjian* (新建), and *zaijian* (再建)—all convey meanings equivalent to ‘reconstruction’ or ‘rebuild’. These terms coexist without unified scholarly consensus, resulting in conceptual ambiguity. Consequently, both the *Law of the People’s Republic of China on the Protection of Cultural Relics* and the *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China* have standardised the use of *chongjian* (重建) as the official Chinese equivalent of ‘reconstruction.’

In non-heritage development projects, it is not uncommon for vanished ancient structures to be fully rebuilt while retaining their historical names to meet contemporary needs. In contrast, within the field of cultural heritage conservation, a project is regarded as ‘reconstruction’ only when it employs original materials, techniques, construction methods, and forms. As a result, genuine reconstruction projects that meet these criteria are extremely rare (Slides 31–32).

3.3 Protective Structures

The second guiding concept adopted in Luoyang is the use of archaeological protective structures, commonly referred to as *protective shelters*. These are structures constructed to cover and safeguard archaeological remains and are clearly defined as an independent category in project application documents submitted to the NCHA (Slide 33).

The term ‘protective shelter’ often evokes images of large-scale structures such as stadiums or parking facilities. However, the *Leifeng Pagoda model*, proposed in 1999 by Professor Guo Daiheng introduced new possibilities for this concept. In this model, the archaeological remains are protected by a large-scale modern steel structure, while the exterior adopts the historical image of the Leifeng Pagoda. Architectural elements such as bracket sets (*dougong*), roof tiles, balustrades, and window frames were reproduced using thin copper sheets to reduce the structural weight.

The interior incorporates modern facilities that meet contemporary standards, including elevators and fire safety systems, and exhibition spaces that present the historical and cultural significance of the Leifeng Pagoda. This case demonstrated a method for simultaneously achieving what had previously been regarded as a binary choice: in-situ protection of archaeological remains and the presentation of a historical appearance. In addition, the Leifeng Pagoda project generated significant economic benefits, with construction costs reportedly recouped within two years of opening up to the public.

Professor Guo Daiheng previously served as an assistant to Liang Sicheng, a figure with deep connections to Nara and Kyoto. It should also be noted that the author was Professor Guo’s last student (Slide 34).

3.4 Systematisation of Practical Approaches in Luoyang

In Luoyang, development approaches were systematised based on the two theoretical foundations outlined above: the *National Archaeological Park* framework and the *Leifeng Pagoda-style protective structure*. To avoid misunderstanding, the act of bringing only the exterior of a building closer to its historical appearance is referred here as ‘ancient-style.’ This definition deliberately separates exterior appearance from building materials and construction techniques. Based on this, the approaches adopted in Luoyang can be broadly categorised into eight types (Slide 35).

The first approach involves constructing a steel-framed protective shelter and applying an ancient-style exterior based on the Leifeng Pagoda model. This method has been most widely adopted at the Sui-Tang city site. The protective shelter for Tiantang has a total floor area of approximately 13,000 square metres and a height of 88 metres, and consists of one basement level and five above-ground floors. At the time of its completion in 2013, it was the largest

protective structure of its kind in China.

An atrium is provided at the basement level, allowing visitors to overlook the central stone pit of the site, while glass flooring enables direct visual access to the rammed-earth remains below. Exhibition spaces are arranged on the first through fifth floors, introducing Tang Dynasty Buddhist and tea culture. These include areas for small-scale tea ceremonies and tea rooms, allowing for both interpretation and immersive experiences (Slides 36–37).

The same approach was applied to Yingtianmen. Covering approximately 30,000 square metres, with a height of 50 metres and six above-ground storeys, it was completed in 2019 and has since become the largest archaeological site protective structure in China, replacing Tiantang. The ground floor serves as an exhibition hall for archaeological remains, while the upper floors function as cultural exhibition spaces, including a restaurant where visitors can experience the Tang Dynasty's performing arts. Dingdingmen and Xuanwumen have been reconstructed using similar methods (Slide 38).

The second approach employs protective shelters in which only the base is steel-framed, while the superstructure uses traditional timber construction. The ground floor is fitted with glass panels to allow direct viewing of the underlying archaeological remains (Slide 39).

The third approach also uses steel protective structures, but adopts a contemporary external form that incorporates selected historical design elements. This method was applied only to Mingtang. The original Mingtang was a huge building, standing 86 metres tall with a diameter of 105 metres. Timber reconstruction was impractical due to the scarcity of sufficiently large timber and inability to meet modern fire-safety standards. Constructing a full-scale steel structure at its original height would have required deep foundations, which risked damaging the archaeological remains. Therefore, the protective shelter was built to a reduced height of 32 metres, minimising the structural weight and preserving the underlying archaeological remains.

The Mingtang protective shelter has a total floor area of 9,600 square metres. It received approval from the NCHA in 2009, becoming both the largest archaeological protective structure in China and the first to incorporate green building design principles (Slide 40).

Internally, Mingtang follows the same structural logic as Tiantang. It features a glass floor, allowing visitors to view the archaeological remains directly. The central atrium provides a downward view of the pillar pit at the heart of the site. Beneath the glass floor is a working level where archaeologists and conservation staff can conduct ongoing research. Since the exterior is not reconstructed to its historical appearance, a large-scale model was also installed to convey the original form. The ground and first floors serve as cultural exhibition halls, presenting interpretive materials and displays about the Mingtang ruins and the historical context of the Sui-Tang city (Slide 41).

The fourth approach, akin to 'reconstruction,' involved preserving the underground remains while recreating the historical appearance of gates and walls using rammed earth and timber structures. However, we did not submit this project for approval as 'reconstruction.' Instead, permission was obtained under the designation of 'interpretive structures' due to the relatively small scale and lower sensitivity of these structures (Slide 42).

The fifth approach involved covering the archaeological remains with earth, reconstructing only the rammed-earth podiums of gate towers while leaving the gatehouses above unbuilt. The walls were not restored to their original height, instead representing a ruined state (Slide 43).

The sixth approach used paving to indicate the location and shape of the buried remains. This method was applied at Yongtaimen and Qianyuanmen. These gates were not primary features, and the site required open plazas for public use, so protective structures were not employed (Slide 44).

The seventh approach, adopted at the Jiuzhou Pond and Taoguang Garden, resembles the reconstruction methods used for historical gardens in Japan. The archaeological remains are preserved underground, while the surface is landscaped to reflect the historical garden layout. In China, gardens have relatively more flexible standards and regulations, so formal reconstruction approval was not required (Slide 45).

The eighth approach, applied to Tianjie, follows a similar principle to Jiuzhou Pond and Taoguang Garden. However,

the surface landscape does not completely replicate ancient designs. Historically, Tianjie was a 141-metre-wide earthen road with broad water channels on both sides and no greenery. In response to community needs and modern water resource constraints, the area has been developed as a central urban park that incorporates elements of classical Chinese gardens. Therefore, this approach is not classified as reconstruction (Slide 46).

4. Authenticity and Cultural Heritage Principles

In addition to the initiatives described in the previous section, the National Archaeological Park of Sui-Tang city continues to advance new projects. The results achieved thus far have been remarkable. The project has received high recognition from the NCHA, being named one of the ‘Ten Outstanding Conservation Cases,’ while also generating substantial tourism revenue and creating approximately 200,000 jobs. Luoyang has established a new urban identity, with public satisfaction reaching 96.04%. These efforts have been termed the ‘Luoyang Model’ by the Luoyang Municipal Government and the Luoyang Cultural Heritage Bureau. Academically, the model can be summarised in the following four points (Slides 47–49).

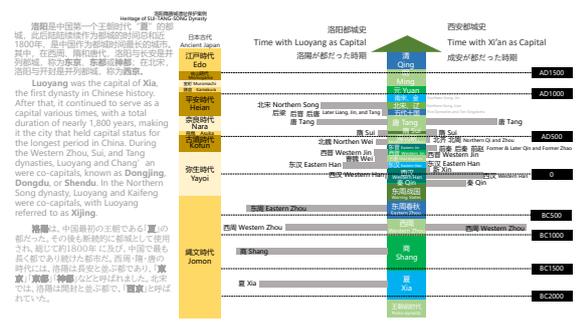
First, the case of Sui-Tang city relies on protective structures rather than reconstruction, thereby avoiding the institutional and academic controversies typically associated with reconstruction. According to the ICOMOS Charter on the Interpretation and Presentation of Cultural Heritage Sites adopted in Quebec in 2007, the protective shelters at Sui-Tang city function as facilities to safeguard cultural relics, with their exterior and internal exhibition spaces serving as interpretive infrastructure to convey the site’s historical and cultural significance (Slide 50).

Some Chinese scholars argue that anything constructed to resemble antiquity violates authenticity and may mislead visitors to believe the structures never disappeared. However, when visitors can observe archaeological remains directly within a protective shelter, such misunderstanding is unlikely. Conversely, marking ruins with reconstructions of building foundations or wall bases are considered more acceptable forms of reconstructions, yet these would be more likely to mislead people to believe they are ancient remnants (Slide 51).

Skepticism regarding the authenticity of a reconstruction stems from the fact that research based solely on documentation and reference cases cannot guarantee accuracy. Once a building has disappeared, a fully faithful reconstruction is impossible, particularly when dealing with natural materials such as timber where no two trees are identical. For the purposes of interpretation, it is sometimes necessary to incorporate some speculative elements to effectively and intuitively communicate the sites’ meaning and significance to people. However, it must be clearly indicated about which aspects are historically accurate, which are interpretations, and which remain subject to debate. Rejecting the overall interpretive value because certain elements are speculative undermines the educational potential of a site and the public’s right to knowledge (Slide 52).

One of the greatest values of archaeological sites is their role as physical evidence of history. Protective structures not only allow for the recreation of a historical appearance but also enable visitors to observe underground remains directly and witness the tangible evidence of the site. This effect is difficult to achieve using interpretative signage or full reconstruction alone. I refer to this concept as ‘verifiability’ (Slide 53).

The materials used in ancient East Asian architecture result in site forms, fragility, and visibility that differ greatly from European archaeological sites. At the same time, East Asian culture demonstrates high continuity, with traditional craftsmanship transmitted across generations. The conservation and interpretation of lost architecture and gardens should respect the current condition of the remains, while also accommodating potential future uses (Slide 54).





应天门
Yingtianmen

21



宫城核心区
Core Area of Palace City

22



九洲池
Jiuzhou Pond

23



定鼎门与天街
Dingdingmen & Tianjie

24



天街与应天门
Tianjie & Yingtianmen

25



坊门与坊墙
Li-fang Gates & Walls

26



如何做
How did we do it?
どうやって整備をした？

决策与审批
Decision-making and Approval
意思決定と承諾

27



国家考古遗址公园
National Archaeological Park
国家考古遗址公园

国家文物局定义：国家考古遗址公园是指以重要考古遗址及其周边环境为中心，开展考古遗址保护、展示、研究、教育、休闲、旅游等功能的公益性场所。

国家文物局的定义：国家考古遗址公园是指以重要考古遗址及其周边环境为中心，开展考古遗址保护、展示、研究、教育、休闲、旅游等功能的公益性场所。

这一概念1995年首次提出，2009年国务院公布《国家考古遗址公园保护规划》，明确了国家考古遗址公园的定义。

This concept evolved from the notion of "big sites" from 1995, which refers to archaeological sites that are significant in scale, value, and influence. In 2009, the National Cultural Heritage Administration established the "National Archaeological Park" system and commenced the nationwide evaluation of sites for designation. Luoyang Ruins of Sui and Tang Dynasty was among the first batch selected in 2010.

この概念は1995年に提唱された「大遗址」の概念から発展したもので、2009年に国家文物局が「国家考古遗址公园」保護体系を確立し、全国で国家考古遗址公园の整備を開始した。洛陽隋唐遗址公園は2010年に第一陣として選定された。

国家考古遗址公园の整備は、国家考古遗址公园体系のもとで実施されている。

All work at the Sui-Tang site is conducted within the framework of the National Archaeological Park system.

国家考古遗址公园の整備は、国家考古遗址公园体系のもとで実施されている。

28



通过隋唐城国家考古遗址公园的保护与建设工作，综合性解决四大难题
The four challenges addressed through the conservation and interpretation work at the Sui-Tang Luoyang City National Archaeological Site Park.
隋唐城国家考古遗址公园的整備事業を遂げて解決した四つの課題



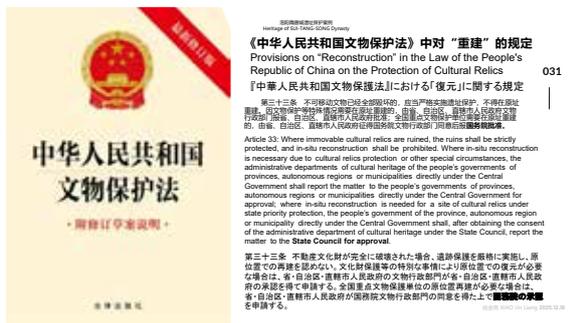
地块衰败
Decline of the area
地域の衰退

市民情感
Community sentiment
市民の思い

职业尊严
Professional dignity
職業の尊厳

城市形象
City Image
都市イメージ

29



《中华人民共和国文物保护法》中对“重建”的规定
Provisions on "Reconstruction" in the Law of the People's Republic of China on the Protection of Cultural Relics
『中華人民共和國文物保護法』における「復元」に関する規定

第三十三条 不可移动的文物已经全部毁坏的，应当严格实施遗址保护，不得在原址进行原址重建；已经灭失的不可移动的文物，原则上不再进行原址重建。

Article 33 Where immovable cultural relics are ruined, the ruins shall be strictly protected, and in-situ reconstruction shall be prohibited. Where in-situ reconstruction is necessary due to cultural relics protection or other special circumstances,

第三十三条 不可移动的文物已经全部毁坏的，应当严格实施遗址保护，不得在原址进行原址重建；已经灭失的不可移动的文物，原则上不再进行原址重建。

30



国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定
Principles on "Reconstruction" in Principles for the Conservation of Heritage Sites in China (2015)
 中国文物古迹保护准则 2015 年 11 月 26 日 批准
 Principles for the Conservation of Heritage Sites in China was published by ICOMOS China and approved State Administration of Cultural Heritage.

Reconstruction of a building in its original location as part of a building ensemble is a means of presenting and interpreting the integrity and appearance of the site. Reconstruction is not, however, advocated due to its impact on the site's authenticity resulting from potential destructive effects on the extant architectural ruins or because of the likelihood of inaccurate interpretation.

However, in special circumstances, reconstruction may be considered provided there is sufficient visual evidence and factual documentation on the missing structure, and it is possible to accurately recreate the structure.

Reconstruction of a site requires going through the approval process for a new project and debate and discussion of possible impacts to the site and the necessity and feasibility of the project. After approval an implementation plan should be devised for review by specialists and the prerequisite legal process undertaken prior to implementation.

Reconstruction must ensure that the site is not damaged, particularly any structural relics. Reconstructed buildings must be clearly marked as such.

Use of models, and particularly digital means of virtual reality display, which would have no impact on the site's physical remains, should be encouraged to present and interpret lost sites.

Archaeological sites are an important category of heritage sites and their values are in part revealed through the ruins themselves. Reconstruction on archaeological sites, ruins and the footings of ruins is not permitted.

31



汉语中 Reconstruction 近似的词汇
Approximate equivalents for "Reconstruction" in Chinese
 中国語における Reconstruction 近似的な語彙

In Chinese, these terms are all akin to "reconstruction" or "rebuild":
 复建, 复原, 重建, 新建, 再建

In everyday communication within China's cultural heritage sector, the terms 复建 (rebuild) + 建筑 (building) and 复原 (rebuild) + 原状 (original) are most frequently used to refer to "reconstruction". Previously, scholars wrote papers arguing for detailed distinctions between these terms, which denotes reconstruction in-situ, which refers to reconstruction under the same name but not on the original site, which involves reconstruction with original materials or without original materials, which preserves the original form, and which alters the form...

However, these perspectives have not gained widespread attention. This is because these terms lack clear distinction in Chinese; the aforementioned so-called distinctions are often the scholars' own definitions, not recognized by others.

Consequently, the current versions of the Law of the People's Republic of China on the Protection of Cultural Relics and the ICOMOS Principles for the Conservation of Heritage Sites in China avoid distinguishing between these terms, uniformly adopting 重建 (begin + build) as the equivalent for reconstruction.

In non-cultural heritage projects, completely new constructions of renowned ancient structures that have vanished may be done in accordance with modern landscape requirements. However, within cultural heritage projects, only those employing original materials, techniques, methods, and forms may be called a "reconstruction". Moreover, reconstruction must undergo approval by the State Council, resulting in an extremely limited number of cultural relics actually obtaining such reconstruction authorization.



32

保护性设施 (保护性建筑、保护棚)
Protective Facilities (Structures, Shelters)
 保護施設 (遺蹟物、保護シェルター)

The strictest form of "reconstruction" is difficult to achieve within China's cultural heritage conservation framework. Consequently, in our work in Luoyang, we frequently employ the concept of "protective shelter". This concept originates from the classification of cultural heritage work outlined in the National Cultural Heritage Administration's conservation project proposal application form.

Such projects are described as follows in *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China (2015)*:

国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定
 National Cultural Heritage Administration Cultural Relics Conservation Work Plan Application Form
 国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定

The strictest form of "reconstruction" is difficult to achieve within China's cultural heritage conservation framework. Consequently, in our work in Luoyang, we frequently employ the concept of "protective shelter". This concept originates from the classification of cultural heritage work outlined in the National Cultural Heritage Administration's conservation project proposal application form.

Such projects are described as follows in *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China (2015)*:

33

雷峰塔模式
Leifeng Pagoda Model
 雷峰塔子儿

In the case of Leifeng, we employed the "Leifeng Pagoda Model" protective shelter.

This approach was pioneered in 1999 by Professor Guo Daifeng, a renowned Chinese architectural historian, during the conservation project at the Leifeng Pagoda site in Hangzhou.

A protective shelter is constructed over the archaeological remains using a modern, large steel structure, while the exterior is clad in traditional materials to replicate the ancient appearance of the Leifeng Pagoda.

To replace structural load and safeguard the site, ancient forms such as bracket sets, roof tiles, haikuais, and dougong (brackets) were crafted using lightweight copper, sheeting, glass, and steel plates.

The interior has modern facilities including fire and safety systems, with exhibition spaces denoting the Leifeng Pagoda's cultural history.

This approach required a groundbreaking dilemma in China: either reconstructing at the original site with potential damage to remains, or reconstructing at a different location. The Leifeng Pagoda model both prevented the site itself while satisfying the aesthetic requirements of Hangzhou's West Lake landscape.

Moreover, the pagoda demonstrates significant economic viability. Constructed in the early 21st century at a cost of RMB 10,000 per square metre – an increase the average of the time – it captured its investment within two years through visitor admission fees alone.



35

保护性设施 (保护性建筑、保护棚)
Protective Facilities (Structures, Shelters)
 保護施設 (遺蹟物、保護シェルター)

The strictest form of "reconstruction" is difficult to achieve within China's cultural heritage conservation framework. Consequently, in our work in Luoyang, we frequently employ the concept of "protective shelter". This concept originates from the classification of cultural heritage work outlined in the National Cultural Heritage Administration's conservation project proposal application form.

Such projects are described as follows in *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China (2015)*:

国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定
 National Cultural Heritage Administration Cultural Relics Conservation Work Plan Application Form
 国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定

The strictest form of "reconstruction" is difficult to achieve within China's cultural heritage conservation framework. Consequently, in our work in Luoyang, we frequently employ the concept of "protective shelter". This concept originates from the classification of cultural heritage work outlined in the National Cultural Heritage Administration's conservation project proposal application form.

Such projects are described as follows in *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China (2015)*:

33

雷峰塔模式
Leifeng Pagoda Model
 雷峰塔子儿

In the case of Leifeng, we employed the "Leifeng Pagoda Model" protective shelter.

This approach was pioneered in 1999 by Professor Guo Daifeng, a renowned Chinese architectural historian, during the conservation project at the Leifeng Pagoda site in Hangzhou.

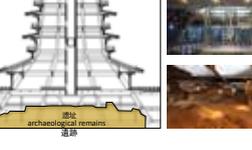
A protective shelter is constructed over the archaeological remains using a modern, large steel structure, while the exterior is clad in traditional materials to replicate the ancient appearance of the Leifeng Pagoda.

To replace structural load and safeguard the site, ancient forms such as bracket sets, roof tiles, haikuais, and dougong (brackets) were crafted using lightweight copper, sheeting, glass, and steel plates.

The interior has modern facilities including fire and safety systems, with exhibition spaces denoting the Leifeng Pagoda's cultural history.

This approach required a groundbreaking dilemma in China: either reconstructing at the original site with potential damage to remains, or reconstructing at a different location. The Leifeng Pagoda model both prevented the site itself while satisfying the aesthetic requirements of Hangzhou's West Lake landscape.

Moreover, the pagoda demonstrates significant economic viability. Constructed in the early 21st century at a cost of RMB 10,000 per square metre – an increase the average of the time – it captured its investment within two years through visitor admission fees alone.



34

洛阳案例分类 Luoyang Case Classification 洛陽事例分類

1. 复古城的保护棚 (雷峰塔模式) - 鋼結構
 2. 复古城的保护棚-钢结构+木结构
 3. 复古城的保护棚-钢结构
 4. 复古城的保护棚-钢结构+木结构+土
 5. 复古城的保护棚-钢结构+木结构+土+土
 6. 复古城的保护棚-钢结构+木结构+土+土+土

7. 复古城的保护棚-钢结构+木结构+土+土+土+土
 8. 复古城的保护棚-钢结构+木结构+土+土+土+土+土

国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定
 National Cultural Heritage Administration Cultural Relics Conservation Work Plan Application Form
 国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定

The strictest form of "reconstruction" is difficult to achieve within China's cultural heritage conservation framework. Consequently, in our work in Luoyang, we frequently employ the concept of "protective shelter". This concept originates from the classification of cultural heritage work outlined in the National Cultural Heritage Administration's conservation project proposal application form.

Such projects are described as follows in *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China (2015)*:

35

1. 复古城的保护棚-钢结构 (天堂、应天门、瑞光殿、定鼎门、玄武门)
Ancestral-style protective shelter: steel structure
 (Tiantang, Yingtianmen, Yaoguang Palace, Dingdingmen, Xuanyumen)

This represents the most prevalent architectural form in Sui-Tang City, where structures serve primarily as protective enclosures for archaeological remains. Their exteriors are designed to resemble Tang Dynasty architecture, thereby circumventing the regulatory risks associated with "reconstruction" approval. The interior spaces offer direct views of the archaeological remains, while other areas function as exhibition halls for interpretation and display.

The structure, spanning 13,000 square metres and standing 88 metres tall, was China's largest protective shelter in 2013. It comprises one basement level and five floors.



36

天章建筑的外层唐风唐式造型 -
 The exterior of Tiantang's protective shelter follows Tang Dynasty design and form.

1- 抬高地面为玻璃地板，可以看到地下遗址
 The basement level features a glass floor, offering views of the archaeological remains.

1- 巨大的钢结构桁架之间，是同样唐风唐式的展览厅
 Between the steel trusses on the basement level, there is an exhibition hall dedicated to interpreting the site's history.

国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定
 National Cultural Heritage Administration Cultural Relics Conservation Work Plan Application Form
 国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定

The strictest form of "reconstruction" is difficult to achieve within China's cultural heritage conservation framework. Consequently, in our work in Luoyang, we frequently employ the concept of "protective shelter". This concept originates from the classification of cultural heritage work outlined in the National Cultural Heritage Administration's conservation project proposal application form.

Such projects are described as follows in *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China (2015)*:

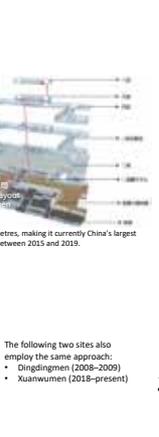
37

应天门
Yingtianmen

"Ancient-style protective shelter." The structure spans 30,000 square metres with a height of 50 metres, making it currently China's largest archaeological site protective shelter. It comprises six above-ground storeys and was constructed between 2015 and 2019.

1- 抬高地面为玻璃地板，可以看到地下遗址
 The basement level features a glass floor, offering views of the archaeological remains.

1- 巨大的钢结构桁架之间，是同样唐风唐式的展览厅
 Between the steel trusses on the basement level, there is an exhibition hall dedicated to interpreting the site's history.



38

2. 复古城的保护棚-钢结构+木结构 (陶光园水阁、南廊、九州池瑞光殿)
Ancestral-style protective shelter: steel + timber
 复古城保护棚-钢结构+木结构

1- 抬高地面为玻璃地板，可以看到地下遗址
 The basement level features a glass floor, offering views of the archaeological remains.

1- 巨大的钢结构桁架之间，是同样唐风唐式的展览厅
 Between the steel trusses on the basement level, there is an exhibition hall dedicated to interpreting the site's history.

国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定
 National Cultural Heritage Administration Cultural Relics Conservation Work Plan Application Form
 国家文物局发布《中国文物古迹保护准则》(2015) 中关于“重建”的规定

The strictest form of "reconstruction" is difficult to achieve within China's cultural heritage conservation framework. Consequently, in our work in Luoyang, we frequently employ the concept of "protective shelter". This concept originates from the classification of cultural heritage work outlined in the National Cultural Heritage Administration's conservation project proposal application form.

Such projects are described as follows in *Principles for the Conservation of Heritage Sites in China (2015)*:

39

3. 不重建的保护棚 (明堂) (Mingtang)
Non-reconstruction protective shelter
 (Mingtang)

The Tang Dynasty's Mingtang stood 294 feet (90m) tall with a floor plan spanning 360 feet (105m). Reconstructing it with timber would prove challenging due to modern timber dimensions and fire safety regulations, encasing the site in steel would damage the remains. The solution implemented was a steel protective shelter rather than replicating the historical appearance. It incorporates ancient architectural details with a contemporary design. Its height was reduced to just 32 metres to minimise structural weight, allowing the structure to be gently lowered into the site without requiring underground foundations, thereby preventing any damage to the site.

Covering 6,000 square metres, the structure received approval from the National Cultural Heritage Administration in 2009 and was completed in 2011. At the time of its construction, it was the largest protective shelter approved in China. It also stands as the nation's first heritage conservation structure to incorporate green building design principles.



40

Reflections on Authenticity
真实性について

关于真实性Authenticity的思考

In the view of some Chinese scholars, any appearance that resembles antiquity violates authenticity, as it may lead people to mistakenly believe the structure never disappeared, let using vegetation, paving, and plants to mark and display architectural ruins does not contradict authenticity.

然而，当观众进入到保护罩中就能看到遗址中的真遗址，还会有人质疑吗？所以，外观形式的保护罩并不真的存在真实性问题。相反，以铺装和植物标记遗址，会不会使人以为这是古代遗留下来的呢？这会不会带来真实性的误读呢？



图例图 3040 in Lang 2020.02.08

51

Reflections on Accuracy
正確性について

关于准确性的思考

Skepticism regarding the authenticity of a reconstruction stems from the fact that research based solely on documentation and reference cases cannot guarantee accuracy. Logically, once a structure has vanished, a 100% faithful reconstruction becomes impossible - particularly with natural materials such as timber, where finding two identical trees is unfeasible.

对于复古外观的怀疑，来自于基于文献和参考案例的研究不能保证准确性。从逻辑上讲，一旦建筑消失了，就不存在100%重建的可能性，尤其是木材这种天然材料，不可能找到两棵完全一样的树木。

然而，即便有 interpretive 的概念能回应这种怀疑，为了可以更有效、直观地向观众解释遗址的含义与价值，有时候还不得不需要添加一些推测。需要透过多种手段向公众介绍，阐释遗址中的部分的确是准确的，部分是不准确的，部分还在学术争议中。

如果因为局部的推测而否定整体阐释的价值，将不利于遗址的有效展示，也不利于民众的认知。



图例图 3040 in Lang 2020.02.08

图例图 3040 in Lang 2020.02.08

52

A new concept: verifiability
新たな概念：可证明性

一个新概念：可证明性

I propose a new concept: verifiability.

A major value of archaeological sites lies in their role as evidence for a particular historical period. Without direct access to the original site, skepticism may arise. Protective shelters offer a form of conservation that both recreates historical appearance and allows direct observation of the site's evidence. In this respect, interpretive structures and complete reconstructions cannot match the effectiveness of protective shelters.

私が新たに提唱する概念は「証明の可能性」である。遺跡の大きな価値は、特定の歴史を証明する役割にある。もし本物の遺跡を目にする事ができなければ、人は疑念を抱くだろう。保護シールドという保存形態は、歴史の外観を再現だけでなく、遺跡を直接目にする事もできる。概観展示や完全な復元は、この点において保護シールドには及ばない。



图例图 3040 in Lang 2020.02.08

53

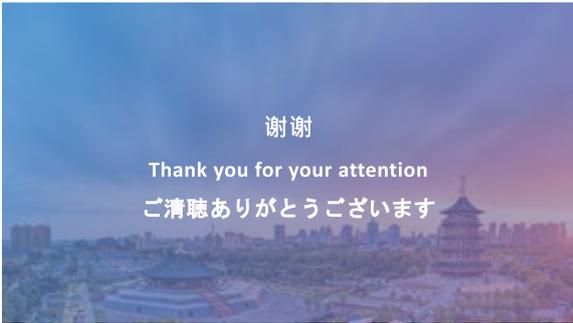


东亚古代建筑所用材料，使得遗址的准确性与口明性都与欧洲遗址差别甚大。同时，东亚文化的延续性、传统工艺的传承性也很强。对已经消失的遗址与园林如何保护和阐释，且身置现场情况，加强交流，寻求新的阐释体系。

The materials used in ancient East Asian architecture result in site forms, fragility, and self-evidence that differ greatly from their European counterparts. Concurrently, East Asian culture exhibits remarkable continuity, and traditional craftsmanship demonstrates a high degree of transmission. Regarding the conception and interpretation of vanished architecture and gardens, approaches should respect each other's capacities, enhance dialogue, and strive to establish new theoretical frameworks.

東アジアの古代建築に使用される材料によって、遺跡の脆弱性、自明性とヨーロッパの遺跡と大きく異なる。同時に、東アジア文化の連続性と伝統工芸の継承性も非常に強い、すでに失われた遺跡を如何に保護するかなど、新たな理論、交流の場、新たな理論的枠組みの構築を自由にする必要がある。

54



谢谢
Thank you for your attention
ご清聴ありがとうございます

55

講演 4

地域に根ざした遺跡の整備活用と研究－岩手県御所野遺跡から－

高田 和徳

特定非営利活動法人いちのへ文化・芸術NPO 代表理事

御所野遺跡は東北地方北部の馬淵川流域沿いの縄文時代の集落遺跡である。遺跡は東西に長く突き出た河岸段丘のほぼ全面に広がっている。遺跡の中央北側を大規模に削平して墓地とし、その南側に土を高く盛っている。周辺には焼土が分布し、祭祀遺物が出土することから墓と一体となった送りなどの祭祀の場となっている。この中央の墓と祭祀の場の東西に竪穴住居跡が分布する大規模な遺跡である。

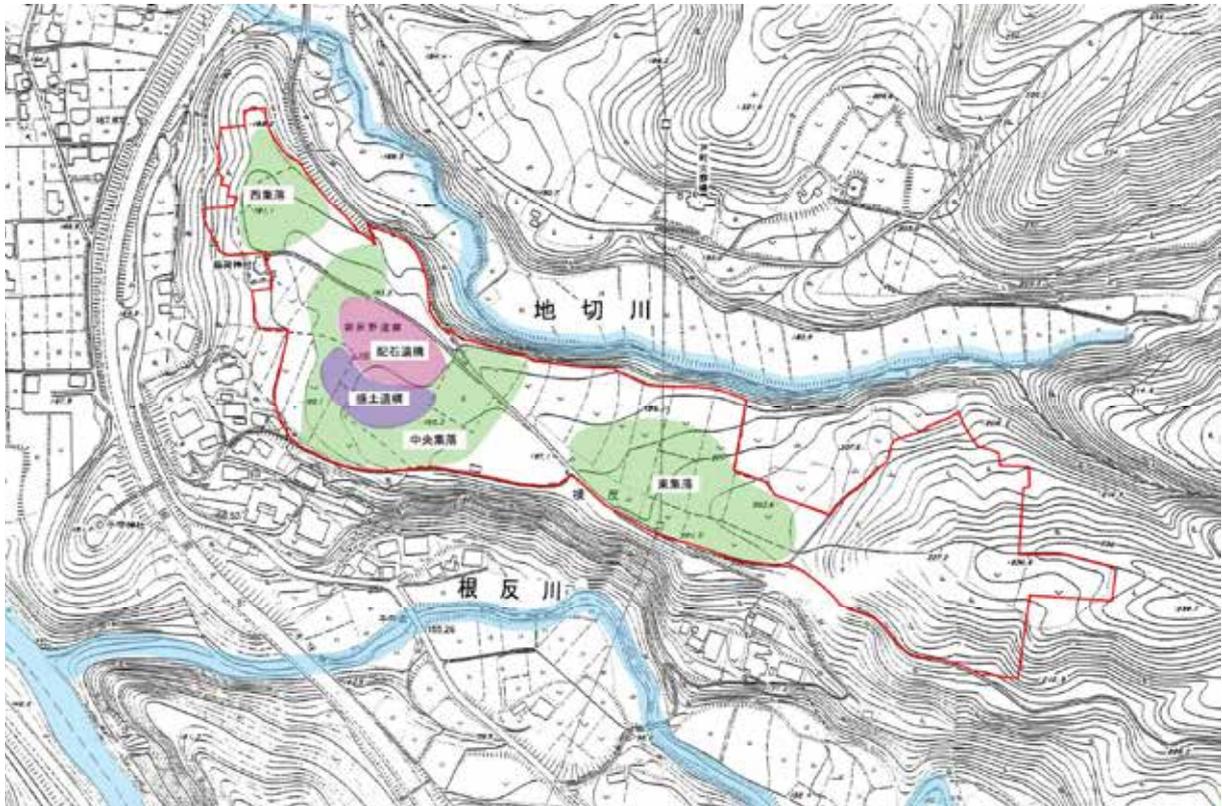


図1 御所野遺跡全体図

遺跡の保存が決定し、整備構想の確定後遺構復元のための発掘調査をはじめた。遺跡はおおよそ800年続きI～V期に時期区分されていたが、そのうちほぼ同時期と考えられるIV期の竪穴住居跡を復元することとした。竪穴住居跡群は、4～6か所に分布するが、いずれも大型を中心として、中・小型の竪穴住居跡が分布してひとつのまとまりとなっていることが明らかになって整備ではそのうち東側、中央東、西側の三箇所建物群を復元している。

竪穴住居跡の調査では焼失住居跡がいくつかあり、その調査で屋根に土がのっていたことを具体的に確認した。調査で得られた資料をもとにして実験的に竪穴住居跡を復元し、二年間四季ごとの温湿度を記録して分析したところ、土屋根住居内も快適な居住空間になることを確認してから二年後家を燃やす実験をおこなった。

焼失住居跡では建物復元のための資料が多く得られる。炭化した建築材が大量に残る場合も多く、

中型住居跡では120点、大型住居跡では50点ほど樹種鑑定を行った。その結果縄文人はクリの木を徹底的に使っていることが明かになった。

発掘調査後その情報をもとにして竪穴住居跡の想定復元図を作成、それをもとにして実験的に土屋根の竪穴建物跡をつくった。復元した竪穴は、全体が土で覆われていることから、厳冬期でも少しの火を炊くことで温かい空間になるし、強い日射しが注ぐ真夏でも涼しく予想以上に快適な空間になることが明かになった。

土屋根竪穴が居住に適した施設であることを確認してから、発掘された焼失住居跡を検証するために焼失実験を行った。実験では多くの情報が得られた。土屋根住居の場合、屋根全体が土で覆われていることからなかで火を炊くと酸欠状態となり、建物は燃えないことがわかった。つまり意図的に燃やそうとしない限り火事にはならないのである。縄文人は何らかの理由で意図的に家を焼いていたのである。博物館では実験の経過を記録するとともに、焼失後の様子についてもそのままの状態でも保存して、時間の経過とともにどのように変化遷するのか、その経過についても記録している。



御所野遺跡では基本的に発掘された遺構の上に、発掘された情報をもとに忠実に復元している。竪穴の位置だけでなく柱穴配置とともに柱の太さなどもこだわっているし、復元建物の状況は、発掘調査の平面図と比較しながらガイド用のアプリで確認できるようになっている。このように御所野遺跡の場合、復元建物は縄文人が活動した場所につくられており、周辺の自然環境やその他の施設と一体となった空間となっている。



中央部には配石遺構の実物がそのまま保存されている。この配石遺構群の外側では環状に密集する柱穴群が検出された。各柱穴の位置などを検討したところ、6本柱の掘立柱建物跡だということがわかった。しかもそれぞれの建物跡は個々の配石遺構に対応する可能性が高く、配石遺構群の外側を一巡するように構築されている。柱穴群のなかには特別太くて深い柱穴がある。北の端で2本、東の端

で3本並列しており、特別な柱として復元した。各掘立柱建物の間にはやや小規模な柱が並んでいるのが確認されており、その位置からそれぞれの場所を区切る柱穴群として復元した。

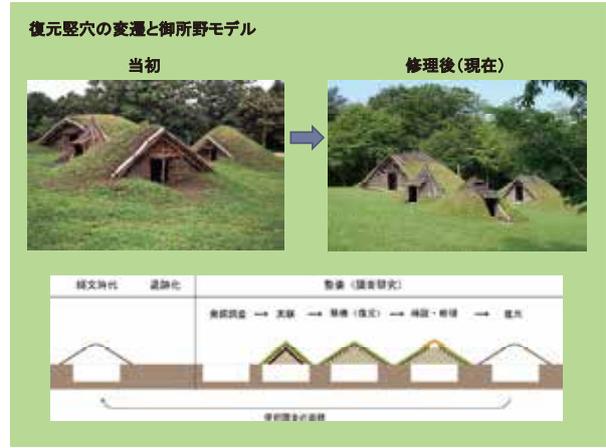


図2 御所野遺跡中央部の復元建物

このように御所野遺跡ではいくつか建物を復元しているが、縄文時代の建物は、限られた数少ない資料をもとに推定で復元しているに過ぎない。あくまでもその時点までに得られた資料をもとに復元したに過ぎない。したがって復元後に新たに資料が得られた場合はそれを取り入れて変更する必要がある。このように発掘調査の成果をもとに実験的な復元を繰り返してから正式な整備事業として復元し、さらにその後の経過観察などを踏まえて新たな資料が得られた場合その都度復元内容を変更することになっている。このような方法は御所野モデルということで評価されている。

史跡公園全体図



遺構の復元とともに重視しているのが周辺景観である。発掘調査で得られた情報から縄文時代の植生について検討して縄文時代の景観を再現する事業である。

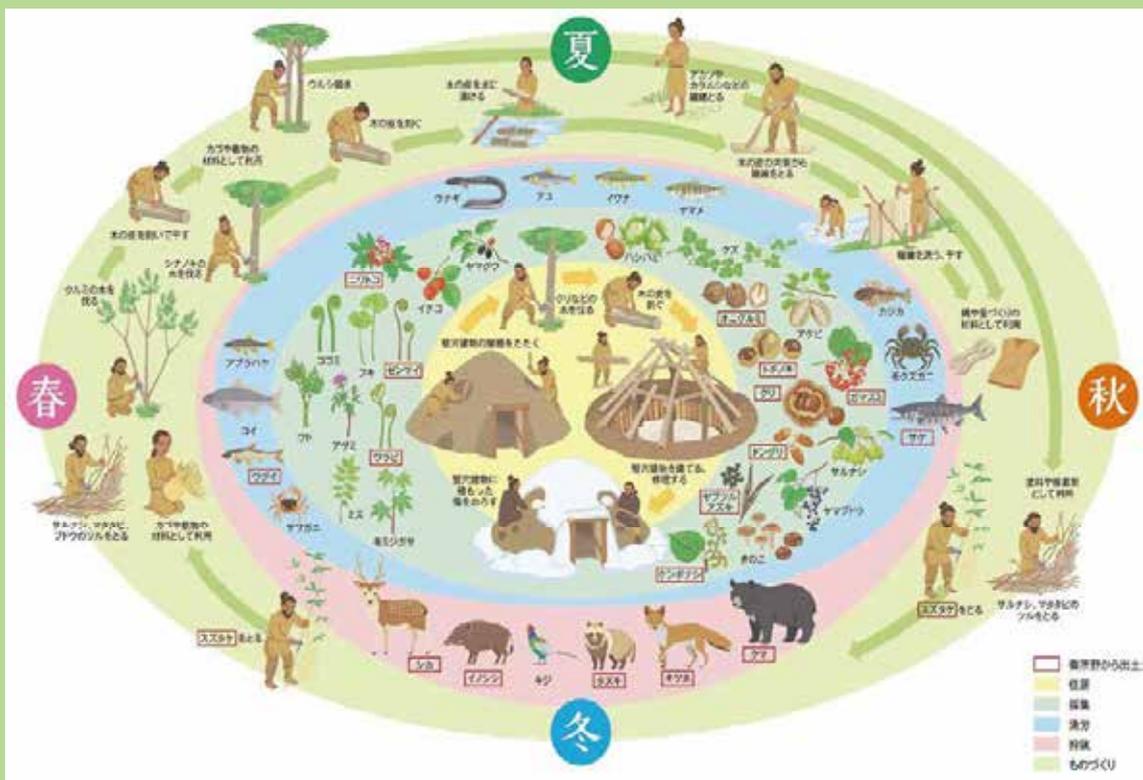
最初にボランティア団体の人たちが現状の植生を調査しているが、それを踏まえて発掘調査で得られた資料をもとに縄文時代は落葉広葉樹を主体とした植生だったことを確認し現状の植物群をできるだけ当時の植生に近づけるような活動で、縄文里山づくり事業と呼んでいる。

その場合単に縄文植物を増やすということだけでなく、人が手を加えることでつくられた景観の再現をめざしている。例えば縄文時代に御所野遺跡ではなかったと考えられている針葉樹を伐採し、そこに落葉広葉樹、特に縄文人が積極的に利用したと考えられる木クリなどを意図的に増やし、それを再現した縄文時代の道具で伐採し、建物などに利用している。伐採後はその周辺の景観がどのように変化していくのかということも観察できる。

以上の活動の中心となっているのが、遺跡の保存とともに結成されたボランティア団体と地元の小学校の「御所野愛護少年団」である。石斧を使った木の伐採は繰り返し行っているが、そのなかで伐



御所野遺跡縄文里山カレンダー



採は樹種によって大きく異なるし、時期も限定されることを知った。このような活動で得られた針葉樹や広葉樹は、樹皮をはじめ、材も建築材や道具づくりなどにも利用されているが、大半は竪穴内で燃やす薪として利用した。その場合、樹種によってどのように異なるのか実験を行っている。樹皮からは縄文人が最も利用した縄を大量につくり建物復元などで利用している。シナノキの樹皮から採取した繊維を利用している。このような実験のもとになったのは各地の縄文遺跡で得られた最新の情報である。実験ではそれぞれの樹種の利用方法やそれぞれの適性も理解している。

以上のように御所野遺跡では、発掘調査を継続しながら各種の実験や体験活動などを20年以上実施してきているが、そのような活動で得られた情報をもとにして作成したのが御所野縄文カレンダーである。カレンダーはあくまでも暫定的なものであり、新たな情報が得られた場合は手直しをしながら随時変更していく予定である。カレンダーから縄文人は基本的には春夏秋冬ごとに、各時期に合わせてながら自然を利用したということがよく理解できるし、さらにはそれを基本としながらできるだけ長期に利用できるように工夫しながら保存食などを開発していったのかも知れない。

復元された史跡公園の四季

春



夏



秋



冬



以上の方法で整備したのが御所野遺跡である。遺跡は日本列島のなかで最も四季の変化がはっきりした地域に位置しているが、縄文時代の植生に近づくことで、一層四季ごとの特徴もはっきりしている遺跡である。今では四季ごとに景観が大きく変化する代表的な縄文遺跡となっている。御所野遺跡は訪れるたびに遺跡のまわりの景観が変わっているし、それとともに復元された建物群なども新たな情報とともに姿を変えてきた。その意味で御所野遺跡は常に変化する遺跡となっている。このことが遺跡の最も大きな特徴である。そして遺跡をこのように動かしてきたのが、ボランティア団体や愛護少年団など地域の住民であるし、その活動のなかで新たな縄文観が得られことも多い。遺跡を整備して活用するというのが縄文研究のひとつの方法でもある。

PRESENTATION IV

TAKADA Kazunori

Representative Director

Ichinohe Culture and Arts NPO

Community-based Site Conservation, Interpretation and Research: Insights from the Goshono Site, Iwate Prefecture

The Goshono Site is a Jomon-period settlement site located along the Mabechi River basin in northern Tohoku. The site extends over nearly the entire surface of a river terrace that projects longitudinally from east to west. A large area in the central northern part of the site was levelled to form a cemetery and a high earth mound to its south. Burnt earth is distributed in the surrounding area, and ritual artefacts have been excavated, indicating that this functioned as a place for funerary ceremonies conducted in conjunction with the cemetery. Remains of pit dwellings are distributed along the east and west of this central burial and ceremonial area, forming a large-scale settlement site.

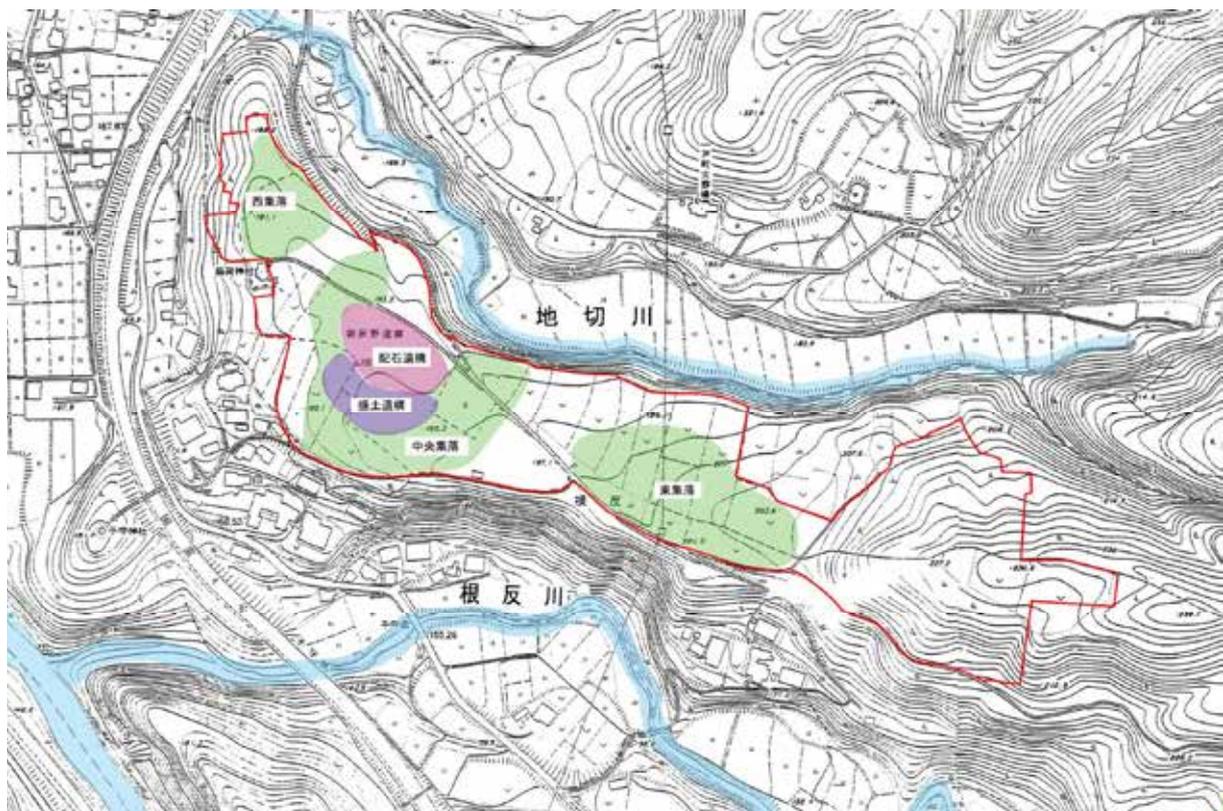


Fig. 1: Overall map of the Goshono Site

After the decision to preserve the site and the site conservation and interpretation plan was finalised, excavation surveys with the purpose of reconstructing the remains was conducted. The site is estimated to have been occupied for approximately 800 years, which was divided into Phases I through V. Among these, pit dwelling remains from Phase IV that roughly existed at the same time were selected for reconstruction. The pit dwelling remains are distributed across four to six areas, each of which forms a coherent group consisting of a large dwelling surrounded by several

medium- and small-sized dwellings. In its conservation and interpretation, building groups were reconstructed in the eastern, central eastern, and western parts of the site.

During the investigation of the pit dwelling remains, several burnt dwellings were identified. Examination of these remains specifically confirmed that soil had been placed on the roofs. Based on the materials obtained through excavation, pit dwellings were experimentally reconstructed. Temperature and humidity were recorded and analysed across all four seasons over a two-year period, confirming that earthen-roofed dwellings provided comfortable living environments. Two years after this confirmation, an experimental burning of a dwelling was conducted.

Burnt dwelling remains yield a large amount of useful data for reconstruction. Substantial quantities of carbonised building materials are found in many cases, and identification of tree species was conducted on approximately 120 samples from medium-sized dwellings and around 50 samples from large dwellings. The results revealed that chestnut wood was extensively used during the Jomon period.

Based on the information collected from the excavation surveys, hypothetical reconstruction drawings of pit dwellings were produced, and experimental earthen-roofed pit dwellings were then constructed accordingly. The reconstructed dwellings were entirely covered with soil, which allow them to retain warmth with only a small fire even during severe winter conditions. During mid-summer, the interiors remain cool despite strong sunlight, proving the dwellings to be more comfortable than expected.

After confirming that earthen-roofed pit dwellings were suitable for habitation, burning experiments were conducted to verify the excavated burnt dwelling remains. A large amount of information was gained from the experiments. In the case of earthen-roofed dwellings where the roof is entirely covered with soil, it was found that lighting a fire inside leads to oxygen-deficient conditions, preventing the structure itself from burning. In other words, a fire does not occur unless the dwelling is deliberately set alight. This indicates that Jomon people intentionally burned their houses for whatever reason. The experimental process has been carefully documented and the burned structures have been preserved as is in the museum, where changes over time are observed and recorded.



Fig. 2: Experimental reconstruction and burning

At the Goshono Site, reconstruction is carried out directly above the excavated remains, based faithfully on the information obtained through excavation. Attention is paid not only to the locations of the pits, but also to details such as the arrangement of post holes and the thickness of the posts. The conditions of the reconstructed buildings and can be checked and compared to excavation site drawings using a guidance app while. The reconstructed buildings at Goshono site stand on the very places where Jomon people once went about their lives, and the space is integrated with the surrounding natural environment and other site facilities.

The stone arrangement remains are preserved at the centre of the site. Surrounding these stone arrangements, a dense ring of post holes was identified. Examination of the locations and characteristics of these post holes indicated that they represent the remains of pit dwellings, each comprised of six posts set directly into the ground. Moreover, each building remain is highly likely to correspond to an individual stone arrangement, and the buildings appear to

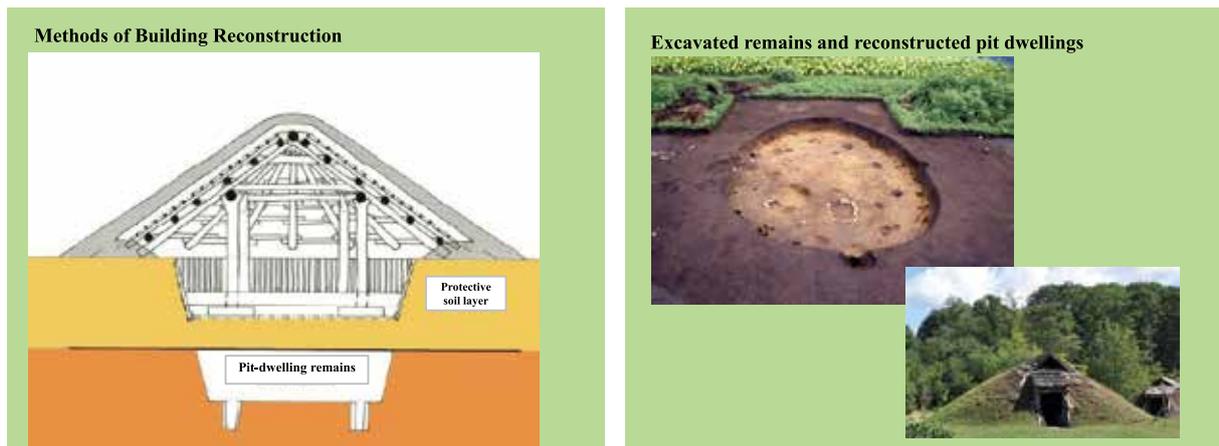


Fig. 3: Profile of reconstructed pit dwellings and remains of stone arrangements

have been constructed to encircle the outer edge of the group of stone arrangements. Within the group of post holes, several posts are notably thicker and deeper than the others. Two such posts stand side by side at the northern edge, with three similarly arranged at the eastern edge, and these were reconstructed as special posts. Remains of rows of smaller posts were also confirmed, based on which groups of post holes that demarcated each individual area were reconstructed.

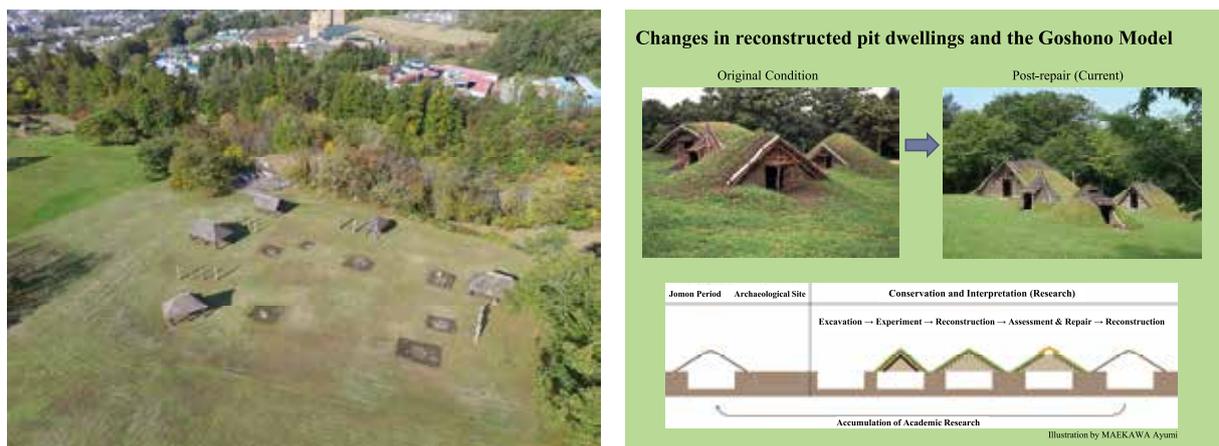


Fig. 4: Reconstructed structures in the central area of the Goshono Site

Thus, although several structures have been reconstructed at the Goshono Site, they are assumptions based on a limited body of available evidence. Each reconstruction is grounded only in the data obtained up to that point. Accordingly, when new evidence comes to light, it is necessary to revise and incorporate it in new reconstructions. Therefore, experimental reconstructions based on excavation results are made repeatedly before implementing them as part of a formal site conservation and interpretation project. Subsequent observation over time and further investigation may yield new evidence, which is then incorporated through revisions to the reconstruction. This method has been recognised and is known as the Goshono Model.

Alongside the reconstruction of archaeological remains, emphasis is placed on the surrounding landscape. The project aims to examine Jomon-period vegetation and to recreate the landscape of that period based on data obtained through excavation. The process began with surveys of the present vegetation conducted by volunteer groups. Based on the findings, excavation data was then used to confirm that vegetation during the Jomon period was dominated by deciduous broad-leaved trees. Activities have been carried out to bring the current plant communities as close as possible to those conditions. This initiative is referred to as the Jomon Satoyama Project.

Overall Map of the Historic Site Park



Fig. 5: Overall map of the Historic Site Park

Here, the aim is not simply to increase the number of Jomon-period plant species, but to recreate a landscape shaped through human activity. For example, coniferous trees, which are thought not to have been present at the Goshono Site during the Jomon period, were removed. In their place, deciduous broad-leaved trees, particularly chestnut trees that are believed to have been actively used by Jomon people, were deliberately introduced. These trees are felled using reproduced Jomon-period tools and are then utilised in building construction and other activities. After felling, changes in the surrounding landscape are also observed over time.

Central to these activities are a volunteer organisation and the local elementary school group known as the Goshono Junior Preservation Group, both formed alongside the preservation of the site. The groups have repeatedly conducted tree-felling using stone axes, through which it was discovered that felling practices differ greatly depending on tree species and limited to specific seasons. Coniferous and broad-leaved trees obtained through these activities were used in various ways. In addition to the bark, the timber was used for building materials and tool making, while most of it was used as firewood burned inside pit dwellings. In this context, experiments are conducted to examine how burning outcomes differ by species. Tree bark is used to make large quantities of rope, one of the materials most extensively used by Jomon people. Fibers extracted from the bark of linden trees are used for this purpose. All these experiments are grounded in the latest findings obtained from Jomon sites across Japan. Through such experiments, the ways in which different tree species were used, as well as their respective suitability for specific purposes, are clarified.



Fig. 6: Tree-felling and rope-making experiments

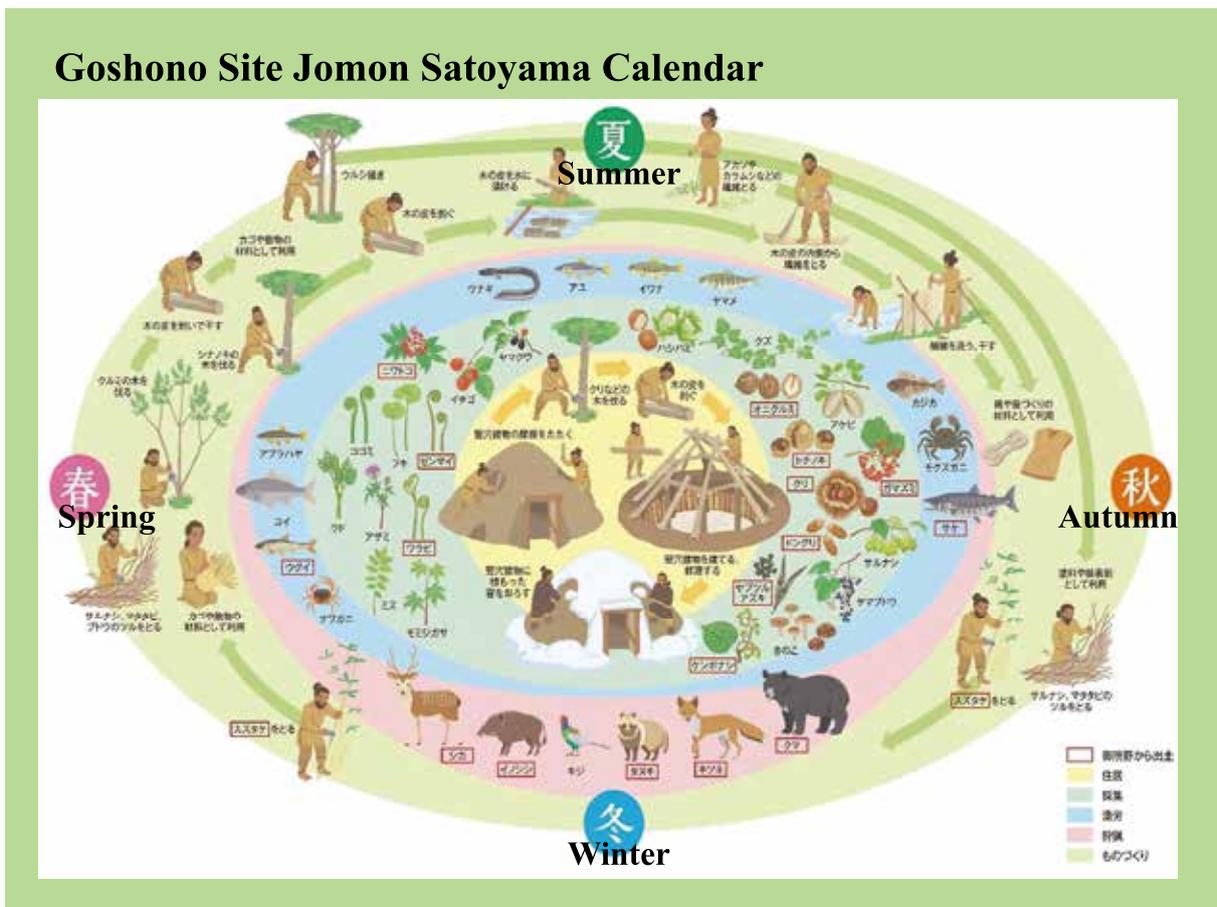


Fig. 7: Goshono Site Jomon Satoyama Calendar

As described above, a wide range of experiments and hands-on activities have been carried out for more than twenty years at the Goshono Site, alongside ongoing excavation. Based on the information obtained through these activities, the Goshono Site Jomon Satoyama Calendar was created. This calendar is subject to ongoing revision, with updates made whenever new evidence is acquired. The calendar shows that Jomon people made use of natural resources in ways closely attuned to the four seasons of spring, summer, autumn, and winter. It also suggests that they may have devised methods for food preservation to extend the period over which resources could be used.

The Goshono Site represents the outcome of the conservation and interpretation methods described above. Located in a region of the Japanese archipelago where seasonal changes are among the most pronounced, the site's vegetation has been brought closer to Jomon-period conditions, making the characteristics of each season even more visible.

Four Seasons of the Historic Park

Spring



Summer



Autumn



Winter



Fig. 8: Four seasons at the Goshono Site

Today, it is regarded as a representative Jomon site where the landscape changes dramatically with the seasons. Each visit to the Goshono Site reveals changes in the surrounding landscape, and the reconstructed building groups have also evolved over time as new information has been incorporated. In this sense, Goshono is a site in a constant state of change, and this ongoing transformation constitutes its most distinctive feature. Driving this process are the local community, including volunteer groups and the Goshono Junior Preservation Group. Through these activities, new perspectives on the Jomon period are often gained, making conservation, interpretation, and utilisation of archaeological sites one approach to Jomon research.

講演 5

エルデン・ズー僧院大ツォグチェン寺と バルーン・フレエ僧院バット・ツァガン寺の復元の実現性

オドフー・アンガラグスレン

文化遺産保護局世界遺産オルホン渓谷文化的景観管理局
研究員

背景

モンゴルでは仏教は3つの重要な歴史的時期を経て広まった。20世紀初頭にはモンゴル全土に700を超える僧院・寺院が存在し、有力な僧院には1,500人から2,000人の僧侶が属していた。1920年代に始まった政治的弾圧は1937年に頂点に達し、700以上の僧院や寺院が破壊され、約1万8,000人の高僧と学僧が処刑された（図1）。

1990年、モンゴルは民主主義国家に移行した。信教の自由が回復され、僧院や寺院は再興された。現在、モンゴル国民の約90%が仏教を信仰している。また、モンゴル全土でかつて破壊された僧院や寺院を復元しようとする取り組みが、強力な公的支援を受け、長年順調に拡大してきた。たとえば、モンゴル南部の主要な僧院の1つ、デムチグ僧院（Demchig Monastery）の仏塔群と本堂が新たに復元されている（図2）。トゥブフン僧院（Töwkhön¹ Monastery）は世界遺産「オルホン渓谷文化的景観」の重要な構成資産であり、1937年の大粛清で破壊されたが、1999年に復元された（図2 A-B）。



図1 20世紀初頭のモンゴルにおける僧院・寺院の分布図と、破壊前の僧院と寺院の写真（A）。1937年頃の政治的動機に基づく虚偽の告発や捏造された事件に関する写真と、破壊されたエルデン・ズー僧院の写真（B）。



図2 左図：デムチグ僧院の廃墟（1937年頃に破壊）。本堂と仏塔の復元
右図：1937年以前のトゥブフン僧院（A）と復元後の状態（B）。

¹ ドゥブハン／トゥブフン僧院（Duwkhan/Töwkhön Monastery）はオンドゥル・ゲゲーン・ザナバザル（Öndör gegen Zanabazar）によって創建された。

歴史的建造物の復元と現在の状況

モンゴルでは破壊された僧院の建造物を復元するための取り組みが続けられているが、以下をはじめ、慎重な考慮を必要とする重要な課題がいくつかある。

1. 専門用語体系に対する共通の理解の欠如

モンゴル語の文化遺産分野では、「復元 (reconstruction)」と「保全・保存 (preservation and conservation)」を合わせて「修復 (restoration)」と呼ぶことが多い。モンゴルの文化遺産の保護に関する法律、文化遺産保護法と、そうした法律に基づき公布された規則において、用語説明の的確さが不十分であり、解釈に大幅な相違が生じている。このように専門用語・用語体系に対する共通の理解が欠如しているために、この分野の規制および課題への対処が困難になっている。国際法律文書の専門用語体系が、モンゴル語にどのように翻訳されているかを見直す必要がある。

2. 歴史的建造物の復元のための明確な哲学的・技術的枠組みの欠如

モンゴルにおける歴史的建造物の復元に関して、その根拠や手法を定義した明確なアプローチや指針は確立されていない。

3. 歴史的建造物の復元における根拠の不足

建造物の復元に関する基礎研究が実施されないことが多く、復元は推測や仮定に基づいて実施される。

これらは根本的課題の主なものであり、以下のような歴史的建造物の復元例に見ることができる。サンギーン・ダライ僧院 (Sangiin Dalai Monastery) は弾圧による破壊の被害が比較的少なかったものの、構造上の欠陥によって建物の上部が崩壊した。2000年代半ばに復元作業が実施され、二階部分が復元された。最近になって保管されていた歴史的写真が発見され、比較したところ、新たに復元された二階部分は本来のものよりも小さいことが明らかになった (図3左図)。

また、同寺にあるツォグチェン・ドゥガン (本堂) は火災で焼失した。復元 (再建) された建物は、オリジナルの大集会堂とは外観が大きく異なっていた。この出来事を受けて、そのようにオリジナルの建造物の設計から逸脱した原因と修正の必要性を問う声が上がっている (図3右図)。



図3 サンギーン・ダライ僧院の復元作業

バルーン・フレーのノヨン・ラマ僧院 (Noyon Lama Monastery) のツォグチェン・ドゥガン (本堂) は、世界遺産「オルホン渓谷文化的景観」の一部を構成しており、復元は1999年に行われた。復元過程において、オリジナルの材料は除去されて新しい建築材料に交換された。さらに、柱や木製部材に一般的な工業用塗料が塗布され、建造物の一部に現代のレンガが用いられた。安価で低品質の材料を用いたことに対して批判が起こり、寺を復元し直す必要性についての議論が現在も行われている (図4)。

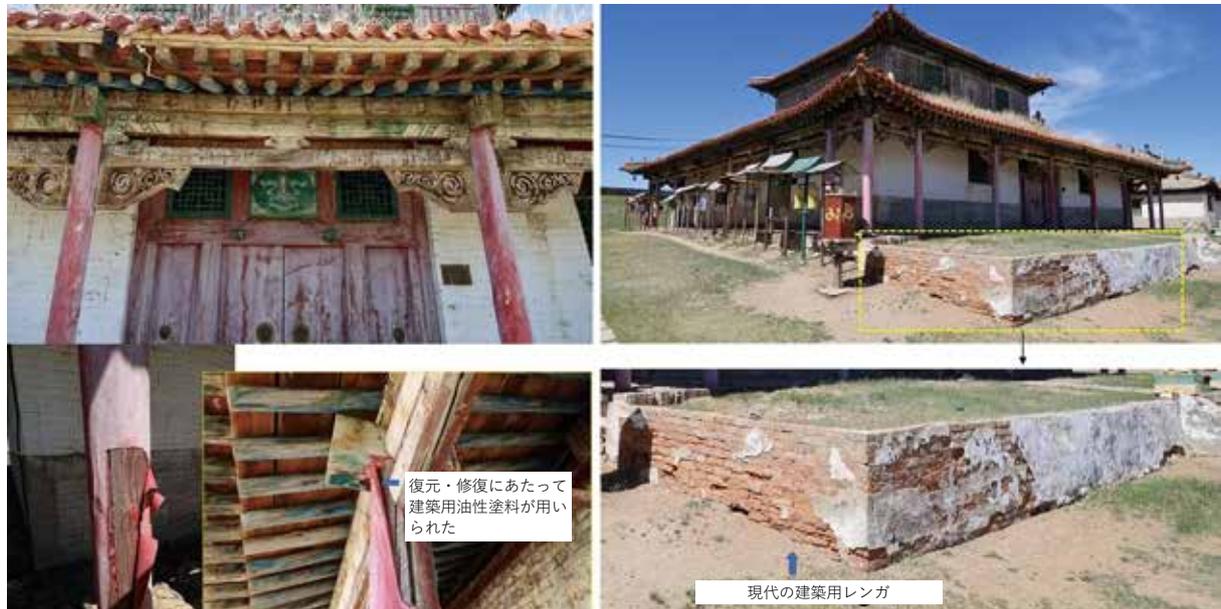


図4 バルーン・フレー僧院の現在の状況

バット・ツァガン寺 (バルーン・フレー僧院) の復元

オンドゥル・ゲゲーン・ザナバザル²はチンギス・ハーンの黄金家系と呼ばれる直系子孫、アバタイ・ハーンの孫である。5歳のときにモンゴル仏教の精神的指導者となり、13歳のときにバルーン・フレー僧院を創建した。バルーン・フレーは移動式の僧院であり、約150年前に今日の場所に置かれ活動を続けたが、1937年に政治的弾圧によって破壊された。現在、かつて僧院があった場所は世界遺産「オルホン渓谷文化的景観」の一部として登録されている。バルーン・フレー僧院は、ボグド・ラマ1世の法衣や所持品を所蔵しており、社会主義時代にも中断されることなく宗教儀式を継続した場所として知られ、モンゴルにおいて特に重要視される寺院である。

181年前、バルーン・フレー僧院の最高位のラマが自身の僧院として、ウブスハンガイ県ハルホリン郡のウハー・オボオ (Ukhaa Ovoo) の近くにあるツォグト山 (Tsogt Mountain) の麓にプンツァグダルジャーリン寺 (Puntsagdarjaalin Temple) を建立した。年月の経過により、現存するのは3つの寺院のみであるが、いずれも国の重要文化遺産に登録されて保存されている。僧院の配置を記した建築スケッチが残っており、僧院の空間的構成と歴史的重要性を一般に公開する目的で、一部の寺院跡の考古学的発掘調査が計画されている。

僧院の管理組織は、市民社会団体と協力して、バット・ツァガン・ドゥガン (本堂) の復元を計画している。バット・ツァガン・ドゥガンはボグド・ラマ1世が設計した、解体・移動可能なモンゴル様式の移動式建築物で、壁はフェルト製、屋根は織物材料製であった。今日でも、かつてバット・ツァ

² 初代ジェブツンダンバ・ホトクト。1635～1723年。ルブサン・ダンビー・ジャルツァン (Luwsan dambii jaltsan) またはオンドゥル・ゲゲーン・ザナバザル (「聡明なる者、叡智の金剛杵／雷電、サンスクリット名:ジュニャーナバジュラ (Jnanavajra)) として知られ、モンゴルにおけるチベット仏教の伝播と発展においてもっとも影響力の大きな人物であった。チンギス・ハーンの子孫であり、アバタイ・ハーンの孫にあたる。チベットの僧院大学で学んだ後、ダライ・ラマ5世とパンチェン・ラマ4世から灌頂を受けた。彼はチベットの高僧、ジョノン・ダルナド (Jonon Darnad) (ターラナータ) の化身と認定された。ダライ・ラマ5世からジェブツンダンバ・ホトクトの称号を与えられた。

資料: <https://www.mongoliantemples.org/en/glossary>

ガン・ドゥガンの頂部にあったシュンシグ（神聖な奉納品）を支えた頂華が残っている。バット・ツァガン・ドゥガンを復元する目的は、忘れられた歴史と記憶を蘇らせ、知識を広め、この寺院の文化的重要性を保存することである。バルーン・フレ僧院のツォグチェン・ドゥガンの写真や絵画は見つかっていないものの、よく似たイフ・フレ（Ikh khüree）のツォグチェン・ドゥガン（本堂）がモンゴル画に描かれ、現在に伝えられている（図5）。

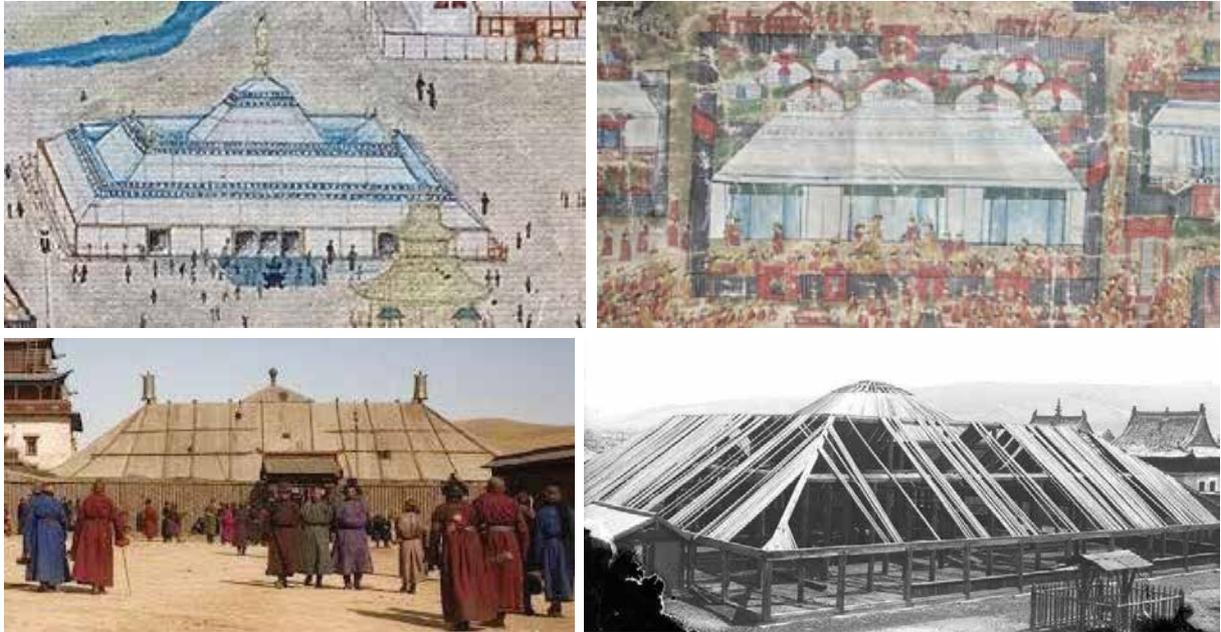


図5 イフ・フレ僧院のツォグチェン・ドゥガン

大ツォグチェン寺（エルデン・ズー僧院）の復元

エルデン・ズー僧院は世界遺産「オルホン渓谷文化的景観」の中心的な構成資産であり、現在は博物館として運営されている。エルデン・ズーは現存するモンゴル最古の僧院で、きわめて重要な記念建造物であり、大モンゴル帝国の宮殿が置かれていた場所に建設されている。モンゴルとドイツ共同での考古学的発掘調査によって、エルデン・ズー僧院の地下に14世紀の遺跡が存在することが確認

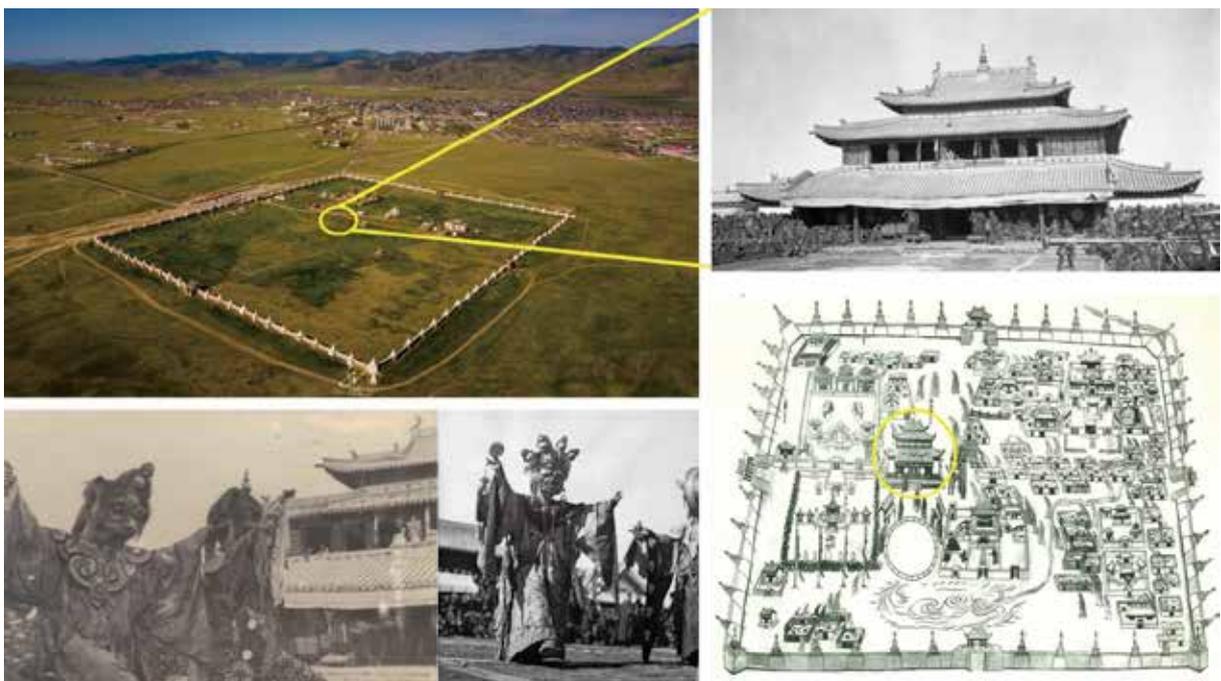


図6 エルデン・ズー僧院の大ツォグチェン寺

されている。敷地内では、博物館が管理する寺院の1つで非政府組織である仏教バット・エルデン・ズー僧院（Buddhist Bat-Erdene Zuu Monastery）が1990年から仏教活動を継続しており、2026年にはエルデン・ズー僧院の創建440周年を迎える。エルデン・ズー僧院のツォグチェン・ドゥガンの復元は、モンゴル国民の長年の悲願である。しかし、本来の歴史的形態をどのように復元するのかという問題は今なお解決していない。

結論

現段階では、エルデン・ズー僧院のツォグチェン・ドゥガンとバルーン・フレー僧院のバット・ツァガン・ドゥガンの復元は、その文化的価値と重要性ゆえに必要と見なされている。そのため、考古学的発掘調査の実施、露出した遺跡の保護方法の決定、遺跡の上に建築することが実行可能かどうかの判断、寺院の設計・構造・空間的構成を明確化するための考古学的調査の実施、包括的な復元計画の開発など、段階的で体系的なプロセスが議論されているところである。

- ツォグチェン・ドゥガンの遺跡に対する考古学的発掘調査
- 考古学的発掘調査の終了後、遺跡を保護しながらその上に建造物を建築するのに必要な対策に関する調査
- 建築および建築設計、構造的な解決策、建築材料などに関する基礎的調査
- ツォグチェン・ドゥガン復元のための設計仕様書・計画の準備
- ツォグチェン・ドゥガン復元作業の実施（遂行）

将来を見据えると、遺跡での歴史的建造物の復元に対する概念的アプローチを議論し、国際的動向を検討し、この分野における最良の慣行や経験を研究する必要があるのは間違いない。

参考資料

<https://www.mongoliantemples.org/en/glossary>

写真引用元：

<https://mongoliantemples.org/mn/component/domm/?view=map&Itemid=160>

<https://gogo.mn/r/mnemx>

<https://www.assa.mn/a/25004>

<https://uvschuud.mn/1751.html>

<https://www.mongoliantemples.org/mn/component/domm/957?view=oldtemplemn>

<https://x.com/sogoomn/status/1292750915426902021>

PRESENTATION V

Angaragsuren Odkhuu

Researcher

Administration of the World Heritage-Orkhon Valley Cultural Landscape

The Possibility of Reconstruction of Tsogchin Dugan (Main Assembly Hall) of Erdene Zuu Monastery and the Bat-Tsagaan Temple of Baruun Khüree Monastery

Background

Buddhism spread in Mongolia over three major historical occasions. By the early twentieth century, over 700 monasteries and temples were in operation across Mongolia, with major monasteries housing between 1,500 and 2,000 monks. Political repression, which began in the 1920s, reached its peak in 1937, destroying more than 700 monasteries and temples and led to the execution of approximately 18,000 high-ranking and learned monks (Figure 1). In 1990, Mongolia transitioned to a democratic state. Freedom of religion was restored and monasteries and temples were revived. Today, approximately 90 percent of the population of Mongolia practices Buddhism. At the same time, efforts to reconstruct previously destroyed monasteries and temples across Mongolia have increased steadily over the years with strong public support. For example, the stupa complex and main temple of the Demchigiin Monastery, one of the principal monasteries in southern Mongolia, have been newly reconstructed (Figure 2). Töwkhön Monastery¹, an important component of the Orkhon Valley Cultural Landscape World Heritage Site and destroyed during the Great Repression of 1937, was reconstructed in 1999 (Figure 2, A-B).



Figure 1. Location of monasteries and temples in Mongolia in the early 20th century. Some monasteries and temples before their destruction (A); politically motivated false accusations and cases around 1937. Demolition of Erdene Zuu monastery (B).



Figure 2. Ruins of Demchig monastery (demolished around 1937); reconstruction of the main temple and stupas; photograph of Töwkhön Monastery from the period before 1937 (A), and its reconstructed state (B).

¹ Öndör gegen Zanabazar founded the Duwkhhan/Töwkhön Monastery

Reconstruction of the Historical Buildings & Current Situation

Although efforts are being made in Mongolia to reconstruct destroyed monastery buildings, several important issues require careful consideration, including the following:

1. LACK OF SHARED UNDERSTANDING OF PROFESSIONAL TERMINOLOGY.

In the cultural heritage field in Mongolia, the terms ‘reconstruction’ and ‘preservation and conservation’ are often collectively referred to as ‘restoration and restoration works.’ In Mongolia’s Law on Cultural Heritage, the law on the protection of cultural heritage, and the regulations issued pursuant to these laws, terminology has not been explained with sufficient precision, leading to substantial discrepancies in interpretation. This lack of shared understanding of professional vocabulary and terminology makes it difficult to regulate and address the sector’s issues. There is a need to re-assess how professional terminology in international legal instruments has been translated into Mongolian.

2. LACK OF A CLEAR PHILOSOPHICAL AND TECHNICAL FRAMEWORK FOR THE RECONSTRUCTION OF HISTORIC ARCHITECTURE.

There is no clearly established approach or guiding principle defining the basis on which, and the manner in which, historic architectural structures should be reconstructed in Mongolia.

3. INSUFFICIENT EVIDENCE IN THE RECONSTRUCTION OF HISTORIC ARCHITECTURE.

Foundational research for architectural reconstruction is often not conducted, and reconstruction is carried out based on approximation or assumptions.

The above constitute the main underlying issues, which can be seen in the below example cases where historic buildings have been reconstructed.

Sangiin Dalai Monastery suffered relatively limited destruction during the years of repression; however, the upper section of the building collapsed due to structural failure. In the mid-2000s, reconstruction works were carried out, during which the second floor was reconstructed. Recently, archival historical photographs were discovered, and comparison clearly shows that the newly reconstructed second floor is smaller in scale than the original (Figure 3).

In addition, the Tsogchin Dugan (Main Assembly Hall) was destroyed by fire. When it was reconstructed, the building was erected in a form that differs substantially from its original appearance. This has subsequently raised questions regarding the reasons for such deviation from the original design and the need for correction (Figure 3).



Figure 3. The reconstruction work of the Sangiin Dalai Monastery

The Tsogchin Dugan of the Noyon Lama Monastery of Baruun Khüree, which forms part of the Orkhon Valley Cultural Landscape World Heritage Site, was reconstructed in 1999. During the reconstruction process, original materials were removed and replaced with new construction materials. In addition, standard industrial paint was applied to columns and wooden elements, and modern bricks were used in parts of the structure. This has drawn criticism for the use of inexpensive and low-quality materials, and at present, discussions continue regarding the need to reconstruct the temple once again (Figure 4).

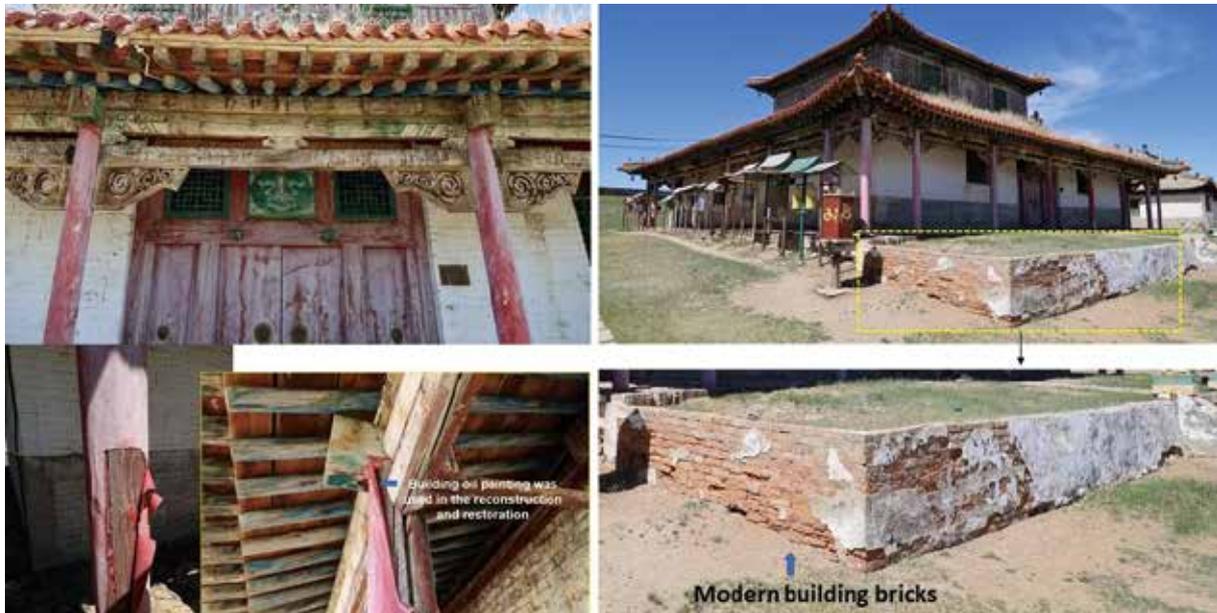


Figure 4. The current condition of the Baruun khüree Monastery

The Reconstruction of the Bat-Tsagaan Temple (Baruun Khüree Monastery)

Öndör geegen Zanabazar ², the grandson of Avtai Khan of the Golden Lineage of Chinggis Khan, was enthroned as the spiritual leader of Mongolian Buddhism at the age of five. At the age of thirteen, he founded Baruun Khüree Monastery. Baruun Khüree was a mobile monastery and settled at its present location approximately 150 years ago, where it continued its activities until 1937, when it was destroyed during the political repression. Today, the site where the monastery once stood is registered as part of the Orkhon Valley Cultural Landscape World Heritage Site. Baruun Khüree is of exceptional value in Mongolia, as it preserves the robes and personal belongings of the First Bogd Lama and is known as a place where religious ceremonies continued without interruption, even during the socialist period.

181 years ago, the head Lama of Baruun Khüree Monastery established his own monastery by founding Puntsagdarjaalin Temple at the foot of Tsogt Mountain, around Ukhaa Ovoo, Kharkhorin soum, Uvurkhangai aimag. Today, due to the passage of time, only three temples, which are all listed as nationally important cultural heritage sites, have been preserved. Architectural sketches documenting the layout of the monastery exist, and archaeological excavations of selected temple sites are planned in order to present the monastery's spatial organisation and historical significance to the public.

The monastery administration, together with civil society organizations, plans to reconstruct the Bat-Tsagaan Dugan. Bat-Tsagaan Dugan, designed by the First Bogd Lama, was a Mongolian-style mobile structure that could be dismantled and relocated, with its walls made of felt and its roof of textile materials. To this day, the finial that once held the

² The 1st Jewtsündamba Khutagt. Living between 1635-1723; Luwsan dambii jaltsan or Öndör geegen Zanabazar ('His Brightness; the vajra/thunderbolt of wisdom'; Sanskrit: Jnanavajra) was the most influential Person in the spreading and flourishing of Tibetan Buddhism in Mongolia. He was descended from Chinggis Khan being the grandson of Awtai Khan. After studying in Tibetan monastic universities; he received initiations from both the 5th Dalai Lama and the 4th Panchen Lama. He was recognized as the reincarnation of the Tibetan master; Jonon Darnad (Taranatha). He was given the title of Jewtsündamba Khutagt by the 5th Dalai Lama.

Resource: <https://www.mongoliantemples.org/en/glossary>

shunshig (sacred consecration objects) at the top of the Bat-Tsagaan Dugan has been preserved. The reconstruction of Bat-Tsagaan Dugan aims to revive forgotten history and memory, disseminate knowledge, and preserve the monument's cultural significance. Although no photographs or paintings of the Tsogchin Dugan of Baruun Khüree have been found, the similar Tsogchin Dugan of Ikh Khüree has been depicted and preserved in Mongolian paintings (Figure 5).

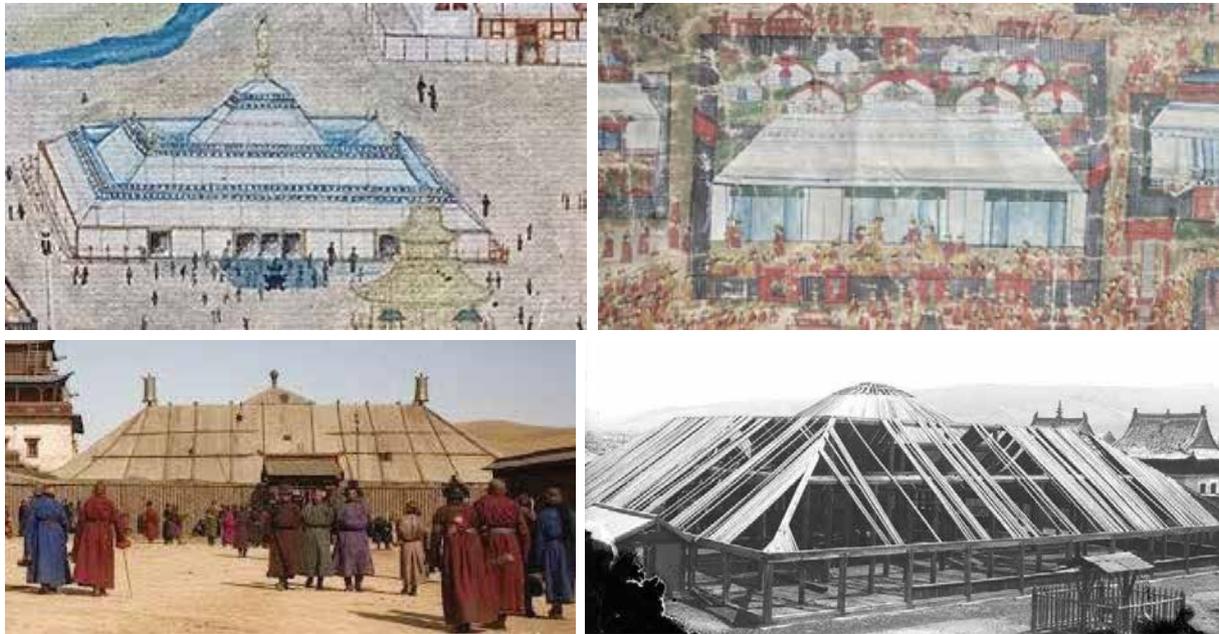


Figure 5. Tsogchin Dugan of Ikh Khüree

The Reconstruction of the Tsogchin Dugan of the Erdene Zuu Monastery

Erdene Zuu Monastery is the central heritage component of the Orkhon Valley Cultural Landscape World Heritage Site and currently operates as a museum. Erdene Zuu is the oldest surviving monastery in Mongolia and is a monument of exceptional importance, having been constructed on the site of the former imperial palace of the Great Mongol Empire. Joint Mongolian–German archaeological excavations have confirmed the presence of fourteenth-century remains beneath Erdene Zuu Monastery. Within its grounds, the Buddhist Bat-Erdene Zuu

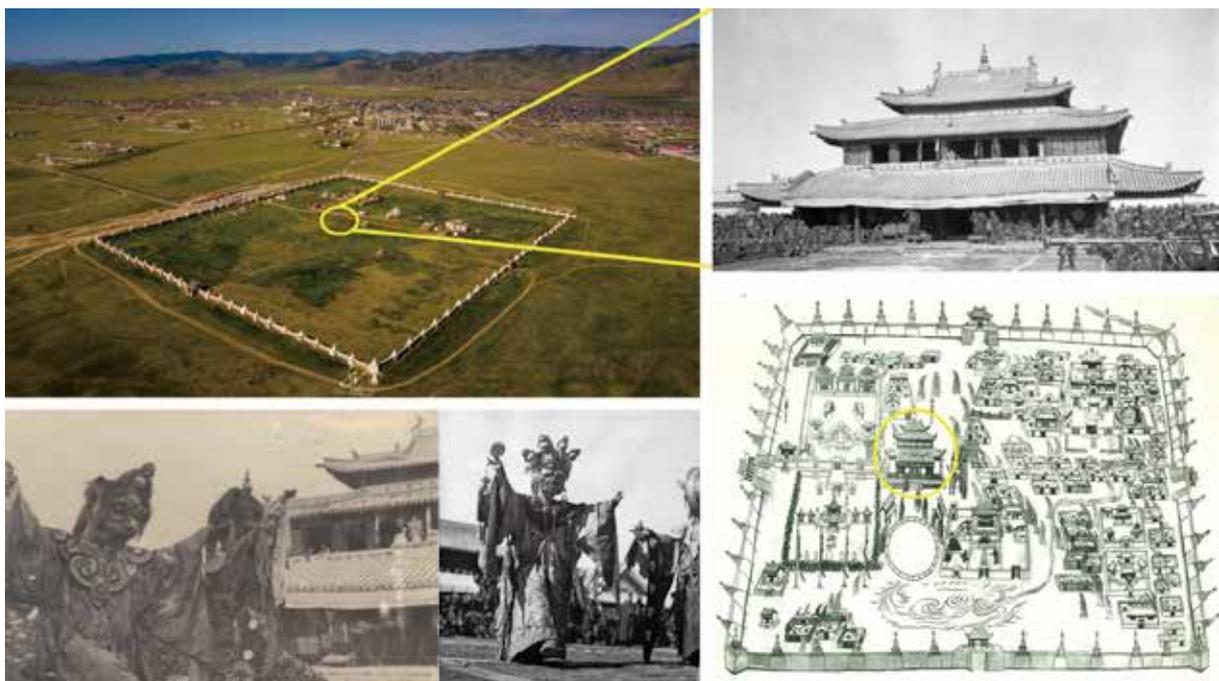


Figure 6. The the great Tsogchin Dugan of the Erdene Zuu Monastery

Monastery, a non-governmental organization, has continuously conducted religious services since 1990 in one of the temples administered by the museum, and 2026 will mark the 440th anniversary of Erdene Zuu Monastery. The reconstruction of the Tsogchin Dugan of Erdene Zuu Monastery remains a long-standing aspiration of the Mongolian people. However, the question of how to reconstruct the building in its original historical form remains unresolved.

Conclusion

At the present stage, the reconstruction of the Tsogchin Dugan of Erdene Zuu Monastery and the Bat-Tsagaan Dugan of Baruun Khüree is considered necessary due to their cultural value and significance. Accordingly, a phased and systematic process is being discussed, including conducting archaeological excavations; determining how to protect the exposed remains and whether construction above them is feasible; undertaking architectural research to clarify the temples' design, structure, and spatial organization; and developing comprehensive reconstruction plans.

- Archaeological excavation research on the remains of the Tsogchin Dugan.
- After the archaeological excavation is completed, research on necessary precautions required to protect the remains while constructing a structure above them,
- Baseline research such as architecture and building design, structural solutions, construction materials, etc.
- Preparation of the design specifications and plans to reconstruct the Tsogchin Dugan.
- Implementation (execution) works to reconstruct the Tsogchin Dugan.

Looking ahead, there is a clear need to discuss conceptual approaches to reconstructing historic architecture at archaeological sites, to examine international trends, and to study best practices and experiences in this field.

Reference

<https://www.mongoliantemples.org/en/glossary>

Photo resource:

<https://mongoliantemples.org/mn/component/domm/?view=map&Itemid=160>

<https://gogo.mn/r/mnemx>

<https://www.assa.mn/a/25004>

<https://uvschuud.mn/1751.html>

<https://www.mongoliantemples.org/mn/component/domm/957?view=oldtemplemn>

<https://x.com/sogoomn/status/1292750915426902021>

講演 6

韓国考古遺跡の復元に対するオーセンティシティ及び最新傾向 — 慶州・新羅王京の中核遺跡を中心に —

ホン・バルグム

国家遺産庁国立伽倻文化遺産研究所 学芸研究員

I. 序文

韓国を含む東北アジアの文化遺産は、木を主要な材料として築造されたものが多い。このような木造文化遺産は、歳月の経過とともに損傷・消失し、地下には基礎遺構だけが残り、地上に当時の構造を留める例はほとんどない。特に、戦争を多く経験した韓国では、古代の木造建築が現存する例はきわめて少ない。したがって、韓国において歴史的建築物の復元が議論される際には、その可否や方法をめぐって多くの論難が絶えず続いている。

本稿では、こうした諸問題を鑑み、新羅王京における核心遺跡の復元内容を精査・検討するとともに、今後の核心遺跡整備における推進方向について考察を試みたい。

II. 新羅王京核心遺跡重要遺跡整備事項

1. 慶州・月精橋復元事業

月精橋は新羅第35代景德王19年(760)に建てられた橋として知られているが、破壊の時期と経緯は明らかではない。慶州市は、この月精橋を復元するにあたり、次の三つの目的を掲げた。

第一に、新羅千年の宮城と王京を結ぶ連結通路である月精橋を再建し、歴史文化都市としての慶州の基盤を確立すること。第二に、古代橋の復元を通じて、仏国寺の青雲橋・白雲橋と並ぶ新羅古代橋の優れた築造技術を再現し、その象徴的意義を示すこと。第三に、慶州市の歴史文化資源の価値を最大化することである。

このような慶州市の計画に従い、慶州月精橋復元事業は、2005年から月精橋復元基本計画および妥当性調査が実施された。その結果、学術的考証を経て本来の姿に近い形で復元(または再建)することは、月城から南山地域に通じる連結道路を再現し、新羅王京の都市骨格を明らかにするという観点から、望ましい事業であると判断され(慶州市・韓国伝統文化大学校 2006: P34~35)、複数回の専門家検討会議および考証研究を経て復元事業が推進された(慶州市・韓国伝統文化大学校 2007:P2~13)。

しかしながら、このように復元された月精橋については、考証の不十分さを理由に「実証的根拠に欠ける復元」であったとの指摘がなされ、社会的批判を招いたことでも知られている。



図1 月精橋復元全景（出典：国家遺産庁ホームページ）

2. 東宮と月池復元事業

東宮と月池は、新羅が三国を統一した直後、第30代文武王14年（674）2月に池を掘り、山を築き、その上にさまざまな草花を植え、珍しい獣を飼ったという記録が始まる。以後、935年の新羅滅亡までの間、王が臣下のために饗宴を催した場所であり、また太子が居住した東宮としても知られている（慶州市・韓国伝統文化大学校2012: P13）。

東宮と月池区域における復元事業は、1977年から1980年代にかけて、1号・3号・5号と呼ばれる三棟の建物が復元され、あわせて護岸石築の整備も実施された（慶州市2024: P4）。

しかし、発掘調査以降、新羅建築に関する具体的研究を欠いたまま復元された三棟の殿閣は、当時から構造や意匠などにおいて誤りがあると指摘されていた。併せて実施された雁鴨池石垣の整備も、造園に関する研究が十分でない状態で進められたため、多角的な観点から問題点が指摘された（梁正錫2020: P85～86）。

この反省を踏まえ、慶州市は2010年から2012年にかけて、新羅時代における東宮と月池の意義を再解釈することを目的として「慶州東宮と月池総合整備基本計画」を策定した。さらに、2012年から2014年にかけては、それまでに実施された発掘成果および研究結果、復元案などを総合的に検討し、東宮と月池の中心建物地と推定される西側建物地に対して基本設計を実施した（慶州市・韓国伝統文化大学校: 2014）。

2015年には、慶州東宮と月池総合整備基本計画および復元細部計画・基本設計に対して文化財庁の条件付き承認が出され、これを基に新たな実施設計が策定された（梁正錫2020: P96）。

2016年5月の文化財委員会合同分科会議および同年7月5日に開催された東宮と月池復元に関する実施設計第1次諮問会議において、イコモスとの協議が必要であるとの見解が示された。その後、文化財委員会において複数回の追加検討および補完が行われ、慶州東宮と月池西側建物地の復元実施設計（案）は、2017年10月に史跡分科会の審議を経て条件付きで可決された（梁正錫2020: P99）。



図2 東宮と月池の全景（出典：国家遺産庁ホームページ）

さらに、2018年8月、文化財庁世界遺産チームはユネスコ世界遺産センターに対し、慶州歴史遺跡地区・月城地区内の西側建物址再現計画を通知した。世界遺産センターは、この計画による建物復元が遺跡の性格およびオーセンティシティに影響を及ぼし、例外的根拠に該当しないと判断した旨の回答を通知した。

これを受けて文化財庁は、慶州市の事業案を「復元」ではなく「保護施設」と再定義し、地下遺構の露出展示方式と広報機能を付加した修正版計画を作成した。また、地下遺構の保護方法を鉄製構造物へと変更するなど、指摘事項を反映したうえで、再度ユネスコ世界遺産センターに通知し、現地での協議を行った。

しかし、世界遺産センターはオーセンティシティの維持を重ねて強調し、保護施設であっても遺跡のオーセンティシティを損なってはならないとの立場を明示した（梁正錫 2020: P101～102）。その結果、2010年以降に文化財庁と慶州市が推進してきた東宮と月池の復元事業は、最終的に中止に至った。

3. 慶州・皇龍寺址復元事業

慶州・皇龍寺址復元事業は、慶州歴史文化都市造成事業の先導事業の一つとして企画・推進されたものである（国立文化財研究所・慶州市 2012: P12）。『三国史記』および『三国遺事』の記録によれば、真興王の在位時代に「ここに王宮を建てようとしたが、黄龍が現れたため王宮ではなく寺院を建立した」と伝えられている（国立慶州文化遺産研究所 2024: P47）。

皇龍寺址の整備工事は、発掘調査が進行中の段階で1981年から1983年にかけて実施され、発掘調査と並行して三度にわたる浄化工事が行われた。木塔址や金堂址など、発掘が完了した主要建物址については、盛土の上に礎石および基壇遺構の整備が行われた（国立文化財研究所・慶州市 2018: P42～45）。



図3 東宮と月池の西側建物址の復元推定の様子（慶州市・韓国伝統文化大学校 2012, P215）

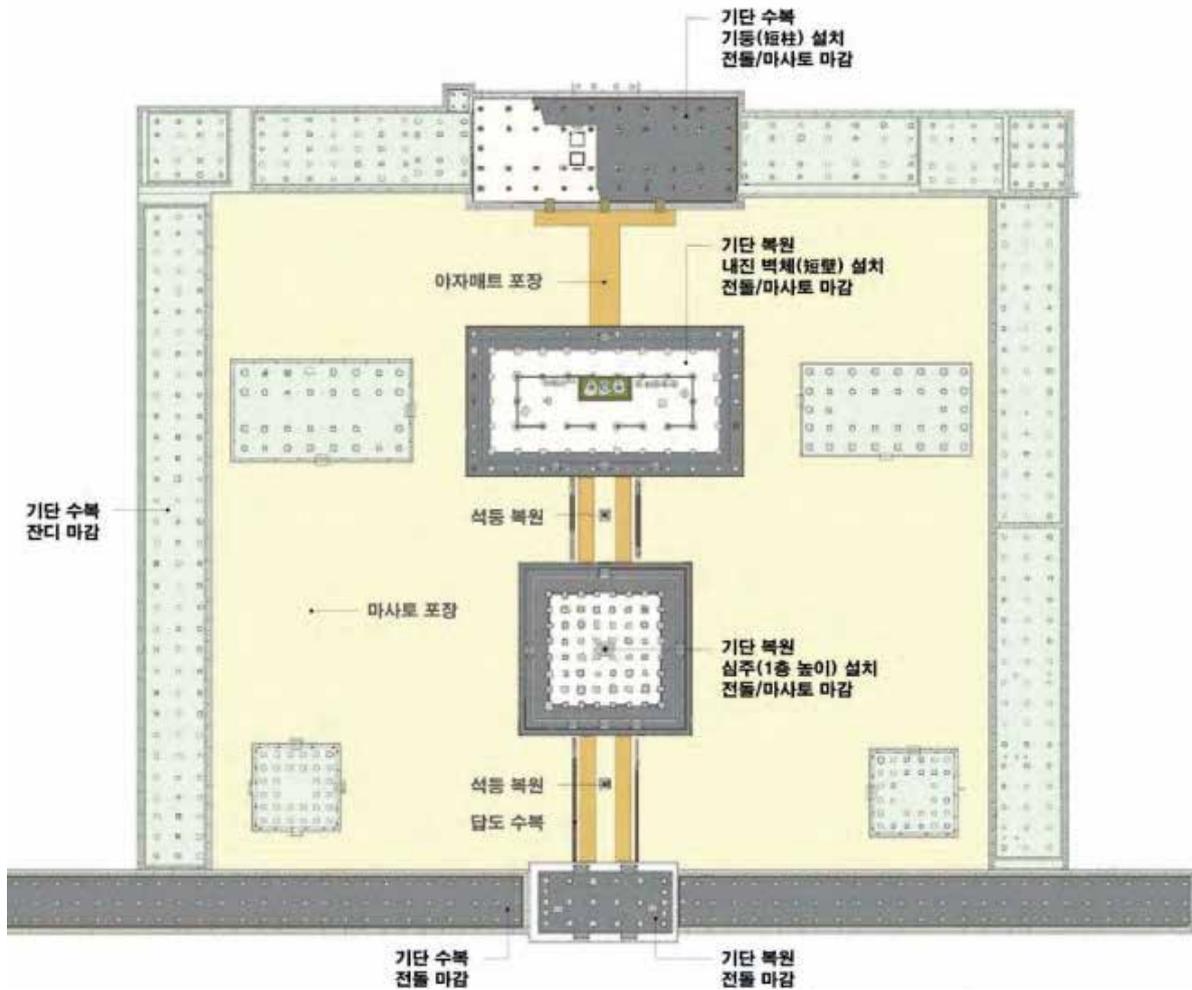


図4 皇龍寺址復元整備推定図（国立文化財研究所・慶州市 2018: P199, 図 5-1）

また、2000年代以降は、皇龍寺址復元基本計画が2007年、2012年、2018年の三度にわたって推進された。第1次計画である2007年の段階では、皇龍寺址全体に対する実物復元を前提とした基本構想が樹立された。2012年には、2007年から2012年にかけて計5回実施された復元基礎研究（国立文化財研究所・慶州市 2012: P12～14）に基づき、復元対象建物の範囲（案）が提示された。提示された5案のうち、木塔の復元については特に推進すべきであると判断された。

さらに2018年には、国際憲章の内容を反映し、事業環境の変化および皇龍寺址の深化研究を踏まえて、「皇龍寺址保存整備基本計画」が再樹立された。基本計画樹立に先立ち実施された2017～2018年のワークショップでは、2012年に策定された総合計画案の修正が必要であるとの見解が示され、復元範囲は中門および南回廊に限定し、それ以外の部分はデジタル技術による復元とする方針が決定された（国立文化財研究所・慶州市2018:P80）。

ただし、2018年の「皇龍寺址保存整備基本計画」には、中門および南回廊の実物復元に関する記述は含まれておらず、中門に関する拡張現実（AR）コンテンツの開発に関する記述が新たに盛り込まれた（国立文化財研究所・慶州市、2018、P190）。ワークショップおよび報告書作成時には、様々な議論が進められる中で、南門および中門の実物復元ではなく、中門を対象とした拡張現実による復元で進める方針が示されたと考えられる。

III. 新羅王京の核心遺跡整備推進方向

1. HIAの重要性

東宮と月池の復元事業に対するユネスコの否定的な見解は、今後の韓国における文化遺産復元の方向性を示す重要な事例であると言える。したがって、当該事業の利害関係者である慶州市、文化財庁、そしてユネスコ世界遺産センターの協議内容を精査することが必要である。特に、議論の中心となったのは世界遺産影響評価（HIA: Heritage Impact Assessment）の実施の有無である。世界遺産センターは、慶州市および文化財庁に対しHIAの実施状況を確認したが、両者は「実施していない」と回答した。これに対し、世界遺産センターはHIAの重要性を改めて強調し、世界遺産の顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value）を維持する上で、開発・整備計画に先立つ影響評価の必要性を指摘した（国立慶州文化財研究所2022:P84）。このことから、文化遺産復元事業においてHIAの実施は不可欠であり、特に世界遺産として登録されている慶州のような地区では、計画段階における事前評価の導入が極めて重要であることが明らかとなる。

2. オーセンティシティの向上

東宮と月池の復元過程においては、オーセンティシティ（Authenticity）の問題も大きな争点となった。文化財庁は、西側建物址の再現事業が国家的に重要な段階にあることを強調したが、ユネスコ世界遺産センターは、目的のいかんを問わず復元行為はオーセンティシティと密接に関係し、物質的側面のみならず、デザイン・形態・機能といった非物質的要素を含めて、オーセンティシティを総合的に満たすことが必要であると指摘した。

すなわち、歴史的建築物を復元する際には、形式的な外観再現にとどまらず歴史的背景や建築技法、地域の文脈を十分に考慮した考証研究が不可欠である。この見解は今後の復元事業における理念的基盤として、オーセンティシティの確保と学術的根拠に基づく復元の重要性を改めて提示するものである。

3. 住民の積極的な参加

このような復元事業を推進する際には、積極的な地域住民の参加の重要性が増大している。2024年に施行された「国家遺産法」第16条（古都及び歴史文化圏の保存・育成）には、古都を保存・育成することで地域のアイデンティティを回復し、地域発展に貢献できるようにしなければならないと明示しており、第23条（国民の国家遺産福祉増進）では国民の文化的生活を保障するために国家遺産観覧・展示・教育・体験などの多様な享有プログラムを提供しなければならないと明示している。そして、世界遺産の保存・管理・活用に関する特別法第15条と第18条を見ると、世界遺産などに関する基礎調査（暫定リストおよび世界遺産登録の適正性、世界遺産地区の指定または変更、総合計画および施行計画の樹立および調整など）などに地域住民が参加できるようにしている。したがって、今後遺跡に対する復元を推進する場合、主役住民の参加が重要だと言える。

参考文献

- 慶州市、2024、『慶州歴史遺跡地区保存・管理および活用計画樹立研究』。
- 慶州市・韓国伝統文化学校、2007、『月精橋復元計画最終報告』。
- 慶州市・韓国伝統文化学校、2006、『月精橋復元基本計画および妥当性調査』。
- 慶州市・韓国伝統文化学校、2007、『月精橋復元計画最終報告』。
- 慶州市・韓国伝統文化大学校、2012、『慶州東宮と月池総合整備基本計画』。
- 慶州市・韓国伝統文化大学校、2014、『慶州東宮と月池復元細部計画樹立および基本設計』。
- 国立慶州文化財研究所、2022、『世界遺産新羅王京管理体系及び活用方案』
- 国立慶州文化遺産研究所、2024、『慶州・皇龍寺址西側廢寺址発掘調査報告書』。
- 国立文化財研究所・慶州市、2012、『皇龍寺復元整備総合計画』。
- 国立文化財研究所・慶州市、2018、『皇龍寺址保存整備基本計画』。
- 梁正錫、2020、「世界遺産として東宮と月池の価値と保存 - 東宮と月池の復元事業と法体系を中心に」、『韓国古代史研究』100、韓国古代史学会。

PRESENTATION VI

HONG Balkeum

Researcher

Gaya National Research Institute of Cultural Heritage, Korea Heritage Service

Authenticity and Recent Trends in Reconstruction of Archaeological Sites in Korea: Focusing on the Core Sites of Gyeongju, the Ancient Capital of the Silla Kingdom

I. Introduction

Among the cultural heritage sites of Northeast Asia, including Korea, many were constructed primarily of wood. Such wooden cultural heritage structures deteriorate and disintegrate over time, leaving only remains of their architectural foundations underground and almost no cases of original above-ground structures remaining intact. This is particularly prevalent in Korea, which has endured numerous wars, resulting in an extremely limited number of ancient wooden structures to have survived to the present day. Consequently, intense debates persist regarding the feasibility and methodology of the reconstruction of historical buildings in Korea.

In light of the aforementioned issues, this paper aims to closely examine and discuss the reconstruction efforts of core archaeological sites within the ancient capital of the Silla Kingdom. Furthermore, future directions for conservation and interpretation of these core sites will also be explored.

II. Key Reconstruction Projects for the Conservation and Interpretation of Core Sites of the Silla Kingdom

1. Gyeongju Woljeonggyo Bridge Reconstruction Project

While Woljeonggyo Bridge is known to have been built in the 19th year of the reign of King Gyeongdeok (760 A.D.), the 35th ruler of Silla, the precise timing and circumstances of its destruction remain unclear. Gyeongju City set forth the following three objectives for reconstructing the Woljeonggyo Bridge.

1. Reconstruct Woljeonggyo Bridge, the connecting passageway between the royal palace and the royal capital over the thousand-year history of Silla, thereby establishing the foundation for Gyeongju as a historical and cultural city;
2. Reproduce the superior construction techniques of Silla's ancient bridges in the reconstruction of Woljeonggyo Bridge, comparable to the Cheongungyo and Baegungyo Bridges of Bulguksa Temple, and demonstrate their symbolic significance; and
3. Maximise the value of Gyeongju City's historical and cultural resources.

Pursuant to this plan by Gyeongju City, the Basic Plan and Feasibility Study for the Restoration of Woljeonggyo Bridge was implemented from 2005. Following academic verification, it was concluded that reconstructing (or rebuilding) the bridge in a form close to its original state was a desirable project. The rationale was based on the perspective that it would recreate the connecting road linking the Wolseong Palace Site to the Namsan area and elucidate the urban framework of the ancient capital of the Silla Kingdom (Gyeongju City & Korea National University of Cultural Heritage, 2006, pp. 34–35). The reconstruction project moved forward after multiple rounds of expert meetings and verification studies (Gyeongju City & Korea National University of Cultural Heritage 2007, pp. 2–13).

Despite these efforts, the reconstructed Woljeonggyo Bridge has amassed criticism for it being a 'reconstruction lacking empirical evidence' based on insufficient historical verification.



Figure 1. Full view of the reconstructed Woljeonggyo Bridge (Source: Korea Heritage Service website)

2. The Donggung Palace and Wolji Pond Reconstruction Project

According to historical documentation, the origins of the Donggung Palace and Wolji Pond can be traced back to February of the 14th year of the reign of King Munmu (674 A.D.), the 30th ruler of Silla, where shortly after the unification of the Three Kingdoms, a pond was excavated, a hill was constructed, and upon it various flowers and plants were cultivated and rare beasts were kept. Henceforth, until the fall of Silla in 935 A.D., the site served as a venue where the king hosted banquets for his subjects and residence for the crown prince, Donggung Palace (Gyeongju City & Korea National University of Cultural Heritage, 2012, p. 13).

The reconstruction project of the Donggung Palace and Wolji Pond area, conducted from 1977 through the 1980s, saw the reconstruction of three buildings, No. 1, No. 3, and No. 5, and stone revetments (Gyeongju City, 2024, p. 4). However, it was pointed out that the three palace buildings, which were reconstructed without detailed research on Silla architecture following the excavation, differed from the original, such as in structure and design. Similarly, the reconstruction of the stone walls of the Anapji Pond, undertaken concurrently, was criticised from multiple perspectives due to its insufficient research on landscape gardening (Yang Jeong-Seok, 2020, pp. 85–86).

Reflecting on these shortcomings, Gyeongju City formulated the Comprehensive Master Plan for the Development of Donggung Palace and Wolji Pond in Gyeongju between 2010 and 2012, aiming to reinterpret the significance of the Donggung Palace and Wolji Pond of the Silla period. Furthermore, from 2012 to 2014, excavation findings, research results, and reconstruction proposals thus far were comprehensively reviewed and the basic design for the western building site, the presumed central structure of the Donggung Palace and Wolji Pond, was devised (Gyeongju City & Korea National University of Cultural Heritage, 2014).

In 2015, the Cultural Heritage Administration (now Korea Heritage Service) granted conditional approval for the Comprehensive Master Plan for the Development of Donggung Palace and Wolji Pond in Gyeongju and its Detailed Reconstruction Plan and Basic Design. Based on this, a detailed design was newly formulated (Yang Jeong-Seok, 2020, p. 96).



Figure 2. Full view of the Donggung Palace and Wolji Pond (Source: Korea Heritage Service website)

At the joint subcommittee meeting of the Cultural Heritage Committee in May 2016 and the first advisory meeting on the detailed design for the reconstruction of the Donggung Palace and Wolji Pond held on 5 July of the same year, it was noted that consultation with the International Council on Monuments and Sites (ICOMOS) was necessary. Subsequently, after multiple additional reviews and supplementation within the Cultural Heritage Committee, the detailed design (draft) for the reconstruction of Donggung Palace and buildings on the western side of the Wolji Pond was conditionally approved in October 2017, following deliberation by the Historic Sites Subcommittee (Yang Jeong-Seok, 2020, p. 99).

Furthermore, in August 2018, the World Heritage Team of the Cultural Heritage Administration notified the UNESCO World Heritage Centre of the plan to reconstruct the western building site within the Wolseong Palace Site of the World Heritage Site, Gyeongju Historic Areas. The World Heritage Centre concluded that the proposed reconstruction plan would impact the character and authenticity of the archaeological site and did not constitute exceptional grounds.

In response, the Cultural Heritage Administration redefined Gyeongju City's project proposal as a 'protective facility' rather than a 'reconstruction,' creating a revised plan incorporating an open exhibition of the underground remains and additional publicity interpretations. After reflecting the points raised, including changing the protective structure for the underground archaeological features to steel, the UNESCO World Heritage Centre was again notified of the revised plan and on-site consultations were conducted.

However, the World Heritage Centre reiterated its emphasis on maintaining authenticity, explicitly stating that even in the case of protective structures, the authenticity of the archaeological site must not be compromised (Yang Jeong-Seok, 2020 pp. 101–102). As a result, the Donggung Palace and Wolji Pond Reconstruction Project, promoted by the Cultural Heritage Administration and Gyeongju City since 2010, was ultimately abandoned.

3. Gyeongju Hwangnyongsa Temple Site Reconstruction Project

The Gyeongju Hwangnyongsa Temple Site Reconstruction Project was planned and promoted as one of the pioneering projects within the Gyeongju Historical and Cultural City Development Project (National Research Institute of Cultural Heritage & Gyeongju City, 2012, p.12). According *Samguk Sagi* and *Samguk Yusa*, during the reign of King Jinheung of Silla, he ‘intended build a royal palace, but due to a yellow dragon sighting, he decided to construct a Buddhist temple’ (Gyeongju National Research Institute of Cultural Heritage, 2024, p. 47).



Figure 3. Reconstruction image of the Donggung Palace and the western building site of the Wolji Pond (Gyeongju City & Korea National University of Cultural Heritage, 2012, p.215)

The conservation and interpretation work at the Hwangnyongsa Temple Site were conducted between 1981 and 1983, during the ongoing excavation survey and three site-clearing works. For the major structures where excavation was completed, such as the wooden pagoda and main hall, the foundation stones and platforms were reconstructed on soil mounds (National Research Institute of Cultural Heritage & Gyeongju City, 2018, pp. 42–45).

Additionally, since the 2000s, the Hwangnyongsa Temple Site Reconstruction Master Plan has been promoted on three occasions: in 2007, 2012, and 2018.

During the first phase of the plan in 2007, a fundamental concept was established, premised on the full-scale reconstruction of the entire Hwangnyongsa Temple Site. In 2012, based on five rounds of preliminary reconstruction research conducted between 2007 and 2012 (National Research Institute of Cultural Heritage & Gyeongju City, 2012, pp. 12–14), draft proposals for which buildings were to be reconstructed were presented. Among the five proposals, the reconstruction of the wooden pagoda was deemed particularly worthy of prioritisation.

In 2018, reflecting international heritage charters, changes in project environment, and new in-depth research of the site, the Basic Plan for the Conservation and Management of the Hwangnyongsa Temple Site was re-established. Workshops conducted in 2017–2018, prior to the establishment of the Basic Plan, indicated the need to revise the comprehensive plan drafted in 2012. There, it was decided that the scope would be limited to the Middle Gate and the South Corridor, with other sections to be digitally reconstructed (National Research Institute of Cultural Heritage & Gyeongju City, 2018, p. 80).

However, the Basic Plan for the Conservation and Management of the Hwangnyongsa Temple Site (2018) did not explicitly mention a physical reconstruction of the Middle Gate and South Corridor. Instead, new provisions concerning the development of Augmented Reality (AR) content for the Middle Gate were incorporated (National Research Institute of Cultural Heritage & Gyeongju City, 2018, p. 190).

It is inferred that this direction to proceed with an augmented reality reconstruction rather than physical reconstructions of the South Gate and Middle Gate was established amidst the discussions during the workshop and drafting of the report.

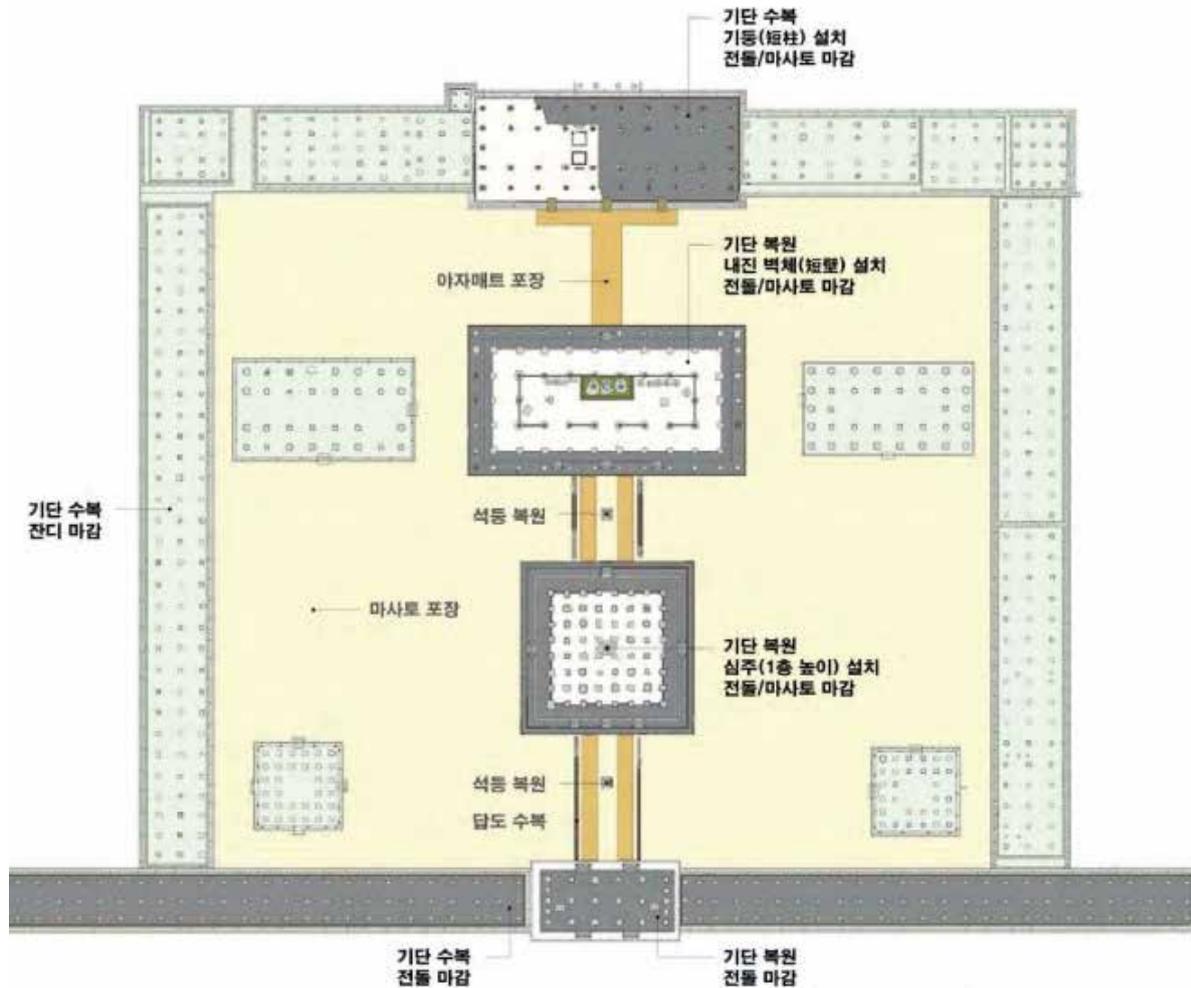


Figure 4. Reconstruction plan for the Hwangnyongsa Temple Site (National Research Institute of Cultural Heritage & Gyeongju City, 2018, p.199, Fig. 5-1)

III. Approaches in the Conservation & Interpretation of Core Sites of the Silla Kingdom)

1. The Importance of Heritage Impact Assessment (HIA)

UNESCO's negative opinion regarding the reconstruction project for the Donggung Palace and Wolji Pond can be considered a significant precedent for the direction of cultural heritage reconstructions in South Korea. Accordingly, it is necessary to scrutinise the content of the discussions held between the stakeholders involved in these projects: Gyeongju City, the Cultural Heritage Administration, and the UNESCO World Heritage Centre.

Of particular focus in the discussions was the implementation, or lack thereof, of a Heritage Impact Assessment (HIA). The World Heritage Centre sought confirmation from Gyeongju City and the Cultural Heritage Administration regarding the status of HIA implementation, to which both entities responded that it had not been conducted.

In response, the World Heritage Centre reiterated the importance of HIA, emphasising the necessity of conducting impact assessments prior to development, conservation and reconstruction plans to safeguard the Outstanding Universal Value (OUV) of World Heritage Sites (Gyeongju National Research Institute of Cultural Heritage, 2022, p.84). This demonstrates that conducting HIAs is indispensable for cultural heritage reconstruction projects and makes it clear that introducing preliminary assessments at the planning stage is particularly crucial in areas like Gyeongju, which are registered as World Heritage sites.

2. Enhancing Authenticity

During the reconstruction process of the Donggung Palace and Wolji Pond, the issue of authenticity also emerged as a significant point of contention. The Cultural Heritage Administration emphasised that the project to recreate the western building site was of national importance. However, the UNESCO World Heritage Centre countered that, regardless of the rationale, any reconstruction work is intrinsically linked to authenticity. It stressed that maintaining authenticity requires a comprehensive approach encompassing not only material aspects but also immaterial elements such as design, form, and function.

In other words, in the reconstruction of historical buildings, it is necessary to undertake thorough research based on historical evidence, considering the historical context, construction techniques, and regional context, rather than merely replicating the outward appearance. This perspective reaffirms the importance of ensuring authenticity and conducting reconstruction based on academic grounds as the fundamental philosophy for future reconstruction projects.

3. Proactive Community Participation

The importance of active participation by the local community is becoming increasingly crucial when promoting such reconstruction projects. Article 16 (Preservation and Promotion of Ancient Capitals and Historical and Cultural Zones) of the Framework Act on National Heritage, enacted in 2024, explicitly states that the preservation and promotion of ancient capitals must contribute to the restoration of regional identity and local development. Article 23 (Enhancement of Public Welfare Related to National Heritage) further mandates the provision of diverse access and engagement programs, including viewing, exhibition, education, and experiential activities, and the creation of environments that enable the public to enjoy and engage with national heritage. Furthermore, Articles 15 and 18 of the Special Act on the Conservation, Management, and Utilization of World Heritage allow for local residents' participation in fundamental World Heritage processes, including preliminary surveys regarding tentative listing and inscription, designation or change of World Heritage areas, and formulation and adjustment of conservation and implementation plans). Therefore, it can be said that the participation of residents is crucial when undertaking future reconstruction efforts for archaeological sites.

References

- Gyeongju City, 2024. 'Research on the Establishment of a Conservation, Management and Utilisation Plan for the Gyeongju Historic Areas.'
- Gyeongju City & Korea National University of Cultural Heritage, 2006. 'Basic Plan and Feasibility Study for the Restoration of Woljeonggyo Bridge.'
- Gyeongju City & Korea National University of Cultural Heritage, 2007. 'Final Report on the Reconstruction Plan for Woljeonggyo Bridge.'
- Gyeongju City & Korea National University of Cultural Heritage, 2012. 'Comprehensive Master Plan for the Development of Donggung Palace and Wolji Pond in Gyeongju.'
- Gyeongju City & Korea National University of Cultural Heritage, 2014. 'Establishment of Detailed Reconstruction Plan and Basic Design for Donggung Palace and Wolji Pond in Gyeongju.'
- Gyeongju National Research Institute of Cultural Heritage, 2022. 'Establishment of a Management System and Utilization Plan for the World Heritage Site of the Silla Royal Capital.'
- Gyeongju National Research Institute of Cultural Heritage, 2024. 'Excavation Report on the Temple Ruins Site West of Gyeongju Hwangnyongsa Temple Site.'
- National Research Institute of Cultural Heritage & Gyeongju City, 2012. 'Comprehensive Reconstruction and Management Plan for the Hwangnyongsa Temple Site.'
- National Research Institute of Cultural Heritage & Gyeongju City, 2018. 'Basic Plan for the Conservation and Management of the Hwangnyongsa Temple Site.'
- Yang Jeong-Seok, 2020. 'The Value and Conservation of the Donggung Palace and Wolji Pond as World Heritage Sites: Focusing on the Reconstruction Project and Legal Framework,' *The Journal of Korean Ancient History*, Issue 100, Society for Korean Ancient History.

講演 7

考古学的証拠に基づく李朝ベトナムの宮殿建築： 東アジアの文脈における形態学的同定と比較分析

ブイ・ミン・チー

ベトナム科学技術協会連合アジア文明研究所 副所長

概要

李朝（1010-1225）の宮殿建築は、大越文明の絶頂期とタンロン王都の繁栄を象徴するものである。しかしながら、地上にあった木造建築が完全に消滅したことは、この地域の建築史に大きな「空白」をもたらしてきた。本稿では、タンロン皇城における画期的な考古学的発見（2002～2004年および2008～2009年に実施された発掘調査）に基づき、李朝宮殿の建築形態を特定した研究成果を紹介する。基礎構造、建築材料の分析、そして異文化比較研究手法の適用を通して、李朝建築は「斗栱」（組物）構造を採用し、朱漆が施され、壮麗な本瓦葺の屋根を特徴とする大規模な木造建築であったことが明らかになった。研究結果は、李朝建築が、同時代の東アジア木造建築（中国の宋代、日本の奈良・平安時代）と共通の技術基準（「文法」）を共有しながらも、熱帯気候への適応と、土着の仏教の特色を色濃く反映した装飾体系を通じて、独自の特徴を確立していたことを示している。本研究は、推定復元（hypothetical reconstruction）のための科学的根拠を提供するだけでなく、東アジア古代建築史の潮流において、ベトナム建築の価値を再定義するものである。

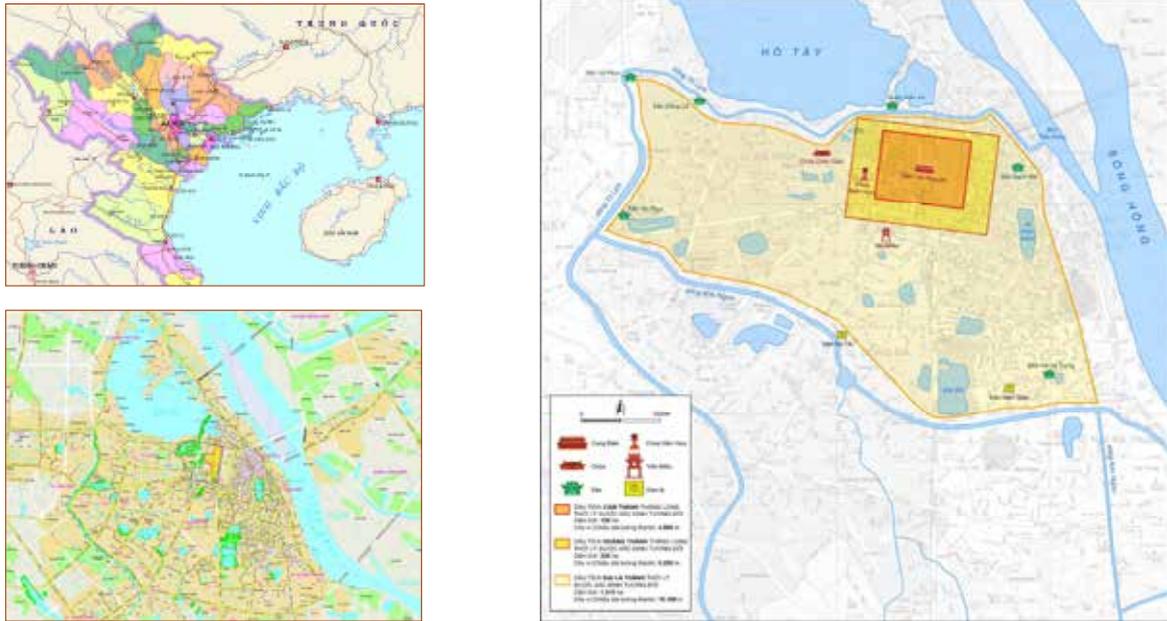
キーワード：李朝の宮殿建築、タンロン皇城、建築考古学、斗栱（組物）、東アジアの木造建築、建築復元

序論

李朝初代皇帝・李太祖（リー・タイ・トー）の治世である1010年秋に正式に定められたタンロン首都（現在のハノイ）は、数世紀にもわたって大越（ダイ・ヴィエット）国の最高の政治・文化の中核として栄えた。都城の計画構造は、羅城（ラ・タイン）、皇城（ホアン・タイン）、そして禁城（カム・タイン）という、互いに包摂し合う三重の城郭図式に従って厳格に構築された。とりわけ中核を成す皇城と禁城は、王室の生活や朝廷儀礼に供する宮殿や楼閣が集中する場であった。『大越史記全書』などの正史料には、遷都の経緯や、中心に位置する乾元（カン・グエン）殿に代表される大規模宮殿の造営、および集賢（タップ・ヒエン）・講武（ザン・ヴォ）・龍安（ロン・アン）の各殿や興天（フン・ティエン）寺といった一連の周辺建築群の整備について詳細に記録されている。これらの記録は、当時のタンロン首都が、類型において多様であり、かつ壮大な規模で、豊かな宮廷建築群であった様相を描いている。

文献史料、金石文、そしてとりわけ考古学的データの総合的な調査研究の結果、タンロン皇城の規模は極めて雄大なものであったと特定された。皇城の面積は約230ヘクタール、禁城は約100ヘクタールと推定され（地図1参照）。李朝の都城計画の思想は、風水説及び東洋的宇宙論の巧みな応用を示しており、ヌン山（龍肚、ロンド）を聖なる中心（主山）とし、そこに正殿である乾元殿を配した。宮殿や楼閣から仏塔に至るまで、当地の建築群はすべて技巧を凝らした木造建築であり、当時の国教として支配的な役割を果たした仏教思想の深い影響を受けつつ、李朝の経済的繁栄と王権の威信を反映している。

しかし、歴史の変遷と経年の風化を経て、地上の李朝宮殿建築はことごとく消滅してしまった。李朝宮殿の外観、規模、建築形態に関する史料の記述は貴重ではあるものの、往々にして概念的で断片的、



地図 1：現在のハノイ市内にある李朝タンロン首都の空間
 (訳注：左上 ハノイ位置図、左下 ハノイ市街地、右 タンロン皇城想定範囲図)

かつ曖昧であり、研究や復元作業に多大な困難をもたらしている。この問題は一世紀以上にわたり歴史学・考古学界の特段の関心を集めてきたが、定量的な科学的データや深化された国際比較研究の欠如により、歴史認識には多くの「空白」が残されている。

こうした史料制約の中、本研究は、タンロン皇城遺跡における画期的な考古学的発見に基づき、李朝行宮の建築形態に関する予備的な同定を行うことに焦点を当てている。使用するデータは、ホアン・ジェウ通り 18 番地 (2002～2004 年)、国会議事堂建設予定地 (2008～2009 年)、及びヴオン・ホン (薔薇園) 地区 (2012～2014 年) における大規模発掘調査から収集されたものである (図 1 参照)。

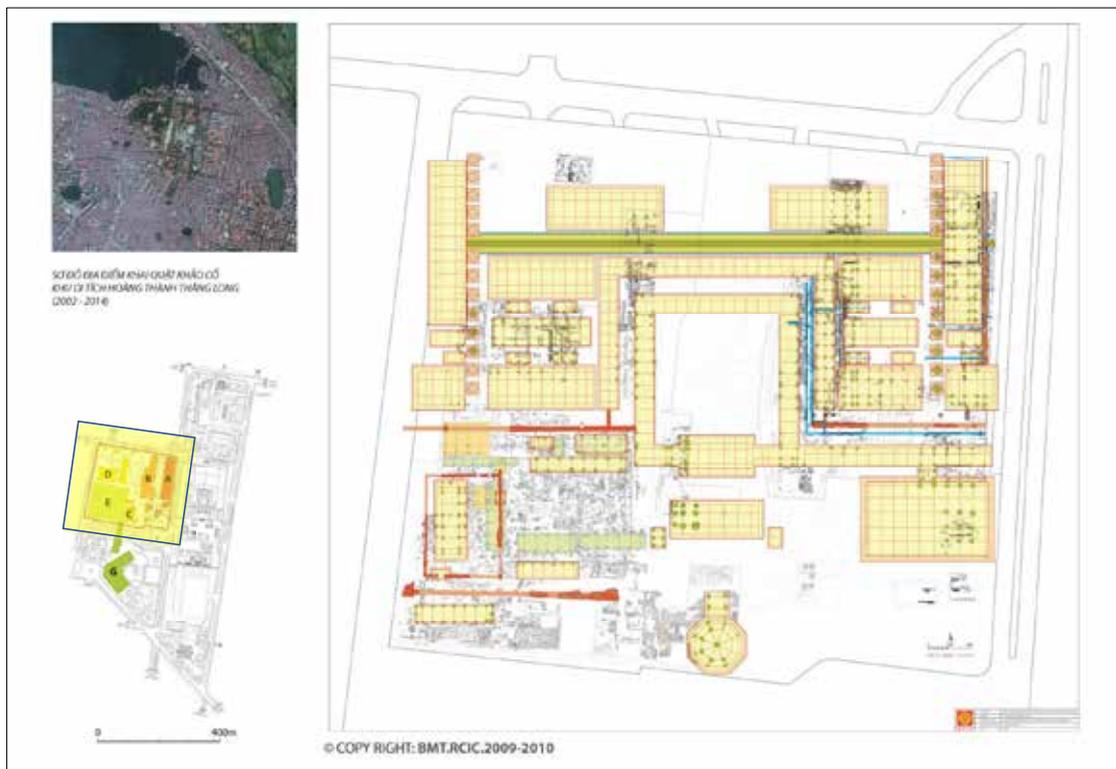


図 1：タンロン皇城遺跡全体図
 (訳注：左上 タンロン遺跡範囲空中写真、左下 タンロン遺跡・ABCDEG 区位置図 右 発掘調査遺構図)

さらに、本研究は、李朝跡宮（あんぐう）遺跡の調査結果、焼成粘土製建築模型の分析、日本・韓国・中国といった東アジア諸国の古代宮殿建築や金石文資料との比較対象を行い、幅広い考察をおこなった。本稿では、李朝宮殿建築を造営技術、建築材料、及び建築様式の観点から分析し、古代東アジアの宮殿建築の比較研究における重要な事例を提示するとともに、ベトナム宮殿建築の様相解明に残された「空白」を埋めるための科学的根拠を提供する。

I. 問題提起と方法論

1. 宮殿建築の概念と特徴

東洋の古代および中世の歴史において、宮殿建築という用語は、朝廷によって直接造営、管理され、主として都城内またはその周辺に配置された建築類型を指す。機能面において、これらの建造物は朝廷の政務や生活の空間を創出するのみならず、より重要な点として、皇帝の至高権力を具現化する象徴であり、王権の威信と等級を示し、王室の儀礼的および精神的需要に応えるものであった。宮殿建築の顕著な特徴は、その壮大な建築規模、精緻を極めた施工技術、そして時代の様式を色濃く反映した装飾芸術との融合にある。そのため、宮殿建築は常に、周辺地域の文明との相関関係の中で、一国の科学・建築技術の到達点、ならびに独自の文化的特質を映し出す鏡と見なされてきたのである。

2. 史料の現状と研究上の課題

中国、日本、韓国の古代建築の伝統と同様に、ベトナムの古代建築、特に李朝期は、主に木造軸組構造と瓦葺き屋根を採用していた。木材という有機質材料の特性上、建築物の耐久性には限りがある。過酷な熱帯気候に加え、遷都、戦乱、火災、あるいは後代の王朝による改修・再建といった歴史の変遷の荒波の中では、数世紀にわたり原形を留めることは極めて困難であった。こうした実情により、現代の考古学が対象とし得るのは、主に地中深くに埋没した基壇・基礎遺構や散逸した建築部材に限られている。

タンロン皇城における重点的な考古学的発掘調査（2002～2004年および2008～2009年）により、多種多様な規模の李朝時代の宮殿や楼閣の堅固な基礎遺構が検出された。さらに、塀垣、排水路、井戸、道路を含む、体系的に整備された技術的都市基盤のネットワークも確認されている。これらの発見は、タンロン皇宮における科学的な都市計画思想と高度な造営技術を実証するものであり、精巧な瓦葺き屋根を冠した壮麗な木造建築群の存在を裏付けているものである。

しかし、膨大な量の遺構・遺物が検出されているにもかかわらず、包括的な科学的データが不足しているため、李朝宮殿建築の様相を十全に解明することは依然として困難な状況にある。ベトナムの宮殿建築と、故宮（北京）、昌徳宮（ソウル）、特に奈良（日本）の宮殿・木造仏塔群といった遺産との最大の相違点は、ベトナムには李朝（11～12世紀）、陳朝（13～14世紀）、さらには黎朝中興期（17～18世紀）のオリジナルな木造宮殿建築が地上に一切伝存していないという事実にある。現存する木造建築は、主として周辺地域の宗教・信仰建築であり、その年代も莫朝（16世紀）や黎中興朝（17～18世紀）まで下るものが大半である。一部には李・陳朝の旧基壇上に再建されたものもあるが、その建築形態は改修が繰り返されて変容している。陳朝期から現存する個々の木造部材をもってしても、全体像を復元するには不十分である。したがって、李朝建築解明における最大の「難点」は、建物の軸部および屋根部に関する直接的な視覚資料が完全に欠落している点にある。一方、ベトナムの金石文や史料も、その形状や寸法に関する技術的な記述をほとんど欠く。

3. 研究アプローチ

史料の断絶という状況下で建築形態を復元するという難題を解決するため、本研究は多角的かつ相互補完的な方法論の枠組みを確立する。

第一に、焼成粘土製建築模型の価値の再評価に焦点を当てる。2011年から2015年にかけて、ベトナム北部の諸博物館に所蔵されている家屋・塔の焼成粘土製模型群を調査・分析した。これらの遺物は

主に外部意匠を表現したものであり、内部技術構造の表現には一定の限界がある。しかし、これらは層位学的な考古学調査では解明し得ない李・陳朝建築の形態に対し、信頼性の高い復元の根拠を提供する「時代の化石」たる確実な物証である。

第二に、古代東アジア宮殿建築との比較手法を適用した。焼物製模型の解読と並行し、李朝建築の諸特徴を、日本・韓国・中国（特に宋代）の同時代の宮殿建築と比較対象した。この比較類型学的手法により、東アジア木造建築に共通する構造原理を特定した上で、ベトナム宮殿建築が持つ土着的な、特異性を抽出し、浮き彫りにすることが可能となった。

第三に、本研究では木造建築の垂直構造を分析する手法を取り上げる。潘谷西（Pan Guxi）と何建中（He Jianzhong）（2005）のアプローチを継承し、建物を以下の三つの部位に解体・分析する。(1) 下部構造（基礎）は、面積、方位、基礎補強構造、礎石配置、柱間などの要素を含む。この部分は最も豊富な考古学的データを有する；(2) 中部（主要構造）は荷重を支える木造軸組システムであり、柱の比例、柱間構成、建具・壁体システムを通じて考察する；(3) 上部構造（屋根部）は、斗栱による支持構造（ブレース）、瓦の種類、及び棟飾りなどの装飾システムを含む。これらのアプローチを統合することで、次節以降における李朝宮殿建築の様相特定と復元に向けた、確固たる科学的基盤を構築するものである。

II. 李朝宮殿建築様式：考古学的資料に基づく分析

1. 建築の平面プランと地盤処理技術

2002年から2004年、および2008年から2009年にかけてタンロン皇城遺跡で行われた大規模な考古学的発掘調査の結果、この時代の建築様相を特定するに足る多種多様な建築部材や大規模な建築基礎遺構群が検出された。42,000m²にわたる発掘総面積において、考古学者は53基の建築基礎遺構、7条の垣、6つ基の井戸、そして13条の排水路を含む高密度な遺構群を確認した。これらの定量的な数値は、李朝治下のタンロン都城内に存在した建造物の膨大な規模と高い集積度を裏付ける確かな物的証拠となっている（図1-2参照）。



図2：タンロン皇城遺跡における李朝期の建築遺構 ブイ・ミン・チー撮影

層位学的分析の結果、李朝期のベトナム人の地業技術は、デルタの地質条件に適応する高度なレベルに達していたことが明らかになった。建物の基礎の痕跡は、遠く離れた丘や山から首都へ運ばれた粘土を多層に突き固める技法によって明確に識別され、安定性を高めるために建設廃材や窯跡からの廃棄物（割れた陶器、瓦礫）を混入して補強されることもあった。特に注目すべきは、建築基礎の縁が長方形の磚で造られ、その表面が高温焼成による特有の淡黄色を呈する方磚で敷き詰められていた

点である。主要構造物周辺には、回廊、周囲の壁、給排水システム（井戸、排水路）が整然と計画・配置されており、高度な都市計画思想の存在を実証している。これは、1010年の遷都後に推進されたタンロン皇宮の造営事業が、膨大な資源の動員と極めて厳格な施工管理体制を要する、まさに国家的一大プロジェクトであったことを示唆している。

1.1. 礫石柱基礎と構造技術の変遷

考古学的証拠から李朝建築を特定する最も根本的な特徴は、礫石基礎地業システムである。従来の布掘りとは異なり、柱網（グリッド）に従って正方形の独立基礎地業穴を整然と配置する手法がとられた。その内部には、川砂利、細かな瓦礫、あるいは陶磁器片が充填され、堅固に突き固められていた。この地業こそが、上部からの木柱の荷重を直接支える構造上の要であった。

礫石柱の基礎地業技術は、紅河デルタの軟弱な地盤への適応を示す顕著な技術的成果と見なされている。基礎地業穴の典型的な寸法は各辺110cm～150cm、深さは150cmから300cm以上に及ぶ。沈下防止のため硬質材料（主に河川礫と丘陵土の混合物）で堅固に突き固められている（Tông Trung Tín & Bùi Minh Trí, 2007: 58-70）（図3参照）。この技術は丁・前黎朝（10世紀）にその萌芽が見られるものの、李朝に至って初めて規格化され、大規模建築の造営規範として確立されたものである。単独の正方形基礎に加え、この遺跡では長方形の柱基礎（双子基礎）も確認されており、これは二つの礎石を支えるために用いられ、独特な軸組構造を持つ小規模な建造物によく見られる（Bùi Minh Trí, 2016:13-44）。

礫石基礎システムと共に、木製造柱を支える148基の礎石が発見された。内訳は73基の四角形礎石（礎石建柱用）と75基の掘立柱礎盤である。計測結果から、サイズは最小60×60cmから最大100×100cmまでと多様である。礎石に残された痕跡から、柱の直径は38cmから59cmの範囲と推定され、主柱の一部では直径70-80cmに達する例も確認された。



図3：タンロン遺跡の李朝の地業の遺構 プイ・ミン・チー撮影
（訳注：左 調査地の様子 中上 礎石と地業 中下 地業断面 右 地業と柱 想定図）

これら膨大な数と規格外の大きさを持つ礎石群は、タンロン皇宮の建築が主に大規模な円柱を用いた木造軸組建築であったことを裏付ける、説得力のある定量的証拠である。これは17世紀にA.ド・ロードが記録しているように、長期にわたり強固に継承された伝統である（A. de Rhodes, 1908: 179）。

美術史的観点から見ると、李朝の礎石は精巧に作られており、鋭くも優美な蓮弁紋が施されるのが一般的であった。特に注目すべきは、考古学によって発見された極めて精緻な装飾を施された質の高い礎石である。これらは、蓮の花弁の内側には龍と菊の蔓が彫られ、あるいは礎石の四辺には生き生きとした音楽演奏の場面が写実的で精巧な線で刻まれている（図4参照）。これらの礎石は単独で存在するのではなく、建造物全体に一貫して使用されており、皇宮や朝廷における最重要建造物の荷重支持部材でも、いかに精巧に加工され、徹底した「芸術的」性質が備わっていたかを反映している。

技術的な観点から見ると、一部の礎石は多機能な設計思想を示している。それは、単に柱を支える



図4：タンロン遺跡における李朝 (11c - 12c) の礎石 プイ・ミン・チー撮影

だけでなく、地覆や仕切り壁を設置するための溝を備えている点である。特に注目すべきは、考古学的データが二つの技法の並存を明らかにしている点である。すなわち、礎石上に設置された「礎石建柱」と、地中深くに打ち込まれた「掘立柱」である。この組み合わせは独自の構造的解決策を生み出した。それは、深い埋設による掘立柱（安定性向上と風雨への耐性強化）が、礎石上に設置された屋内の側柱と支柱（風雨に対する構造補強）を囲むシステムである（図5参照）。これは、李朝初期のタンロン皇禁城において重要な機能を持つ建造物に用いられた特有の建築技術を示す重要な証左である。（Bùi Minh Trí, 2016: 13-44）（Bui Minh Trí 9）

1.2. 平面形態と八角形建築の建築的特徴

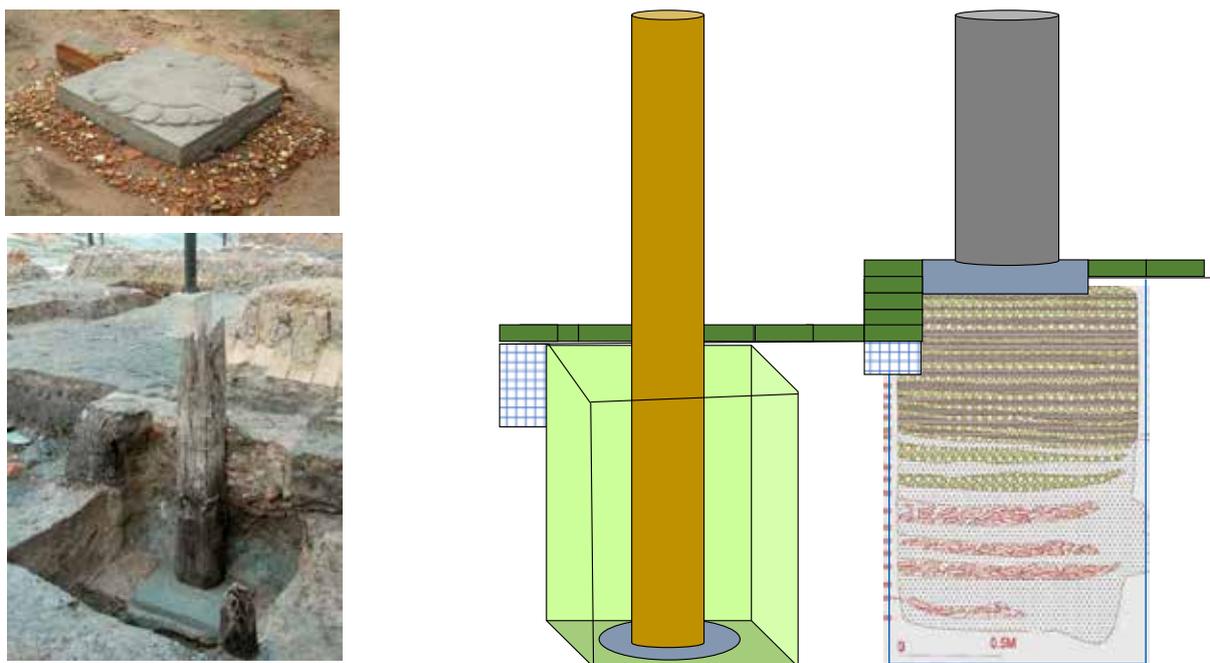


図5：掘立柱と礎石建柱 プイ・ミン・チー撮影、作図
 (訳注：左上 礎石と地業 左下 掘立柱 検出状況 右：掘立柱・礎石建柱の想定図)

礎石の配置規則とその分布を検討することにより、長方形、正方形、六角形、八角形といった多様な建築平面形態が確認できる。なかでも最も一般的なのは、平方向に展開する長方形平面（長い建物）であり、間数は7間、9間、11間、13間といった奇数が主で、宮殿建築における厳粛な空間秩序を象徴している。一方、2間、6間、8間、10間などの偶数間をもつ建物は比較的小規模であり、これらと並行して、長大な回廊を伴う建築群も存在する。こうした構成は、建築群全体に連続性と多様性を付与している（図1参照）。

タンロン皇城における建築類型上、最も注目すべき特徴は、多角形建築群の出現である。その代表例として、平面規模の大きい八角形建築（遺構番号 LYCKT50 平面面積 702m²）が挙げられる。本建築は、周囲に配置された16本の二重になった柱と、中央に据えられた1本の大型中心柱（Central Pillar／心柱）からなる構造体系を有している。さらに、基礎は極めて大きな荷重に耐えるため、河原石を用いて特別に堅固に補強されている。心柱の存在は、複雑な仕口処理や高度な屋根架構技術を必要とする要素であり、これにより本遺構は、壮大な規模を有する多層構造の楼阁建築であった可能性が高いと考えられる。

古代東アジア建築の文脈において、本八角形建物は近隣諸国と比較する上で深い意義を持つ。中国では多層八角形平面は主として仏教建築、とりわけ仏塔に結び付けられる事例が多く（山西省・仏宮寺釈迦塔など）、一方、日本では八角形建築は主に単層の円堂（八角堂）に限定される傾向があり、その代表として法隆寺夢殿が挙げられる。（訳注：日本には円堂は夢殿以外に複数ある）一方、日本における多層木造塔は、一般に正方形平面を基本とする。こうした東アジア諸地域の建築的通例を踏まえると、タンロン皇城の禁城区域において多層構造をもつ八角形楼阁建築が出現することは、きわめて特異な現象として位置付けることができる（図6参照）。

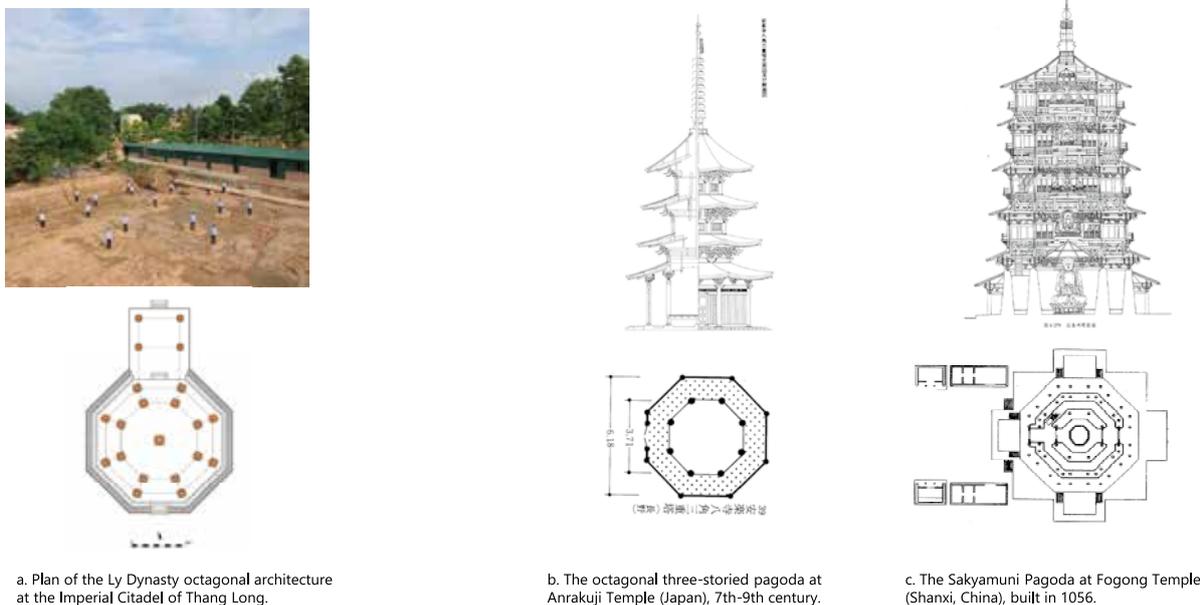


図6：ベトナム李朝の八角形建築と東アジアの八角形建築との比較

a：タンロン皇城における八角形建物の図面

b：日本の安楽寺八角三重塔 (7-9c)（訳注：正しくは1290年ごろ）

c：1056年建立 仏宮寺釈迦塔（中国、山西省）

この八角形建物は、一般的な宗教建築や単なる休憩用の楼阁とは考え難く、むしろ王権の象徴、あるいは重要な王室儀礼に供された建築であった可能性が高い。このような形態の選択は、李朝における独自性と強い主体性を備えた建築思想を反映するものといえよう。さらに、実測データによれば、李朝建築における柱間寸法は非常に大きく、平均で5.7mに達している。とりわけ調査区の南西部地域（現・国会議事堂）では、二列の柱列をもつ建築において、柱間が6.0mから7.5mに及ぶ事例も確認されている。これらの数値は、同時代の周辺地域における多くの建築例と比較しても際立って大

きく、李朝期の人々が断面の木材部材を高度に活用・加工する優れた技術力を有していたことを示すものである。

1.3. モジュール化と規格化された寸法体系

基壇構造の寸法比率に関する研究により、李朝期の宮殿建築は恣意的に造営されたものではなく、厳密な寸法体系に調和した原理に従っていたことが明らかになった。建築部材の構成（柱、梁、柱間など）はすべて基本単位に基づく比例関係を有している。井上和人研究員は大量の基礎データを統計分析し、李朝の基準寸法を再構築した。その結果、李朝の単位は宋朝（中国）の単位と同じであり、1単位は約29.98cm（およそ30cm）であったことが判明した（井上和人、2015:9-17）。さらに、『中国度量衡史（紀元3～14世紀）』（郭正忠、1993年）に記録された宋代の度量衡体系と同一の尺度が採用されていた事実は、大越が東アジア建築における技術的規範の共有圏に組み込まれていたことを示唆している。

基準寸法は、天文学的な方位設定および風水学的要素にも明確に表れている。すなわち、すべての建築は南北軸を基準として厳密に配置されており、その方位には北東方向へ約4～5度の偏角が認められる。さらに、Bùi Minh Trí (2015)によれば、李朝期建築における各種寸法値（長さ・幅・柱間寸法）は、いずれも3で割り切れる数値体系に従って設定されているという。このような数学的整合性は、設計段階から施工、さらには建築の実現に至るまで、高度に組織化され、統一的に管理された専門的な建設体制の存在を示すものと考えられる（Bùi Minh Trí 2015:19-63）。

2. 耐荷重木造軸組構法の解説

2.1. 歴史的文脈と建設の背景

ベトナムの正史史料には、タンロン皇城における宮殿造営活動が比較的詳細に記されており、李朝における建築事業の規模がきわめて壮大であったことをうかがわせる。1010年の遷都直後、李太祖は乾元殿（カン・グエン殿）、集賢殿（タップ・ヒエン殿）、講武殿（ジャン・ヴォ殿）、龍安殿（ロン・アン殿）、龍瑞殿（ロン・トゥイ殿）をはじめ、翠華宮（トゥイ・ホア宮）、興天寺（フン・ティエン寺）、五鳳精楼（グ・フオン・ティン楼）など、王都の中樞をなす一連の重要建築の造営に着手した。その後の年代記、とりわけ1203年の李恵宗朝における記録では、新たな宮殿建設の状況が詳細に叙述され、「古来未曾有」と形容されるほどの壮麗さが強調されている（『大越史略』2005:166）。『大越史略』『大越史記全書』『越史通鑑綱目』といった主要正史を総合すると、李朝期には大小合わせて56回に及ぶ建設事業が確認され、そのうち1010年・1029年・1203年の三度にわたり大規模な都市の再編を伴う造営が行われたことが分かる。これらを通じて、具体的に名称が確認できる各種建築は計207件のぼる。このような歴史的背景に、国教としての仏教の隆盛が重なり合うことで、李朝期には高度な技術と豊かな創造性を備えた建築的達成が可能となり、当時の建築工匠・設計者たちの卓越した構想力が結実したのである。

2.2. 耐荷重木造軸組構法に関する復元的検討（建築構造）

屋根瓦や棟飾りなどの遺物から建築の外観はある程度復元可能である一方、木造建築全体が現存せず消失しているため、建物本体の耐力構造、すなわち木造軸組の解明は最大の課題となっている。しかしながら、考古学的発見および比較研究に基づき、建物の架構形態は徐々に復元されつつある。材料面では、タンロン皇城における木材サンプルの分析結果（2010年）から、李朝期の耐力柱には、リン（Lim）、タウ（Tau）、および特に多用されたセン（Sen, *Madhuca pasquieri*）など、いわゆる「四鉄」に分類される高耐久木材が主として用いられていたことが明らかとなった（Bùi Minh Trí, Nguyễn Thị Anh Đào, 2015:127-141）。これらの柱の寸法は非常に大きく、柱を支える礎石の直径に基づいて相対的に推定できる。上部構造に関しては、床を支えていたレンガの痕跡の存在と、紡錘形の木製扉などの遺物とを合わせると、李朝宮殿の建築は、耐力壁によるレンガ造りではなく、主に木の板で内部を囲むシステムを採用していたと結論付けることができる。この結論は、フォーミン寺で発見された陳朝時代の「回転脚」木製扉と比較することでさらに強固なものになる。この扉は、遺跡で発見さ

れた石の扉枠と一致しており、木製の壁と扉の柔軟なシステムを示唆している (Bùi Minh Trí, 2016: 13-44)。

復元作業において最も複雑な課題は、柱の高さをいかに推定するかという点にある。技術的な設計記録が残されていない状況下では、中国・朝鮮半島・日本における宮殿建築との比例比較手法が採用されており、一般に柱高は柱間幅 (基準となる柱間) とほぼ同等とする原則が用いられる。この原則に基づき、李朝期における主柱 (柱脚を有する主要柱) の平均的な高さは、おおよそ 5.10m から 5.70m の範囲にあったと推定される。この数値は、屋根を支持する軸組および小屋組全体の高さを設定し、建築の立面を復元するための基礎的パラメータとなる。また、軒の出の寸法に関する検討からも、注目すべき知見が得られている。18 ホアン・ジエウ遺跡における基壇遺構の実測結果によれば、李朝期建築の軒は比較的浅く、その出寸法は概ね 120cm から 180cm の範囲に収まっている。この値を、『营造法式解説』(潘谷西・何建中、2005 年) および傅熹年 (2009 年) による宋・元代建築研究に示された規準と比較すると、第 4 級の軒出 (約 137 ~ 160cm) に相当することが確認できる。すなわち、一定の共通した技術的規範を共有しつつも、李朝建築は独自の地域的比率を保持していたことが示唆される。

2.3. 組物構法の存在を示す証拠 (建物上部構造)

2011 年から 2015 年にかけて行われた一連の研究における最も重要な成果は、李朝の宮殿建築に組物 (斗拱) 構法が用いられていたことを実証的に確認した点にある。この画期的な結論は、考古学的遺物、建築模型、そして文字資料 (碑文) という 3 つの独立した資料群の相互補完的検討によって導き出されたものである情報源を統合することによって得られている (Bùi Minh Trí, 2016: 13-44)。

まず第一に遺物について。李朝文化層の発掘調査では、朱漆塗りの木製部材や組物を持つ建築模型の破片などが発見された。なかでも注目されるのは、溝加工を伴う方形木材であり、これは「斗(ます)」、とりわけ荷重を受け持つ「櫨斗 (ろと)」に相当する部材と判断される。これは、上面に十字形の窪み、下面に四角いほぞ穴を備えた、荷重を支える組物の一部で、『营造方式』(李誠、1103 年) の基準と一致している。さらに、全体に貫通する溝を有する小型の斗材も確認されており、これは日本建築における卷斗 (まきと) に類似する要素と考えられる (図 7 参照)。梁 (ゴング) の完全な形は発見されていないが、これらの特殊な柄の存在は、李朝建築において柄と柄穴構造が屋根を支える構造に用いられていたことを示す紛れもない物的証拠である。

第二に、建築模型に基づく資料が挙げられる。北寧省 (バク・ニン省) や南定省 (ナム・ディン省) における李・陳朝期の素焼き製建築模型、ならびに富寿省 (フート省) の平山塔 (ビン・ソン塔) に加え、特に注目されるのが、広寧省 (クアン・ニン省)・瓊林寺 (クイン・ラム寺) に伝わる李朝期の石塔模型および、富寿省 (フート省)・チョー寺に残る陳朝期の陶製塔模型である。これらの模型は、



図 7 : タンロン皇城で出土した李朝の組物の部材 ブイ・ミン・チー撮影

当該構造をきわめて具体的かつ視覚的に示している。これらの模型においては、組物（斗栱）が「詰組（inter-columnar bracket sets）」として明瞭に表現されており、斗栱が柱頭部のみに設けられるのではなく、柱間にも水平方向に密に配置されている点が確認できる。このような「連続的組物配置」は、本構造の大きな特徴である。さらに、斗栱群の柱間部分に葉提（ようてい）文様を配して装飾する点は、李・陳朝建築に特有の意匠であり、日本・朝鮮半島・中国における組物装飾とは明確に異なる地域的特徴を示している。また、「垂木を覆う軒構法（いわゆる桁下覆い構法）」の採用や、斗栱と一体化して屋根荷重を支える龍・ガルダ・キンナリー像などの彫刻表現を伴う点も、これらの模型に認められる重要な特徴であり、大越建築における独自の構造的・造形的創意と評価できる（図8参照）。



図8： 陳朝の組物の模型 ブイ・ミン・チー撮影

第三に、李朝の碑文資料、例えば「思朗州崇慶寺鐘銘」（1113年）および「円光寺碑銘」（1210年）（Pham Lê Huy, 2016:45-62）は、組物の色彩や用語に関する最後の重要な手がかりを提供している。

碑文中に見られる「丹樓「đan lô」（赤く彩色された栱）」や「画栱「họa cùng」（文様を描いた栱）」といった表現は、李朝期の斗栱構法が単に存在していたのみならず、朱色の彩色を施し、さらに龍・鶴・仙女などの文様を描くという、きわめて装飾性の高い意匠を伴っていたことを明確に示している。これらの文献記述は、タンロン皇城遺跡から出土した木製構造部材に認められる朱彩の痕跡と完全に符合しており、碑文資料と考古学的実物資料とが相互に裏付け合う形で、李朝宮殿建築における彩色斗栱の実態を具体的に復元することを可能にしている。

以上の検討から、組物（斗栱）構法の存在を確定することは、屋根形式を解釈するための「鍵」となる要素であることが明らかとなる。この構造法は、耐荷重と屋根の突出という問題を解決するだけでなく、李朝宮殿建築が東アジアの木造建築の水準に達し、独自の美的特徴を生み出していたことを示している。これらの研究成果は、李朝建築が礎石の上に木造の骨組みを載せ、彩色された組物と瓦屋根を採用することで、統一された構成を成していることを裏付けている。東アジアの他の宮殿建築とは形態こそ類似しているが、細部においては独自の特徴を有している。

3. 屋根構造と建築的表現

タンロン皇城の発掘調査では、基礎構造に加えて、極めて多量の屋根葺材が出土している。1に示した73,856点に及ぶ出土資料の統計データからは、平瓦（凹瓦）と丸瓦（凸瓦）が多数を占めていること、さらに、蓮葉、龍、鳳凰、鴛鴦など多様な装飾意匠をもつ瓦類が豊富に存在していることが確認できる。これらの数量的データは、建築群の規模の巨大さを示唆するのみならず、李朝宮殿建築における屋根構成の技術的特質や美的志向を検討するための、重要な物的基盤を成すものである。

表 1：発掘調査で発見された李朝時代の屋根材の量と種類に関する統計

TT	遺物の種類	数量（個数）	備考
1	平瓦（凹瓦）	39,035	最も大きな割合を占める
2	丸瓦（凸瓦）	25,484	
3	棟覆瓦	715	
4	均整蓮弁（菩提葉）	4,687	凸瓦上の装飾
5	偏位蓮弁（菩提葉）	2,122	棟覆瓦の装飾
6	鴛鴦	551	屋根瓦の装飾要素 棟覆瓦の装飾
7	龍と鳳凰の像	1,241	切妻の端と軒の端の装飾
	合計	73,856	

3.1. 屋根瓦の種類と機能の分類

屋根材は、形状学的分析に基づき、その技術的機能と設置場所に応じて体系的に分類することができる。主な瓦群は、雨水受けと排水の役割を担う丸瓦と平瓦（樋瓦）が含まれる。上向き（凹）の列が水を受け、下向き（凸）の列が目地を覆う構造で、屋根の傾斜に沿って平行な溝を形成し、熱帯雨林地帯における最適な排水効率を確保する。軒瓦群（ベランダ列）（訳注：軒先瓦のことか）は、美観を重視した特別な処理が施されている。屋根の端部には、軒丸瓦と軒平瓦が用いられ、柔らかな印象を与える。特に、軒先では軒丸瓦の上部に、焼成粘土で作られた菩提葉の装飾が施されることが多く、菩提葉の紋様には玉庭の龍や舞う鳳凰などの精巧な彫刻が施され、重層的な装飾効果を生み出している。最後に、屋根の棟と下棟の装飾瓦群には、オシドリ、オフセットの菩提葉、バランスの取れた菩提葉、龍頭、鳳凰頭などの大きな像が含まれている。これらの装飾品は、棟、破風、棟中央、下り棟といった「要所」に配置され、地平線に印象的なハイライトを作り出し、大越のアイデンティティを最も明確に表現している。

李朝建築が、同一の文化圏に属する他の東アジア建築と「共通性と差異性」を同時に示す最も顕著な要素は、軒先に用いられる軒瓦（丸瓦）による意匠に見いだされる。中国・日本・朝鮮半島の宮殿建築においては、蓮華文や霊獣文を施した円形の瓦当をもつ軒瓦が一般的であるのに対し、タンロンの宮殿建築では、これを大きく踏み越える独自のベトナム化が図られている。李朝期の軒瓦は、精緻に装飾された円形瓦当を備えるだけでなく、その上面に左右対称形の菩提葉文を象った焼成土製の装飾板を付加している点に特徴がある。この構成により、軒先は単なる屋根の終端処理から、立体的かつ上方へと展開する装飾帯へと転化した。このような表現は、同時代の東アジア宮殿建築における軒瓦構造には類例が認められない。建築部材の「装飾化 (ornamentalization)」は、さらに、動的な姿勢（翼を広げ、首を伸ばす）で表現された鴛鴦像を伴う棟瓦や、妻壁部に据えられた大型の龍頭・鳳凰頭像にも顕著に表れている。これらの装飾瓦の中には、重量が 250kg に達するものも確認されている。鮮紅色を呈する焼成土という素材の多様な使用と、きわめて大型の装飾部材の存在は、李朝期の工匠が窯焼成技術のみならず、重量部材を前提とした構造計画および施工技術を高度に掌握していたことを明確に示している（図 8-11 参照）。



図9：李朝の宮殿建築の屋根瓦（飾瓦） ブイ・ミン・チー撮影

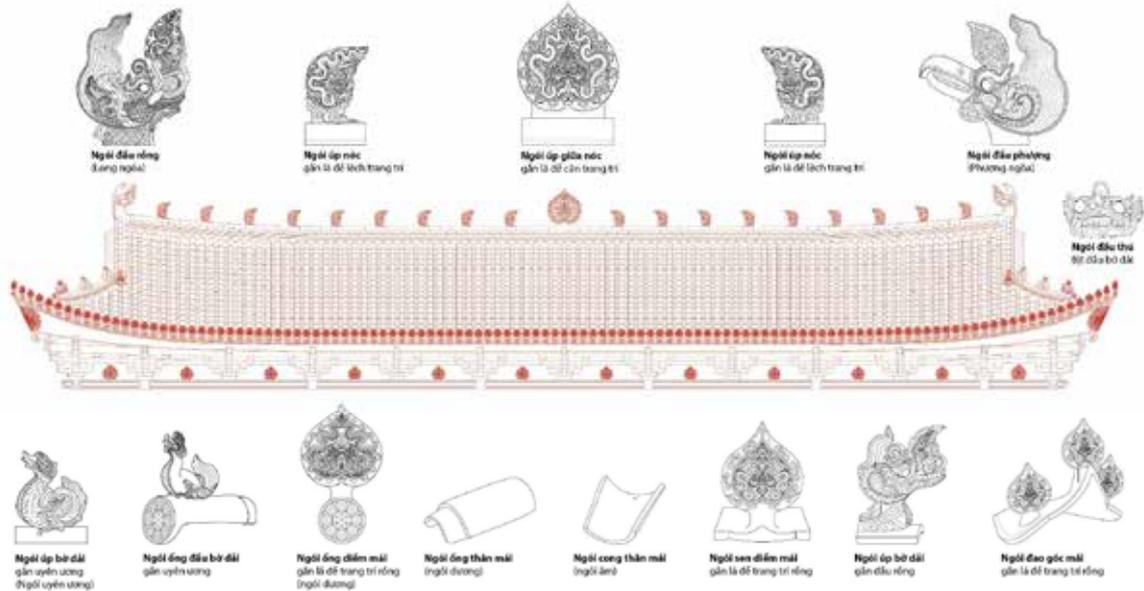


図10：李朝・陳朝の各種瓦の紹介 ブイ・ミン・チー作成



JAPAN

KOREA

THĂNG LONG - VIETNAM

図11：ベトナムの屋根瓦と東アジアの屋根瓦の比較
(訳注：左から 日本、朝鮮、タンロン遺跡・ベトナム)

3.2. 屋根葺き技術と屋根構造

考古学的資料および建築模型の総合的分析により、李朝宮殿建築における屋根形態は、その技術的特質とともに復元可能となった。形式面では、妻壁を閉じる切妻形式ではなく、四方に屋根面を展開する入母屋造（Hip-and-Gable roof）が主流であったと考えられる。美的側面において、屋根全体は鳥の翼を思わせる緩やかな反りを有しており、李朝期の碑文にはこれを詩的に表現した記述が見られる。例えば、「軒は翼を広げ、鳥が四方へ飛翔するがごとし」（『宝寧崇福寺碑』1107年）や、「屋根の隅角は、翼を張って舞い上がるかのように立ち上がる」（『崇厳延聖寺碑』1118年）といった表現である。このような視覚効果は、強く反り上がる隅木先端（斗棋上の隅部）および隅部装飾によって生み出されていた。

屋根勾配については、元代の使節・陳孚が『安南即事』（1293年）の中で、大越の建築を「直峻にして傾くがごとし（直峻如傾）」と描写している。この特徴は、李朝・陳朝建築が、『营造法式』（李誠、1103年、北宋）に記される折上げ（折れ）による起反構法（いわゆる「折上げ法」）を全面的には採用していなかったことに起因すると考えられる。その代わり、直線的で急勾配の屋根形式が選択され、これは多雨なベトナムの気候条件に適した、迅速な排水を可能とする合理的な構造であった。屋根葺き技法については、李朝建築は東アジア地域に共通する陰陽瓦葺（丸瓦・平瓦による本瓦葺き）を基本としつつも、各瓦部材の造形意匠において独自の美的展開を示している（図12参照）。

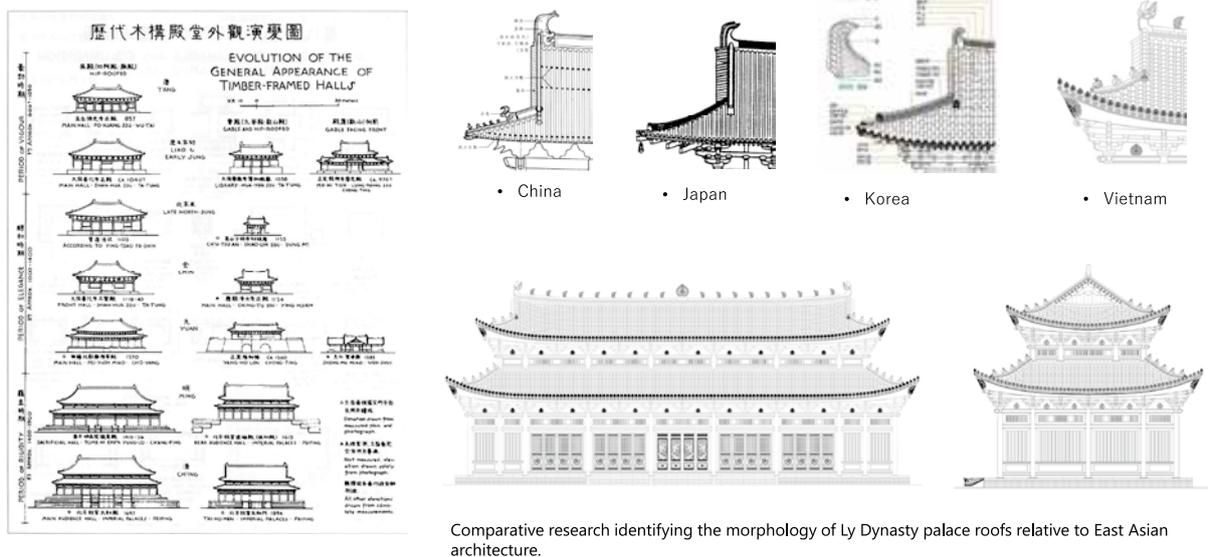


図12：ベトナム李朝の屋根と東アジアの屋根との比較 プイ・ミン・チー作図

3.3. ベトナムでの復元作業と比較方法論

李朝の屋根構造を解明していく過程は、「少ない手掛かりから想定する (extrapolation)」から「証拠に基づく復元」へと移行していく知的プロセスであったと言える。とりわけ2014年から2015年にかけては、研究者が各種瓦の機能と配置を正確に特定し、考古学的データ（形状、寸法）と技術的原理（荷重、傾斜）を統合した復元図を作成した転換期となった（図13参照）。

李朝建築の特質と価値を相対的に把握するためには、中国・宋代建築との比較という文脈に置くことが不可欠である。宋代は木造建築の絶頂期であり、北宋時代の1103年に李傑が編纂・公布した『营造法』という標準化されたマニュアルに要約されている。タンロン皇城遺跡の出土品と营造法を比較することで、文化交流と同化の深遠な様相が浮かび上がる（表2参照）。

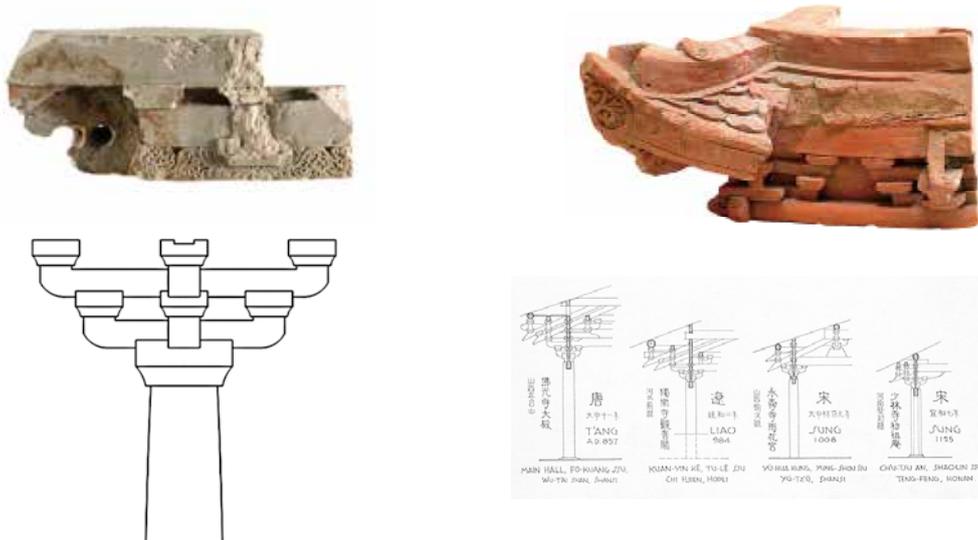


図 13：李朝の木造建築の組物構造

表 2：李朝（Đại Việt/ 大越国）と宋朝（中国）の宮殿屋根建築の基本的特徴の比較分析

比較カテゴリー	李朝宮殿（Đại Việt）の建築	宋代（中国）の宮殿建築	コメント
耐荷重構造	組物構造	組物構造 (Dougong)	東アジアの木造建築の「共通の技術言語」を共有することで、技術的な熟練度の類似性が証明される。
屋根の形	湾曲した屋根、急勾配、高い屋根角度。妻が2つある切妻屋根によく見られる。	屋根は湾曲しており、勾配が急で、軒は上向きに反り返っている。多様な形式（陸屋根、妻が二つある屋根）。	同じ構造原理を採用しているため、全体的な形状が似ている。
素材と色	主に赤色の焼成粘土：釉薬をかけたタイル（緑、白、黄色）はあまり一般的ではない。	厳格な規則：皇帝には黄色の釉薬、貴族には青い釉薬。	大越時代は施釉タイル技術を採用していたが、その運用や等級化において独自の分類システムを持っていた可能性がある。
特徴的な装飾	龍と鳳凰をモチーフにした瓦縁飾り、オシドリと龍と鳳凰をモチーフにした瓦葺。	軒飾丸。軒に沿って一列に並べる屋根瓦。	根本的な違い：独特の文化的アイデンティティと美的感覚を表現する。
象徴的紋様	王の力（龍、鳳凰）と聖なる力（蓮の葉、蓮の花）を融合し、「仏王」の概念を反映している。	世俗的な権力と天命を強調する儒教/道教のシンボル。	支配的なイデオロギーの違いを反映している（ベトナムでは仏教、宋では儒教）。

比較研究の結果は、李朝宮殿の建築様式が宋建築の受動的な模倣ではなかったことを明確に示している。共通の技術的「文法」（継ぎ手・仕口）を基盤として、大越の建築家工匠たちは独自の「方言」

を創造した。これは、仏教の象徴（蓮の葉、蓮の花、鴛鴦）を建築要素に大胆に組み込み、王権の荘厳さと宗教的な静謐さを併せ持つ美を生み出した。これは、東アジア文明の流れに溶け込みながらも、消滅することなく、独自の文化的アイデンティティを築いた証である。

III. 東アジアの経験をふまえ、タンロン皇城の復元を考察する

建築史の長い潮流の中で、首都計画を国家の物理的な骨格と例えるならば、宮殿建築はその王朝の政治的権威や美意識を反映する「魂」に相当する存在である。しかし、世界文化遺産タンロン皇城においては、その「魂」は時と歴史の変遷によって埋もれ、現存する遺構は主に考古学的基礎や散在する断片的な建築部材といった形で残されている。残された資料は貴重ではあるものの、後世の人々が千年前の壮麗な姿を思い描くには不十分である。だからこそ、宮殿建築の謎を解き明かすこと、あるいは失われたタンロン皇城の姿を復元することは、科学的課題であると同時に、きわめて深い歴史的意義を有している。

考古学的遺跡に基づく建築研究および復元は、世界的に重要かつ挑戦的な学術分野であり、特に東アジア諸国においては顕著である。東アジア諸国は、共通の木造建築文化という豊かな基盤を有する一方で、時間の経過や火災といった要因に対してきわめて脆弱な建築遺産を抱えている地域でもある。李朝の建築形態を復元する方法論を模索する上で、国際的な経験、特に日本、韓国、中国における成功例を参考にすることが極めて重要となる。近隣諸国からの実践的な教訓は、考古学的証拠と建築仮説との弁証法的な関係を扱うプロセスについて、多面的な視点を提供する。

古代の首都遺跡保存の復元において先駆的役割を果たしてきた日本は、その代表的な事例として位置づけられる。奈良時代（710～784年）の平城宮の調査・復元から得られた知見は、遺跡の類型という点で、タンロン皇城（主に柱跡が残る遺跡）と多くの共通性を有する、示唆に富んだケーススタディである。

日本の研究者たちは、物的証拠の価値こそが歴史文書の真正性を検証する上で核となる基盤であると明確に位置づけている。さらに重要なのは、奈良におけるデジタル技術と3Dによる模型への応用が、視覚化機能にとどまらず、耐力構造や建築技術に関する仮説を科学的に検証するツールとしても機能していることである。痕跡の解読、想定図の作成、実際の復元に至るまで、奈良における復元プロセスは、多分野にわたる連携と長期的なビジョンを必要とし、地域社会の意識向上と歴史教育に役立てながら、遺産を徐々に「再生」することを目指している。

同様に、韓国および中国における復元事業も目覚ましい成功を収めている。韓国の慶州市における東宮と月池、あるいは中国の西安市における唐代の大明宮の再現といったプロジェクトは、考古学的現地調査、歴史分析、そして伝統的な建築技術を組み合わせることに多くの示唆を提供している。特に、韓国における継手・仕口技法と色彩装飾美術（丹青 / *Dancheong*）の復元経験は、李朝の構造的枠組みと建築色彩を解読する上で重要な参考資料となっている。これらのアプローチは、タンロン皇城、特に八角塔建築の複雑な構造の復元に関する研究にとって貴重な参照できる枠組みを提供していて、考古学と建築学の思考をほころびのないように統合する必要がある謎解きであることを示す。

東アジア地域における先進的な方法論的成果を取り入れ、2014年から2020年にかけて実施された李朝の3D建築復元研究プログラムは、画期的な科学的取り組みであった。ベトナムにおけるこの先駆的な研究プロジェクトは、美的感覚や類似のモデルに基づいて「推定」手法から「証拠に基づく復元 (evidence-based reconstruction)」手法への根本的な転換を示すものである。

構造原理や、建築考古学の手法を示す数万点に及ぶ考古学的遺物、そして東アジアの伝統的な建築史を統合することで、本研究はこれまでの認識にあった「空白」を補完し、李朝の建築形態を段階的かつ高い精度で再構築することを可能にした。このプロセスの成果は、技術図面と精密な3Dモデルからなるシステムとなり、菩提樹のモチーフで飾られた幾重にも重なった軒丸瓦と、そびえ立つ神話上の獣の彫刻を備えた特色ある宮殿建築の屋根構成を再現している（図14-15参照）。



LY.E.KT014

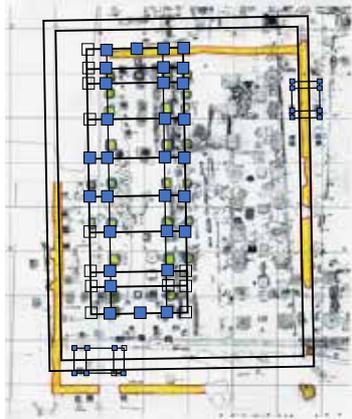


図 14：タンロン皇城の宮殿・楼閣の図面研究成果
(訳注 左上 遺構番号 LY.E.KT014 の様子 左下同遺構図 右 李朝の遺構図)



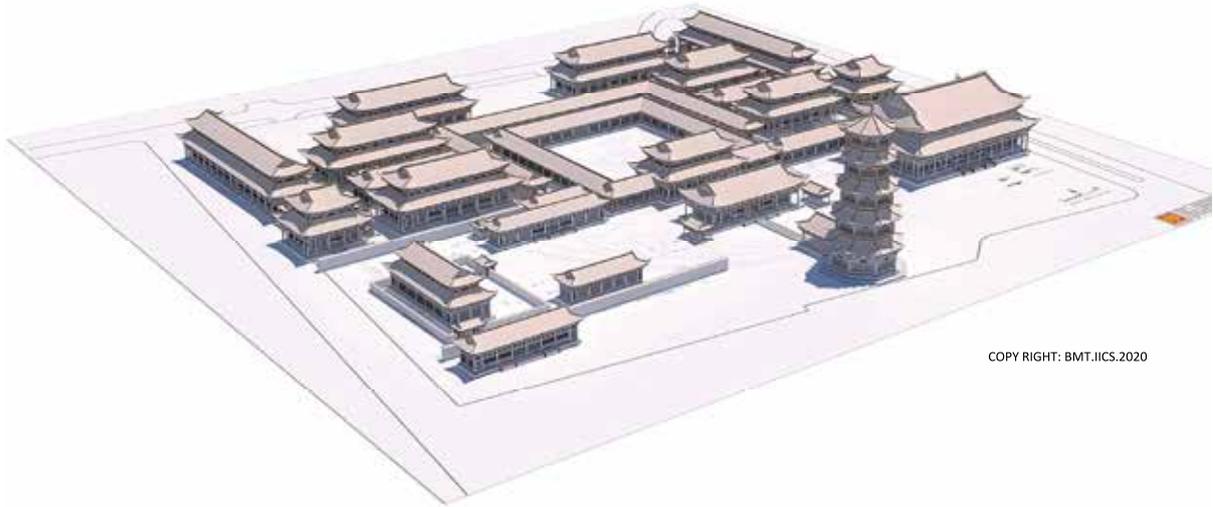
COPY RIGHT: BMT.IICS.2015

図 15：李朝建築形態 3D 復元モデル（遺構番号：LY.E.KT014）
出典：ブイ・ミン・チャー

特に、2021 年には、タンロン皇城の建築形態全体の解明と復元に関する研究成果を公式に発表した（図 16 参照）。本成果では、ホアンディウ 18 考古遺跡と国会議事堂建設予定地での考古学的遺物に基づき、李朝の宮殿と塔の全体像を再現した。

研究結果では、38 の宮殿や回廊、26 の六角形建物を含む 64 の建造物からなる壮麗で特徴的な建築群が、統一的に計画された城壁、道路、門が系統的に組み合わせられていることが明らかになった。これらすべての痕跡は、李朝の黄金期における計画に対する体系的かつ科学的なアプローチを示している（Bui Minh Tri, 2021）。これらのデータは、李朝時代のタンロン皇宮が多くの大規模な木造建築物を備えた壮大な建築複合体であり、同時代のアジアの有名な王宮に匹敵する建築レベルに達成していたことを裏付けている。

本稿で提示する李朝の建築形態の復元成果は、ベトナムおよび東アジアの建築遺産資料の宝庫を豊かにするだけでなく、大越建築の独立性と独自のアイデンティティを力強く裏付けるものでもある。地下に眠る遺跡から建築の外観を復元することで、李朝の権力と哲学の象徴を復元するだけでなく、タンロン皇城が英雄的な歴史物語を語り継ぐための確固たる科学的基盤を構築することにつながる。



COPY RIGHT: BMT.IICS.2020

図 16：2021 年のタンロン皇城遺跡における李朝の宮殿・楼閣建築形態の総合的 3D 復元成果
出典：ブイ・ミン・チャー

さらに、本研究は、タンロン皇城を地域における世界遺産の間で、対等かつ実証的な文化的対話を展開し得る存在として位置付けるものである。

IV. まとめ

タンロン皇城における大規模な考古学的発掘調査の結果成果により、極めて価値の高い物的証拠体系が得られた。これらの成果は、大規模な宮殿・塔楼建築群の存在を裏付けるものであり、特に李朝期を中心とする大越の繁栄を物語っている。大型の龍頭や鳳凰像から、精緻な菩提葉装飾を施した飾り瓦や軒瓦に至るまで、高級建築資材の豊富な使用は、壮麗な美観を反映するだけでなく、王朝の権威と格式を明確に表現している。

李朝の宮殿建築は、様式面では、仏教やチャンパ美術との深い文化的繋がりの中で、土着の創造的思考が結晶化したものであり、その過程は独特の建築様式を生み出している。それは、輝かしい造形美と国家の地位に関する深遠な哲学が融合し、「王権」と「神権」が強く並列的に並んでいた痕跡なのである。

技術と構造の面から見ると、地業跡、焼き物模型、銘文などの包括的な分析を経て、本研究は、李朝宮殿建築が斗拱を用いた建築様式であったことを確固たる科学的根拠に基づいて確認した。李朝建築は中国、日本、韓国の古代宮殿建築と典型的特徴を共有しながらも、独自の特性を持つことを確立した。この時期のベトナムの宮城の特徴は、耐荷機能と装飾彫刻要素（菩提葉、龍、鳳凰、ガルダ、キンナリなどの図像）の調和のとれた融合、そして垂木で支持される屋根構造の普及である。さらに、考古学的・歴史的証拠は、かつて丹塗装が施され、精巧な模様で装飾された木造軸組の壮麗な外観を明らかにし、強い視覚効果を生み出していた可能性が高い。

総括すると、過去 15 年間にわたるベトナム李朝宮殿建築の調査と解釈の歩みは、画期的な成果を成し遂げた。最も顕著な成果は、3D 技術を用いて李朝宮殿の建築形態を仮説的に復元することに成功したことである。これにより、信頼性の高い科学的根拠に基づき、直感的で鮮明な映像化が実現した。これらは仮説的な性質を持つ初期の成果ではあるが、世界遺産タンロン皇城の本質的価値を定量的に再評価する上で先駆的な役割を果たしている。これらの成果は、今後、各建造物の機能と名称を具体的に特定し、タンロン皇城の歴史的に栄華を誇った姿を徐々に復元することを目指した、より詳細な比較研究の重要な基礎となるものである。

參考資料

1. A. de Rhodes, 1908: *Historie du Royaume de Tonquin (1627-1646)*, Revue Indochinoise, p.179.
2. Bùi Minh Trí, 2015: Kiến trúc thời Lý ở khu A-B, khu di tích Hoàng thành Thăng Long - Những thành tựu sau 10 năm nghiên cứu, *Thông báo Khoa học* - Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Hà Nội, tr. 19-63.
3. Bùi Minh Trí, 2016: Hình thái kiến trúc cung điện Việt Nam thời Lý dưới ánh sáng khảo cổ học, *Thông báo Khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb. KHXH, Hà Nội, tr.13-44.
4. Bùi Minh Trí - Nguyễn Thị Anh Đào, 2015: Bảo tồn đồ gỗ khu di tích Hoàng thành Thăng Long, kết quả nghiên cứu và những vấn đề đặt ra, *Thông báo khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb.KHXH, Hà Nội, tr.127-141.
5. Bùi Minh Trí - Tống Trung Tín, 2012: Giá trị nổi bật toàn cầu, tính chân thực và toàn vẹn khu trung tâm Hoàng thành Thăng Long - Hà Nội từ phân tích đánh giá di tích khảo cổ học, *Nhật - Việt Tuyển tập bài viết nghiên cứu Hoàng thành Thăng Long*, Viện Nghiên cứu Di sản Văn hóa Tokyo, Japan, tr.135 - 150.
6. Bùi Minh Trí, 2016: *Những khám phá khảo cổ học dưới lòng đất Nhà Quốc hội*, Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội.
7. Bùi Minh Trí, 2018: Vietnam Palatial Architecture in the Ly period similarities and distinctive differences in architectural history of East Asia. Kỳ yếu Hội thảo Khoa học quốc tế tại Hàn Quốc, tháng 10/2018: *Ngói lợp mái*, tr.213-236.
8. Bùi Minh Trí, 2019: Kinh thành Thăng Long thời Lý – Dấu tích thành xưa điện cũ, *Khảo cổ học*, số 3, tr. 46-72.
9. Bùi Minh Trí, 2021: *Viện Nghiên cứu Kinh thành: Chặng đường và Dấu ấn*, Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, 2021.
10. Bùi Hữu Ngọc, 2017: Chân tầng đá khu di tích Hoàng thành Thăng Long – Loại hình, đặc trưng và niên đại, *Thông báo Khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb. KHXH, Hà Nội, tr.89-117.
11. Dương Hồng Huân, 2001: *Cung điện khảo cổ thông luận*, Nxb. Từ Cẩm thành, Bắc Kinh, Trung Quốc.
12. *Đại Việt sử ký toàn thư*, Tập 1, Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, 1983.
13. Đỗ Văn Ninh, 2002: Những viên gạch kể chuyện mình, *Hoàng thành Thăng Long*, Nxb. Văn hoá Thông tin, Hà Nội, tr.139-159.
14. Hà Văn Tấn - Nguyễn Văn Kự - Phạm Ngọc Long, 2013: *Chùa Việt Nam*, Nxb. Thế giới, Hà Nội.
15. Kazuto Inoue, 2015: Các di tích cung điện của Hoàng thành Thăng Long - Phương pháp đo lường và quy hoạch xây dựng, *Thông báo khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, tr. 9-17.
16. Kazuo Nishi and Kazuo Hozumi, 1996: *What is Japanese Architecture? A survey of Traditional Japanese Architecture*, Kodansha International, Tokyo 112-8652.
17. Lưu Sương, 2009: *Bắc Kinh - Từ Cẩm thành*, Nxb. Đại học Thanh Hoa, Bắc Kinh, Trung Quốc.
18. Nguyễn Văn Thịnh (Chủ biên), 2010: *Văn bia thời Lý*, Nxb. Đại học quốc gia Hà Nội.
19. Phạm Lê Huy, 2016: Cấu kiện và kiến trúc thời Lý - Trần nhìn từ nguồn tư liệu chữ viết đồng đại, *Thông báo Khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, tr. 45-62.
20. Phan Cốc Tây và Hà Kiến Trung, 2005: *Doanh tạo pháp thức - Giải độc*, Nxb. Đại học Đông Nam, Nam Kinh, Trung Quốc.
21. Phó Hy Niên, 2009: *Tuyển tập tiểu luận lịch sử kiến trúc*. Nxb. Văn nghệ Bách Hoa, Trung Quốc.
22. Quách Chính Trung, 1993: *Cân đong đo đếm của Trung Quốc từ thế kỷ 3 đến thế kỷ 14*, Nxb. Khoa học xã hội Trung Quốc.
23. Tomoda Masahiko, 2017: Thể hiện kiến trúc trên các mô hình thời Lý – Trần, *Thông báo khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb. KHXH, Hà Nội, tr.63-87.
24. Tống Trung Tín - Bùi Minh Trí, 2007: Về một số dấu tích kiến trúc trong Cẩm thành Thăng Long thời Lý - Trần qua kết quả nghiên cứu khảo cổ học năm 2005 - 2006, *Khảo cổ học*, số 1, tr. 58-70.
25. Tống Trung Tín - Bùi Minh Trí, 2008: Những phát hiện khảo cổ học về Hoàng thành Thăng Long, *Việt Nam học*, Nxb. ĐHQGHN, tr. 548-560.
26. Tống Trung Tín - Bùi Minh Trí, 2010: *Thăng Long – Hà Nội, Lịch sử ngàn năm từ lòng đất*, Nxb. KHXH, Hà Nội.
27. Vũ Tam Lang, 2010: *Kiến trúc cổ Việt Nam* (Tái bản), Nxb. Xây dựng, Hà Nội.
28. Viện Kiến trúc Nhật Bản, 2007: *Nhật Bản kiến trúc sử đồ tập*, Akirakunisha, Nhật Bản.
29. Viện Văn học, 1977: *Thơ văn thời Lý – Trần*, Tập I, Nxb. KHXH, Hà Nội.
30. *Việt sử lược*, Bản dịch của Trần Quốc Vương, Nxb. Thuận Hóa, Trung tâm Văn hóa ngôn ngữ Đông Tây, 2005.

PRESENTATION VII

BUI Minh Tri

Deputy Director

Institute of Asian Civilisation Studies, Vietnam Union of Science and Technology Association

Vietnamese Palace Architecture during the Ly Dynasty from Archaeological Evidence: Morphological Identification and Comparative Analysis within the East Asian Context

ABSTRACT

The palace architecture of the Ly dynasty (1010-1225) represents the zenith of Dai Viet civilization and the prosperity of the Thang Long capital. However, the complete disappearance of original wooden structures above ground has created significant 'blank spaces' in the region's architectural history. This article presents research findings on identifying the architectural morphology of Ly dynasty palaces based on breakthrough archaeological discoveries at Thang Long Imperial Citadel (excavations conducted in 2002-2004 and 2008-2009). Through the analysis of foundation systems, archaeological remains of architectural elements, and the application of cross-cultural comparison, this study determines that Ly architecture consisted of large-scale wooden architecture, utilising 'dougong' (bracket systems) lacquered in vermilion and gold and roofs clad in yin-yang tiles. The findings demonstrate that while sharing common stylistic techniques of historical East Asian wooden architecture (Song China, Nara/Heian Japan), Ly architecture established distinct characteristics through adaptation to the tropical climate and a decorative system steeped in indigenous Buddhist identity. This research not only provides a scientific foundation for hypothetical reconstruction but also repositions the value of Vietnamese architecture within the historical continuum of ancient East Asian architecture.

Keywords: Ly dynasty palace Architecture; Thang Long Imperial Citadel; Architectural Archaeology; Dougong bracket structure; East Asian Wooden Architecture; Architectural Reconstruction.

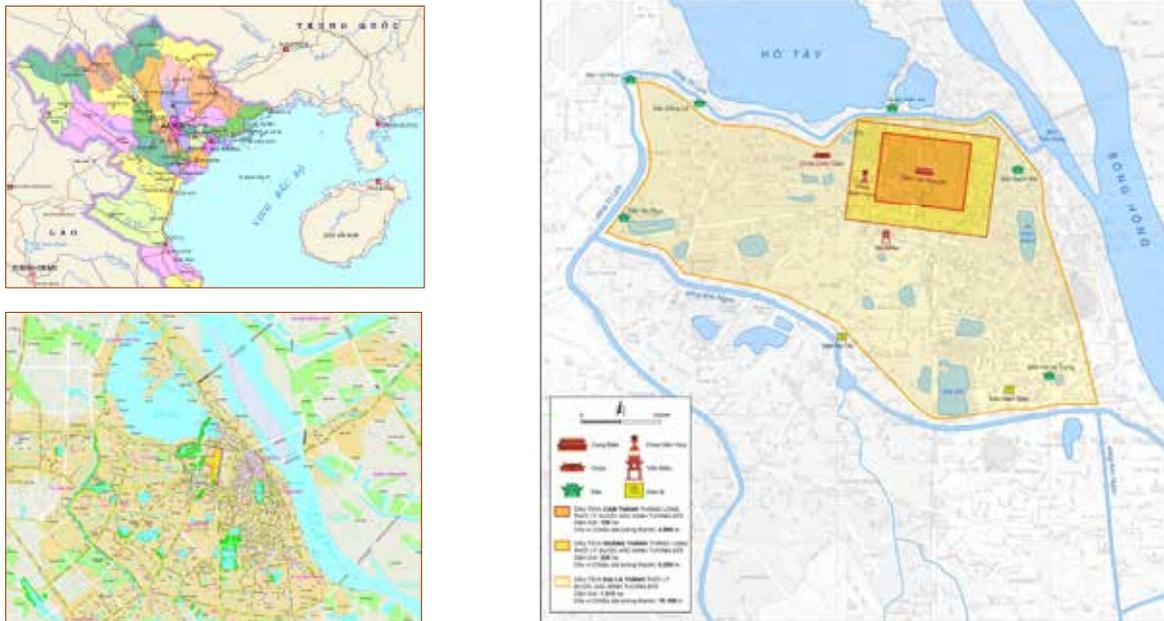
INTRODUCTION

The imperial capital of Thang Long (now Hanoi) was officially established in the autumn of 1010 during the reign of Emperor Ly Thai To as the supreme political and cultural centre of the Dai Viet kingdom. The capital's layout was meticulously structured around three concentric walled areas: the Outer City (La Thanh), the Imperial City (Hoang Thanh), and Forbidden City (Cam Thanh). The Hoang Thanh and Cam Thanh areas formed the core, housing the palatial complexes and pavilions that served the royal family and court ceremonies. Authoritative historical sources such as the *Complete Annals of Dai Viet* recorded in detail the events of the capital's relocation and the construction of a series of large-scale palaces, typically the Can Nguyen Hall located in the centre, along with a system of satellite structures such as the Tap Hien, Giang Vo, and Long An palaces, and the Hung Thien Pagoda. These records paint a picture of the Thang Long capital at that time as a rich and diverse complex of court architecture; both varied in typology and magnificent in scale.

Based on the comprehensive results from research into ancient texts, stele inscriptions, and especially archaeological data, the scale of Thang Long Imperial Citadel is determined to be quite significant, with the Imperial City estimated to cover approximately 230 hectares and the Forbidden City occupying about 100 hectares (Map 1). The urban

planning philosophy of the Ly dynasty capital city demonstrated a sophisticated application of feng shui and East Asian cosmological concepts, utilising Nung Mountain (Long Do) as the sacred centre axis (main mountain), where the main hall, Can Nguyen, was located. The architectural system here, from palaces and pavilions to pagodas and stupas, consists of elaborate wooden structures reflecting the economic prosperity and power of the Ly dynasty, while also being profoundly influenced by Buddhist ideology, the state religion of the time.

However, due to the vicissitudes of history and the ravages of time, none of the above-ground palace structures from the Ly dynasty survive today. Though the historical records describing the appearance, scale, and architectural



Map 1: Spatial layout of the Ly dynasty Thang Long Capital superimposed on the modern urban administrative map of Hanoi

morphology of these Ly dynasty's palaces are invaluable, they are often approximate and vague, posing significant challenges for research and reconstruction efforts. Although this subject has attracted the attention of historians and archaeologists for over a century, the lack of quantitative scientific data and in-depth cross-cultural comparative studies has left many gaps in historical understanding.

Against this backdrop of limited documentation, this study aims to present preliminary findings regarding the architectural morphology of Ly dynasty palaces, based on archaeological discoveries at the Thang Long Imperial Citadel site. Data was collected from large-scale excavations at 18 Hoang Dieu (2002-2004), the National Assembly construction site (2008-2009) and the Vuon Hong (Rose Garden) area (2012-2014) (Fig. 1). In addition, the study expanded its scope by combining the results of surveys of Ly dynasty temporary royal residences, analysing terracotta architectural models, and comparing them with ancient palace architecture in East Asian countries such as Japan, South Korea, and China, as well as inscriptions on steles. This paper will provide an in-depth analysis of Ly dynasty palace architecture in terms of construction techniques, material, and architectural morphology, aiming to provide important scientific insight and establish a benchmark for comparative studies of ancient East Asian palace architecture, thereby contributing to reducing gaps in the identification of the architectural appearance of Vietnamese palaces.

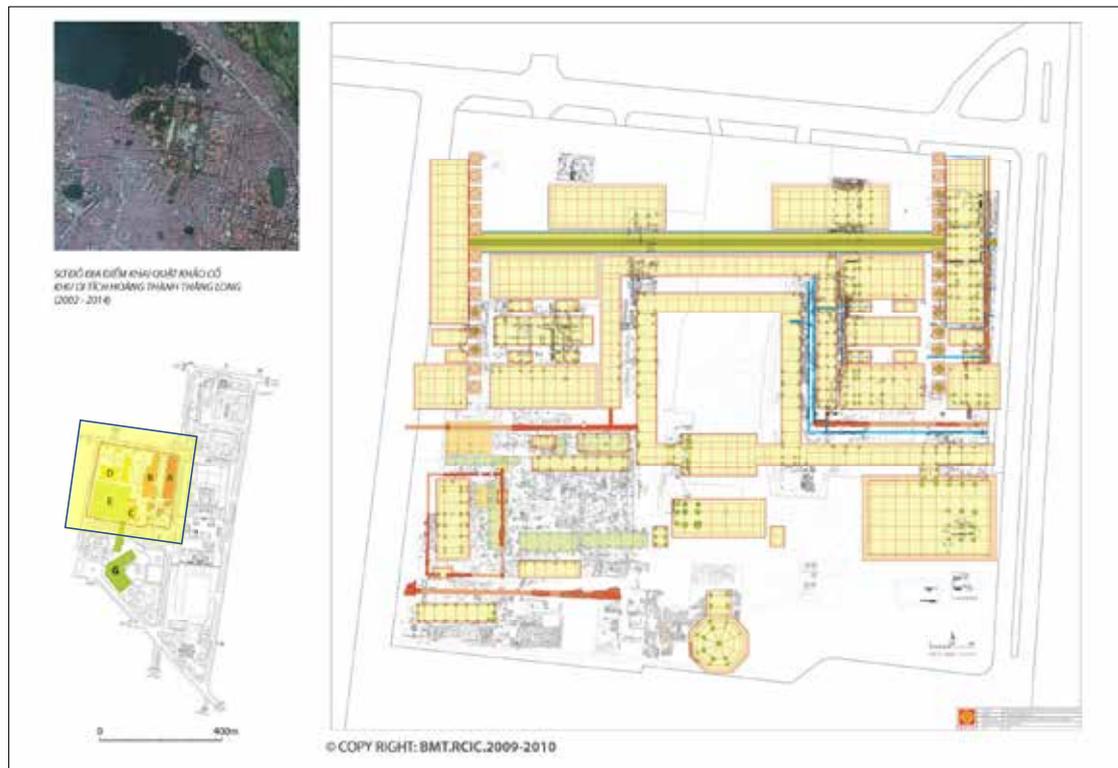


Fig. 1: General Site Plan of the Thang Long Imperial Citadel Heritage Complex (Site Plan of Archaeological Excavations at the Thang Long Imperial Citadel (2002–2014))

I. PROBLEM STATEMENT AND METHODOLOGY

1. Concepts and characteristics of palace architecture

In East Asian pre-modern history, the term palace architecture was used to refer to types of structures directly commissioned, constructed, and managed by the imperial court, typically located within or in the vicinity of the capital city. Functionally, these structures not only created living and working spaces for the imperial court, but more importantly, they were physical symbols of the ruler’s supreme power, representing the hierarchy and authority of the monarchy and fulfilled the ceremonial and spiritual needs of the royal family. The most recognisable features of palace architecture lie in its grand scale, sophisticated and meticulous construction techniques, combined with decorative artistry bearing the distinctive hallmarks of the era. Therefore, palace architecture is always regarded as a barometer of a state’s scientific advancements, construction technology, as well as its unique cultural nuances within the region.

2. Current State of Documentation and Research Challenges

In alignment with the ancient architectural traditions of China, Japan, and Korea, ancient Vietnamese architecture – particularly during the Ly dynasty period – primarily utilised load-bearing timber frame structures and tiled roofing systems. The organic nature of wood as a material meant that these structures had a limited lifespan and could not survive intact for centuries under the harsh tropical climate and historical events such as capital relocations, wars, disasters, or the restoration and reconstruction processes of successive dynasties. Consequently, contemporary archaeology can only access the underground remains of the structure foundations and scattered construction elements.

Major archaeological excavations at the Thang Long Imperial Citadel (2002-2004 and 2008-2009) have uncovered the solid foundations of many Ly dynasty palaces and pavilions of varying scale, along with integrated infrastructure including enclosure walls, drainage systems, wells, and paved roads. These findings provide concrete evidence of the sophisticated urban planning and high level of construction at the Thang Long Imperial Palace, substantiating the existence of a magnificent complex of wooden architecture with elaborate tiled roofs.

However, despite the discovery of a vast number of features and artefacts, fully and clearly identifying the architectural form of Ly dynasty palaces remains challenging due to the lack of systematic scientific data. The most significant difference between Vietnamese palace architecture and other sites such as the Forbidden City (Beijing), Changdeokgung (Seoul), and the palace architecture and wooden pagodas in Nara, is that Vietnam retains no extant, in-situ wooden palace structures from the Ly dynasty (11th-12th centuries), the Tran dynasty (13th-14th centuries) or even the Le Trung Hung dynasty (17th-18th centuries). The surviving wooden structures are mainly religious and spiritual architecture in the outskirts, dating back to the Mac dynasty (16th century) and the Le Trung Hung dynasty (17th-18th centuries). Although some structures were reconstructed on the old foundations from the Ly-Tran era, their architectural form has changed through successive renovations. Even the few remaining wooden components from the Tran era are insufficient to extrapolate a complete reconstruction image. Therefore, the most significant bottleneck in deciphering Ly dynasty architecture is the complete lack of data on the body (wooden frame) and roof system of the structures, while Vietnamese inscriptions and historical records provide almost no detailed technical specifications of form and scale.

3. Research Methodology

To overcome the challenges of reconstructing architectural forms in the context of fragmented documentation, this study establishes a multi-dimensional and complementary methodological framework.

First, the study focuses on examining **terracotta architectural models**. Between 2011 and 2015, terracotta house and pagoda models preserved in museums in Northern Vietnam were surveyed and analysed. Although these artefacts mainly depict external forms and have certain limitations in expressing internal technical structures, they are authentic material sources, ‘fossils’ of the era, providing a credible basis for the architectural forms of the ancient Ly and Tran dynasties that underground archaeological remains cannot provide.

Second, the study **employs a typological comparative analysis of ancient East Asian palace architecture**. Alongside deciphering the terracotta models, characteristics of Ly architecture was compared with historical palace architecture in Japan, Korea, and China (specifically Song dynasty architecture). This comparative typological method helps identify common structural patterns in East Asian wooden architecture, thereby filtering and highlighting the distinctive, indigenous characteristics of Vietnamese court architecture.

Third, the study utilises **vertical structural analysis of wooden architecture**. Adopting the framework of Phan Coc Tay and Ha Kien Trung (2005), we dissect the structure into three parts: (1) The substructure (foundation) includes elements such as scale, orientation, ground consolidation, column bases, and bay spacing, yielding the most archaeological data; (2) The superstructure (main structure) is the load-bearing wooden frame system, studied through the proportion and thickness of columns, distances between them, and wall-and-doorway systems; and (3) The roof system, encompassing the bracket sets (dougong), roof material, and ridge decoration. The integration of these approaches will create a solid scientific foundation for the identification and hypothetical reconstruction of Ly dynasty palace architecture in the subsequent sections of this study.

II. ARCHITECTURAL MORPHOLOGY OF THE LY DYNASTY PALACES: AN ANALYSIS BASED ON ARCHAEOLOGICAL EVIDENCE

1. Architectural foundation layout and geological treatment techniques

The results of large-scale archaeological excavations at the Thang Long Imperial Citadel site during the periods 2002–2004 and 2008–2009 unearthed a large complex of architectural foundations along with a wide variety of building materials sufficient to identify the architectural features of this period. Across a total excavation area of 42,000m², archaeologists uncovered a high-density complex of relics, including 53 architectural foundations, 7 enclosure walls, 6 wells, and 13 drainage conduits. These quantitative figures serve as authentic material evidence, confirming the immense scale and spatial density of structures within the Thang Long Capital under the Ly dynasty (Fig. 1-2).

Stratigraphic analysis reveals that the foundation construction techniques of the Vietnamese during the Ly dynasty had reached a high level of sophistication in adapting to alluvial deltaic geology. Building foundations consist of multiple layers of compacted clay transported from distant hills and mountains to the capital, sometimes reinforced with layers of industrial debris (such as ceramic shards and brick fragments) to enhance structural stability. Notably, the architectural foundations were edged with rectangular bricks, and the surface was paved with square bricks fired at high temperatures, giving them a distinctive golden hue. The system of corridors, enclosure walls, and a well-planned drainage system (wells and conduits) around the main structures attests to a high level of urban planning. This suggests that the construction of the Thang Long Imperial Palace following the capital relocation in 1010 was a monumental national enterprise requiring the mobilization of enormous resources and stringent logistical organisation.



Fig. 2: Archaeological remains of Ly dynasty architecture at the Thang Long Imperial Citadel site.
Source: Bui Minh Tri

1.1. Rammed Gravel Foundation Pits and Developments in Structural Engineering

The most fundamental characteristic for identifying Ly dynasty architecture through archaeological evidence is the system of column foundation pits. Instead of continuous strip foundations, Ly dynasty architecture utilised independent square foundation pits, arranged in a standardised grid pattern, reinforced internally with river gravel, crushed brick and tile, and pottery fragments. This is where the weight of the wooden columns was borne.

The rammed gravel column foundation technique is considered a remarkable technical achievement, reflecting an adaptation to the soft soil of the Red River delta. The foundation pits typically measure 110cm to 150cm in each dimension, with depths ranging from 150cm to over 300cm. They are compacted with hard materials (most commonly river gravel blended with laterite or hill soil) to mitigate differential settlement (Tong Trung Tin & Bui Minh Tri, 2007: 58-70) (Fig. 3). Although this technique originated during the Dinh- Early Le period (10th century), it was not until the Ly dynasty that it was standardised and became the construction standard for large-scale structures. In addition to single square foundations, the site also records rectangular column foundations (double foundations) used to support twin plinths, commonly found in small structures with unique frame structures (Bui Minh Tri, 2016:13-44).

Alongside the foundation system, a total of 148 stone plinths supporting wooden columns were discovered, including 73 surface-mounted square plinths and 75 buried plinths. Measurements recorded a wide range of sizes: the smallest measuring 60×60cm, while the largest reached 100×100cm. Based on the traces left on the plinths, the diameter of the columns was determined to range from 38 cm to 59 cm; in some cases, the diameter of the main columns

reached 70-80 cm. The large number and large dimensions of this plinth system are convincing quantitative evidence, confirming that the architecture of the Thang Long Imperial Palace was mainly large-scale round-column wooden frame architecture – a sustainable tradition recorded by A. de Rhodes even in the 17th century (A. de Rhodes, 1908: 179).



Fig. 3: Remains of rammed gravel-filled column foundations from the Ly dynasty at the Thang Long Imperial Citadel site. Source: Bui Minh Tri

Artistically, Ly dynasty plinths were meticulously crafted, commonly featuring intricately carved, delicate lotus flower designs. Archaeological investigations have uncovered a type of high-grade plinth decorated with extreme elaboration, with dragons and chrysanthemum vines carved on the inside the lotus petals; or carved depictions of lively musical performances with realistic and exquisite lines on four sides (Fig. 4). The presence of these plinths is not isolated occurrences; they were used consistently throughout an entire structure, reflecting the level of elaborate investment and the thorough aestheticisation of structural load-bearing components of the most important structures in the Imperial Palace and the court.

From a technical perspective, some plinths demonstrate versatile design logic: they both support columns and feature grooves for installing ground sills or partition walls. Notably, archaeological evidence also reveals the coexistence of two distinct techniques: surface-mounted columns placed on stone plinths and columns buried deep into the



Fig. 4: Representative stone plinths from the Ly dynasty, 11th–12th centuries. Source: Bui Minh Tri

ground. This combination created a unique structural solution: a system of deeply buried columns on the perimeter (to increase stability and resist wind and storms) surrounding a system of inner and main columns mounted on stone plinths (to resist termites and moisture) (Fig. 5). This is an important indicator of the specific construction techniques used for high-status structures within the Thang Long Imperial Citadel during the early Ly dynasty period (Bui Minh Tri, 2016: 13-44).

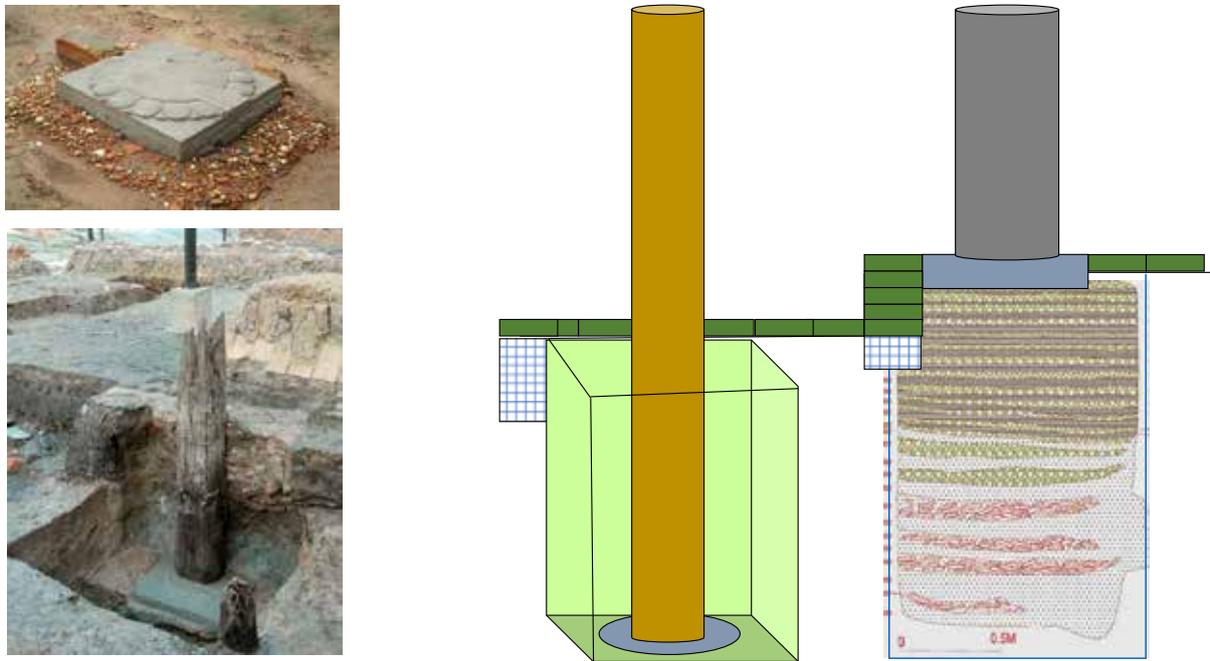


Fig. 5: Archaeological remains of a structure employing hybrid techniques: buried and surface-mounted columns.

1.2. Floor Plan and Octagonal Architectural Features

Surveying the patterns and spatial distribution of columns allows for the identification of the diversity in floor plans, including rectangular, square, hexagonal, and octagonal layouts. The most common type is the rectangular floor plan (long-house) with an odd number of bays (7, 9, 11, 13 bays), which reflects the hierarchical and ritualised spatial order of palace architecture. Structures with an even number of bays (2, 6, 8, 10 bays) are smaller in scale. A system of long corridors also existed, contributing to the continuity and overall diversity of the complex (Fig. 1).

The most distinctive typological feature of the Thang Long Imperial Citadel is the presence of a group of polygonal structures, most notably a large-scale octagonal building (designated LYCKT50, with a floor area of 702m²). This structure is characterized by a ring of 16 peripheral columns and a single massive central pillar, with its foundation exceptionally reinforced with river pebbles to withstand extremely heavy loads. The presence of the central pillar, a structural element that necessitates sophisticated joinery and complex roof-framing techniques, supports the interpretation that this building was a monumental multi-storey pavilion.

When situated within the broader context of ancient East Asian architecture, this octagonal structure assumes significant comparative value. In China, multi-storey octagonal floor plans are commonly associated with Buddhist pagodas (such as the Sakyamuni Pagoda of Fogong Temple in Shanxi); in Japan, by contrast, octagonal architecture is typically limited to single-storey ‘octagonal halls’ (Hakkaku-dō) (exemplified by the Yumedono of Horyu-ji Temple), whereas multi-storey wooden pagodas predominantly have square layouts. Against this background, the presence of a multi-storey octagonal pavilion within the Thang Long Imperial Citadel constitutes a distinctly anomalous phenomenon (Fig. 6).

This was certainly not a conventional religious structure nor a mere leisure pavilion, but was far more likely an architectural manifestation of political authority or a venue for major royal rituals. The deliberate adoption of this

architectural form reflects the independent and highly distinctive architectural mindset of the Ly dynasty. In addition, quantitative measurements indicate that the bay widths in Ly-period architecture were exceptionally large, averaging approximately 5.7 metres. In the south-western area (present-day National Assembly area) several structures with two rows of columns exhibit bay widths ranging from 6.0 to 7.5 metres. These dimensions surpass those of many contemporaneous structures in the region, thereby attesting to the advanced capacity of Vietnamese builders to procure, manipulate, and assemble large timber components.

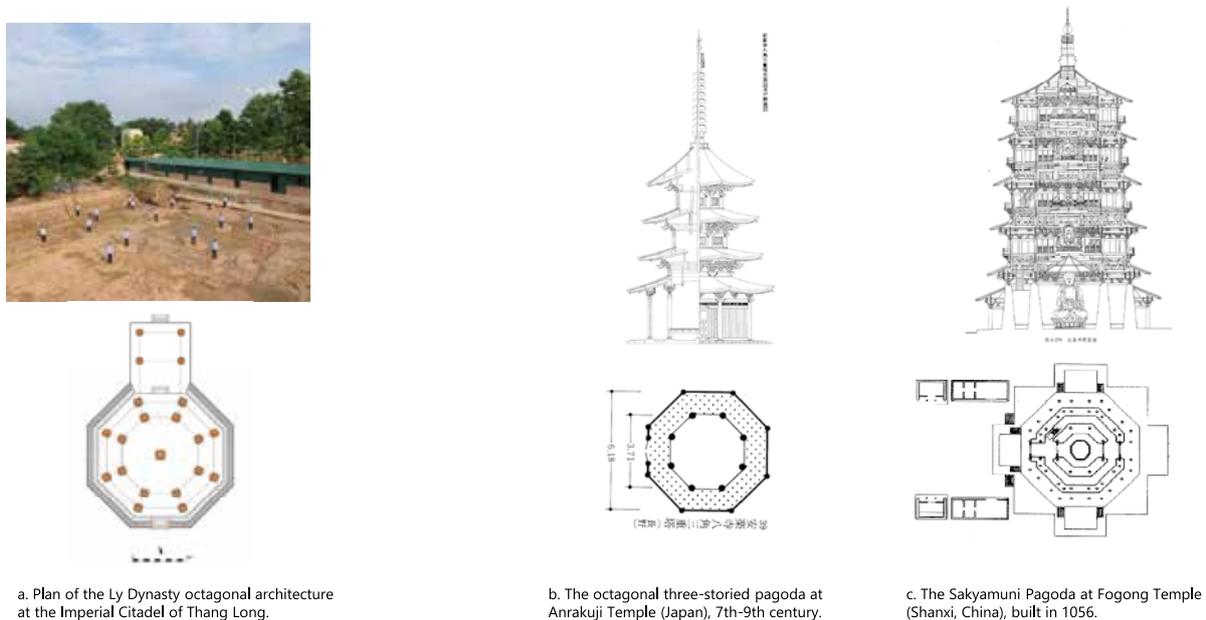


Fig. 6: Octagonal architecture of the Ly dynasty in Vietnam in comparative studies with East Asian architecture.

1.3. Modularisation and Standardised Measurement

Research into the dimensional ratios of foundation systems reveals that the architecture of Ly dynasty palaces was not constructed randomly but strictly adhered to the principle of Modular Coordination. Architectural components – including columns, beams, and bay widths – were all governed by proportional relationships based on a single fundamental unit of measurement. Through statistical analysis of an extensive body of foundational data, the researcher Kazuto Inoue reproduced the standard measurement unit of the Ly dynasty. The results indicate that the Ly dynasty's unit of measurement was equivalent to that of the Song dynasty, with one unit being approximately 29.98 cm (rounded to 30 cm) (Kazuto Inoue, 2015: 9-17). The adoption of the same measurement system as that was employed in Song dynasty architecture as presented in Guo Zhengzhong's *Chinese Weights and Measures from the 3rd to the 14th Century* (1993) demonstrates the technical integration of Dai Viet into broader East Asian architectural traditions.

Standardisation is also evident in astronomical orientation and feng shui elements: all structures were systematically laid out along a north-south axis, with an azimuthal deviation of approximately 4-5 degrees to the northeast. Furthermore, according to Bui Minh Tri (2015), all dimensional parameters of Ly dynasty architecture – length, width, and bay spacing – conform to a rule of divisibility by three. This mathematical consistency reflects a high level of construction organisation and architectural management, ensuring coherence from design conception through to the material realisation of the structure (Bui Minh Tri, 2015: 19-63).

2. Decoding the Load-Bearing Timber Frame System

2.1. Historical Sources and Construction Context

Vietnamese historical records provide relatively detailed documentation of palace construction activities within the capital of Thang Long, reflecting the monumental scale of building projects undertaken by the Ly dynasty. As early as 1010, following the relocation of the capital, Emperor Ly Thai To initiated a series of key construction projects, including the Can Nguyen, Tap Hien, Giang Vo, Long An, and Long Thuy palaces, as well as the Thuy Hoa palace, Hung Thien pagoda, and Ngu Phuong Tinh Pavilion. Later chronicles, notably the events of 1203 during the reign of Ly Hue Tong, continued to describe in detail the construction of new palaces with eulogies praising their ‘unprecedented splendour’ (Viet Su Luoc, 2005:166). By synthesising data from official historical sources, such as the Viet Su Luoc, Dai Viet Su Ky Toan Thu, and Viet Su Thong Giam Cuong Muc, it can be estimated that the Ly dynasty undertook 56 major and minor construction projects, with three large-scale planning phases in 1010, 1029, and 1203; in total, 207 individual architectural works were identified. This historical context, combined with the flourishing of Buddhism in its role as a state religion, laid the foundation for the emergence of architectural masterpieces that embody the outstanding creative and technical capabilities of Ly dynasty architects.

2.2. Research on Load-Bearing Timber Frames (Superstructure)

While roof tiles and ridge decorations reveal the exterior appearance, deciphering the internal load-bearing structure – namely the wooden frame – poses the greatest challenge as the entire wooden architecture has perished. However, based on archaeological findings and comparative studies, the shape of the frame has gradually been reconstructed. Regarding materials, the results of wood sample analysis at Thang Long Imperial Citadel (2010) determined that the primary load-bearing columns of the Ly dynasty architecture were predominantly made from high-quality hardwoods belonging to the ‘four precious timbers’ (tứ thiết), including Lim xanh, Tau mat, and most notably, Sen mat (*Madhuca pasquieri*) (Bùi Minh Trí, Nguyễn Thị Anh Đào, 2015: 127-141). These columns were of substantial size, with their dimensions estimated indirectly through the diameters of plinths. Regarding the enclosing structure, traces of bricks supporting the ground beams beneath the floor surface, together with remains of wooden balustrades and spindle-shaped window and door elements, suggests that Ly dynasty palace architecture primarily employed wooden plank walling to enclose interior spaces, rather than load-bearing brick walls. This interpretation is corroborated by comparison with the Tran dynasty ‘pivot-hinged’ (chân quay) wooden doors at Pho Minh Pagoda, which correspond closely to the stone door sockets uncovered at the site, thereby pointing to a flexible and non-load-bearing system of wooden walls and doors (Bùi Minh Trí, 2016: 13-44).

The most complex issue in architectural reconstruction lies in determining the height of the main structural columns. In the absence of explicit technical documentation, a comparative method based on the proportions of palace architecture from China, Korea, and Japan has been adopted, whereby column height is typically equivalent to the width of the central bay. Based on this principle, the average height of principal columns in Ly dynasty architecture is estimated to range between 5.10m and 5.70m. This is the baseline parameter for establishing the height of the roof support frame and reconstructing the building's facade. In addition, analysis of eave projection provides further insights. Measurements derived from foundation remains at 18 Hoang Dieu indicate that eaves in Ly dynasty architecture were relatively shallow, typically extending between 120 cm and 180 cm. When compared with the dimensional standards set out in *Doanh Tao Phap Thuc Doc Giai* (Phan Coc Tay & Ha Kien Trung, 2005) and research by Pho Hy Nien (2009) on Song-Yuan architecture, these dimensions correspond to a grade 4 eave (approximately 137cm to 160cm). This suggests a degree of standardisation shared with broader East Asian architectural norms, while simultaneously preserving distinctive local proportional characteristics.

2.3. Evidence for the ‘Dougong’ Bracket System (Upper Structure)

The most significant achievement in the research conducted between 2011 and 2015 was the identification of the presence of the Dougong system in the architecture of Ly dynasty palaces. This conclusion was based on the synthesis of three independent sources of information: archaeological artefacts, architectural models, and inscriptions

(Bùi Minh Trí, 2016: 13-44).

First, regarding material evidence, excavations within Ly dynasty cultural layers uncovered red-lacquered wooden components as well as fragments of dougong architectural models. Particularly noteworthy are square wooden blocks with carved grooves, identified as ‘*lu đầu*’ – a type of load-bearing bracket (*dou*) with a cross-shaped recess on its upper surface and a square mortise at the base, features that closely correspond to the specifications outlined in *Yingzao Fashi* (Li Jie, 1103). In addition, smaller *dou* elements with continuous through-grooves, comparable to the ‘*makito*’ detail in Japanese architecture, were also found (Fig. 7). Although complete gong arms (bracket arms) have not yet been discovered, the presence of these specialised *dou* components constitutes unequivocal material evidence for the use of a dougong bracket system to support roof structures in Ly dynasty architecture.



Fig. 7: Wooden bracket blocks and dougong architectural models from the Lý dynasty excavated at the Thăng Long Imperial Citadel.

Source: Bùi Minh Trí.

Second, sources from the brick architectural models of the Ly-Tran dynasties in Bac Ninh, Nam Dinh, or the Binh Son tower (Phu Tho), particularly the Ly dynasty stone tower model at Quynh Lam pagoda (Quang Ninh) and the Tran dynasty ceramic tower at Tro pagoda (Phu Tho), provide visual representations of this structure. On these models, the dougong bracket systems are clearly depicted with the ‘inter-columnar bracket sets’ that is characterised by dense horizontal deployment not only above column heads but also between them. A distinctively local feature is the use stylised bodhi-leaf motifs to decorate the spaces between bracket sets, setting these designs apart from the decorative styles observed in Japanese, Korean, and Chinese architecture. Moreover, the ‘rafter-sheltering roof’ technique (*tàu mái che rui*), together with the integration of dougong brackets and sculpted figures of dragons, Garudas, and Kinnaris serve as roof supports on the models, and is regarded as a set of uniquely innovative solutions characteristic of Dai Viet architecture (Fig. 8).

Third, epigraphic evidence from Ly dynasty steles, such as the Tu Lang chau Sung Khanh tu chung minh (1113) and the Vien Quang tu bi minh (1210) (Phạm Lê Huy, 2016: 45-62) provides the final pieces of evidence concerning colouration and technical terminology. Phrases such as ‘*đan lô*’ (red lacquered brackets) and ‘*họa cùng*’ (lacquered brackets with floral designs) confirm not only the existence of the dougong bracket system in Ly dynasty architecture, but also its highly elaborate decorative treatment, including the application of vivid red lacquer and painted motifs of dragons, cranes, and celestial figures. These textual descriptions correspond closely with the traces of red lacquer found on wooden architectural components excavated from the Thang Long Imperial Citadel, thereby reinforcing the reliability of the inscriptions.

Thus, the identification of the dougong bracket system constitutes a key interpretative breakthrough for decoding the roof structure. This structural system not only solves the problems of load transfer and roof projection, but also demonstrates that Ly dynasty palace architecture had reached the standard level of East Asian wooden architecture,

while creating its own unique aesthetic characteristics. The results of this research allow Ly dynasty architecture to be understood as a coherent and integrated system, comprising of a timber structural frame erected upon stone column bases, employing red-lacquered dougong bracket sets, and roofed with tubular ceramic tiles. While similar in form to palace architectures elsewhere in East Asia, this system is distinguished by its unique structural details and ornamental elements.



Fig. 8: Architectural model of the dougong bracket system from the Tran dynasty (13th–14th centuries). Source: Bùi Minh Trí.

3. Roof Structure and Architectural Language

In addition to the foundation system, archaeological excavations at the Thang Long Imperial Citadel have yielded a vast amount of roofing materials. Table 1 demonstrates the overwhelming predominance of concave and convex tiles, together with a wide array of decorative elements, including bodhi-leaf ornaments, dragon, phoenix, and mandarin duck figures. These not only reflect the monumental scale of the architectural complex, but also constitute a solid material basis for the accurate identification of the construction techniques and aesthetic principles of Ly dynasty palace roof design.

TT	Type of artefact	Quantity (pieces/objects)	Note
1	Concave tiles	39,035	Accounting for the largest proportion
2	Convex tiles	25,484	
3	Ridge tiles	715	
4	Symmetrical bodhi-leaf ornaments	4,687	Decorative elements on tubular tiles
5	Asymmetrical bodhi-leaf ornaments	2,122	Decorative elements on ridge tiles
6	Mandarin duck figurines	551	Decorative elements on ridge tiles
7	Dragon and phoenix figurines	1,241	Decorative elements on gable ends and ridge
	Total	73,856	

Table 1: Statistical breakdown of the quantities and types of Ly-period roofing materials recovered through excavation

3.1. Types of Roofing Tiles and Functional Classification

Based on morphological analysis, roofing materials are scientifically classified according to their technical function and installation location. The primary roofing tiles, which serve covering and drainage functions, are concave and convex tiles. With a structure of one row facing upwards (concave) to receive water and one row facing downwards (convex) to cover the joints, this system creates parallel grooves running along the slope of the roof, ensuring optimal drainage efficiency in tropical rain conditions. Eave-end tiles are specially decorated, notably with Bodhi leaf details made of fired clay are often attached to the tops of the concave tiles. Inside the Bodhi leaf are intricate carvings of dragons in jade gardens or dancing phoenixes, creating a layered decorative effect. Finally, decorative tiles for the roof ridge and end includes large statues of mandarin ducks, symmetrical and asymmetrical Bodhi leaves, as well as large dragon and phoenix heads. These components were positioned at key structural and visual focal points – such as the ridge, gable ends, ridge centre, and roof corners – creating upward visual accents along the skyline and most clearly expressing the distinctive identity of Dai Viet architecture.

The distinctive feature highlighting the similarities and differences of Ly architecture in comparison with other East Asian architectural traditions lies in round eave-end tiles. While East Asian palace architecture in China, Japan, and Korea typically use round eave-end tiles decorated with lotus flower motifs or mythical beasts, Thang Long architecture represents a bold and distinctly localised variation. Ly dynasty architecture not only featured exquisitely decorated round eave-end tiles, but also have an additional fired-clay plate in the form of a symmetrical Bodhi leaf attached to the upper surface of the tile. This detail transformed the tiles from a simple functional object into a visually dynamic decoration – a feature unprecedented in the eave-end tiles of historical East Asian palaces. The ornamentalisation of architectural components is further evident in the ridge tiles that incorporated mandarin duck figures depicted in dynamic postures with outstretched wings or extended necks, as well as large-scale dragon and phoenix head sculptures, some of which weigh up to 250 kg, placed as protective elements at the gable ends. The use of bright red fired clay and the oversized dimensions of these decorative components demonstrate that the craftsmen of the Ly dynasty had complete mastery of kiln-firing technology as well as sophisticated knowledge of structural calculation and modular assembly techniques (Fig. 8-11).



Fig 9: Types of roof tiles used in Ly Dynasty Palace architecture (Photo by Bui Minh Tri)

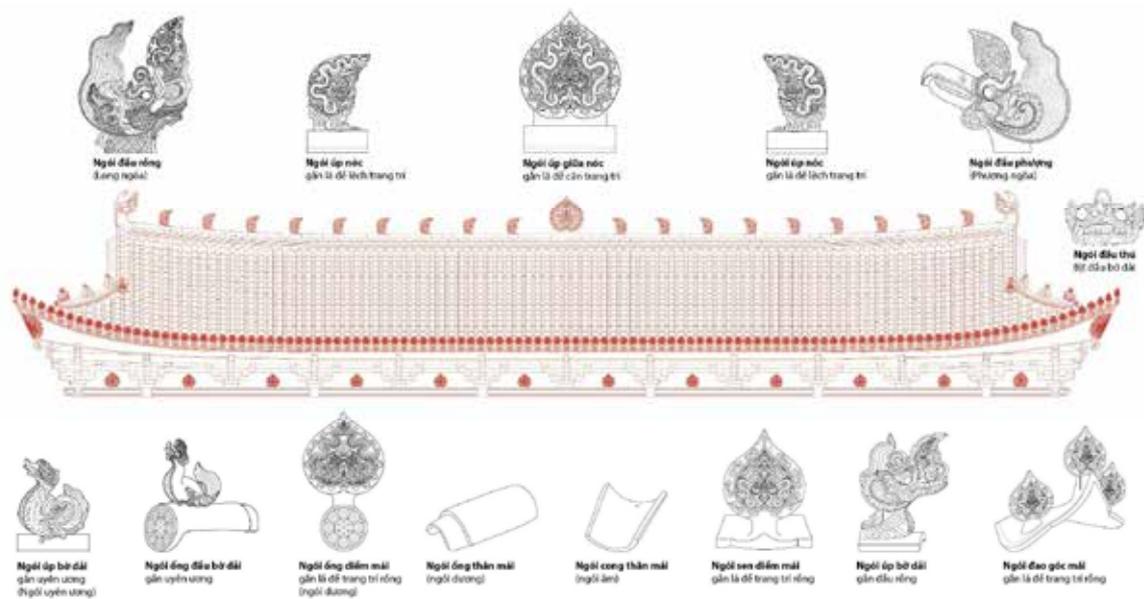


Fig 10: Types of eaves tiles in Vietnamese palace architecture during the Ly and Tran Dynasties (Compiled and documented by Bui Minh Tri)



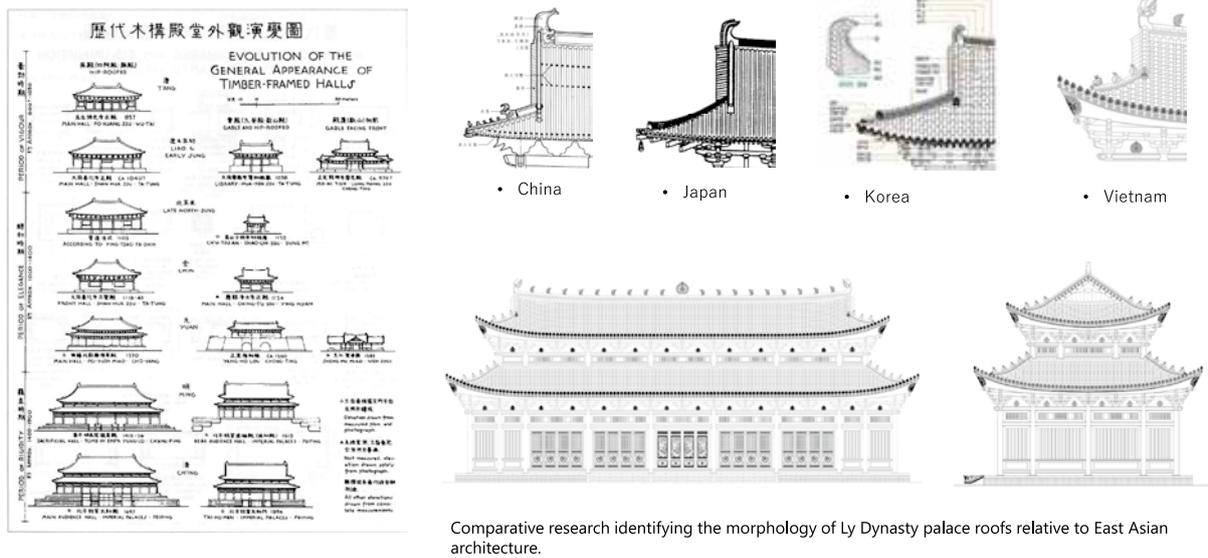
Fig 11: Comparative study of eaves tiles between Thang Long Imperial Citadel and East Asian styles (Note: From left to right: Japan, Korea, Thang Long Imperial Citadel, Vietnam)

3.2. Roofing Techniques and Framework

A synthesis of archaeological evidence and architectural models allows for the reconstruction of the Ly dynasty palace roofing system with its distinctive technical features. In terms of form, the prevalent architecture was the four-gabled roof (hip-and-gable roof), extending in four directions rather than the closed gable wall style. Aesthetically, the roof has a gentle curve resembling bird wings, described poetically in Ly dynasty inscriptions as ‘eaves spreading like wings, like birds flying in all directions’ (Bao Ninh Sung Phuc Pagoda Stele, 1107) or ‘roof corners rising like wings spreading’ (Sung Ngiem Dien Thanh Pagoda Stele, 1118). This visual effect is created by the sharply curved eaves and decorative elements at the corners of the roof.

Regarding the roof pitch, the records of the Yuan envoy Tran Phu in *An Nam tuc su* (1293) described the roofs of Dai Viet as ‘steeply sloping like a tilt’. The technical reason for this feature is that Ly-Tran architecture did not fully apply ‘chiết giá pháp’ (a technique of bending the roof to create a camber by gradually lowering the height of the purlins) which was recorded in *Yingzao Fashi* compiled and promulgated by Li Jie in 1103 during the Northern Song

dynasty. Instead, the steeply pitched roof facilitates rapid drainage, suitable for the heavy rainfall in Vietnam. Regarding roofing techniques, Ly architecture applied the regional ‘yin-yang’ standard (pan-and-cover tiles), but the difference lies in the aesthetic form of each component (Fig. 12).



Comparative research identifying the morphology of Ly Dynasty palace roofs relative to East Asian architecture.

Fig 12: Comparative study on the roof morphology of the Ly Dynasty in Vietnam and roofs in East Asia (Drawings by Bui Minh Tri)

3.3. Regional Reconstruction and Comparison Methodology

The process of deciphering the roof structure of the Ly dynasty is a methodological shift from ‘extrapolation’ to ‘evidence-based reconstruction.’ The period from 2014 to 2015 marked a pivotal turning point when researchers accurately determined the spatial distribution and functional taxonomy of each type of tile. This enabled the formulation of integrated reconstruction models that harmonise archaeological attributes (morphology, dimensions) with structural engineering principles (load-bearing capacity, gradient requirements) (Fig. 13).

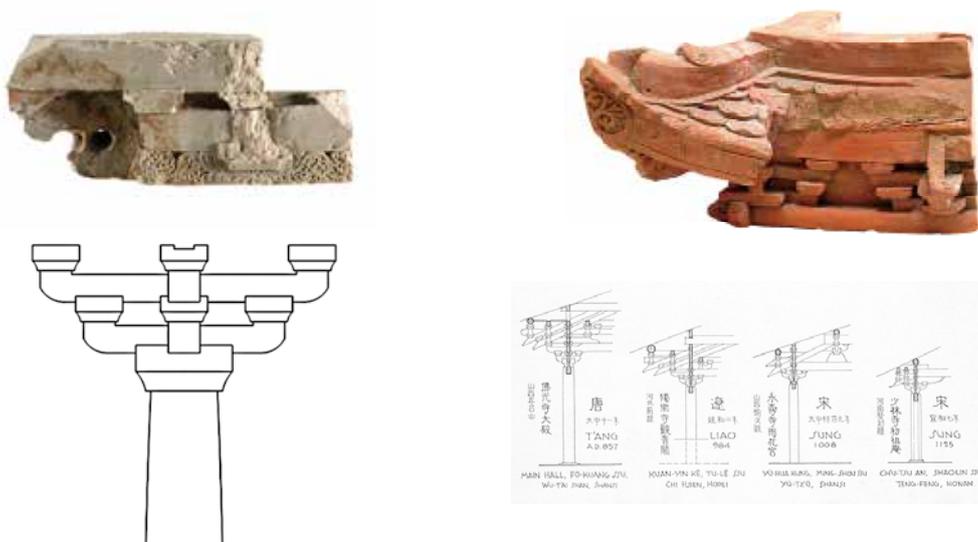


Fig 13: Bracketing Structure (Dougong System) of wooden architecture in the Ly Dynasty

The value of Ly dynasty’s architecture must be gauged in relation with Song Dynasty’s architecture. Comparing the findings at Thang Long with the *Yingzao Fashi* reveals a profound picture of cultural exchange and acculturation (Table 2).

Comparison category	Ly dynasty palace architecture (Dai Viet)	Song dynasty palace architecture (China)	Remarks
Load-bearing structure	Dougong System	Dougong System	Common technical jargon indicates similarities in technical expertise.
Roof form	Curved roof, steep pitch. Roof with two gables is commonly found.	Curved roof, relatively steep roof pitch. Various types, including flat roof and roof with two gables.	Similar in overall shape due to use of Dougong.
Materials & Colours	Mainly terracotta; less commonly glazed tiles (green, white, yellow).	Strict regulations: yellow glaze for the emperor, sapphire blue glaze for the nobility.	Dai Viet adopted glazed tile technology but may have had its own classification system.
Ornamentation	Roof tiles decorated with dragon and phoenix motifs and Bodhi leaf and Mandarin duck sculptures.	Round eave-end tiles; beast motifs arranged along the eaves.	Fundamental difference: expressing distinct cultural identity and aesthetic sensibility.
Symbolic language	Mixture of royal authority (dragon, phoenix) and divine authority (Bodhi leaves, lotus flowers), reflecting the concept of 'Buddha-King.'	Confucian/Taoist symbolism, emphasising secular power and the Mandate of Heaven.	Reflecting differences in dominant ideologies (Buddhism in Dai Viet and Confucianism in Song).

Table 2: Comparative analysis of the basic characteristics of palace roof architecture during the Lý dynasty (Đại Việt) and the Song dynasty (China)

The results of the comparative analysis confirmed that the architecture of the Ly dynasty's palaces was not a mere imitation of Song dynasty's architecture. Based on a shared 'grammar' regarding techniques (dougong, wooden joints), the architects of Dai Viet have created a distinct 'dialect' of their own. It is a bold integration of Buddhist symbols (Bodhi leaves, lotus flowers, Mandarin ducks) into structural elements, creating a beauty that encapsulated both the majesty of royal authority and the refinement of religion. This is the evidence for an independent cultural identity that integrated but did not dissolve into the flow of broader East Asian civilisations.

III. RECONSTRUCTION APPROACH IN RELATION TO THE EAST ASIAN EXPERIENCE

In the course of architectural history, if the planning of a capital city is likened to the physical framework of a nation, then palace architecture is its 'soul,' reflecting the political authority and the aesthetic sensibilities of that dynasty. However, at the Thang Long Imperial Citadel World Cultural Heritage Site, that 'soul' has been shrouded by the passage of time and the historical transformations, with its remains mainly existing in the form of archaeological foundations and scattered artefacts. The remaining material data, though valuable, is insufficient for future generations to fully imagine its magnificence of a thousand years ago. Therefore, the mission to decipher the mysteries of the palace architecture – or to revive the long-lost appearance of Thang Long – has become an urgent academic necessity with profound historical significance.

Physical reconstruction from archaeological remains is an important and challenging academic field worldwide, particularly in East Asian countries, which exhibits a vast yet fragile wooden architectural heritage that is vulnerable to the ravages of time and fire. In the context of seeking a methodology for reconstructing the architectural form

of the Ly dynasty, it is crucial to look for references in the form of international experience, particularly successful precedents in Japan, South Korea, and China. Practical lessons from neighbouring countries provide multidimensional perspectives on how to handle the dialectical relationship between archaeological evidence and reconstruction hypotheses. Japan is a prime example of pioneering in the conservation and interpretation of ancient capital heritage. The experience gained from researching and reconstructing Heijo-kyo from the Nara period (710-784) is a notable case study, sharing many similarities with the Thang Long Imperial Citadel site in terms that remains are predominately limited to building foundations.

Japanese scholars have asserted that the value of physical evidence is crucial to authenticating historical documents. More importantly, the application of digital technology and 3D modelling in Nara not only functions as a visual aid but also as a scientific verification tool for hypotheses of load-bearing structures and construction techniques. The reconstruction process in Nara, from decoding remains and creating reconstruction drawings to actual reconstruction, all required multidisciplinary coordination and a long-term vision to gradually ‘revive’ the heritage while raising community awareness and serving purposes of education.

Similarly, reconstruction projects in South Korea and China have also achieved remarkable success. Projects such as Donggung Palace and Wolji Pond in Gyeongju (South Korea) or the recreation of the Tang Dynasty’s Daming Palace in Xi’an (China) have provided valuable lessons on combining field archaeology, comparative analysis of historical documents, and traditional construction techniques. In particular, South Korea’s experience in reproducing wood joinery and decoration colouring (Dancheong) techniques are important references for deciphering the Ly dynasty’s bracket system and architectural style. These approaches provide a valuable reference framework for research on reconstruction of complex structures at the Thang Long Imperial Citadel, notably the octagonal pagoda, a puzzle requiring a seamless combination of archaeological and architectural thinking.

Drawing on the advanced methodological achievements of the region, a groundbreaking academic endeavour to reconstruct the Ly dynasty’s architectural form using 3D technology was undertaken from 2014 to 2020. This pioneering research project in Vietnam marks a fundamental shift from ‘extrapolation,’ which is based on aesthetic perception or similar models, to ‘evidence-based reconstruction.’

By integrating data from tens of thousands of archaeological artefacts with structural principles, architectural archaeology methods, and traditional East Asian architectural history, the research has gradually filled gaps in understandings of Ly dynasty architecture. The outcome of this process is a system of technical drawings and vivid 3D models, which recreate a

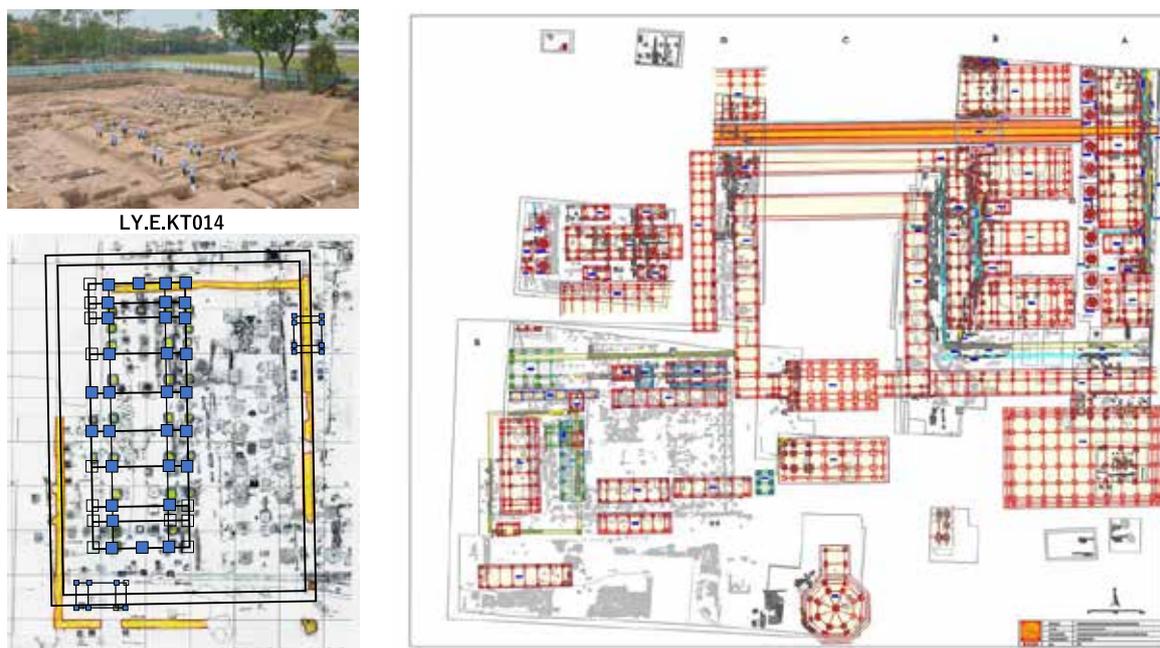


Fig 14: Research results on architectural drawings of Palaces and Pavilions in the Thang Long Imperial Citadel

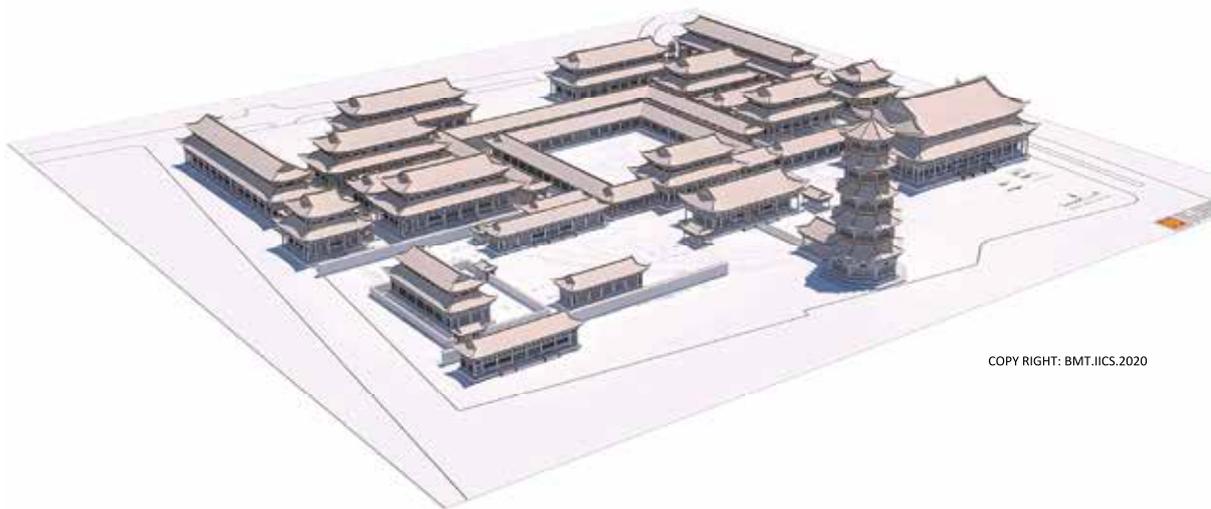


COPY RIGHT: BMT.IICS.2015

Fig. 15: 3D reconstruction of Ly dynasty architectural morphology (Model ID: LY.E.KT014)
 Source: Bui Minh Tri
 COPYRIGHT: BUI MINH TRI - BMT.IICS.2015

distinct architectural roof structure with layers of tiles with Bodhi leaves decorated edges and towering mythical beast sculptures (Fig. 14-15).

In 2021, we officially announced the results of our research in unravelling and reconstructing the overall architectural form of the Thang Long Imperial Citadel (Fig. 16). A complete image of the palaces and towers of the Ly dynasty has been reconstructed based on archaeological remains at the 18 Hoang Dieu archaeological site and the National Assembly House area.



COPY RIGHT: BMT.IICS.2020

Fig. 16: Panoramic 3D reconstruction of the Ly dynasty palatial ensemble and pavilions at the Thang Long Imperial Citadel site (2021).
 COPYRIGHT: BUI MINH TRI - BMT.IICS.2021

The research results indicated a magnificent and distinctive 64-structure architectural complex, which includes 38 palace and corridor structures, 26 hexagonal structures, combined with a system of walls, roads and gates that were planned in a unified manner. All these pieces of evidence suggest a systematic and scientific approach to planning during the golden age of the Ly dynasty (Bui Minh Tri, 2021). This data confirms that the Thang Long Imperial Palace of the Ly dynasty was a magnificent architectural complex with numerous large-scale wooden structures and it had achieved a level of construction comparable to the renowned imperial palaces from the same period in Asia.

The results of reconstructing the architectural form of the Ly dynasty's structures presented in this paper not only enrich the treasure trove of architectural heritage data in Vietnam and East Asia, but also serve as a powerful affirmation of the independent and unique identity of the architecture of Dai Viet. By reviving the architectural appearance from ruins

hidden away underground, we have not only restored a symbol of power and philosophy of the Ly dynasty, but also established a solid scientific foundation for the Thang Long Imperial Citadel to continue telling its heroic historical story and participating in an equal and profound dialogue with other world heritage sites in the region.

IV. CONCLUSION

The results of large-scale archaeological excavations at the Thang Long Imperial Citadel have provided a valuable system of physical evidence, confirmed the existence of large-scale palace and tower architectural complexes, and demonstrated the prosperity of the Dai Viet dynasties, especially the Ly dynasty. The abundant presence of high-class architectural materials – from large-sized dragon and phoenix head statues to the system of roof tiles and eave-end tiles elaborately decorated with Bodhi leaves – not only reflects the magnificent aesthetic but also clearly demonstrates the authority and class of the royal court.

In terms of style, the Ly dynasty's palace architecture is the culmination of indigenous creative thinking during the acculturation process with Buddhism and Champa art. This process has created a unique architectural appearance, where the brilliant beauty of form flawlessly blends in with profound philosophies regarding international status, firmly reflecting 'royal authority' and 'divine authority'.

In terms of technique and structure, through the comprehensive analysis of foundation remains, terracotta models, and inscriptions, this study has established a solid scientific ground to affirm that the Ly dynasty's palace architecture uses the dougong system (wooden bracket system). Despite overall similar characteristics with ancient palace architecture in China, Japan, and Korea, Ly dynasty's architecture still demonstrates its own distinct nuances. The identifying characteristics of Vietnamese dougong during this period are the harmonious combination between load-bearing function and decorative sculptural elements of images of Bodhi leaves, Dragons, Phoenixes, Garuda, Kinnari, and the popular use of roof structures covering the rafters. In addition, archaeological and historical evidence also reveals a splendid presentation of the wooden frame system that was once painted red and decorated with elaborate patterns, creating a strong visual effect.

In summary, the research to unravel the Vietnamese palace architecture of the Ly dynasty over the past 15 years has achieved groundbreaking achievements. The most outstanding is the successful hypothetical reconstruction of the architectural form of the Ly dynasty's palace using 3D technology, providing vivid visual images with a reliable scientific basis. Although these are initial hypothetical results, they play a pioneering role in quantifying and re-evaluating the core values of the World Heritage site of the Thang Long Imperial Citadel. These achievements will be important premise for further in-depth comparative studies, which aim to identify the specific functions and names of each structure and gradually restore the glorious appearance of the Thang Long capital in history.

REFERENCES

1. A. de Rhodes, 1908: *Historie du Royaume de Tonquin (1627-1646)*, Revue Indochinoise, p.179.
2. Bùi Minh Trí, 2015: Kiến trúc thời Lý ở khu A-B, khu di tích Hoàng thành Thang Long - Những thành tựu sau 10 năm nghiên cứu, *Thông báo Khoa học - Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành*, Hà Nội, tr. 19-63.
3. Bùi Minh Trí, 2016: Hình thái kiến trúc cung điện Việt Nam thời Lý dưới ánh sáng khảo cổ học, *Thông báo Khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb. KHXH, Hà Nội, tr.13-44.
4. Bùi Minh Trí - Nguyễn Thị Anh Đào, 2015: Bảo tồn đồ gỗ khu di tích Hoàng thành Thang Long, kết quả nghiên cứu và những vấn đề đặt ra, *Thông báo khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb.KHXH, Hà Nội, tr.127-141.
5. Bùi Minh Trí - Tổng Trung Tín, 2012: Giá trị nổi bật toàn cầu, tính chân thực và toàn vẹn khu trung tâm Hoàng thành Thang Long - Hà Nội từ phân tích đánh giá di tích khảo cổ học, Nhật - *Việt Tuyển tập bài viết nghiên cứu Hoàng thành Thang Long*, Viện Nghiên cứu Di sản Văn hóa Tokyo, Japan, tr.135 - 150.
6. Bùi Minh Trí, 2016: *Những khám phá khảo cổ học dưới lòng đất Nhà Quốc hội*, Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội.
7. Bui Minh Tri, 2018: Vietnam Palatial Architecture in the Ly period similarities and distinctive differences in architectural history of East

- Asia. Kỳ yếu Hội thảo Khoa học quốc tế tại Hàn Quốc, tháng 10/2018: *Ngôi lợp mái*, tr.213-236.
8. Bùi Minh Trí, 2019: Kinh thành Thăng Long thời Lý – Dấu tích thành xưa điện cũ, *Khảo cổ học*, số 3, tr. 46-72.
 9. Bùi Minh Trí, 2021: *Viện Nghiên cứu Kinh thành: Chặng đường và Dấu ấn*, Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, 2021.
 10. Bùi Hữu Ngọc, 2017: Chân tảng đá khu di tích Hoàng thành Thăng Long – Loại hình, đặc trưng và niên đại, *Thông báo Khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb. KHXH, Hà Nội, tr.89-117.
 11. Dương Hồng Huân, 2001: *Cung điện khảo cổ thông luận*, Nxb. Từ Cẩm thành, Bắc Kinh, Trung Quốc.
 12. *Đại Việt sử ký toàn thư*, Tập 1, Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, 1983.
 13. Đỗ Văn Ninh, 2002: Những viên gạch kể chuyện mình, *Hoàng thành Thăng Long*, Nxb. Văn hoá Thông tin, Hà Nội, tr.139-159.
 14. Hà Văn Tấn - Nguyễn Văn Kự - Phạm Ngọc Long, 2013: *Chùa Việt Nam*, Nxb. Thế giới, Hà Nội.
 15. Kazuo Inoue, 2015: Các di tích cung điện của Hoàng thành Thăng Long - Phương pháp đo lường và quy hoạch xây dựng, *Thông báo khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, tr. 9-17.
 16. Kazuo Nishi and Kazuo Hozumi, 1996: *What is Japanese Architecture? A survey of Traditional Japanese Architecture*, Kodansha International, Tokyo 112-8652.
 17. Lưu Suồng, 2009: *Bắc Kinh - Từ Cẩm thành*, Nxb. Đại học Thanh Hoa, Bắc Kinh, Trung Quốc.
 18. Nguyễn Văn Thịnh (Chủ biên), 2010: *Văn bia thời Lý*, Nxb. Đại học quốc gia Hà Nội.
 19. Phạm Lê Huy, 2016: Cấu kiện và kiến trúc thời Lý - Trần nhìn từ nguồn tư liệu chữ viết đồng đại, *Thông báo Khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb. Khoa học xã hội, Hà Nội, tr. 45-62.
 20. Phan Cốc Tây và Hà Kiến Trung, 2005: *Doanh tạo pháp thức - Giải độc*, Nxb. Đại học Đông Nam, Nam Kinh, Trung Quốc.
 21. Phó Hy Niên, 2009: *Tuyển tập tiểu luận lịch sử kiến trúc*. Nxb. Văn nghệ Bách Hoa, Trung Quốc.
 22. Quách Chính Trung, 1993: *Cân đong đo đếm của Trung Quốc từ thế kỷ 3 đến thế kỷ 14*, Nxb. Khoa học xã hội Trung Quốc.
 23. Tomoda Masahiko, 2017: Thể hiện kiến trúc trên các mô hình thời Lý – Trần, *Thông báo khoa học*, Trung tâm Nghiên cứu Kinh thành, Nxb. KHXH, Hà Nội, tr.63-87.
 24. Tống Trung Tín - Bùi Minh Trí, 2007: Về một số dấu tích kiến trúc trong Cẩm thành Thăng Long thời Lý - Trần qua kết quả nghiên cứu khảo cổ học năm 2005 - 2006, *Khảo cổ học*, số 1, tr. 58-70.
 25. Tống Trung Tín - Bùi Minh Trí, 2008: Những phát hiện khảo cổ học về Hoàng thành Thăng Long, *Việt Nam học*, Nxb. ĐHQGHN, tr. 548-560.
 26. Tống Trung Tín - Bùi Minh Trí, 2010: *Thăng Long – Hà Nội, Lịch sử ngàn năm từ lòng đất*, Nxb. KHXH, Hà Nội.
 27. Vũ Tam Lang, 2010: *Kiến trúc cổ Việt Nam* (Tái bản), Nxb. Xây dựng, Hà Nội.
 28. Viện Kiến trúc Nhật Bản, 2007: *Nhật Bản kiến trúc sử đồ tập*, Akirakunisha, Nhật Bản.
 29. Viện Văn học, 1977: *Thơ văn thời Lý – Trần*, Tập I, Nxb. KHXH, Hà Nội.
 30. *Việt sử lược*, Bản dịch của Trần Quốc Vương, Nxb. Thuận Hóa, Trung tâm Văn hóa ngôn ngữ Đông Tây, 2005.

総合討議サマリー

ACCU 国際会議「考古遺跡の整備とオーセンティシテイ

－ ‘復元の是非’ を超えて：アジアの多様な実践と論理－

司会進行：稲葉信子（筑波大学名誉教授）、西和彦（文化庁主任文化財調査官）

サマライザー：ロヒト・ジギヤス（ICCROM プログラム・マネージャー）

アジアにおける考古学的遺跡における多様な実践と理論に基づく復元（再建）アプローチ

- 本会議で提示された事例研究は、考古学的遺産の復元（再建）に対する幅広いアプローチを示している。これらのアプローチは、物理的な再建や実験的再建、保護シェルターとしての使用、拡張現実（AR）や仮想現実（VR）などのデジタル技術の活用に至るまで多岐にわたる。復元は単一の「理想的」または「完全な」解決策ではなく、文化的・社会的・技術的・倫理的観点に基づき、文脈に適した戦略を選択可能な多様な手法のパレットとして理解されるべきである。
- アジア太平洋地域における復元に関する用語は国ごとに大きく異なり、その概念は歴史的建造物の保存や再建に限られない場合が多い。多くの文脈では、復元は機能、意味、感情、象徴的関連性の継続も含む。例えば中国においては、遺跡整備における復元は「名称」「材料」「位置」「形態」「規模」といった複数の基準で評価されることがある。これには、名称を維持しつつ材料を変更する場合、現地で再建する場合や異なる場所で再建する場合、全体の形態を保持する場合などが含まれる。これらの多様な実践は明確に区別されることは少なく、広義の概念として「復元（再建）」に包含されることが多い。
- 復元プロセスにおいて重要な考慮点の一つは、コミュニティの意義ある関与である。コミュニティは均質ではなく、複雑かつ動的であり、遺産に対して異なる、場合によっては相反する価値を付与することがある。したがって、復元の意味決定には、多様な声や経験、そして人と場所との変化する関係性を考慮した包括的なプロセスが必要である。
- 復元は、保存の行為であると同時に解釈の行為としても機能する。場合によっては、遺産の意義を伝えるために全く新しい形態が創出されることもある。これらの区別は、災害後や紛争後の文脈において特に重要であり、復元はしばしば復興、アイデンティティ、社会的癒しと密接に結びつく。したがって、復元アプローチは連続体上に存在し、異なる手法間に厳密な境界を設けることは実際的にも望ましくもない。
- 復元は本質的に遺産価値を伝達する手段であり、価値に基づく枠組みが意思決定において不可欠である。価値は利害関係者の視点、文化的文脈、時間的文脈によって異なり、固定的なものではない。復元そのものが新たな価値を創出したり、既存の価値を変容させたりすることもある。したがって、意思決定は現代的価値判断を反映しつつ、将来の世代がこれらの価値を再解釈・再評価できる余地を残すことが重要である。この観点から、真正性（authenticity）は復元の意味決定プロセスにおいて特に複雑で議論の多い概念となる。
- 最後に、復元に関する意思決定は、完全性（integrity）の維持、伝統的知識や技能の継承・復活、歴史情報や文書の入手可能性・信頼性・解釈など複数の要因に基づいて行われる。これらの要素は、倫理的・文化的・社会的枠組みの中で慎重に調整され、文脈に応じた適切な結果を導く必要がある。

（紙面の都合により、総合討議の詳細な議事録（各発言を含む記録）は本報告書には掲載していない。詳細については、ACCU 奈良のウェブサイトに掲載予定である）

Summary of the Discussions

International Conference on Cultural Heritage 2025 'Conservation and Interpretation of Archaeological Sites and Authenticity: Approaches to Reconstruction through Asia's Diverse Practices and Rationales'

Moderators: INABA Nobuko *Professor Emerit*, University of Tsukuba
NISHI Kazuhiko, *Chief Senior Specialist for CP*, Agency for Cultural Affairs
RAPPORTEUR: Rohit JIGYASU, *Programme Manager*, ICCROM

- The case studies presented during the conference demonstrate a wide spectrum of approaches to the reconstruction of archaeological heritage. These approaches range from physical rebuilding and experimental reconstruction, to the use of protective shelters and digital tools such as Augmented Reality (AR) or virtual reality (VR). Rather than a single 'ideal' or 'perfect' solution, reconstruction should be understood as a palette of possible approaches, from which context-appropriate strategies can be selected based on cultural, social, technical, and ethical considerations.
- Terminology related to reconstruction varies significantly across the Asia-Pacific region and is often not limited to the preservation or rebuilding of historic fabric alone. In many contexts, reconstruction may also encompass the continuity of functions, meanings, emotions, and symbolic associations. For example, within the Chinese context, reconstruction may be assessed through multiple criteria such as name, material, location, form, and size. This can include maintaining the same name while altering materials, rebuilding in situ or at a different location, or retaining overall form. These diverse practices are often not sharply distinguished and may all fall under a broad conceptual umbrella of reconstruction.
- A critical consideration in any reconstruction process is the meaningful engagement of communities. Communities are not homogeneous; they are complex, dynamic, and may assign different—and sometimes conflicting—values to heritage. Reconstruction decisions therefore require inclusive processes that acknowledge diverse voices, lived experiences, and evolving relationships between people and place.
- Reconstruction can function both as an act of conservation and as an act of interpretation, including cases where entirely new forms are created to communicate heritage significance. These distinctions may carry different meanings in post-disaster or post-conflict contexts, where reconstruction is often closely tied to recovery, identity, and social healing. As such, reconstruction approaches exist along a continuum, and it is neither practical nor desirable to draw rigid boundaries between various approaches.
- Reconstruction is fundamentally a means of conveying heritage values, making a values-based framework essential for informed decision-making. Values may differ according to stakeholder perspectives, cultural settings, and temporal contexts, and they are not static. Reconstruction itself can introduce new values or transform existing ones. Decisions therefore reflect contemporary value judgments, while consciously leaving space for future generations to reinterpret and reassess these values. In this light, authenticity becomes a particularly complex and contested concept within reconstruction decision-making processes.
- Finally, decisions related to reconstruction may be guided by multiple factors, including considerations of integrity, the continued use or revival of traditional knowledge and craft skills, and the availability, reliability, and interpretation of historical information and documentation. These factors must be carefully balanced within broader ethical, cultural, and social frameworks to ensure context-sensitive outcomes.

参考資料

文化遺産に関わる国際会議等の開催 2025
国際会議「考古遺跡の整備とオーセンティシティ
— “復元の是非” を超えて：アジアの多様な実践と論理—

開催要項

1. 共催および後援・協力

共催：文化庁、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所

後援：ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・奈良文化財研究所、奈良県、奈良市

協力：文化遺産国際協力コンソーシアム

2. 背景と目的

近年、アジア諸国では、考古遺跡の保存・整備や建物遺構の復元に対する関心が高まっており、それに伴い、日本の専門機関に対する研修や技術的助言の要請も増加傾向にある。とりわけ、消滅した寺院や宮殿等の再建や、発掘調査に基づく復元整備の一環として、再建の方針を模索する動きが、各国で具体化しつつある。

こうした事例では、復元に対する価値判断や実践のアプローチには国ごとの多様性が見られ、それぞれの課題や文化的背景を踏まえた柔軟な議論の必要性が浮き彫りとなっている。日本においても、オーセンティシティの視点から否定的な見解が根強く存在する一方で、実際には教育的活用や地域理解の促進を目的とした復元事例が数多く進められており、その是非をめぐる議論には新たな論理展開が求められている。

本会議は、このような背景を鑑み、アジア各国の考古遺跡における復元・整備の取り組みを共有し、文化財の地域性を踏まえた新たな視点から、「上物のない考古遺跡の整備」や「復元という選択肢の意義」について、実践に即した議論を展開することを目的とする。単なる理論の整理にとどまらず、現場における意思決定や政策判断に資する具体的な知見を提示する場としたい。その議論の中で、日本の幅広い知見と事例を効果的に発信するとともに、各国の「理論」と「実践」の実情につき情報を共有する機会としたい。

3. 開催日および会場

【開催日】2025年12月17日（水）～12月18日（木）

12月17日（水）：エクスカージョン

（平城宮跡歴史公園 第一次大極殿院東楼復原整備工事事業視察）

開会式、基調講演、講演Ⅰ・Ⅱ

12月18日（木）：講演Ⅲ～Ⅶ、総合討議

【開催方法】現地および同時双方向のオンライン配信

現地会場：奈良県コンベンションセンター 2階 202会議室

4. 会議日程

◆ 12月17日(水) 09:30～12:00

【エクスカージョン】平城宮跡歴史公園 第一次大極殿院東楼復原整備工事業視察

現地講師： 箱崎和久氏、西田紀子氏、高橋知奈津氏（奈良文化財研究所）
稲葉信子氏（筑波大学名誉教授）

【国際会議：第一日目】14:00～17:00

「考古遺跡の整備とオーセンティシティー “復元の是非” を超えて：アジアの多様な実践と論理」

開会式

基調講演 「考古学的遺跡における木造建造物の復元—世界遺産「古都奈良の文化財・平城宮跡」を事例として」

本中眞氏（奈良文化財研究所長）

講演Ⅰ 「考古遺跡：保存・管理とその意義」

リチャード・マッケイ氏（マッケイ・ストラテジック可能性開発ディレクター／
ICOMOS 世界遺産顧問）

講演Ⅱ 「遺跡復元の価値と復元学」

海野聡氏（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻准教授）

討議

（司会進行：稲葉信子氏、西和彦氏、サマライザー：ロヒト・ジギヤス氏、討論参加者：参加者全員）

◆ 12月18日(木) 9:30～17:00

【国際会議：第二日目】

講演Ⅲ （中国）「隋唐洛陽城遺跡に関する事例研究」

肖金亮氏（清華大学 同衡都市計画設計研究院 文化財保護分院総エンジニア）

講演Ⅳ （日本）「地域に根ざした遺跡の整備活用と研究—岩手県御所野遺跡から—」

高田和徳氏（特定非営利活動法人いちのへ文化・芸術 NPO 代表理事）

講演Ⅴ （モンゴル）「エルデン・ブー僧院大ツォグチェン寺とバルーン・フレー僧院バット・ツァガン寺の復元の実現性」

オドフー・アンガラグスレン氏

（文化遺産保護局世界遺産オルホン渓谷文化的景観管理局研究員）

講演Ⅵ （韓国）「韓国考古遺跡の復元に対するオーセンティシティー及び最新傾向—慶州・新羅王京の中核遺跡を中心に—」

ホン・バルグム氏（国家遺産庁国立伽倻文化遺産研究所学芸研究員）

講演Ⅶ （ベトナム）「考古学的証拠に基づく李朝ベトナムの宮殿建築：東アジアの文脈における形態学的同定と比較分析」

ブイ・ミン・チー氏（ベトナム科学技術協会連合アジア文明研究所副所長）

総合討議

（司会進行：稲葉信子氏、西和彦氏、サマライザー：ロヒト・ジギヤス氏、討論参加者：参加者全員）

5. 会議用語 会議用語は英語とする（同時通訳あり）。

6. 事務局

（公財）ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所

〒632-0032 奈良県天理市杣之内町437-3 なら歴史芸術文化村 文化財修復・展示棟2階

Tel.: 0743-69-5010 Fax.: 0743-69-5021 Email: nara@accu.or.jp

（担当：研修事業部 脇谷華代子、吉田万智、長野積良、サン・パトリシア）

Appendix

2025 International Conference on Cultural heritage
**Conservation and Interpretation of Archaeological Sites and Authenticity:
Approaches to ‘Reconstruction’ through Asia’s Diverse Practices and Rationales**

General Information

1. Organisers and Collaboration

This conference is organised by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan (Bunkacho) and the Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU Nara), in collaboration with the International Centre for the Study of the Preservation and Restoration of Cultural Property (ICCRROM), the National Research Institute for Cultural Properties (Tokyo and Nara), the Nara Prefectural Government and Nara City. Support is provided by the Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage.

2. Conference Background & Objectives

In recent years, many Asian countries have seen a growing interest in the reconstruction of archaeological features as part of the conservation practices of archaeological sites. Alongside this trend, requests for technical assistance for reconstruction from Japanese institutions and individual experts have been increasing. In particular, the rebuilding of vanished temples, palaces, and other structures based on archaeological findings is gaining traction and on-site implementations have been actualised in various parts of the region.

In these contexts, a diversity can be observed in how value assessments and practical approaches to reconstruction are understood and applied across different countries. These differences highlight the need for more context-sensitive dialogue that goes beyond existing theoretical frameworks. In Japan, while critical opinions persist regarding reconstruction—particularly from the standpoint of authenticity—some projects have in fact been undertaken with the aim of promoting educational use and enhancing local understanding. Such approaches to reconstruction suggest that current debates require more nuanced perspectives and deeper discussions.

Considering this background, this conference aims to provide a platform for sharing initiatives related to the reconstruction and development of archaeological sites across various Asian countries. It seeks to explore, from a practical standpoint, the significance of options such as ‘reconstructing non-extant structures’ and the broader question of how to develop archaeological sites that lack visible remains. Rather than limiting the discussion to theoretical analysis, the conference aspires to offer concrete insights that can support decision-making processes and policy development in the field. Through this conference, we hope to effectively present Japan’s extensive experience and diverse case studies, while also facilitating the exchange of both theoretical and practical knowledge from across the region.

3. Schedule

17 December (Wednesday) Excursion (Reconstruction Site of Higashi-rou of Nara Palace Site)

Lecturer: **HAKOZAKI Kazuhisa, NISHITA Noriko, TAKAHASHI Chinatsu**

(Nara National Research Institute for Cultural Properties)

INABA Nobuko (*Professor Emerit*, University of Tsukuba)

International Conference: Day 1

Conservation and Interpretation of Archaeological Sites and Authenticity: Approaches to ‘Reconstruction’ through Asia’s Diverse Practices and Rationales

Opening Ceremony

Keynote Speech

MOTONAKA Makoto (Nara National Research Institute for Cultural Properties)

Presentation I (Australia)

Richard MACKAY (Mackay Strategic, Australia)

Presentation II (Japan)

UNNO Satoshi (The University of Tokyo)

Discussion

(Moderator: INABA Nobuko, NISHI Kazuhiko; Rapporteur: Rohit JIGYASU; Panellists: All speakers)

18 December (Thursday) International Conference: Day 2

Presentation III (China)

XIAO Jin Liang (Tsinghua Tongheng Urban Planning & Design Institute)

Presentation IV (Japan)

TAKADA Kazunori (Ichinohe Culture and Arts NPO)

Presentation V (Mongolia)

Angaragsuren ODKHUU (Administration of the World Heritage-Orkhon Valley Cultural Landscape)

Presentation VI (Republic of Korea)

HONG Balkeum (Gaya National Research Institute of Cultural Heritage)

Presentation VII (Vietnam)

BUI Minh Tri (Institute of Asian Civilisation Studies, Vietnam Union of Science and Technology Association)

Discussion

(Moderators: INABA Nobuko, NISHI Kazuhiko; Rapporteur: Rohit JIGYASU; Panellists: All speakers)

4. Conference Language

The conference is conducted in English (simultaneous interpretation in Japanese).

5. Correspondence

Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex, 437-3, Somanouchi-cho, Tenri, 632-0032 Japan

TEL: +81-743-69-5010

Email: nara@accu.or.jp

WAKIYA Kayoko, *Vice Director*, Programme Operation Department

YOSHIDA Machi, *Chief*

NAGANO Sekiroh

Patricia SUN

